

マブラヴオルタネイティブ～～怪獣達の逆襲～～

ユウキ003

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

BETA。人類に敵対的な地球外生命体。そのBETAに侵略される地球。

そんな地球で、人類は必死にBETAに抗っていた。しかし、

その物量から人類は日々戦線の後退を強いられ、多くの

人間がBETAとの戦いで命を落としていた。

だが、ある日、母なる星の大地の下で眠っていた

生物たちが、『怪獣』が目を覚ます。

異星からの侵略者に、地球に生きる命達の

逆襲が始まったのだった。

# 目次

第1話	希望と絶望の始まり	1
第2話	3匹の獣	9
第3話	特別調査班	32
第4話	白き冬	51
第5話	本物の『怪物』	64
第6話	黄金の目覚め	82
第7話	明星作戦	100
第8話	小さな来訪者	126
第9話	インフアント島	142
第10話	双翼の神々	157
第11話	出雲攻略作戦	174
第12話	希望作戦	190
第13話	ギドラ・モスラ・バトラ 三大怪獣総攻撃	208
第14話	別つ道	229
第15話	覚醒	244
第16話	狂人現る	258
第17話	光と陰	273
第18話	熱砂の出会い	291
第19話	怪物	308
第20話	双翼の加護	320
第21話	ヘドラ掃討作戦・I	335

## 第1話 希望と絶望の始まり

俺は、この世界が楽園だと思った事は一度だってない。この世界はクソツタレだ。

生きての地獄を味わい続けるか、いつその事一瞬の痛みを受けられぬか。

生憎とこの世界で『平和』って奴を享受できる程、俺の人生は恵まれて無かった。

BETA。『人類に敵対的な地球外起源種』の英語の頭文字を取ってそう呼ばれる、宇宙からの侵略者。

天文学的な数の物量を生かして押し寄せる化け物。人類はそのBETAに襲われてからという物、後退の一途を辿り続けて来た。中国、東南アジア、中東、ソ連、欧州。

中国のウイグル自治区への落下から始まったBETAの侵攻の前に、人の持つ兵器は尽く蹴散らされ、喰われ、破壊されてきた。

奴らが通った道には何も残らない。残骸も、雑草も。……命も。

俺はこんな世界に生まれた事を後悔した。

ここは地獄だ。

何度そう思った事か、自分でも分からない。

現在進行形で化け物に侵略された世界を地獄と言わずになんて言う？

だが、俺達の足の下にあった物。地球の中には、その地獄すら一蹴する化け物が居た事を、その時の俺はまだ知らなかった。

あの日、『あいつ』を目にしたその時まで。

俺が『あいつ』を目にする約1年前の事だ。『奴ら』の出現は、唐突だった。

1998年。朝鮮半島。

そこでは進行するBETAから領土を、人間の住まう大地を捨てて逃げ出す作戦。『光州作戦』が展開されていた。

何の装備も無く、BETAの前に立つ事は死以外の何物でもない。ゆえに、BETAが迫った土地の人々は迫られる。

故郷からの脱出か。故郷と運命を共にするか。

呆気ない死か、惨めな生か。

どちらにしろ、選ぶだけでも苦だ。

だからこそ人の中には、せめて最後は故郷で死のう。

そう考える奴も居るらしい。

そして『奴ら』の内の一体が初めて姿を現した戦場は、そんなクソみたいな選択を迫られる場所だった。

くく光州作戦、帝国陸軍司令部くく

この作戦には、半島の隣国である日本、帝国の軍隊も参加していた。そして、現場での帝国軍の指揮を任されていたのが『彩峰萩閣（しゅうかく）』中将だった。

光州作戦の目的は、BETAが迫る朝鮮半島からの撤退。

その撤退戦を支えるために、最前線では大勢の兵士が戦っていた。

逐次現場から上がる報告を、当時の中将は司令部で聞いていた。

そして、後に中将はこう語った。

『私は、あの日希望と絶望の双方を見た』

これは、そんな作戦の時に起こった、のちの争乱の幕開けとなる序章だ。

くくく

現場から上がる悲鳴のような報告に、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる萩閣。

既に帝国の部隊のいくつかはBETAとの戦いに敗れ消滅した。その時。

「っ!?緊急連絡ー!」

と、通信を行っていた兵士の一人が立ち上がって萩閣の方へと向き矢継ぎ早に報告を始めた。

「大東亜連合軍が避難を拒否する現地住民救助のために動き出した模様です！」

通信士のその報告で、陸軍司令室は騒めきに包まれ始めた。

「現地住民の救助だど!?自ら残った人間のために兵力を裂くなど！大東亜連合の司令部は正気か!?!」

「しかし、だからといって彼らを見捨てる訳には！」

一つのイレギュラーが更なるイレギュラーを引き起こすように、大東亜連合の起こしたイレギュラーに帝国陸軍司令部も瞬く間に飲み込まれていた。

萩閣を補佐する佐官達がたちまち声を張り上げる。そして、萩閣を補佐する側の佐官たちの意見が割れ始めたその時。

「あ、あの。中将。我々は一体どうしたら」

その喧噪を収めるためかそう問う通信士の兵士。そしてその質問が響くと、喧噪は嘘のように消え去った。

皆、この場において最上位の階級を持つ萩閣の指示を待っていた。現地住民を無視するか、否か。

そして、萩閣は考え、決断を下そうとしたその時。

「緊急連絡!!」

不意の別の通信士の一言が、萩閣の口に待ったを掛けた。

「最前線の部隊より報告！突如として巨大不明生物が出現！BETAと交戦中との事です！」

「……………何？」

その時、萩閣は文字通り『思考が追い付かなかった』。

『巨大不明生物？新種のBETAか？いや、しかしBETAと交戦中とはどういう事だ？』

あまりの事に民間人救助の事からそちらに意識が移ってしまう萩閣。

「な、何をバカな事を言っているのだ！ふざけているのか貴様っ！」

「い、いえっ！決してそのような事は！現に前線の部隊からはそのような報告がっ！」

怒鳴り散らす佐官に、通信士は慌ててそう返事をする。

「くっ!? 巨大不明生物だと……!? まさか前線の者達が錯乱でもしたのではあるまいな……!?」

佐官の一人が苦々しい表情でテーブルを叩こうとした時。

「……データリンク」

「中将? どうされました?」

不意に呟かれた言葉に周囲の佐官たちが気付いた。

「データリンクだ! 前線の部隊からデータリンクで映像を取得できないか!」

「あ! す、すぐにやってみます!」

そう言われた兵士は飛ぶ勢いで席に戻るとコンソールを操作しました。

「中将閣下! 今はそのような!」

「映像に何も映っていないければ前線の者達の妄言で済む! しかし真実であれば!……確かめる必要がある」

彼がそう言って周囲の佐官たちを納得させた時。

「前線部隊からリアルタイムの動画データを取得しました! モニターに映します!」

通信士が叫ぶと、戦域マップが映されていたモニターが一瞬暗くなり、すぐに動画に切り替わった。

そこでは……。

『ゴロゴロゴロゴロゴッ!』

「何だ。これ、は」

そう、正しく、疑問符しか浮かんでこないような映像が映し出された。

『グシャツ! ベギヤツ!』

そこでは、今まさに、『無数の針が生えた巨大な岩石の様な物がBE TAの集団の中を縦横無尽に転がっている』、という彼らからしてみれば現実離れた映像が流れていた。

「巨大な、岩石?」

あまりの事に、我を忘れ、周囲を忘れ呟く萩閣。その巨大で丸い『何か』は、転がりながらも背中の棘とこれまで確認された中でも最大級

のBETA、『要塞（フォート）級』を軽く上回る巨体を生かし次々とBETAを轢殺していった。

あの『何か』が通り過ぎる場所では盛大に血しぶきが吹き、小さい（と言っても数メートルはある）『戦車（タンク）級』の体が木の葉のように吹っ飛んでいる。

BETAの中で最硬度の前面装甲を持つ、『突撃（アストロイヤー）級』ですらあの『何か』の攻撃には煎餅を割るように簡単に装甲を破壊され、押しつぶされている。

これまで人間を『蹂躪してきた』BETAが何かに『蹂躪されていた』。

その事実が思考が停止寸前の萩閣と周りの者達。しかし、本当の驚きはこれからだった。

次の瞬間、盛大に跳ねた丸い『何か』はBETAの群れの外に着地した次の瞬間、『態勢を戻した』。

そう、その『何か』は最初から丸かったのではない。

『丸まって転がっていた』だけなのだ。

そして、『それ』、『暴龍アングラス』が姿を現した。

『プアアアアンツ!!』

どこか甲高いラツパのような咆哮を上げるアングラス。

四つん這い、4足歩行の体つき。びつしりと背中を覆う、BETAの血に汚れた幾重もの、巨木サイズの剣山みたいな針の群れ。

恐竜を思わせるそのフォルム。

「あ、あゝ。すまん、誰か俺を一発殴ってくれ。げ、幻覚が見える」「ちゅ、中将閣下！お気を確かに！」

そして、その動画を見ていた萩閣はあまりの動揺っぷりにそんな事を言い出してしまった。

『プアアアアンツ！』

しかし、動画の中では相変わらずアングラスがBETAの集団相手に暴れ回っていた。

尻尾を振るい襲い来るBETAを薙ぎ払い、地中に潜って姿を消したかと思えば、今度は



群れのど真ん中から飛び出して奇襲をする。  
その巨体に似合わない速度で戦場を縦横無尽に駆けまわる。  
また姿を丸くし、必殺の『暴龍怪球烈弾（アンギラスボール）』でB  
ETTAの群れを蹂躪していった。

そして、この流れを見ていた時、萩閣はハツとした。  
如何に非現実的とはいえ、今は戦闘中だ。

その事実がこの驚きの中にあつて指揮官である萩閣の思考を引き  
戻した。

「前線の部隊に伝達！今すぐに後方に下がり弾薬等の補給をさせろ！  
それと後方からの支援砲撃部隊にも伝令！あの化け物が居る地点へ  
の砲撃は中止し他を狙わせろ！今の内に態勢を立て直し、あの化け物  
の力を利用して一挙にBETTAを殲滅する！」

「なっ!?本気なのですか中将閣下！」

驚いた佐官の一人が叫ぶ。

「BETTAが奴に気を取られている今がチャンスだ！あの化け物がB  
ETTAであり、今は錯乱して敵味方の区別がついていないだけでも言  
い切れない！しかし奴がこちらに向かって来る前にBETTAを殲滅  
しておけば、戦う相手は奴一匹で済む！」

と、その時。

「き、緊急連絡！各地の防衛線で戦っていた残存BETTA群がああ  
の怪物の方向に向かって反転、移動を開始しました！」

「ッ！ならば好都合だ！国連軍司令部にも通信を繋いで援軍を送らせ  
ろ！あの怪物を餌にしてここでBETTAの数を可能な限り削り取る  
！」

通信士の報告に、すぐさま命令を伝える萩閣。

「「はっ!!」」

萩閣の命令を的確に実行していく部下達。

そして、この戦いはアンギラスを倒そうと無数に群がってくるBE  
TAを、人類側の戦力が半包围する形となり、結果的に人類側に背を  
向けたBETTAを後ろから撃つ事が出来た

光州作戦の参加部隊は、奇跡的に撤退作戦を成功させることが出来た。

そんな中で、萩閣は……。

「一体、奴は何だったんだ」

祖国へと帰る船の中で、ずっとその事だけを考えていた。

アンギラスは襲い来るBETAと戦い続けた。

人類側はそれを利用し、BETAを後ろから撃ちまくった。

それによって、結果的に人類側は作戦を成功させた。

加えて、BETAのほぼ全てがアンギラスに注意を向けた事で大東亜連合軍は強引ではあったものの、民間人の救助に成功した。

そして、肝心のアンギラスはと言うと……。

『プアアアアンツ！』

BETAを殲滅したアンギラスは、勝利を宣言するかのように数回天に向かって吠える

と、近くに『戦術機』——人間がBETAと戦うために作り出した18メートルサイズのロボット——の集団が居たにもかかわらず、彼らをガン無視して地中へと帰って行った。

その事実が、彼ら、萩閣や彼の部下。

アンギラスが暴れ回る所を見た者達を困惑させた。

そして帰国後、その際の事を聞かれた萩閣は……。

「不明。正しくそうとしか言えません。奴が何者なのか？そもそもBETAなのか？違うのなら、なぜ今になって現れたのか？何処から来たのか？なぜ我々に興味を示さなかったのか？何一つ、分かりません。ただ……」

「ただ？何だね？」

疑問符を浮かべながら問う上官。

「私は、あの日希望と絶望の双方を見た。そう感じております」

「希望と、絶望？」

「はい。もし仮に、奴がBETAと戦い続けるのであれば戦況に何かしらの影響を与える

でしょう。それが今の戦況に変化をもたらすのではと期待してい

た自分が、あの時居ました。しかし同時に、奴の、BETAの軍団を単独で蹂躪する奴の力が我々人類に、帝国に向けられたらと考えると、余りにも恐ろしいと、そう思ってしまうのです」

そんな彼の報告を前にして、上官たちもまた重く口を閉ざした。

くくく

その日、初めて人類は《怪獣》と言う存在を目撃した。

BETAを蹂躪するアンギラス。

その事実は一般への公表は控えられた物の、様々なルートを通じて各国の軍高官や政治家の耳には届けられた。

しかし、一体誰がこれから起こり得る事を予見しただろう。

後に、《怪獣》と言う言葉が世界各地で使われるようになる。

アンギラスだけが、怪獣ではない。

BETAを蹂躪する怪獣の《王》が、実在する等と。

あの戦いの日が、唯の始まりに過ぎないのだと。

今、侵略者に襲われていた地球の生命が、怒りだす。

地球生命の逆襲が、今始まろうとしていた。

第1話 END

## 第2話 3匹の獣

くく前回のあらすじくく

地球外生命体、BETAとの苛烈な戦争が続く現代。しかし、そんなある日、朝鮮半島の戦いで謎の巨大生物が出現、BETAと交戦するという事態が発生。当時半島で行われていた撤退作戦、光州作戦の最中の事であった。しかし結果的にその巨大生物の出現で作戦は成功を収めるのだった。

光州作戦から数日後。

日本帝国・元枢府。

その日、極東の国の政治家や軍の高官たちが一同に会する会議があつた。しかし、その会議室の中の空気は重く、皆が皆頭を抱えていた。理由は唯一つ。それは……。

『プアアアアアンツ！』

甲高いラツパのような鳴き声と共に、体を丸めた巨獣が荒れた大地の上を転がり、BETAの群れを轢殺する。その非現実的な映像に、政治家や軍人たちは頭を悩ませて居たのだった。そんな彼らの中に、彩峰中将の姿があつた。やがて……。

「……以上が、我々が朝鮮半島撤退作戦、光州作戦で経験した世にも不思議な事案です」  
萩閣がそう言うと言つて皆が皆、唸り声を上げる。

「彩峰中将。……貴官は、その、本当にあれを見たのか？」

「自分の目で、という意味の質問であれば  
違います。私が見たのは、前線の部隊の  
戦術機から送られて来た映像をリアル  
タイムで見ただけです」

軍人の一人の問いに答える萩閣。

「中将、単刀直入に聞くが、我々は幻覚を  
見たのか？何だあの生物は。まるで

太古の恐竜ではないか」

「恐れながら、私もそう思った事は帝国に  
帰還してから一度や二度ではありません。  
まるで長い夢を見ているような感覚に  
至る事があります。しかし、数千の兵士  
が幻覚を見た、というのは些か突拍子  
もない事です。ましてや我々以外の国の  
兵士達も、です。認める事は遺憾ですが、  
あの巨獣は現実に存在し、尚且つBETA  
と個の武力で殺し合いが出来る程に強大な  
存在であると言えるでしょう」

今度は政治家の問いに萩閣が答えるが……。

「……………」

彼の言葉に政治家たちが黙り込む。そんな時。

「……………」この星には、もしかすると、我々や

BETAでさえ知らない『怪物』が、眠って  
いるのかもしれない」

彼の言葉に、誰もすぐには反論できなかつた。

この時の彼の発言は、半信半疑であつた。

彼自身も『あんなのが他に居るなんて思えない』。  
内心はそう思っていた。

だが彼の言葉が現実である事を知るのは、存外  
すぐであつたのだつた。

1998年、夏。BETAがついに北九州へと上陸した。人々は怯え、BETAの脅威から逃げようと東へと向かった。そんな人々を追うかの如くBETAは東へ、ついには帝都である京都にまで迫っていた。人々は更に東へと逃げる。しかし、その人の流れに逆らう存在が今、覚醒しつつあった。

東北地方・某所

巨大な洞窟の中にて。

『ピクッ』

その中で眠っていた巨獣が、目覚めた。そして、洞窟の外を見つめる。

感じる。『彼』は感じ取る。自らの縄張りを犯さんとする『害虫』が外からやって来た事を。彼は憤る。この場所は自分の住処である。よそ者が入ってきていい場所ではない。彼は決心する。撃退せねば。住処を守る為にも戦わねば。彼はノソノソと歩き出し、洞窟の外へと出る。

そして、夜空に浮かぶ月と星空を見上げながら、彼は、『むささび怪獣バラン』は静かに、両脇に備えられた被膜を広げて飛び立った。全ては、自らの住処を荒らすよそ者を撃退するために。

同じように、日本の一角、日本海側に面する新潟県。そこにある妙高山の地下で……。

『ピクッ』

バランと同じように、静かな眠りにしていた一匹の獣が目を覚ました。

一本の角を生やした、その赤い獣、いや、  
聖獣は目を開き、周囲を見回してから西の方  
へと目を向け、そして唸る。

『彼』もまた感じ取っているのだ。この国  
を汚さんとする悪しき軍勢が迫っている事を。  
ならば、『彼』のやることはただ一つ。

『護国聖獣』の一匹として、この『くに』  
を守るのみである。

『ガガガガッ』

そして、『彼』、『地底怪獣バラゴン』は住処を  
離れ、地下を進む。

そして更に……。

日本の某所に、山に偽造されたピラミッドが  
あった。そして、その中で眠り続けていた  
存在がいた。

しかし、『彼』もまた守るべき『くに』へと  
迫る危機を感じ取り、眠りより目覚める。

『彼』は西の方角を睨み、グルルとうなり声  
を上げる。

そして、それを合図とするかのように光の  
ピラミッドは消え去る。

月光の元に照らされたもう一匹の

『護国聖獣』、『超古代狛犬怪獣』、

『ガーディー』もまた、迫り来る

BETAに立ち向かう為に、西へと向かい  
足を進めた。

一方で、とある場所に数人の少女達が集め  
られていた。そこは京都の嵐山に造られた、  
仮設の補給基地だった。そしてその基地の  
守備隊に、近衛軍の衛士である少女たちが割り

当てられていた。

帝国には、他国と比べて少々変わった軍がある。それが、『帝国斯衛軍』だ。斯衛の主な目的は、帝国のトップである『政威大將軍』およびそれに任命される可能性のある5大武家、『五撰家』、更にその縁者の護衛である。そして、その近衛軍には大抵由緒ある武家の人間が所属する事になる。今ここに居る彼女たちも、譜代や一般という差はあれど、武家の生まれだ。しかし彼女たちはまだ学生であってもおかしくない年頃だ。訓練も満足に出来たとは言えず、大半のメンバーが怯えていた。そんな中……。

「なあ、みんなはこんな話、聞いた事あるか？」  
褐色肌が特徴的な少女、『石見 安芸』が傍に居た友人達に問いかけた。

「何？話して？」

首をかしげているのは、黒髪のロングヘアが特徴的な『甲斐 志摩子』だ。

「朝鮮半島での光州作戦、あっただろ？」

あの時向こうでさ、化け物が出た

んだってよ」

「ば、化け物？まさかBETAの新種？」

その単語に怯えた様子なのは、眼鏡を駆けている『能登 和泉』だ。

「それがさ、どうも違うらしくてさ。」

聞いた話じゃBETAとやりあったんだって」

「えっと、どういうこと？」

安芸の言葉の意味が良く分からず、首を



かしげるショートヘアの少女、『篁 唯依』。

「私も知り合いからの又聞きだからよく

分かんないんだけど、BETAとは違う

巨大な未確認生物が現れて、BETAと

戦ったんだってさ」

「ハア、なんですのそれは？ 大方、何か

の話を聞き間違えたのではなくて？」

そう言っただけのため息をつくのは、黒髪

ロングヘアの少女、『山城 上総』だ。

「いやまあ、そりゃ言っただけ私も非現実的

だってのは分かっているけどさ。

……信じたくもなるだろ？ BETAを

蹂躪する怪物、つてのをさ」

安芸は、どこか暗い表情で呟いた。

その言葉を前に唯依たちも押し黙ってしまった。

今この世界は、BETAによつて滅ぼされつつある。

アジア大陸の大半が今やBETAの活動地域と

なっている今、安芸の言うように、BETAを

蹂躪する怪物、と言う存在に縋りたいのも

無理は無いのだ。

しかし、彼女達には知る由も無かった。

その存在、『怪獣』と自分達が出会うその時、

その瞬間が、既に秒読みに入っている事を。

今、唯依たちは嵐山仮設補給基地に迫る

BETA群を迎撃するために出撃。

平野部でBETAを待ち構えていた。

そんな中で、戦術機のパイロット、『衛士』と

なるための訓練過程を満身に終えていない

彼女達は、皆一様に緊張を隠せずにいた。

彼女達の乗る戦術機、『82式戦術歩行戦闘機』。  
通称、『瑞鶴』。その数合計12機。

だが、そんな彼女達を嘲笑うかのように、  
地鳴りと共に数千、数万の数のBETAが  
彼女達へと向かって来た。

「……来た」

静かに呟く唯依。

だが……。

『き、緊急連絡っ！』

その時、彼女達の耳に司令部から通信が  
届いた。

『戦闘中の各部隊に通達っ！東北東より』

正体不明の飛行物体が前線に向かって

飛行中！なお、物体は航空機では無いっ！

各自警戒せよっ！』

「え？何？」

「飛行物体って、まさかBETAっ!？」

通信内容がよく理解出来ない志摩子と、

まさかの状況に怯える和泉。もし飛行物体が

BETAなら、それはBETAの新種で、しかも

背後を取られBETAに前後を挟まれた事に

なる。

「落ち着け新兵共っ！」

それを、中隊長である『如月 佳織』中尉が

一喝する。

「とにかく今は目の前のBETAをつっ！」

と、指示を出そうとした時。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!』

「じ、地震だっ！」

BETAの進撃による地鳴りを上回る大きな

揺れが彼女達を襲った。

咄嗟に叫ぶ安芸。

と、その時。唯依は咄嗟にレーダーで地中の様子を探ったのだが……。

『何、これ。震源が、動いている?』

視覚にデータなどを投影するヘッドセットを通して、索敵し得られた情報が映し出されるのだが、それは、震源が移動していると言うデータに他ならなかった。

そして、振動が僅かに弱まったその時。

『ドバアアアアアアンツ!!』

唯依達の前方、約数百メートルの地点で突如として大地が割け、その下から大きな影が姿を現した。

それは、バラゴンだった。地を割って現れたバラゴンは、唯依達に背中を向ける形で前方のBETA群を睨み付け、威嚇なのか耳を逆立てながら咆哮を上げる。

「何、あれ?」

目の前の存在を、文字通り『理解出来ず』に困惑する志摩子。

だがそれは唯依や、中隊長の佳織も同じ事だった。

正しく、『理解不能』。

だが、それだけではなかった。

『ガルルルッ!』

どこからうなり声のような物が聞こえ、慌てて彼女達が周囲を見回すと、東の方向から山を越えて二足歩行の怪獣、ガーデーが現れた。

「ま、また現れたっ!」

「どうなってるの!?!」

驚く安芸。和泉はもはやパニックになりそう  
で仕方が無かった。  
と、その時。

『キイイイイイインツ!』

甲高いジェット音が聞こえた。かと思うと、  
遠方の山々から、光、『光線（レーザー）級』の  
BETAによる攻撃が夜空を切り裂いて、その  
夜空に居る物体を撃ち落とそうとしていた。  
しかし、その物体はレーザーを何発も喰らおう  
と物ともせず、そしてバラゴンから少し離れた  
場所に着陸した。それは、バランだ。

突如として現れた、バラゴン、バラン、  
ガーデーの3体に、唯依達はもはや、  
頭がパンク寸前だった。

だが、現状はそんな彼女達が落ち着くのを  
待ってくれる程甘くは無い。

3体の怪獣が現れても、構わずに突進してくる  
BETAの先方、突撃級の群れ。

だが……。

「な、何あれ?」

和泉が真っ先に気づいた。それは、バラゴンの  
角が発光している事だった。と、次の瞬間。

『ヴァアアアアアアアッ!』

バラゴンがその口から、赤い熱線を吐き出した  
のだ。

「ビーム!? ビーム吐いたぞあいつつ!」

混乱のあまり叫ぶ安芸。

そしてバラゴンの放った熱線は、そのまま  
突撃級の群れを横薙ぎになぎ払っていく。  
しかし、バラゴンの熱線の威力だけでは、

突撃級の装甲、モース硬度15以上を誇る装甲を溶解させ貫く事は不可能だった。だが、それでも熱線の威力は、人類の武装を超えた威力がある。そして、突撃級の足までもが、その驚異的な装甲で覆われている訳ではない。

『ガクンッ！』

熱線の照射を受けても、最初はビクともせず走り続けていた突撃級の一部が、不意に態勢を崩して横転。更に時速170キロに及ぶ速度で走っていた為に、運動エネルギーを止める事が出来ずに、突撃級は盛大にスツ転び、更に後続の突撃級までもが転んだ同族に激突して転倒したりしていく。

「な、何が」

戸惑う志摩子。そんな中で、唯依は倒れて起き上がれなくなった突撃級の足に注目し、気づいた。

「あ、足が、溶けて、る？」

そう、突撃級の足は、バラゴンの熱線を受けて焼け爛れ、終いには一部が熱量によつて溶けて、その巨体を支えられなくなったのだ。

それが先ほど、盛大にスツ転んだ理由である。そして……。

盛大にスツ転んだのを合図に、バランとガーディーが前に出る。

BETA群も、前方が突つかえて身動きが取れなくなった突撃級を超えて、戦車級や要撃級のBETAが続々と向かってくる。

普通の人間ならば、例え戦術機に乗り、武装していたとしても、その圧倒的なまでの

物量から恐れ、怯えていただろう。

だがしかし、2匹は恐れず、むしろ、

「やってやるぜ」と言わんばかりにうなり声  
や咆哮を上げながら突進していく。

そして、真っ先に飛び出したのはバランだ。

一瞬力を溜めたかと思うと、大きく跳躍。

光線級の攻撃を物ともせず、BETA群の  
ど真ん中に着地。

すると、『ドドドオオオオオンッ！』

と言う爆音と爆風によって、下に居たBETA

は軒並みぺしゃんこ。比較的軽い戦車級は

今の爆風で軒並み吹っ飛び、味方(?)の

BETAに激突する始末だ。

更にそのままバランは大きく旋回し、その

巨大な尻尾でBETAをなぎ払う。

吹っ飛ばされた戦車級が地面に激突し、

大地にシミを作っていく。

更にガーディーも前進し、要撃級の群れを

次々と踏み潰していく。

別の要撃級がガーディーにその前肢を

振りかぶって突撃するが、ガーディーは

逆にその前肢を両手で掴むと、1匹の

要撃級を、さながら武器のように振り回し

他の要撃級や戦車級に叩き付けていった。

更にその場で大きく回転し、バランのように

巨大な尻尾でBETAをなぎ払う。

と、その時、ガーディーとバランに向かって

要塞級が向かって来た。緩慢な動きで前進し

向かってくる要塞級。しかしガーディーと

バランは要撃級や戦車級の相手で手一杯だ。

そして、要塞級最大の武器である衝角が

放たれようとした時。

『ドゴオオオオンッ!』

突如として地面を割って地下から現れたバラゴン。真下からの突然の奇襲に対応出来ず、

要塞級はその巨体を倒された。更に衝角と

本体を繋ぐ触手を、バラゴンの顎が食いちぎった。

と、そこに今度はガーディーが近づいてきて、

倒れた要塞級の頭のような場所に噛みつき、

その首を、文字通り食いちぎってしまった。

そして更にガーディーは、動かなくなつた

要塞級の、槍のような形をした足を2本、

強引に引き抜くと、まるで双剣のように

それを振り回し始めた。

バゴオン、ドゴオンツと音を立てながら

振り下ろされる攻撃に、砂塵とBETAの

千切れた四肢、その体液が飛び散り、

さながらこの世の地獄のような様相を呈していた。

バラゴンが熱線でなぎ払い、バランスが飛び、

ガーディーが要塞級の足でぶつ叩く。

そして、そんな戦いの惨状を、唯依達は

呆然と見ている事しか出来なかった。

だが……。

『嵐山仮設補給基地より護衛中隊へ!』

ヘッドセットを震わせる通信の声を聞き、

彼女達は体をビクツと震わせながら我に

帰った。

『レーダーで大型の物体を確認したが、

どうなっている!?!状況はっ!?!』

「こちら護衛中隊隊長の如月だ。げ、

現在我々の前方にて、未確認大型生物

がBETA群と交戦中」

『な、何!?!中隊長、気は確かか?』

『そんなもの……』

「今からデータリンクで映像を送るっ!

良いから見てくれっ!」

そう叫ぶと如月はデータリンクを通して

今自分達が目になっている映像を、基地へと

送信した。

すると……。

『な、何、よ。これ……』

通信機越しに、女性オペレーターの驚く声が

聞こえてくる。

彼女もまた、自分の目を疑っていた。

ほんの少し離れた所にBETAの群れが居ると

言うのに、唯依達は呆然と、立ち尽くす事

しか出来なかった。

そしてそのBETAも、彼女達に構ってる暇

など無い、と言わんばかりにガン無視で

バラゴン達に次々と襲いかかり、

そして次々と返り討ちにあっている。

そんな中で、真っ先に我に返ったのは、

上総だった。彼女は頭をかぶり振ると数秒

考えたあと、中隊長である如月に通信を

開いた。

「中隊長、進言したい事があります」

「ッ、何だ。言ってみろ」

「はい。今のこの状況は、好機、チャンス

です。あの3体が何であれ、今BETAと

戦い、そしてBETAの注意がああ3体に

向いているのなら、これを利用して少し

でもBETAの数を減らすべきでは無い



でしょうか？幸い、まだ戦闘開始前で  
あつた為、全機推進剤も弾薬も、まだまだ  
あります」

上総の言葉に、数秒考えた彼女は……。

「よしっ。中隊各機へっ！これより我々は

BETA殲滅に移るっ！なお、あの3体への

対処は現時点では保留とするっ！この

状況であるの3体まで敵になられては

厄介だっ！奴らには不必要に攻撃せず、

BETAのみを攻撃せよ！」

「了解っ！」「」

佳織の指示に少女達は頷く。

「よしっ！篁の第1小隊と私の第2小隊は

近中距離戦にて戦車級、要撃級を

最優先で攻撃。山城の第3小隊は遠距離より

光線級を最優先で撃破せよっ！各自、

兵器使用自由っ！攻撃開始っ！」

彼女の指示に従い、唯依達が攻撃を開始する。

「当ってええええええっ！」

「うおおおおおおっ！」

志摩子と安芸が、悲鳴にも似た叫びを上げながら  
戦車級を撃ち抜く。

「うわあああああっ！」

「そこおっ！」

更に和泉と唯依の射撃が要撃級を撃ち抜く。

「前方11時の方角に光線級を発見っ！

各機、攻撃開始っ！」

「了解っ！」

上総の第3小隊も光線級に対して狙撃を  
始めた。

放たれる弾丸が怪獣3匹を超えてBETA群に

襲いかかる。バラゴンとガーデーは一瞬  
彼女達に目を向けた後、しかし何を  
する事も無く再び前を向いて襲  
いかかってくる。BETAを蹂躪し  
はじめた。

そして、彼女達の弾がそろそろ  
無くなりそうになつたその時。

『き、緊急連絡っ！嵐山守備中隊へっ！』

各地のBETA群が突如として転進っ！

こちらに向かつて来ますっ！』

「っ!?!何だと!?!」

その通信に驚く佳織。そして彼女  
はすぐさまハツとなつて目の前の  
巨大不明生物へと目を向けた。

『まさか、この3体を脅威だと認識  
したのかっ!?!』  
彼女は、まさかの仮説を立てた。  
しかし今は戦闘中だ。向かつてくる  
のなら、戦う準備をしなければなら  
ない。

「司令部へっ!?!こちらの弾薬がそろ  
そろ底を突く!大至急補給物資を送  
つてくれっ!頼むぞっ!」

『了解っ!』

とにかく今、彼女達に、戦う以外  
の選択肢は無かつた。だからこそ、  
少女達は戦う。撃ちまくる。

そしてそれが、人類史で二度目の、  
怪獣と人類の、意図せぬ共闘作戦と  
なるのだ。

一方、帝国陸軍司令部でも、バラ  
ゴン、 balan、 ガーデー出現の報  
告を受けて混乱に陥っていた。

更にここに来てのBETA群の転進。

これまでBETAに見られなかった行動と未確認巨大生物の出現に混乱する司令部。

だが、こんな中でも比較的冷静だった人物がいた。それは、彩峰萩閣。

即ち、朝鮮半島でアンギラスを目撃した彼だった。

「これは、好機だっ！」

「ツ!?何を言っている彩峰中将っ！」

「これのどこが好機なのだっ!」

「BETA共は今、出現した3体の巨大不明

生物に集中している。これは私が

半島で経験した状況と全く同じです。

ならば、あの時と同じ事が出来るのです」

「同じ事、とは?」

「あの3体を囮としてBETA群を我々が

包囲し、攻撃する。そして、あの3体を

我々が支援するのです」

「し、支援だと!?正気か中将!」

「はい。もしここであの3体が倒されて

しまえば次にBETAが狙うのは我々

人間です。だからこそ、あの3体を

生かしつつ囮とするために、3体が

死なぬように援護するのです。

もし仮に戦闘終了後に、あの3体が

敵となったとしても、3体だけならば

BETAと三すくみの状況になるよりかは、

まだマシだと考えます。如何でしょうか?」

「ぐ、う、うう」

萩閣の言葉に、周りの者達は困惑したが、彼の言う事も最もであり、また光州作戦

の時のアンギラスという前例がある為に、最終的には彼の意見が届く事となった。

「全軍に連絡っ！残存部隊は嵐山周囲に集結しBETA群を攻撃せよっ！なお、BETAと戦闘中の巨大不明生物3体への攻撃をしないよう、全部隊に徹底させろ！」

「了解っ！」

司令官の指示を受けてオペレーター達が慌ただしく動き出す。

「それと在日米軍、国連軍、斯衛軍司令部にも通達して協力を要請しろっ！ここが正念場だぞっ！」

帝国陸軍から他の軍司令部に届いた要請に応じて、他の3軍も動き出した。

ある者は祖国を守るために。  
ある者は戦いながらも3体のデータを手にするために。

それぞれの思惑が交錯しながらも、嵐山に部隊が、戦術機が集結する。

国連軍や米軍からは『F-4ファントム』や『F-15イーグル』が集結してくる。

帝国陸軍からは『77式撃震』や『89式陽炎』そして世界初の第3世代機でもある

『94式不知火』とその改修機でもある

『不知火壱型丙』が嵐山へと向かってくる。

そしてその中にも、唯依達の訓練校時代の恩師である『真田 晃蔵』大尉の姿もあつた。更に、斯衛軍からも82式瑞鶴を主力とする部隊が嵐山に集まってきてた。

そして……。

唯依達も、数十分におよぶ射撃支援を行い、

ついに何度目の補給が分からなくなっていた時。

『こちら帝国陸軍戦術機部隊っ！嵐山に  
到着っ！これよりBETAへの攻撃を  
開始するっ！』

唯依達の耳に、オープンチャンネルで届いた  
通信。

「ハア、ハア、ハア、え、援軍？」

安芸は、戦闘ですっかり上がった呼吸を  
整えながら、遠方よりこちらに向かつてくる  
戦術機部隊の方へ視線を向けた。

更に、そこから堰を切ったように周囲に  
集まってくる、国家の枠組みを超えた  
戦術機たちや戦車部隊。戦闘へり部隊など。

今、嵐山に、この戦いに参加している  
半分以上の戦力が集結しつつあった。

そして、集まった部隊から放たれる  
幾千、幾万もの火線がBETAの群れに  
集中する。

バラン、バラゴン、ガーデイーを狙って  
前進してくるBETA。だが、それらは  
3体の元にたどり着く前に、降り注ぐ  
銃弾に穿たれ、多くのBETAが屍と  
なっていく。そして火線を突破しても、  
3体は向かってくるBETAを軽々と  
屠り続けた。

だが、それでも物量で人類を圧倒してきた  
BETAだけあって、数でもって火線を  
くぐり抜け、小柄な戦車級が同類の屍の山  
を盾にバラゴンとガーデイーの死角から  
襲いかかった。

咄嗟に気づいたバラゴンとガーデイーだが、

対応出来ずに2匹に無数の戦車級が取り付いた。そのまま噛みつく戦車級。肉を食いちぎる事は出来なかったが、それでも2匹が悲鳴のよな声を上げながら倒れる。

「あぁっ！」

それを見ていた和泉が悲痛な声で叫んだ。すると、直後。

「やめろおおおおおっ!!」

「離れろおおおおおっ!!」

次の瞬間、安芸と志摩子の瑞鶴が飛び出した。

そして、バラゴンに取り付いた方を安芸が。

ガーディーに取り付いた方を志摩子が。

それぞれ蹴る、殴るなどして、戦車級を

2匹から引き剥がす。更に……。

引き剥がされて起き上がった戦車級。だが……。

「こんのおおおおっ！」

「そこおっ！」

それを和泉と上総の瑞鶴が撃ち抜く。

そして、4人は倒れたバラゴンとガーディー

の前に立つと、そこから弾幕を張って戦車級を

2匹に近づけまいとした。

「ツ！各機っ！上総達を援護っ！」

更に佳織は咄嗟に指示を出して唯依達が

2匹と4人にBETAを近づけまいと撃ちまくる。

だが、その攻撃を超えて戦車級数匹が、

4人に向かって飛びかかってきた。

「ひっ！」

悲鳴を漏らす和泉。

「っ!？」

目を瞑ってしまう志摩子。

「っ!!」

戦車級を睨み付ける安芸。

「おおおおおおおっ!」

反撃しようとして支援突撃砲を向ける上総。

だが……。

『ヴァアアアアアアアアッ!』

後方から放たれた熱線が、戦車級の半分をなぎ払い。

『ドシヤアアアッ!』

投げつけられた要撃級の死骸が、残り半分を押しつぶした。

「え?」

呆けた声を上げながら振り返る志摩子。

すると、後ろでは倒れていたバラゴンと

ガーディーが起き上がっていた。

そして、2匹は志摩子達の瑞鶴を数秒

見つめた後、彼女達の機体を避けるように

前に出て、再び戦闘を開始した。

しばし、それを前に呆然としていた4人。

しかし……。

『何をボサツとしているっ!今は戦闘中だぞ!』

佳織の怒声を聞いて我に返った4人は、

再び戦闘を開始した。

そして、それから約1時間後。

彼等は、襲い来るBETAを全て退けた。

嵐山付近に積み重なるBETAの死骸の山。

そして、その死骸の山で雄叫びを上げる

3匹の巨獣。バラン、バラゴン、ガーディー。

そして、それを見上げる鋼鉄の巨人、

戦術機。

そして、バルンは勝ち鬨の咆哮を上げると、大きく跳躍し、皮膜を広げてどこかへと飛び去ってしまった。

『あつー！一匹逃げていきますっー！どうしますか!? 大尉!』

「よせ。手を出すな。下手に手を出して我々を敵と判断されても面倒だ。それに、ここにいる全員、既に疲弊している。

これ以上の戦闘は無理だ」  
バルンを見送る真田たち。

しかし、ふとバラゴンとガーデーの2匹が何故かゆつくりと戦術機部隊の方へと歩み寄って来た。

戦術機たちは慌てて道を空けながら武器を構えるが、2匹はそれをガン無視で、白い機体、瑞鶴の元へと歩み寄り、あと少しと言う所で足を止めた。

2匹が足を止めたのは、安芸たちの瑞鶴の前だった。

「な、何? 私らに用なのか?」

巨大な顔が近くにあつて、戸惑う安芸。すると、2匹とも、小さく喉を鳴らし始めた。まるで犬が喜びを表現しているかのような声で困惑する安芸達。

その時、不意に和泉が機体のスピーカーをONにした。

「あ、あの。もしかして、お礼、言ってるの?」  
そう声を掛ける和泉。  
しかし相手は獣だ。

人間の言葉が伝わるわけがない。



そう、遠巻きに見ていた誰もが思った。  
しかし……。

次の瞬間、2匹は目を細めて小さく唸りながら  
頷いた。

「えっ!? つ、通じたの!?!」

これに驚く志摩子。更に続いて上総も  
スピーカーをONにする。

「ま、まさか、私達の言葉が、分かるの  
ですか?」

咄嗟に問いかける上総。しかし2匹は  
困ったように首をかしげるだけだ。

どうやら言葉は通じないようだ。

だが、それでも和泉の感情は、思いは、  
間違い無く2匹に通じたようだ。

すると……。和泉の瑞鶴が武器を地面に  
置いて静かに前に出る。

「え!? ちよ、ちよつと和泉!?!」

それを見ていた唯依が通信で止めるが、  
彼女の瑞鶴は止まらずに……。

「ありがとう、助けてくれて」

そう言って静かにバラゴンの頭を撫でた。  
するとバラゴンは嬉しそうに喉を鳴らす。

更に、それを見てどこか羨ましそうな  
表情をしていたガーディーに気づいた

安芸の瑞鶴が、ゆっくりと飛び上がると  
同じようにガーディーの頭を撫でた。

するとガーディーも嬉しそうに喉を鳴らす。

「はは、こうして見ると、可愛いなあお前」

そう言いながらガーディーを、戦術機を  
使って撫でる安芸。

そうして、2人が2匹を撫でる様を、

周囲の人間は皆、ハラハラしながら見守っていた。しかし、2人が撫でるのを止めると、2匹は最後に、4人に向かって小さく鳴き、その後バラゴンは地面の下に潜っていき、ガーディーはそのまま、東の山中へと姿を消した。

こうして、帝国の首都、京都を守る為の戦いは、 balan、バラゴン、ガーディーという正体不明の、巨大生物の介入によって、一応の勝利となったのだった。

そして、数時間後。帝国、某所。

1人の男が、部下から話を聞いていた。

「そうか。ついに、『彼等』が動き出したか」

「ええ。……神話世界の存在。真の霊長類。

……かつての、この星の支配者たち。

とうとう、彼等が動き始めましたね。

『芹沢』博士」

「ああ。……もはやこの星は、BETAに蹂躪されるだけではない。

始まるのだ。この星に、この星に生きる

命達による、反撃が」

男は、近くの窓から見える街並みを見つめ、そしてその先に見える山々へと目を向けた。

「『怪獣』達による、反撃が」

そして、彼はポツリと呟くのだった。

第2話 END

### 第3話 特別調査班

京都防衛戦を、勝利という形で生き残った唯依達。しかし、だからといってBETAに勝利した訳ではないため、今も彼女達は首都防衛の為に、嵐山の仮設補給基地に守備隊として配属されたままとなっていた。しかし、数日はBETAの侵攻も無く、5人は手持ち無沙汰なまま、機体の整備などをしつつ数日を過ごしていた。

そんな中で……。

「なあ、結局の所、彼奴らって何なんだろうな？」

「何なんだ、とは？」

BDU姿のまま食堂で休憩中にポツリと呟いた安芸の言葉に首をかしげる上総。

「あの3匹って、結局どういう存在なんだろうって話だよ。どこから来たのか。今どこにいるのか。なんで今更出てきたのか、とかさ」

「それについては、まあ確かに疑問しかないよねえ」

安芸の言葉に頷く志摩子。

「どういう存在なのかは、分からないけど、生き物、には違いないよね？」

「それはまあ、確かにBETAよりは、何て言うか生き物らしかったけど」

和泉の言葉に、唯依は少し曖昧な返答を返す。

「まあ、ですが私たちがここで首をかしげていても始まりませんわ。

それより、今後の為にも訓練などを……」

と、上総が言っていた時。

『基地内の嵐山守備中隊総員に連絡。』

直ちに第2会議室に集合せよ。

繰り返す。嵐山守備中隊の全衛士は

第2会議室に集合せよ』

「ッ。何だ？ 私達の呼び出しか？」

突然の放送に、食堂に居た唯依や他の

女性衛士たちも戸惑いながら動き出した。

そして会議室に集まると、彼女達の

隊長である佳織が話し始めた。

「さて、突然ではあるが、本日付で

私を含めたここに居る12名は

嵐山仮設補給基地の守備中隊の任を

解かれ、新設された部隊へ全員

移動する事になった」

突然の話題に、皆が驚く。

「静かにしろっ。まだ話は終わってないぞ」

と、彼女の言葉に、一瞬で彼女達は

静まり変える。

「我々12名は、今後斯衛軍内部に新設

される事になった、例の正体不明

巨大生物の調査を主任務とする

『特別調査班』の実行部隊となる」

との彼女の説明に、上総が手を上げた。

「質問をよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「あの巨大生物を調査するとしても、

なぜ実行部隊に我々のような新兵の

部隊が起用されるのでしょうか？」

「上総の指摘はもつともだ。が、

お前達を選ばれた理由は二つある。

一つは、熟練の斯衛衛士を正体不明

生物の調査に割く余裕が無い事。

そしてもう一つは、各国軍衛士の中で最初にあの3匹を目撃した事。更に和泉と安芸は2匹と接触までしている。だからこそ、我々が選ばれたのだ」

「それで、私たちが？」

「そう言う事だ。そういうわけで、明後日の明朝9時に我々はこの基地を出て東京に設立予定の特別調査班の仮設基地へ戦術機と共に移動する事になる。BETAの突然の襲来などが無ければ予定通りに動くだろう。」

各自、それまでに荷物をまとめておけよ。

以上だ。解散」

そう言うて部屋を出て行く佳織。

こうして、唯依達は新たな部隊に配属される事になり、各々家族などにその事を連絡した後、荷造りを始めた。

そしてBETAの襲来も無かった為、彼女達は新たに来た守備中隊と入れ替わるように嵐山を出て、そのまま東京へと向かうのだった。

それから更に数日後。

唯依達は仮設基地で生活しながらも、特別調査班の実動部隊としていつでも動けるように、愛機の整備や訓練などを自主的に行っていた。これも、彼女達なりに責務を果たそうと考えての事だ。

とは言え、彼女達の目的は巨大不明生物の調査であるが、戦時下、しかもBETAに国土を荒らされている状態である以上、

「戦術機と衛士を遊ばせておく理由は無い、  
として特別調査班の設立に否定的な意見  
も多い。」

「加えて、BETAの群れを単独でも撃退  
可能な巨大不明生物を、調査の名目で  
下手に刺激して、自分達を敵とみられる  
事も気をつけなければならない。」

「そのため、不用意な調査は許可出来ない、  
として斯衛軍上層部も、特別調査班に  
対してどこまでやらせて良い物か？  
と悩んでいたのだ。」

「そのために、基地での待機ばかりの日々  
が続いていた唯依達だったが。」

「ある日、彼女達の元に来客があった。  
そして唯依達5人の前に現れたのは、  
日本人、それも中年くらいの男性だった。」

「はじめまして。私は、こういうものです」  
「そうやって男性は、彼女達にそれぞれ名刺  
を差し出した。」

「それを受け取る5人。」

「えっと、『モナークアジア方面調査  
責任者』、『芹沢大助』博士、で

「よろしいのでしょうか？」

「ええ。私はモナークで生物学者を  
している者です。今日、皆さんに会いに来た  
のは、先日皆さんが接触した3匹の  
怪獣、『彼等』について話を聞きたい  
からです」

「あの、その怪獣、と言うのは？」

「ああ、失礼。怪獣、と言うのは私が考え

採用された、貴方方が目撃した3匹の  
ような、巨大不明生物の総称です。漢字  
で、怪しい獣と書きます」

上総の言葉に答える芹沢。

「それでその、モナークって何なんですか？」

と、そもそもな疑問を投げかける安芸。

「失礼。まずはそこも、だったね。そもそも

モナークとは、1944年のある事件以降、

世界各地で目撃されるようになった

巨大不明生物の調査を目的に設立され

ました」

「1944年の事件ですか？」

「ええ。……原爆です」

首をかしげる和泉に答える芹沢。

「「「「「」」」」」」

すると、彼女達はその単語に息を呑んだ。

「1944年。ドイツに2発の原爆が投下され、

ドイツは連合軍に降伏。更に帝国も

条件付きで降伏し、戦争は終結した。

しかしこの原爆投下後、まるでそれが

引き金となったかのように、世界各地で

怪獣が目撃されるようになり、その調査を

目的に国連によって結成された組織が

モナークなのです」

「それで、モナークはずっと怪獣の調査を？」

「いえ。それからしばらくして火星での

BETA発見もあり、それに伴って規模を

縮小。更にBETA大戦が始まった事で、

今では数少ない面々が細々と活動している

ばかりだ」

上総の言葉に答える芹沢。

そして彼女達は、確かに、と言わんばかりの表情だ。

実際、戦争中に居るかも分からない怪しい存在に力と金と人員を割く事など言語道断に近い行為だ。

「しかし今、この世界に変化の兆しが見え始めている」

「……怪獣達、ですか？」

芹沢の言葉に問いかける唯依。

「ええ。最初に朝鮮半島で目撃された

怪獣アンギラス。そして今回

目撃された3匹。 balan、バラゴン、

ガーデー」

「え？ちよつと待って下さい。今の名前って？」

突然芹沢が彼等の名前を呼び出した事で首をかしげる志摩子。

「実は、我々の調査によって、怪獣は

我々人類が生まれるずっと前、有史以前

からこの地球に存在している事が確認

されました。実際、世界各地にある

巨大な生き物の伝承などは、現実には

人々が怪獣を目撃したものでだろう、と言う

のが我々モナークの見解です。

そして、今回出現した3匹と朝鮮半島の

アンギラスも、それぞれ過去の伝承など

から名称を付けたものです」

「つまり、あの3匹は昔からこの帝国にいた、と？」

「ええ。恐らくは。……アンギラスは

中国の伝承の中で、『暴龍』。

暴れる龍と呼ばれていました。



アングラスという名称は、モンゴルで発見された古文書から読み解いたものです」

「つまり、昔の中国やモンゴル、東アジアで活動していた、と？」

「ええ。恐らくその辺りがアングラスの活動エリアなのでしょう」

上総の言葉に応える芹沢。

「じゃあ、あの3匹についても博士は何か知ってるんですか？」

「ええ。まず、あの飛行していた怪獣

ですが、あれは東北地方の隔絶された部落において、伝説の怪物、

婆羅陀魏山神として恐れられていた

ようで、我々はそれを縮めて、バランと呼称しています」

更に和泉の言葉に応える芹沢。

「それと、他の2体、バラゴンと

ガーデーでしたが、彼等は少し

特殊でした」

「特殊、と言うと？」

彼の言葉に首をかしげる唯依。すると

芹沢は持っていた鞆の中から一冊の本を取り出して彼女達の前に置いた。

それを手に取る唯依。

『護国聖獣伝記』？」

彼女はタイトルを読み上げると、開いて中を見ていく。それを横から覗いている安芸達。

「私も、バラゴン達について調べる中で、たまたまその本を発見したのですが、

その本の中に、護国聖獣としてバラゴンとガーディーの名があったのです」

「護国聖獣、と言う事はあの2匹は帝国を護る存在なのですか？」

「いえ。正確に言えば古い大和言葉での

『くに』となります。このくにが指す

のは、自然や命の事であり、決して

特定の国家や人間を護る存在では

ありません」

上総の言葉に応える芹沢。しかしふと、和泉に疑問が浮かんだ。

「あの、そもそも怪獣達って大昔の、

言わば古代生物なんですよ？

それがどうして聖獣になってるんですか？」

「あくまでも推察ですが、帝国には古く

から自然信仰があった。八百万の神、

と言うように、古来から神道において神は

万物に宿るものとして、自然を始めとした

もの全てが信仰の対象だった。

そんな中で、巨大な生き物である怪獣は、

十分信仰の対象になりえたのではない

ですか？」

「確かに。昔の人からしたら、怪獣みたいに

デカくて強けりや、信仰されてもおかしくは

ない、か」

芹沢の言葉に頷く安芸。

「ええ。そして、バラゴンやガーディーは

人々から信仰を集め、そしてその結果、

聖獣や霊獣としての『格』を得た。

そう、私は考えていますし、その本にも

同じような記載がありました」

「強い信仰心によって存在そのものが昇華された、と?」

「おそろくは」

上総の言葉にそう応える芹沢。

「古くからこの星に生きていた獣たち。

それが怪獣。そして、今その怪獣達が目覚めつつある、と言う事ですね?

芹沢博士」

上総の問いかけに、彼は静かに頷いた。

「ええ。そして、だからこそ怪獣を、

バラゴンやガーディーを間近で見、

戦術機越しとは言え触れた貴方達に

話を聞きたいのです」

という彼の言葉に、姿勢を正す唯依達。

そして芹沢から聞かれたのは、怪獣の

能力や戦い方などを始め、他に何か

気づいた点などを質問された。

そんな中で……。

「あ、そういやバラゴンとガーディーつてさ。

何て言うか、犬みたいじゃなかった?

人懐っこいって言うか」

「うん。撫でたら喉を鳴らしてたの、

ちよつと可愛かった」

安芸の言葉に和泉が頷く。

「でも、相手はその、獣なんですよ?

いくら神聖な存在だからって、下手に

近づいたりするのは……」

と、若干苦言めいた事を口にしてしまう唯依。

彼女も、バラゴン達に助けられた身ではあるが、

やはり相手は人知の及ばない存在。それ故に

恐れてしまうのも無理は無い。

しかし……。

「いや。少なくとも、バラゴンとガーディーに関しては極端に恐れる必要は無いだろう」  
芹沢がそう言って静かに首を振った。

「それはどうしてですか？」

「皆さんの話を聞いて思ったんですが、  
貴方方4人はバラゴンとガーディーの危機を救った、と言うのは間違い無い事ですね？」

首をかしげる和泉の言葉に応える芹沢。

「それって、あれかな？バラゴンとガーディーに取り付いた戦車級を倒したって言う」

「ええ」

安芸の言葉に、芹沢は静かに頷いた。

「そして戦闘終了後、あなた達のお礼を

言うように、声を掛けたと。そこ

から言えるのは、彼等にも『心』や

『知性』がある、と言う事です」

「心や、知性？」

芹沢の言葉に、志摩子は首をかしげた。

「ええ。知性や心を持つのが、人だけだと

考えているのなら、はつきり言わせて

貰えば、それは人間の傲慢です」

どこか鋭い視線の彼の言葉に、咄嗟に

口をつぐむ唯依。先ほどの発言は、怪獣達

を獣とIIで結びつけるような発言だったからだ。

「すみません、先ほどの私の発言は、失言でした」

「あ、いや。こちらこそ失礼を。」

責めている訳ではないのですが……。

やはり、怪獣をただの獣と断じる、愚かな

大人を、私はたくさん見てきたので。

……失礼しました」

そう言つて唯依に頭を下げる芹沢。

「あの、芹沢博士は、怪獣をどんな存在だと思つて居るのですか？」

不意に、そんな事を問いかける和泉。

「私にとつて、怪獣とは即ち、この世界のバランスを保つ存在です」

「世界のバランスを、保つ？」

「ええ」

唐突な表現に首をかしげる上総。

他の面々も少し驚いている様子だ。

そんな中で頷く芹沢。

「自然界には、調和を取り戻そうとする力があると、私は考えています。

そして怪獣達は、その調和を取り戻す力なのではと、私は考えています。

そして、だからこそ怪獣達は目覚め、

BETAと戦うでしょう」

「それは、BETAがあらゆる物を食い尽くす存在だから、ですか？」

「ええ。BETAは全てを食い尽くす。

自然も、命も、生命の調和も。全て。だからこそ、バランスを保つ存在

である怪獣達は、この星を食い荒らすBETAを決して許しはしない」

唯依の言葉に芹沢は頷き、話す。

「これから恐らく、世界各地で怪獣が目覚めるでしょう。そして彼等は、

この星の破壊者であるBETAと戦う。そしてそれは、変化となるでしょう」

「変化？」

彼の言う言葉の真意が分からず、首を

かしげる安芸。

「ええ。これまで、BETAを相手に戦線の後退を続ける人類でしたが、彼等がBETAと戦うのであれば、それは少なからず戦況に変化をもたらすでしょう。そして、それを生かすも殺すも、全ては人間の行動次第です」

「それはつまり、怪獣達と共に戦うか否か。博士はそう仰りたいのですか？」

「……ええ」

鋭い視線のまま問いかける上総に対して、芹沢は静かに頷いた。

「彼等と共に、この星に生きる同じ命として降り注ぐ災いに立ち向かうか。彼等を獣と侮り、この混沌の世界で三つ巴の戦いを繰り広げるか。

……全ては、我々人類の選択に掛かっている。

私は、そう確信しています」

今の芹沢の目は、彼の確固たる信念を表すかのように、5人を真っ直ぐ見つめていた。

そうして、改めて防衛戦の時の話をしていった時。唯依の目がとあるページで止まった。

「これは……」

「ああ。それは3体目の護国聖獣ですよ」

ポツリと呟いた唯依に答える芹沢。

「え!?護国聖獣って、バラゴンとガーディーだけじゃないんですか?!」

驚いた様子で声を上げる志摩子。

「ええ。この護国聖獣伝記に記されている聖獣は、全部で3体。その内の2体が、

皆さんの遭遇したバラゴンとガーディーです。そして、残された最後の1体。それこそが最強の聖獣。『彼』は成長が遅いとされ、完全体になるには1万年の眠りが必要だとその本には記されています」

「最強の、聖獣」

唯依は本の中にある単語に目を落とす。

そして、彼女は漢字で記されたその名を  
読み上げる。

『ギドラ』、と。

その後、話を聞いた芹沢は帰っていき、  
残った唯依達。

すっかり話し込んでしまっていたので  
外はもう既に暗く、彼女達は基地の食堂で  
夕食を取っていた。

そんな中で……。

「バラゴン達と、共闘かあ」

ポツリと、安芸が食事の手を止め呟いた。

更にその言葉に、唯依達も手を止める。

「どうかしたの？安芸」

「あ、いや。博士に言われた事を思いだして  
ただけだよ。……バラゴン達と一緒に  
戦うのか、それとも対立するのか。」

正直、分かんなくてさ」

「分らない、って？」

安芸の言葉に首をかしげる和泉。

「いや、だってさ。私たちは斯衛軍の衛士だろ？  
だったらもし、バラゴンやガーディーが、  
もし斯衛の敵になったら、それってつまり  
私達の敵になるって事だろ？」

「ッ、それは、そうだよね」

志摩子は息を呑みながらも、彼女の言葉に頷く。しかし納得は出来ていない様子だ。

「もし仮に、斯衛や帝国の偉い人達が、ガーディー達を敵だつて言つたら、私達はガーディー達と戦うしかない、つて事だよね」

志摩子の言葉に、他の4人も俯く。

「嫌だな。あの子達と戦うのなんて」

ポツリと呟く和泉。

「私つて、きつと、あの子達が居てくれたから、京都を生き残れた気がする」

「それは、私達もだよ」

彼女の言葉に、志摩子が頷く。

「そうですね。あの2匹が、バラゴンと

ガーディーが居なければ、防衛戦も

どうなっていた事か。そして、私達も

どうなっていた事か。あの2匹は、

言わば私達の、いいえ。あの戦いで

生き残った人間たちにとって、恩人にも

等しい存在。……『彼等』の助け

なくして、果たして私たちが生き

残れたでしょうか？」

彼女の問いかけに、4人は皆、視線を落とす。

そして更に彼女は続ける。

「衛士の立場で言えば、あの戦闘力を持つ

彼等と敵対するのは、はつきり言つて

策として下の下。ただでさえBETAを

相手に押されている今、愚策の極。

……そして、ただ1人の人間として

言うのなら、あの日彼等に助けられ



繋いだこの命。その恩を仇で返すような事は、絶対に避けなければなりません」  
確固たる信念を思わせる瞳で、4人を見つめる上総。すると4人とも静かに頷いた。

「そして、幸運にも今の私たちは、彼等の調査をする立場にある。だからこそ、今は私たちの立場を生かすべきではありませんか？」

そう言うと、上総は不意に笑みを浮かべた。「そう遠くない将来。彼等と共に、人類がBETAと戦うために。同じ星に生きる、同じ命として。彼等と共に戦えるように。彼等と敵対すると言う愚策を、人類が犯してしまう前に。……初めて、怪獣と接触した人間として」  
笑みを浮かべながら語る上総の言葉に、他の4人も、笑みを浮かべながら頷くのだった。

しかし、決心したとしても、彼女達の立場は一部隊の一パイロットに過ぎず、発言力に関しては無いも等しいものだった。そして、折角設立された調査隊も、前線でも兵力不足から調査をするどころかその前線に回されてしまった。

ある日、前線に配置されてしまった唯依達の中隊。一応、後方の部隊だが、それでも戦闘地域に居るのだ。そして彼女達にとってはまだ2回目の実戦。緊張するな、と言う

のは無理な話だ。

そして戦闘が始まり、案の定物量で押し寄せてくる  
BETAを前に第1陣の防衛ラインが突破され、  
唯依達の元へと迫る先鋒、戦車級の群れ。

「来るぞっ！各機兵器使用自由！」

「迎え撃てっ！」

「「「了解っ！」「」」」

隊長である佳織の指示に従って武装を  
構える瑞鶴たち。と、そんな中で……。

「バラゴン達が居てくれれば……」

志摩子がポツリと呟いた。

と、その時。

『ドガアアアアアアアンツ!!』

彼女達の前方の大地が突然爆発し、その下  
から現れたバラゴンが、ちょうど真上を  
通過していた戦車級達を吹っ飛ばした。

「え!?!え!?!」

突然の登場に和泉が驚く中、バラゴンは  
咆哮を上げた。

「ば、バラゴン!?!なんで!?!」

突如現れたバラゴンに対して、困惑と喜びの  
半々、と言った感じで叫ぶ志摩子。

佳織を始め、他の中隊衛士達も、皆困惑した  
様子だ。

更に……。

『ガールルッ!』

「ツ!?!このうなり声って!?!」

聞き覚えのあるうなり声に振り返ると、  
そこにはガーディーの姿が。

「バラゴンに、ガーティイも。」

また、来てくれたの？」

2匹を見つめながらポツリと呟く和泉。

そしてガーティイはズシンズシンと音を立てながらバラゴンと合流すると、揃って

咆哮を上げる。

そして、少しだけ後ろに見える、佳織達

の中隊へ。正確に言えば、その中の志摩子達の瑞鶴へ向かって振り返る2匹。

そして、2匹は互いにならずき合うと前に

踏み出した。護国聖獣として、くにを荒らす

異星起源種をぶちのめすために。

そして、彼等の出現にハツとなる佳織。

『ここは、再びあの2匹と共に戦うべきか』

彼女もまた、京都防衛戦の勝利の要因が、

怪獣にある事は百も承知していた。

そして今、彼女の前に怪獣が居る。しかも

2匹は明らかに志摩子達を意識している

様子があつた。だからこそ……。

「中隊各員へっ！我々はこれよりバラゴン

とガーティイを支援するっ！各機

兵器使用自由っ！行くぞっ！」

「「「了解っ！」」」

佳織の赤い瑞鶴に続いて、唯依の黄色い

瑞鶴と残り10機の白い瑞鶴が前に出る。

そして、2匹が要撃級や突撃級に専念

出来るように、2匹の傍で突撃級や光線級

に対して撃ちまくる志摩子達。

そして、彼等と彼女等は、お互いをカバー

するように戦った。

バラゴンとガーティイを左右から包囲しよう

とする戦車級を唯依達の瑞鶴が退け。  
逆に向かってくる突撃級をバラゴンの熱線  
で足を溶かして倒し。

ガーデーのぶん投げた突撃級がぶつかって  
倒れた要塞級の頭を、集中砲火で潰す。  
更に、あの日のように各地から部隊が  
集まり、怪獣を狙うBETA群を更に包囲する。  
加えて京都防衛戦よりも小規模な侵攻で  
あつた為、戦いはあの戦いよりも遙かに  
短い時間で終了した。

それでもやはり、戦闘が発生する以上  
犠牲は出る。

しかし、怪獣たちの傍で戦い、お互いに  
フオローしあう戦いをした結果か、  
唯依達は再び、戦死者0で戦いを乗り切る  
と言う奇跡を経験するのだった。

そして、戦いが終わると、あの時のように  
バラゴンとガーデーが、志摩子達の元へ  
と歩みを進める。

「また、助けてくれたね。ありがとうバラゴン」  
そう言って和泉の瑞鶴がバラゴンを撫でる。

「ガーデーもありがとう。ガーデーは  
強いねえ」

更に志摩子の瑞鶴もガーデーを撫でる。  
すると2匹とも、気持ちよさそうに喉を  
慣す。

それを見ていた佳織は……。  
『やはり、この2匹には感情がある。』

喜怒哀楽を感じている様子だ。

その辺りも上に報告するか』

と、佳織は内心呆れながらも、笑みを

浮かべながら怪獣と戦術機を通して  
触れあう志摩子達を見守るのだった。

そうして、京都防衛戦以降、帝国の最前線  
は緩やかな後退を続け、京都を放棄する事にな  
ってしまふのだが、しかし怪獣達の  
活躍もあって、その後退はとて緩やかな  
ものであり、その理由が怪獣達にある事は、  
もはや誰の目にも明らかであった。

しかし、それでも相手は億越えの怪物の群れ。  
人類と怪獣の戦いを嘲笑うかのように、  
ジリジリとその勢力圏を伸ばしつつあった。  
そして、BETAの波は、確実に東京へと、  
次なる目標へと着実に迫りつつあったの  
だった。

### 第3話 END

## 第4話 白き冬

突如として現れた怪獣、バラゴン、ガーディー、バラゴンの活躍によって京都防衛戦を生き抜いた唯依達。更に、それ以降も襲いかかるBETAに対して、バラゴンとガーディーは率先して戦場に現れるようになった。

しかし、彼等と人間の奮闘を嘲笑うように、BETAはジリジリと人類の戦線を押し込み、今や京都を超え関東一帯へと迫りつつあったのだ。

そんな中でも、唯依達は懸命に戦った。ほぼ全ての防衛戦にかり出され、そんな中で、バラゴンやガーディーと共に戦った。時にはバラゴンとも。

更に言えば、彼女達はBETAとの積極的な接近戦を避ける事で、これまで死傷者を出さずに何とか生き残ってきた。

BETAにおいて、遠距離攻撃能力を持つのは光線属種の、光線級と重光線級の2種のみ。あとは精々要塞級の衝角だ。

彼女達はBETAの突撃級や要撃級、戦車級などがガーディーやバラゴンに近づかないように、戦闘では光線級の射界に入らないように最大限注意をしながら中距離からの援護に力を注いだ。

更に、光線属種も戦術機などより怪獣を警戒しているのか、バラゴン達が現れると、光線級の射撃ももっぱらそつちに集中する為、それが唯依達の生存の一助になっていたりする。

そうやって、奇跡的に生き残り続けてきた唯依達。彼女達の家族や、彼女達自身にとってそれは喜ばしい事だ。

だが、怪獣を疑う者、その存在を危険視する者、更には戦いで家族を失った者達からは、軽蔑や嫉妬を込めて、獣に媚びを売る女たち、と言った類いの陰口を叩かれていた。

しかし、それでも怪獣たちによって前線の後退が帝国軍などの予想よりも緩やかな事は事実であり、怪獣達の存在を肯定し、密かに崇め始める人間達もいた。

と、ここで少し話を戻すが、芹沢は頻繁に怪獣、バラゴンやガーディーと接触していた唯依達の元へと、彼もまた、何度も足を運んでいた。そんなあるとき、11月のある日の事だった。

「そうだ。君たちに、これを」

いつものように話を聞き終えた時、芹沢が持ってきていた鞆の中から、奇妙な形の、平べったい石のような物を取り出した。

「これは？」

「バラゴンやガーディーと言った護国聖獣の

調査中に発見したものだ。用途などは一切不明の出土品だが、この国で最も彼等とゆかりのある君たちが持っている方が意味があるんじゃないかと思ってるね」

そう言つて2個、不思議な形の石を渡す芹沢。

「博士。どうしてこれを私達に？」

不思議な石を受け取りながら首をかしげる志摩子。ちなみに、今ではお互いため口でOKな間柄だ。芹沢は、5人からもらえばら博士と

呼ばれている。

「今言ったように、現在この国で最も  
彼等と交流、この場合、縁と言った方が  
良いだろうが、それがあるのが君たちだ。  
だからこそ、私が持っているよりも  
君たちに託した方が良いだろうと判断  
した」

「しかし、良いのですか？これはモナーク  
が保管すべき物のはずでは？」  
そう言って首をかしげる上総。

「構わない。既に上層部から許可を貰って  
いる。それに、上もそんな石ころが  
外に漏れた所でどうでも良い、と  
考えている程度だ。気にせず皆で  
持っていてくれ」

「博士がそう言うなら」  
と言う事で、話し合いの結果、安芸と和泉  
がこれを持つ事になった。

だが、話はそれだけではなかった。  
「それと、これからはしばらく君たちと  
会えなくなるだろう」

「え？」  
芹沢の言葉に疑問符を浮かべる唯依。  
「戦線の後退に伴って、仙台に移動に  
なった。明日にでも、あちらに向かう  
つもりだ」

「そう、ですか」  
安芸は、どこか悲しそうに顔を伏せた。  
他の4人も、どこか悲しそうだったり、  
悔しそうな表情を浮かべていた。  
戦線の後退。それはつまり、帝国が



押されていると言う事に他ならない。

そして更に悪い事が2つあった。

それは、戦線の後退を理由にアメリカが

一方的に日米安保を破棄。在日米軍は帝国

よりの撤退を開始している。

これはつまり、帝国でBETAと戦う戦力が

減ったと言う事に他ならない。

もう一つ。それは日本海の佐渡島に、

BETAの巣窟、『ハイヴ』の建設が

始まってしまったことだ。

BETAは、ハイヴより出現し侵攻してくる。

これまでBETAが出現し、日本に向かって

来たのは、朝鮮半島にある20番目の

ハイヴ、『鉄原（チョルウォン）ハイヴ』からだ。

しかし国内にハイヴが出来た、と言う事は、

それだけBETAの攻撃が増加する可能性がある。

自分達の防衛能力の低下と。

敵の攻撃能力の増加。

はつきり言って、悪い事づくめだ。

その悪い事ばかりを思いだし、彼女達は

静かに歯がみする。

すると、その時、立ち上がった芹沢が

真ん中に居た唯依に手を差し出した。

「今お互い、別々の場所で生きる事に

なるが、『必ずまた』、どこかで会おう」

「博士」

唯依は、それが彼なりの励ましと知って、

静かに彼の手を取った。

「ええ。必ず、またどこかで」

そして2人は握手を交わし、芹沢は

他の4人にも挨拶をすると、部屋を後にした。

そして……。

「生き残ろう。みんな」

唯依は、周りの4人に呼びかける。

「折角、『死の8分』を乗り越えたん

だから。こんな所で、死ねない」

「ああ。そうだなっ！生き残ってやる！」

唯依の言葉に同意するように、パシツと

手を打ち付け合う安芸。

「うん。そうだね。生き残ろう。みんなで」

志摩子も、そう言って笑みを浮かべる。

「戦って、勝って、生き残る。皆で」

和泉も、戦いの中で命を落とした恋人の

写真が入ったペンダントを抱きしめながら、

静かに頷く。

「そうですね。諦めずに、最後まで、

共に戦いましょう。仲間と共に。

そして……。バラゴンやガーディー達

と共に」

笑みを浮かべる上総の一言に、他の4人も

頷く。

彼女達は、決心する。戦う事を。そして、

生き残る事を。

しかし、BETAはそんな彼女達の決意を

嘲笑うかのように、襲いかかって来た。

12月。冬。曇天の空の下、戦場で戦う

男と女たち。

そして、彼等と共に戦うバラゴンとガーディー。

だが、BETAはまるで、それを嘲笑うかの

ように、京都防衛戦以上の物量でもって、襲いかかって来た。

序盤と中盤こそ、バラゴンとガーディーのおかげで優勢、拮抗と言う形だった。

だが、2匹にも体力の限界がある。

次第に押され、2匹の体に戦車級が纏わり付き、要撃級の一撃が彼等の体に撃ち込まれる。

悲鳴にも似た咆哮を上げながら、2匹は必死に戦った。

「やめろおおおおっ！」

と、そこに後方での補給を終えて戻ってきた安芸たちの射撃が繰り出される。

2匹の傍に居た要撃級の群れに銃弾の雨が降り注ぐが、BETAはそんなことお構いなしに2匹へと群がる。

「各機！バラゴンとガーディーを援護っ！」

彼等からBETAを引き離せっ！」

「了解っ！」

彼女達は、佳織の指示に従ってBETAを撃ちまくる。

更に撃たれて数が減ったチャンスを生かし、バラゴンは転がって。ガーディーはその場で回転し、取り付いていた戦車級を弾き飛ばした。

「いのおっ！」

飛ばされ、倒れながらも起き上がった戦車級を志摩子や和泉の瑞鶴の突撃砲が撃ち抜く。

これで2匹は自由になった。しかし、彼等も限界が近いのか、バラゴンは蹲り、ガーディーもその場に四つん這いになって動かなく

なってしまうた。

その事で、唯依達の中に絶望が顔を覗かせ始めた。だが……。

「総員傾注っ！BETAはまだ居るっ！だがっ！

後は精々1万程度だっ！ならば、あとは

我々で倒すだけだっ！バラゴンとガーディー

の戦いを無駄にするなっ！各自っ！彼等を

護りつつ、残存BETAを殲滅せよっ！

撃ちまくれえっ！」

「「了解っ！！」」

佳織の、部隊を鼓舞する指示に応じて、

少女達も覚悟を決め、引き金を引く。

「あああああああっ！」

咆哮のような叫びを上げながら、撃ちまくる志摩子。

「バラゴン達には、近づけさせないっ！」

彼等を護ろうと群がってくる戦車級を撃ち抜く和泉。

「こいつらに、近づくなあああああっ！」

接近してくる要撃級を撃ち抜く安芸。

「そこおっ！」

上総の正確な狙撃が、遠方の光線属種を撃ち抜く。

そして、彼女達は、これまで護られてきた恩

を返すように、バラゴンとガーディーを

護った。近づいてくる戦車級の群れを、

一歩も引かずに撃ち殺していく。

そして、そんな彼女達の背中を、静かに

見つめるバラゴンとガーディー。

そして、約15分にも及ぶ戦いで、彼女達は

向かってくる要撃級と戦車級の混成BETA群

の殆どを退けた。あとは精々50匹程度の

戦車級だけだ。

だが……。

『ビーツビーツ!』

その時、戦術機のシステムが、彼女達に光線属種から狙われている事を告げる。

今、彼女達を狙っているのは、通常の

光線級以上の高威力レーザーを放ってくる、

重光線級だ。戦艦の耐熱装甲板ですら

10秒程度で蒸発させてしまう。

それが唯依達を狙っていたのだ。まともに

喰らえば、塵一つ残さず消えてしまう

だろう。

そして、上総の瑞鶴のカメラアイが、遠方

の山からこちらを狙う重光線級を捕えた。

その数、2匹。恐らくは最後の生き残り

だろう。重光線級のレーザーのインターバル

は36秒。しかし、こちらからの攻撃は届きそう

になく、更に重光線級の防御力は高く、

突撃砲の120ミリクラスの破壊力を持つ

攻撃をぶつけなければならぬ。そして、

今からでは有効射程に近づきぶち込むのは

難しい。

「くっ!? 総員退避っ!」

咄嗟に指示を出す佳織。

だが、まるでそれを阻止するかのようには、

残った最後の戦車級が群がってくる。

「このおっ! バラゴン達には、近づけさせないっ!」

安芸が戦車級を、2匹に近づけまいと倒していく。

「私だってえっ!」

更に和泉も、安芸と同じように戦車級を倒していく。

数は多くなかった。故にすぐに倒しきる事が

出来た。

だが、掛かった時間は数十秒。そして、重光線級にとつて、その数十秒で、十分なのだ。その攻撃を放つには。

直後、その巨体から放たれたレーザーが、安芸と和泉の瑞鶴へと向かっていく。

誰もが、2人の死を予見してしまう。

志摩子が硬く目をつぶり、上総がギユツと歯を食いしばる。

だが……。

『ドオオオオオオオンツ!!!』

レーザーは、確かに命中した。

だが……。

当たったのは、安芸と和泉の瑞鶴を護るように立つ、ガーディーとバラゴンに、だった。

「え？」

ポツリと、安芸の口から疑問符が漏れる。

「ば、ガーディー？お前、何やって……」

武器を持たない安芸の瑞鶴の左手が、

目の前のガーディーの背中に伸びる。

「バラゴン、どうして？」

訳が分からず、和泉も呟く事しか出来なかった。

そこに再びレーザーを放とうとする重光線級。

しかしそれは、唯依達とは別部隊の攻撃に

よつてその2匹が倒された事によつて事なきを得た。

そして、BETAを全て退けた事もあって、

無線には作戦終了を告げる喜びと安堵の音が満ちている。

だが……。

『ズズウウウウンツ!!』

バラゴンとガーディーは、地面に倒れてしまった。

「ツ!?バラゴンっ!」

「ガーディー!」

和泉と安芸の瑞鶴は、それぞれバラゴンとガーディーに駆け寄り、更に周囲に唯依や上総、佳織達の瑞鶴が集まる。

「しつかりしろガーディー!ガーディー!」

「バラゴン起きてっ!バラゴンっ!」

安芸と和泉は、悲痛な声で必死に2匹に呼びかける。

すると、2匹とも目を開け、目の前の瑞鶴を、延いてはその中に居る安芸と和泉に目を向ける。そして、2匹は小さく喉を鳴らす。

まるで、2人の無事を喜ぶかのように。

と、その時、曇天の空から白い雪が降り始める。

「雪……?」

ポツリと空を見上げながら唯依が呟く。

と、その時。バラゴンとガーディーの体が光を放ちながら、静かに、粒子となって周囲に霧散していく。

「ツ!!」

和泉は、それを見て、理解してしまう。

彼等の『死』を。その『消滅』を。

「だ、ダメっ。ダメッ!死んじやダメッ!」

咄嗟に、和泉の瑞鶴が武器を投げ捨て、両手でバラゴンを抱きしめた。

まるで、彼等を逝かせまいとするかのように。ここに留めようとするかのように。

「……ぎげるな。ふぎげるなよっ!」

なんで、なんでだよっ！」

安芸は、その目に涙を溜めながら、声を荒らげる。

「私、私ら、まだ、まだお前達に、

何にも恩返し出来てないのにつ！」

これまで、彼女達は何度も何度も、彼等に、バラゴンとガーディーによって、命を救われてきた。

そしてその恩は、まだまだ返しきれっていない。「死ぬなよガーディー！死ぬなっ！」

私達は、まだ、まだ何も返せて無いんだっ！

それをつ！それをおつ！」

溢れる涙で、安芸の視界が歪む。彼女はそれを必死に拭う。

と、その時。ガーディーが静かに、安芸の瑞鶴の手を舐めた。

そして、彼女に向かって、静かに、優しい声色で鳴くガーディー。

それはまるで、『良いんだよ』と、優しく語りかけているようであった。

そして、同じようにバラゴンも、和泉に向かって、小さく喉を鳴らす。

その行動に、安芸や和泉だけではない。これまで彼等によって護られ、生きてきた少女達は、静かに涙を流す。志摩子も、

唯依も、上総も。更には、佳織までも。

そして、バラゴンとガーディーの肉体は、やがて粒子となって、消滅してしまった。光の粒子が、周囲へと広がっていく。

誰もが、声を漏らす事無く、ただ、涙を



流しながらそれを見送る。

彼女達はただ、それしか出来なかった。

「あ、ああ、あつ」

安芸の表情が、次第に歪んでいく。

止めどない涙が、その瞳を満たす。

「あああああああああああつ!!!」

そして、彼女はただ、やるせなさを

慟哭に変えて、コクピットの中で叫び

ながら、大粒の涙を流す事しか出来なかった。

「バラゴン」

そして和泉も、ただ、涙を流しながら、

これまでずっと、自分達を護ってくれた

彼の名を、呟く事しか出来なかった。

「バラゴン、ガーディー。う、ううつ」

志摩子もまた、ただ、涙を流す事しか

出来なかった。

「……………」

皆が嗚咽を漏らす中、上総はただ1人、

涙を流しながらも、彼等の居た場所を、

ただジツと、見つめ続けていた。

例え異なる種族であろうと、人と怪獣で

あろうと、自分達を守り、共に戦った

彼等の死に、少女達は涙を流す。

そして、彼女達の涙を現すかのように、

降りしきる雪が、瑞鶴のカメラアイに

触れて溶け、その顔を伝って地に落ちる。

まるで、戦術機までもが、衛士たちと

共に、戦友の死を悼んでいるかのように。

だが、前線より遙か後方。唯依達の基地の、  
安芸と和泉のロッカーに収められたあの  
不思議な石に、どこからともなく降り注いだ  
光の粒子が収められ、ただ、一度だけ石は輝く。  
しかし、今の唯依達に、それを知る由は無い。  
今はただ、少女達は戦友の死に、涙を流す事  
しか出来ないのだった。

第4話 END

## 第5話 本物の『怪物』

帝国は今、BETAの侵略を受け、遂には関東圏までその存在が迫っていた。

米軍の撤退。佐渡島ハイヴの建造。

そして、バラゴンとガーデイーの消滅。

それは人々に対して大きな絶望となった。

そして、最もダメージが大きかったのは、

唯依達だった。

あの戦いの後、帰還した彼女達は皆無言で、

その頬には泣きはらした涙の痕が残った

ままだった。氣力を失っている、と言う

表現が似合いそうな事態となり、隊長

である佳織は、彼女達を一時的に前線から

下げられないか、上層部と掛け合った。

上官として、今のまま前線に行けば

確実に死んでしまいそうな彼女達を

見ていられなかったのだ。

そして、以外にも彼女の提案は受諾された。

もちろん彼女の進言と、唯依達の状況を

哀れんだから、等では無い。

一つはモナークの人間である芹沢が日本政府

を通じて、『怪獣と初めて接触し、剩え心を

通わせた彼女達には相応の価値があり、

怪獣との対立を避ける意味でも彼女達を

無駄死にさせるのは得策ではない』、と言う

旨を斯衛軍上層部に伝えた事。

更に五撰家の1人であり、唯依の従妹叔母に

当る『崇宰 恭子』が、芹沢の言葉に

価値があると判断した結果、こちらに対して

色々口添えをした事が大きかった。

結果、唯依達はバラゴンやガーディーを失った失意のまま、首都機能を仙台に移転するために、避難民の護衛、と言う事で前線を離れて一度北部へと向かうのだった。

そして、そんな避難民を追うように、BETAは迫りつつあった。

1999年1月。年も明けて新年だというのに、誰もがそれを祝う事など、出来ないのであった。

某所、海底。

一片の光も挿さない深海の奥底で、静かに眠っていた『巨獣』が目を覚ました。

目覚めた巨獣は、彼は、遙か遠方を見つめる。そしてそこに跋扈する、異星起源種達の気配を察知する。

『グルルルッ』

彼は、静かに唸ると、ゆっくりと歩き出した。

『ゴアアアアアアアアアアッ!!』

漆黒の深海に響き渡る巨獣の咆哮。

それはまるで、開戦を告げる鐘の音の

ように、暗い海へと響き渡る。

そして巨獣、『怪獣王ゴジラ』は、

その足を進める。

この星を食い荒らす存在を、破壊するために。

その視線の先にあるのは、極東の島国、帝国。

彼は歩みを進める。そこにいる敵を、

倒す為に。

そして、彼が向かう視線の先にある帝国の都市、横浜。今そこで、4人の少年少女が、必死に走っていた。

「走れ！『武』っ！『純夏』っ！『優子』っ！」  
先頭を走る黒髪の少年。その後ろを、茶髪の少年と、朱色の髪と大きな黄色いリボンが特徴的な少女。更に黒髪ショートヘアの少女が続いている。

彼等は、先頭を走る少年、『榊 陽男（はるお）』に続き、『白銀 武』、『鑑 純夏』、『谷 優子』は息を切らしながらも必死に走っていた。

4人は、この横浜の街で育った幼馴染みだ。腐れ縁で、何をするにも4人一緒だった。だが、今は住み慣れた街を捨て、必死に走っていた。BETA襲来の警報を受け、彼等は家族とともに逃げ出した。

だが、逃げる人混みの中で、それぞれの家族とは離れ離れになってしまった。それでも彼等は走る。逃げた先で、家族と会える。きっと生きている。再会出来る。

そんな淡い希望を抱きながら、彼等は走る事しか出来なかった。  
だが……。

『ドドドドドドドドドッ！』

そんな彼等の必死の逃走を嘲笑うように、BETAの先鋒、突撃級の群れが、時速170キロで離れた所から4人の方へ向かってくる。轟く進撃音に、4人は足を止めて振り返ってしまう。そして向かってくるBETAの群れを目にしてしまう。

そして、純夏と優子の表情が、一気に青ざめる。突撃級と人間の足では、勝負にもならない。すぐに追いつかれ、踏み潰されるだろう。そんな絶望感から、純夏と優子はその場に崩れ落ちるように膝を突いてしまった。

「ッ!? 純夏! 優子も立つんだっ! 逃げるぞ!」

咄嗟に声を掛ける陽男。しかし、2人とも動かない。

「くっ! 武っ! 純夏を頼む! 俺は優子をつ!」

「お、おおっ!」

陽男と武は、それぞれ優子と純夏を立たせるとその手を引いて走り出した。

『クソッ! クソオッ!』

陽男は、頭の中で全てを罵る。

自分達の生まれ育った街を蹂躪するBETAを。それを押さえ込めない人類の、軍隊の無力さを。そして何よりも。ただ逃げる事しか出来ない自分自身の『弱さ』を。

「チクシヨオオオオオオオオッ!!!」

怒り、悲しみ、憎しみ。負の感情を

織り交ぜて、彼は叫ぶ。

一方、防衛戦の指揮所には菽閣の姿があつた。彼は現場から上がる悲痛な報告に顔をしかめている。

『……彼等がいなければ、やはり人類は

この程度だと言うのか』

彼等、とはつまり、バラゴンやガーディーの事である。そして、現在において唯一生存が確認されている balan は、佐渡島ハイヴが建造されると、そこから日本海を渡って

上陸してくるBETAに対して、ほぼ  
かかりつきりで戦っている。そのため、  
今現在において、バランスの助力は得られて  
いない。

『クソッ。こうなれば、もはや悪魔でも  
何でも良い。あの憎きBETA共を、  
滅ぼせるのならっ!』

目を覆いたくなるような現状に、彼は  
そんな事を考えてしまう。  
と、その時。

「き、緊急連絡!」

「萩閣や周囲の佐官たちの耳に飛び込んでくる  
その言葉。不意に萩閣は、いつぞやの、  
光州作戦の時のようなデジャブを感じた。  
そして、それはその通りであった。

「東京湾に未知の巨大不明生物出現!」

「何だ?!まさかBETAが地下を  
侵攻してきたのか!」

突然の報告に佐官の1人が叫ぶ。BETAは  
希に、地下を侵攻してくる事がある。  
なのでそれを疑うのも無理は無い。

「いえっ!現場からの報告では、BETA  
ではない模様!」

「何?では怪獣か?で、大きさは?  
まさかバランスか?」

彼等がまず真っ先に疑ったのはバランスだ。

「しよ、少々お待ちを。今確認を」  
通信士は、そう言って通信でやり取りを  
するが……。

「……え?」

彼は、通信の内容を疑った。

「どうした！何を呆けている！

早く報告せんかつ！」

その様子に苛立った様子の佐官が声を荒らげた。

そして、通信士は、顔を青ざめさせながら答えた。

「と、東京湾に出現した生物の体高は、さ、300メートルを超える模様」

「……………はっ？」

彼の言葉に、萩閣は疑問符を浮かべた。そして彼はすぐさまその通信士の傍に駆け寄った。

「本当に300メートルを超えているのか？」

聞き間違いじゃないのか？」

「い、いえっ！確かに報告では300メートルを超えるっ！」

「で、奴の侵攻ルートは？」

「は、はいっ！現在巨大不明生物は、横浜市の本牧埠頭より上陸しつつありとの事です！」

「その映像は出せるか？」

「はい。やってみますっ！」

萩閣の指示に答え、通信士は近くを航行する帝国軍の艦船が捉えた映像を、データリンクで取得し、モニターに映し出した。

『『『ザワザワツツ!!』』』』

それだけで、司令部内はざわめきに包まれた。「……………デカイ」

周囲に映る建物と比較し、更にアンギラスを目撃した事もある萩閣でさえも、驚きからそう呟いてしまうほど、その生物は、ゴジラとは強大な存在だったのだ。

『ゴアアアアアアツツ!!』



埠頭から上陸したゴジラは、咆哮を上げるとその巨体で足下の建物を粉碎しながら、ノシノシと静かに、しかし着実に足を進める。そして、映像を食い入るようにつめていた者達の中で、萩閣が一番に我に返った。

「おいっ！あの巨大不明生物の侵攻ルート  
を調べろっ！それと、戦闘中の各部隊に  
怪獣出現の連絡っ！加えて奴に対して  
攻撃を控えるように通達っ！急げっ！」  
咄嗟に周囲に指示を出す萩閣。それを受けて  
通信士達が慌ただしく動き出した。

すぐに全部隊に帝国陸軍司令部から情報が  
伝わっていく。そして、そんな中でゴジラの  
侵攻ルートが割り出された。いや、実際  
には割り出す必要も無かったのだ。

「か、怪獣は真っ直ぐ、BETA群へ  
向かっていますっ！」

「ッ、やはりか」

報告に、静かに頷く萩閣。

『奴らは本能的にBETAを攻撃するようだ。  
だとすれば当然、BETA群に向かっ  
ていくだろう。だが、本当に奴1匹でBETA群  
を退けられるのか？今のBETA群の数は、  
京都防衛戦の比ではない。……大丈夫  
なのか？』

と、萩閣は疑っていた。ゴジラの勝利を。  
まあそれも無理は無い。彼の耳にも、バラゴン  
とガーデー消滅の話は届いていた。  
彼は怪獣という存在が不滅の怪物ではないと、  
理解している。つまりBETAが怪獣に勝つ  
可能性も0ではない。そう彼は考えている。

それ故に、ゴジラの勝利を疑ってしまう。  
だが、その疑問はすぐさま吹き飛ばされる  
結果となった。ゴジラがあと少しでBETA群  
と接触するか、と言う時。

「怪獣が移動を停止しましたっ！」

「っ、何？」

突如聞こえた通信士の声に、萩閣はモニターに  
目を向けた。見ると、確かにゴジラが市街地の  
ど真ん中で足を止めていた。

『何故止まった？』と、萩閣が考えた直後。

「か、怪獣の体内に高エネルギー反応！」

加えて背部の背鰭のような部位の放電を

確認っ！」

「ッ!?何だと!？」

萩閣は驚きながらも、瞬時に背鰭の放電が  
攻撃の予備動作ではないかと考える。

「おいっ!アイツのエネルギーを計測出来るか！」

彼はすぐに通信士に指示を出した。少しでも  
ゴジラのデータを得るためだ。そして指示を  
受けた彼はすぐにキーボードを叩くが……。

「け、計測不能!ダメですっ!エネルギー量が

巨大すぎて、この機器では計測出来ません！」

通信士から届く悲鳴じみた報告に、萩閣だけ  
でなく他の誰もが冷や汗を流す。

「怪獣の頭部にエネルギーの収束を確認っ！」

次いで上がった報告に、誰もがモニターへと  
視線を向けた。

そして……。

『ドシユウウウウンッ!!!』

その口元から放たれた光。青白い閃光。

そしてそれは、真っ直ぐ横浜へと到達しつつ

あるBETAの先鋒、突撃級の群れを捉え……。

『ドオオオオオオオオンッ!!』

着弾、爆発。

『『『ジユオオオオオオオオオオオッ!!!』』』』

そしてその圧倒的な熱量でもって、突撃級の群れを蒸発させてしまった。だが、それだけではなく、ゴジラは光線、『熱線』の照射を続けながら右から左へと首を振ってBETAの群れの大半を、蒸発させてしまった。

だが、蒸発したのはBETAだけではない。破壊されかけていた街並みも。そこで戦っていた戦術機や部隊も。そして、逃げ遅れていた人々も。その圧倒的な熱量でもって、焼き払ってしまった。

そしてその直後、ゴジラの熱線の余波として発生する電磁波障害によって司令室のモニターはブラックアウトしてしまった。

「ッ!?どうなっている!?映像は!?!」

「わ、分かりませんっ!電波障害が発生して

居る模様!」

「前線との通信は!?!データリンクはどうした!」

「一部は辛うじて機能していますが、例の怪獣の地点に近い部隊ほど障害の影響が強い模様!」

「ッ!?まさか、奴がこの状況を引き起こしていると言うのか!?!」

文字通り、『まさか』の考えに戸惑う萩閣。

生物が軍の通信を妨害するほどの電磁波を出すなど、前代未聞だ。BETAでさえ、これまでそのような事はしてこなかったのに、だ。

『格が、格が違いすぎる。これまで俺が見てきた怪獣よりも。ずっと』

彼がこれまで見てきた怪獣、アンギラスやバラゴン、ガーディー、 balanと言った怪獣たち。だが、今回現れたゴジラは正しく『別格』。比較のしようが無いほどに圧倒的な力を持つ存在だった。

それでも何とか、ゴジラからかなり離れた場所にいた戦術機のカメラが捉えた映像が回されてきて、司令部のモニターに映し出された。

そして彼等は気づく。残存BETAが全てゴジラに向かっていている事に。

その数は、10万を軽く超える規模だ。地を埋め尽くすほどのBETAが全て、たった1体の獣に向かっていく。

だが……。

『バチバチッ!』

再びゴジラの背鰭が放電する。

「ツ!?再び怪獣に高エネルギー反応!」

攻撃、来ますっ!」

「ツ!?またあれを撃つのか!?!」

オペレーターの報告を危機、萩閣はモニターを食い入るようにつめる。

だが、彼の予想は裏切られた。

『ゴアアアアアアアアッ!!!』

放たれたのは、咆哮。

だが、ただの咆哮ではない。それは

共振効果によって物体を破壊、粉碎する

『超振動波攻撃』だった。

この攻撃を受け、BETAの10万以上のBETAの大半。約5万匹の個体がバラバラに砕け散った。大量の飛び散ったBETAの体液

がBETAの同族や周辺を汚す。  
それでもBETAは進撃をやめない。  
だが、それは無謀な進撃に他ならない。  
そして、三度ゴジラの背鰭が放電する。  
ゴジラはグルル、と唸りながらもその体を  
捻り、そしてその巨大な尻尾を振り抜いた。  
直後、振り抜かれた尻尾の先から巨大な  
プラズマのカッターが放たれた。

『ドドドドドドドッ!!!』

放たれたプラズマのカッターは、全てを  
切断する。

突撃級の装甲だろうが、要塞級の巨体  
だろうが。街だろうが何だろうが。  
全てを切り裂き、切り伏せる。

そして、今の一刀が残っていた全ての  
BETAを切り裂き、吹き飛ばした。  
直後、戦場はこれまでの喧噪が嘘のように  
シンと静まりかえった。生き残っていた  
者達はモニターや戦術機のカメラ越しに、  
ただただ巨大なる獣、ゴジラを見つめる事  
しか出来なかった。

『ゴアアアアアアッ!!!』

そして、ゴジラは勝ち鬨を誇示するかのように、  
一度咆哮を上げると、踵を返し、東京湾へと  
消えていった。

その様子を、陸軍司令部で見ていた萩閣や他  
の将官、佐官たち。しかし、BETAを退けた  
と言うのに、彼等は誰も喜ぶ事など出来なかった。  
ただただ、現れた存在の強さに恐れおののく  
事しか出来なかった。

『格が、違いすぎる。我々人類とも、BETAとも、

他の怪獣達とも。あれこそ正に、『化け物』だ』  
そして歴戦の将である萩閣でさえも、恐れと  
畏怖から、ただただ海へと帰っていくゴジラ  
を、モニター越しに見つめる事しか出来なかった  
のだった。

だが、誰もが呆然とする中でただ1人、  
ゴジラの背を睨み付けている者がいた。  
それが、陽男だ。

時は少し遡り……。

武と陽男は、必死に走っていた。純夏と優子の  
手を引いて、息を切らし汗と涙を流しながらも  
必死に走っていた。

『ゴアアアアアアアアッ!!』

「ツ!!?」

だが、そんな彼、彼女達の耳に届いた咆哮。  
その咆哮に、彼等は立ち止まり俯いていた  
純夏と優子も顔を上げ、咆哮の主へと視線  
を向けた。

「何、あれ」

ポツリと呟く優子。他の3人も、ただ呆然と  
ゴジラを見上げている。かなり離れた場所に  
居ると言うのに、見上げる程巨大なゴジラの  
その巨体。

と、その時。ゴジラの背鰭が放電を始めた。

『ツ!?!』

陽男はそれを見て、悪寒を覚えた。

『あれは危険だ』。そう本能が彼に訴えかけた。  
そして彼はすぐさま周囲を見回し、コンビニを  
見つけた。

「皆こつちだつ！隠れるぞつ！」

彼は優子の手を引き、閉じたままのコンビニの自動ドアのガラスを蹴破った。

「武っ！早くっ！」

「お、おおっ！」

陽男に一拍遅れながらも武が純夏を連れて続く。そして店内に入った陽男は、カウンターの傍にあつた倒れそうな物を退かしている。

と、その時、外で強烈な光が瞬いた。

「ツ!?伏せろおっ！」

陽男は叫ぶと、咄嗟に優子の上に覆い被さり、それを見た武も、純夏を護るように抱きしめた。直後。

『ドオオオオオオオンツ!!!』

遠くで聞こえる熱線の着弾音。そして一拍の間の後、『ゴオオオオオツ!』と凄まじい

爆風が吹き荒れ、コンビニや商品棚が

ガタガタと揺れる。

「ぎやあああああつ！」

悲鳴を上げる純夏。

大きな揺れの中で、必死の彼女達を護ろうと

その体を抱きしめる陽男と武。

それから更に2回。超振動波攻撃とプラズマカッターの攻撃による振動と爆風が収まった頃、武と陽男は、純夏と優子の手を引いてコンビニの外へとでた。

そして、彼等は絶句した。

遠方に見える彼等の住み慣れた街は、

ゴジラの攻撃によって壊滅し瓦礫の山と

なっていた。

そして、その瓦礫の山の上に立ち咆哮するゴジラ。

勝ち鬨の咆哮を上げたゴジラは、踵を返して海へと向かっていく。だが、そんな中で陽男は静かに拳を握りしめる。

彼の目に映るのは、破壊された故郷の街並み。そして彼の中で、怒りが沸き起こる。

BETAに対する怒り。

ゴジラに対する怒り。

そして、無力な自分への怒り。

陽男は憤怒の表情を浮かべながら涙を流し、海へと帰って行くゴジラの背中を、いつまでも睨み付けるのだった。

一方その頃、芹沢は仙台でゴジラ出現の報告を聞いていた。

「ありがとう。もう休んでくれ」

「はい」

返事をして出て行く部下を見送った後、

彼は部屋の窓から見える外へ視線を向けた。

「どうとう、『彼』までもが参戦してきたか」

ポツリと呟く芹沢。そして彼は更に一言。

「始まる。ここからが、本当の変化だ」

遠くを見つめながらそう呟いたのであった。

ゴジラの出現によって、BETAは一時的に退けられた。しかし、その圧倒的な破壊力に帝国政府は警戒心を強め、いつぞやの時のように会議に萩閣を招集していた。彼が一番、怪獣を目にしているから、と言う理由でだ。

「……正直に申し上げれば、あいつは別格です」

「どう言う意味かね？中將」



「文字通りです。これまで出現が確認された  
アングラスやバラゴン、ガーディー、  
 balanなどと比較しても、いえ。もはや  
比較のしようが無いほど奴は強力です。  
例えば、あくまでも私個人の認識ですが、  
これまで出現した怪獣は『単独でBETAの  
軍勢とやりあえる存在』です。しかし奴の  
場合は、『単独でハイヴ攻略も可能な存在』  
だと考えています」

そんな彼の発言に、周囲はざわめいた。  
「中将、それは本気かね？ハイヴはBETAの  
巣窟だぞ」

「そうだ。若いハイヴでも内部には数万以上の  
BETAの存在が予想される。加えて、  
大陸のハイヴの殆どが『フェイズ4』まで  
巨大化している以上、内包されている  
BETAの数はハイヴ一つでも10万以上。  
下手をすれば20万以上の可能性もあるっ」  
一人目の発言に、同意するような事を言う  
政治家の一人。

余談だが、ハイヴの発展具合などの目安として  
『フェイズ』という表現がある。そして現在に  
おいて世界にある大凡のハイヴはフェイズ4。  
今現在、宇宙より落下し全てのハイヴの元と  
なった、言わば始まりのハイヴである

『喀什（カシユガル）ハイヴ』はフェイズ6である。  
「それを高々一匹の獣如きが……！」

「奴は、たった3回の攻撃で数万のBETAを  
退けています」

政治家の言葉を制する萩閣。彼はその言葉に、  
呻きながら黙り込んでしまった。

「戦闘の様子を収めた映像データを解析した所、奴の体内エネルギー量は最低でも500ギガワット以上だろうと想定されています。そして、1ギガワットは100万キロワット。加えて100万キロワットという数値は、原発1基分とされています。……つまり、単純計算でも奴のエネルギー総量は原発の500基分に相当する事。加えてこの解析結果について専門家は、『目標のエネルギー量が大きすぎるためこれくらいしか予測できない。下手をすればテラワットクラスのエネルギー量を保有している可能性もある』と指摘しています。もはや、奴は生物と定義して良いのかさえ怪しい存在です」

「むう。……それで、中将。君の意見を聞きたいのだが。奴に対して我々はどのような対策を取れば良いのかね？」

「……軍人としての立場にあるまじき発言かもしれませんが、奴に対しては『何もするべきではない』と私は考えます」  
「ツ!?何をすべきではない、だと!？」

奴の攻撃が、我が帝国軍に被害を与え、町を破壊し、人々を殺し、そして『放射能汚染』だぞ!?奴の現れた場所は高濃度の放射能汚染を受けてもはや人の住める場所ではないのだっ！  
国土を汚されたと言うのに、それでも何もするべきでは無いと言うのか！

中将っ！

萩閣の言葉に、将官の一人が声を荒らげた。

「……仰ることは最もだ。だが、もし仮に  
奴の怒りを買えば、我々はBETAに  
滅ぼされるよりも先に奴に滅ぼされる  
でしょう。……それほどまでに、奴は  
強い」

そう呟く萩閣に、声を荒らげていた将官は  
舌打ちをするのだった。

結局、ゴジラに対する対応については現時点で  
保留となり、最低限、出現したとしても攻撃は  
避けるようにとの通達が各軍各部隊に伝えられた。

だが、彼等にとつて、数日後にはゴジラの  
事などどうでもよくなってしまった。

なぜなら、横浜でハイヴの建造が  
始まってしまったからだ。

加えて、高濃度の放射能汚染が発生している  
ため不用意には軍を接近させられない事  
から、帝国軍はハイヴ建造を、指をくわえて  
見ている事しか出来なかった。

それ故に、帝国内部ではゴジラに対する  
反発心が強く根付きつつあった。

しかし、このゴジラ侵攻によって結果的に  
とある少年と少女は、命を繋げた。

少年は、大切な人を守れずに無残な最後を  
遂げるはずだった未来を。

少女は、目の前で愛する人を失い、BETAに  
陵辱されるはずだった未来を。

それぞれ回避し、未来へと命を繋げた。

それは、ゴジラも意図せずの事であった。

だがそれでもゴジラは、怪獣王は、

少年と少女の、最悪な未来をぶっ壊した  
のだった。

第5話 END

## 第6話 黄金の目覚め

バラゴンとガーデーという、防衛の要を失った帝国軍はBETAの攻撃を受け後退せざるを得なかった。更に米軍の撤退。

佐渡島のハイヴ建造という目を覆いたくなる状況。そんな中で、横浜に迫るBETA。

しかしそれは、突如として出現したゴジラによって排除された。が、高濃度の

放射能汚染によって横浜は人の住める街ではなくなり、その隙を突くかのように、

BETAは横浜に22番目のハイヴを建造し始めるのだった。

横浜ハイヴの建造が始まって、早数日。

そんな中で、人類にとっては朗報とも凶報とも言うべき報告が上がってきた。

放射能汚染された横浜のハイヴ建造地に

『新種のBETA』が発見されたのだ。

とは言え、人類にとってまだ朗報なのは、今現在においてその新種が戦闘タイプではない事だ。

遠方より発見されたその新種は、小型の光線属種に似ているが、体が白く、目のような光線の発射機関が閉じられている事。そして背中の体毛のような部分から白い粒子を周囲に散布し続けている。

その粒子には人体や機械への悪影響は無く、効果は『放射能の除去』だったのだ。

これについては、『BETAも高濃度の放射能汚染は嫌っているのだろう』という

予測が為された。実際、ゴジラによって汚染された場所の放射線数値は、戦術核の爆心地の数倍だ。普通なら生物が生きられる環境ではなかった。だからこそBETAは、この新種を生み出したのだろう、と言うのが専門家達の意見だ。

その後、この新種は『光線級変異種』と呼ばれ、前線では皮肉を込めて『清掃（クリーナー）級』等とも呼ばれている。

一度はBETAの侵攻を退けたゴジラ。

しかし残された高濃度放射能汚染。

横浜に建造される新たなハイヴ。

しかし結果的に横浜の地はBETAによって除染されつつある。

どちらも、何とも皮肉な結果だ。

どちらにもメリットとデメリットがあるのだから。

しかし、横浜の一件の後、ゴジラは帝国に出現する事は無かった。

次にゴジラが現れたのは、ビルマ領

マンダレー。つまり、世界で17番目に

ハイヴが建造された場所だった。

最初にその存在を確認したのは、世界各地のハイヴの動向を探っている人工衛星の1機だった。

マンダレーに接近したゴジラ。それをまず

真っ先に迎撃したのは超射程を誇る光線級と重光線級だ。

だが、何十、何百、何千と光線の掃射を受けてもゴジラは意に介した様子も無く

その足を進める。

そこに今度は突撃級を先頭に、戦車級。要撃級の群れが向かってくる。その数は、数万を超える規模だ。

BETAの規模に応じて、規模の表現を分けている。

3万以上ならば軍団。

1万から2万ならば師団。

3000から5000で旅団、と言った具合にだ。

そして今、ゴジラに向かっているのは5万を超える数のBETA。

だが、それさえもゴジラにとっては烏合の衆に過ぎない。

『バチバチッ!!』

ゴジラの背鰭が放電し、そして彼の口元にエネルギーが収束。放たれた熱線がBETAの

群れのだ真ん中に命中し、一撃で数千の

戦車級が蒸発する。しかしそれでも、今の

一撃で葬られたのはマンダレーハイヴに

巣くうBETAの、1%程度に過ぎない。

そして、だからこそ、ゴジラは更に攻撃を

放つ。熱線で蒸発させ、超振動波攻撃で

バラバラにし、プラズマカッターで全てを

切り裂く。

BETAも負け時と、ハイヴの地下から

周辺の地表に繋がる『門(ゲート)』を通って

次々と現れてはゴジラに襲いかかる。

しかし、それもゴジラにとっては数が多いだけ。

そしてテラワットクラスのエネルギー量を

持つゴジラならば、熱線や超振動波を連続で

放つ事も可能だ。

そして約30分。ゴジラの前には砕け散り、バラバラになったBETAの死骸の大地が広がる。そして最後に、今も攻撃を続けていた光線属種の群れを熱線で焼き払う事で、ゴジラはマンダレーハイヴのBETAを全滅させてしまった。

光線属種を全て蒸発させた熱線の余波で、ハイヴ上部のモニュメントと呼ばれる構造物も瓦解。バラバラになった瓦礫が荒れ果てた大地に散らばる。

しかし、直後ゴジラは自分の前方の大地を静かに見つめ、唸った直後。再び放電を始める。しかし、普段よりも数秒長いチャージのあと、ゴジラは突然地面に向かつて熱線を放った。

だが、それは大地に対して攻撃したのではない。ハイヴの最下層、『縦坑（シャフト）』と呼ばれる大きな縦穴を降りていった一番下、

『大広間（メインホール）』という巨大な空間に、『それ』はある。

『反応炉』。一言で表現すれば、ハイヴの心臓だ。

そして、ゴジラの放った熱線は大地を貫き、ハイヴの奥底にある反応炉に命中。

『ドオオオオオオオンッ……！』

と同時に、反応炉は大爆発を起こした。

地下で反応炉が爆発し、振動が地震となって周辺の大地を揺らす。

だがそれだけに留まらず、ゴジラはハイヴと言う存在を抹消するかのようになり、何発も熱線を地下に向かって発射し、終いにはボロボロになった周辺の大地が陥没し、



巨大なクレーターになってしまった。  
そして、ハイヴ跡地にクレーターが出来た事  
でようやく満足したのか、ゴジラは踵を  
返して海へと帰っていった。

それから数時間後。ゴジラによるマンダレー  
ハイヴ攻略。いや、ハイヴ殲滅という報告は  
全世界を駆け巡った。

しかし、憎きBETAのハイヴが破壊されたと  
言うのに世界中の人々は、手放しでそれを  
喜ぶ事が出来なかった。

なぜならそれは人類の偉業ではなく、たった  
一匹の怪獣によって為されたからだ。

確かにハイヴが破壊された事自体は喜ばしい  
ものだ。だが、それを行ったのはゴジラ、  
つまり怪獣なのだ。そしてこれは、結果的に  
ゴジラ単独での戦闘能力が、如何なる国の  
軍隊よりも上回っている事に他ならない。  
仮に、ゴジラによってBETAが滅ぼされた  
としても、地球にはその後もBETA以上に  
強大なゴジラが居座る事になる。その現実に  
人々は、素直にこのニュースを喜べ  
なかったのだ。

更に、とある国の会議室では……。

「これは由々しき事態だ」

円形のテーブルを囲み、座る数人の男女。  
その中で男、この中では一番に偉い男が  
そう呟いた。

「高々一匹の獣によって、ハイヴが攻略  
された。加えて付近に展開していた

BETA群の殆どが壊滅。僅かに残存していたBETA群も、北上にH16、『重慶（チョンチン）ハイヴ』へと逃走。結果的に、ビルマ付近が解放された事で大東亜連合軍はこれを生かして防衛ラインの再構築と軍備強化に乗り出した」

「……ハイヴ付近が高濃度放射線によって汚染されているため、『あれ』が他国の手に渡らないだけでも、まあ良しとするしかありませんか」

男の言葉に、中年の女性の1人がため息交じりに呟いた。

「何を悠長な事を。もし仮にあの化け物が他のハイヴを攻撃して、今回みたいに全て破壊しなかったとしたら？」

『あれ』を狙っているのは我が国だけではない」

彼女の言葉に、このメンバーの中では最高齢の男が反応する。

その時。

「そうだ。我々は、このBETA大戦に勝利した後の事も考えなければならぬ。そして、だからこそあんな怪物如きに好き勝手をさせる訳には行かないのだ」  
そう言うと、男は立ち上がる。

「全ては、祖国のために」

男は、静かにそう呟いた。皆もそれに同意するように、静かに目を伏せる。

だが、彼等は知らない。ゴジラという存在の強さを。

そして何よりも、『この星の支配者が誰である』かを。

それから数日後。再びゴジラが出現した。今度は旧ソ連領、19番目のハイヴ、

『ブラゴエスチェンスクハイヴ』に

対して攻撃を仕掛けた。

当然、BETAも迎撃をした。

だが、マンダレーのハイヴよりも若い

このハイヴに、マンダレーハイヴを

上回る数のBETAは居らず、こちらもまた

精々1時間といった程度で簡単に壊滅

させられてしまった。

そしてマンダレーのようにハイヴ跡地を

陥没させるほど攻撃した後、ゴジラは

海に帰っていった。

正に連戦連勝。この事実の人々は、ゴジラ

に対する畏怖と恐怖を強めつつあった。

しかしBETAもやられっぱなしではなく、

新たにハイヴを建造し始めた。23番目の

『オリョクミンスクハイヴ』と、24番目

の『ハタンガハイヴ』だ。どちらもソ連

の領土に建造され始めた。

そうやって、人間を後目に戦うゴジラとBETA。

しかし人類側もただそれを傍観している

だけではない。

とある1人の女性が、光線級変異種によつて

横浜の除染がある程度進んだ段階で

その横浜ハイヴの攻略を国連に進言。

これは国連司令部によつて即決され、

更に大東亜連合軍もこれに参加する事に

なった。よって、国連軍、帝国軍、大東亜連合軍の共同による横浜ハイヴ攻略作戦、『明星作戦』が実行される事になり、急ピッチで作戦準備が進んでいた。

そうやって、帝国国内が慌ただしくなる中、唯依や志摩子達は今も、バラゴンとガーデーを失った失意の中にあつた。

彼女達にとって、あの2匹はただの怪獣ではない。言わば戦友であり、恩人。それを失った事による失意。更に彼等の加護を失った事で、戦いに恐怖を覚える事になってしまったのだった。

『もう彼等の守護は無い』、と言う現実は一〇代の彼女達の心を怯えさせるのに、十分だったのだ。

そして、明星作戦の決行が迫る8月1日。そんな、失意の内にある彼女達の元を訪れる男があつた。芹沢だった。

「久しぶりと言うべきか。よくぞ無事だったと言うべきか」

「博士」

ポツリと呟く唯依。

「とにかく。君たちが無事で良かった」

「そんな。私達なんて、バラゴン達が

護つてくれなかつたら……」

そうやって視線を落とす志摩子。

その隣では、安芸と和泉が、2匹の事を

思いだして今にも泣きそうになっている。

「あの、それで博士はどうしてこちらに？」

5人の中で、比較的元気な上総が問いかける。と言つても、彼女も周囲を元気づけようと必死にそれを演じているだけで、本心ではバラゴンとガーデーの消滅をずっと引きずっていた。

「実は、君たちに話しておきたい事がある。君たちに渡した不思議な形の石だが、その後、何か変化は無いか？」

「それでしたら、ずっと安芸さんと和泉さんが持っていたはず」

そう言つて、2人の方へ視線を向ける上総。すると……。

「変化……？　そう言えば……」

ポツリと、和泉が呟いた。そして彼女はポケットからあの石を取り出した。

「あの。これ、時々暖かくなるんです」

「何？　石が？」

「はい。温めた訳でもないのに、暖かくなつて。それに、これを握つて眠ると、いつも同じ夢を見るんです」

「え？　和泉、も？」

すると今度は彼女の発言に安芸が反応した。

「え？　安芸も？」

「あ、ああ。いつも、これを持って寝るといつも同じ、変な夢を見るんだ」

「すまないが、どんな内容の夢なんだ？」  
「すぐに問いかける芹沢。」

「ふと、夢の中で気づくと、自分は真っ白な空間にいるんです。そしてすぐ目の前にバラゴンが現れて、まるで私を呼ぶように鳴くんです。それからバラゴンは

振り返って、いつの間にか奥に見える富士山  
に向かうんです。それで何度も振り返って、  
また私を呼ぶように鳴くんです」

「そんな夢を。安芸君、君は？」

「え、と。私も同じです。私の場合は

ガーディーが、ですけど」

「……2人とも、殆ど同じような夢を

見ている、と言う事か。そして更に富士山。

……どうやら、待っているようだね。

いや、この際呼んでいると言った方が

正しいだろうか」

「えつと、どういうことですか博士？」

呼んでいる、とは」

彼の発言の意味が分からずに戸惑う唯依。

「実は、護国聖獣の最後の1匹、ギドラ

は富士の樹海の地下に眠っていると言う

旨が以前見せた、護国聖獣伝記に

記されていたんだ」

「でも、どうしてバラゴン達が……」

ポツリと呟く和泉。

すると芹沢は……。

「あくまでも私の仮説だが、かつての

アメリカインディアン、コビ族の言葉で

『石が記憶する』とされていた。更に

花崗岩に圧力を掛けると電気を帯びる

と言う性質がある。もしかすると、

過去の人間たちはこの性質を利用して、

花崗岩の石を記憶ディスクのように

使って居たのかもしれない。更に、

霊魂は電気だという説がある。それを

合わせて解釈すると……」

「花崗岩のディスクに、魂を封じ込める事が出来る。そう仰りたいのですか？」

「そう言っつて、半信半疑と言わんばかりの上総。

「無論確証は無い。だが、もしそうなのだ」と

したら。その石の中に、バラゴンとガーデーの魂が宿っているのかもしれない」

彼の言葉に、安芸と和泉は視線を手の中の石へと落とす。

そして、静かに涙を流すのだった。

2人が落ち着くのを待ってから、芹沢は

5人に声をかけた。

「改めて君たちに話したい。明星作戦の事は聞いてるか？」

「ええ。横浜ハイヴ攻略作戦ですわね？」

芹沢の言葉に上総が応えた。

「ああ。だが、実はその作戦において、

国連軍の主力が新型爆弾を使う動きが

あるらしい。しかも、帝国軍や

大東亜連合軍にそれを通達した様子が

一切無い」

「ッ。それってつまり……」

彼の言葉に、唯依は表情を青くしながら

問いかける。

「いや。まだ確証があるわけではないんだ。

だが、仮に新型爆弾を使ったとしても

BETAに勝てる証拠がある訳じゃない。

だからこそギドラの力が必要なんだ」

「しかし、以前見せて貰った伝記によれば

ギドラは成長が遅いとありました。

仮に今目覚めさせたとしても、それは

言わば不完全体ではありませんか？」

芹沢の言葉に、上総はあの本で読んだ事を思いだし問いかける。

「それも最もだ。だが、恐らくその石がギドラ復活に鍵になるのかもしれない」

「え？これ、が？」

突然振られた話に和泉が戸惑う。

「そうだ。そして今、この国は聖獣の力が必要だ。多くの人が絶望する中で、彼等の希望となる聖獣、怪獣の存在が。」

そのために、君たちに協力して欲しい」

「協力って、私達が何を？」

思わぬ言葉に首をかしげる志摩子。

「その石と、私を連れて行ってほしい。」

ギドラの眠る場所へ」

そうして、彼女達の任務が決まった。

芹沢の話はモナークを通して帝国斯衛軍に打診された。内容は、特別調査班の実動部隊である瑞鶴1個中隊を一時的に貸してほしい、と言う旨の物であった。

これには斯衛上層部も難色を示したが、五摂家当主の1人、恭子ともう1人、

『斑鳩家当主』『斑鳩 崇（たか）継（つぐ）』の進言もあってこの行動は容認された。

無論、崇継の方はモナークに対して貸しを作るためであったが、それでも

結果的に唯依達は富士に向かう事が出来た。だが、準備に数日を要してしまった為、彼女達は横浜で明星作戦が展開される中、モナークが少し前に帝国海軍より購入していた一隻の『大隈級戦術機揚陸艦』と、



同じくモナーク所属の駆逐艦に乗って唯依達は太平洋側から伊豆半島を迂回して、静岡県沖に向かった。

そで12機の瑞鶴が大隈級より発進。

更に彼女達の後に続いて、芹沢や

モナークに所属する武装兵士を乗せた

1機の輸送ヘリが駆逐艦より離陸。低空

飛行で12機の瑞鶴と1機のヘリが富士の樹海を直指して進んだ。

幸いな事に、周辺にBETAの姿は無い。

どうやら明星作戦が、彼女達の行動を

助ける陽動になったようだ。

しかし、富士山の周囲にあつた自然は

BETAによって荒らされていた。その光景を

一瞥しながらも彼女達は進んでいく。

「この辺りだ。降下してくれ」

芹沢が指示を出すと、瑞鶴たちとヘリが

荒地へと降下する。

更にレーダーで周辺を調べると……。

「ッ。博士、地下に大きな空洞のような物を発見しました」

周辺を調べていた上総から報告が上がる。

「よし。その天井付近を戦術機の120ミリ

で破壊してくれ。恐らくそこに、ギドラが

いるはずだ」

「了解」

指示を受けた上総は、瑞鶴が手にする突撃砲

の120ミリ砲弾で、空洞上部の大地を攻撃し

これを破壊。すると地下へと通じる入り口が

出来た。

「よし。では、私と唯依君たち5人は、あれ

を持つて付いて来てくれ」

「「「了解っ」」」」

「では、私と残りのメンバーはここで待機だ。  
周辺警戒を厳と為せ」

「「「了解っ！」」」」

唯依たちは瑞鶴を降りて、それぞれが念のため拳銃と、安芸と和泉は例の石を手に、芹沢と共に地下へと降りていく。

残った佳織たちは、その場で周辺の警戒を始める。

そして、ライトを手に攻撃で出来た穴から降りていった6人を待っていたのは……。

「ツーこれ、が……」

巨大な氷の中に封印されている、『黄金の三つ首龍』、『ギドラ』だった。

「そうだ。これこそが、ギドラ。最強の聖獣だ」  
芹沢は、ギドラを見上げながら、ポツリと

呟いた。

そして、石を手にした安芸と和泉が  
ギドラに近づいた時。

『「カアアアアアッ！」』

突如として、2人の手にしていた石が  
白い光を放ち始めた。

「な、何がっ！」

突然の事で志摩子が驚く。そして白い光が次第に光量を増し、6人とも目を覆った。やがて光量が収まり、6人が目を開くと、皆驚いた。

なぜなら自分達の前に、人間大の大きさで

半透明の、さながら幽霊のようなバラゴンと  
ガーディーが浮いていたのだから。

「ば、バラゴン？それに、ガーディーまで」

唯依は幽霊のような彼等を見つめながら  
ポツリと呟く。

その時、安芸と和泉は、自分の手の中にある  
石が、今も光を放っている事に気づいた。

そして、2人は理解する。この石の中に、ずっと  
彼等がいた事を。

バラゴンとガーディーはまるで再会  
を喜ぶように喉を鳴らす。

すると、5人が笑みを浮かべながら涙を  
流す。

「ガーディー。ずっと、私の傍にいて  
くれたんだな」

「バラゴンも。ずっと、ずっと私達と  
一緒だったんだね」

安芸と和泉の言葉に答えるように二匹は  
喉を鳴らす。

「でも、なんでお前等、あの時私や

和泉を庇ったんだよ。私達なんかの  
ために、あんな無茶して……」

安芸は、震えながらそう呟く。

彼女は、あの時の自分が許せなかった。  
自分の弱さ故に、ガーディーやバラゴンに

無茶をさせてしまった自分が許せなかった。

だが、ガーディーは静かに安芸に歩み寄ると、  
その場に屈んで彼女の頬を舐めた。

「ッ！」

それは、まるで犬が主に愛情表現をするよう

だった。それに驚く安芸。

そしてガーディーは静かに鳴く。まるで、安芸を心配し、励ますように。

すると、安芸は更に大粒の涙を溜める。

「あの時は、守れなくて、ごめん。」

そして、あ、ありがとう」

彼女は大粒の涙を流し、声を震わせながら  
呟いた。

その涙に吊られて、志摩子達も涙を流す。

それを見たバラゴンとガーディーは、最後  
に大きな咆哮を上げた。

すると、安芸と和泉の手に握られていた

石の中から、白い塊、霊魂のような物が

浮かび上がるとそのまま氷塊の中で眠る

ギドラへと自ら飛び込んでいった。

そして氷塊の中のギドラが一瞬光輝いた  
かと思ったその時。

『ゴゴゴゴゴゴゴツ……!!』

周囲の大地が振動し始めた。

「ツ!? ここは危険だつ! 一旦退避をっ!」

そう叫ぶ芹沢に従って、彼女達は外へと急ぐ。

しかし、そんな中で安芸と和泉だけは、

何度も後ろへと振り返る。

そして5人は瑞鶴へ。芹沢はへりに搭乗する。

すぐさま中隊とへりは離陸して一旦その場を

離れた。

直後。

『ドオオオオオオンツ!!!』

荒れ果てた大地を突き破り、一対の翼が

現れた。そして、それに続くように、大地

を割って黄金の三つ首龍、覚醒した

『キングギドラ』が姿を現す。

バラゴンとガーディーの力を糧として、  
彼は一気に成長したのだ。

「あれ、が、最強の聖獣」

それを、宙に浮く瑞鶴から見下ろす唯依。

黄金の鱗に覆われた体は、太陽の光を

受けてキラキラと輝く。

それは正しく、神秘的という他無い。

「そうだ。あれが、『千年竜王』、

キングギドラだ」

そこに、彼女達の耳へと届く芹沢からの通信。

「キング、ギドラ」

静かにその名をリピートする上総。

と、その時。3本ある首の内、右の首が

和泉の瑞鶴を。左の首が安芸の瑞鶴を

見つめた。

そして、2人はすぐにその意味を理解し

笑みを浮かべた。

「ああ、そうか。そう言う事なんだなガーディー」

「バラゴンも。そこに居るんだね」

2人は笑みと嬉し涙を流す。

そして、完全体となったキングギドラは、

その大きな翼を広げると飛び立った。

翼を飛ばたかせながら、彼は東へと向かう。

この『くに』を荒らす侵略者を退けるために。

そして、それを見送る瑞鶴たち。

だが……。

「中隊長っ、我々もすぐに帝都に戻りましょう」

安芸が涙を拭いながら佳織に進言した。

そして彼女はその言葉の意味を理解した。

「……良いんだな？最前線だぞ？」

「分かっています。でも、もう彼女らに頼ってばかりなんて、情けない自分はいやなんです。今度こそ、私は彼女らの隣で一緒に戦いたいっ！」  
「それこそが、安芸の決意だった。あの日、一度は失って失意にくれた後悔を二度としない為に。」  
「今度こそ、大切な戦友を護りたいが為に。」  
「そして、その思いは和泉や志摩子、上総、更には他の少女達も同じだ。何より、佳織自身も。」

「よしっ！中隊各機！我々はすぐに沖合の大隅級に帰還し、その足で帝都方面に急行っ！明星作戦ならびに、キングギドラを援護するっ！」

「「「了解っ！」「」」」

そして、彼女達も動き出す。戦うために、生き残るために。そして、勝利するために。今、最強の護国聖獣が誕生した。そしてこの『くに』を守る為に動き出した。

確かに、ゴジラの残した爪痕によって怪獣を快く思わない存在は多い。  
だが、それが全てではない。  
彼女達のように。ともに歩もうとする人々も確かに存在している。  
そして、少女達は急ぐ。

『共に生き、共に勝利を勝ち取る』ために。

第6話 END

## 第7話 明星作戦

人類とBETAの前に姿を現したゴジラは、まず横浜へと侵攻していたBETA群を殲滅後、アジア大陸各地にあるハイヴの内の二つを完全に破壊。しかしBETAも新たに二つのハイヴを建造し始めるのだった。そんな中、失意にくれる唯依達の元を訪れた芹沢。彼は唯依達と共に、最後の聖獣であるギドラを覚醒させるために富士の樹海跡地へと向かった。

そして、安芸と和泉の持つ石の中で眠っていたバラゴンとガーディーの魂と融合する事で一気に進化し覚醒したキングギドラ。そしてキングギドラは明星作戦が展開される横浜を目指して飛行するのだった。更に、彼を追って唯依達もまた、横浜を目指すのだった。

横浜、明星作戦区域。

荒れ果てた市街地で戦術機とBETAが入り乱れて戦う中、2機で行動する不知火の姿があった。

その機体は『UNカラー』と呼ばれる青をベースにしたカラーで彩られていた。

その2機に搭乗するのは、国連軍に属する帝国出身の、2人の男性パイロットだった。

1人は『鳴海 孝之（たかゆき）』。

もう1人は『平 慎二（しんじ）』。

2人は、国連が主導するとある計画、

『オルタネイティブ4』という計画において

戦術機の実動部隊、『A-01連隊』の中の『デリング中隊』に属する衛士だ。

彼等がここに居る理由。それは戦闘におけるデータ収集のためだ。そのため上官からは出来るだけ戦闘を避けるように命令されている。だが、2人にとってここは故郷。

そう、2人は幼馴染みと共に、この横浜で育ったのだ。それ故に、歯がゆさを覚えて居た。そんな彼等の耳に入ってきたのは、米国が本来作戦には無い、正確に言えば作戦から外されたはずの、『G弾』の使用を強行しようとしているとの事だった。

『G弾』。これは、BETA由来の地球には存在しない物質、『G元素』を元に作られた兵器だ。

そもそもの話この攻略作戦後、もし攻略が成功すれば、各国には攻略によって手に入ったG元素を分配する話がある。それも既に協議済みだが、彼等には、G元素の強奪を阻止する任務も与えられている。

つまり、帝国や他国がG元素を強引に奪おうとしたのなら、彼等にはそれを殺してでも阻止しなければならぬ。例え相手が、同じ祖国を持つ同胞であったとしても。それほどまでに、G元素とは魅力的であり強力な兵器の元であり、そして、争いの火種なのである。

そんなG元素由来の兵器であるG弾の破壊力は極めて高く、孝之達にもたらされた情報によれば、仮にG弾が使われたとしたら



この辺り一帯は間違い無く跡形もなく吹っ飛ぶ事間違い無しだ。

加えて、作戦に参加している帝国軍や大東亜連合軍の部隊はこれを知らない。

孝之達がこれを知ったのは、強い権限を持つ1人の女性のおかげとも言えた。

そして、G弾の強行使用に怒りを覚えた孝之は、周囲の部隊に撤退を呼びかけると

言い出した。そしてバディである慎二と言い合いになっていたその時。

『こちらは帝国斯衛軍、特別調査班所属の者であるっ！』

不意に、オーブンチャンネルで全ての部隊に通信が届いた。

今現在、周囲には対光線属種用に放たれた

『ALM』、『対レーザー弾頭弾』によって

形勢された重金属粒子の雲が展開し、結果的に通信を阻害していたが、それでも奇跡的に、

2人の耳や作戦行動中の衛士達に佳織の言葉が届いた。

『現在、富士山近郊より出現した怪獣が

横浜ハイヴに向かって飛行中っ！

もう間もなくそちらの作戦区域に到達

する模様っ！各自留意されたしっ！

なおっ！怪獣の特徴は黄金の三つ首龍っ！

これはBETAにあらずっ！各隊黄金の

三つ首龍、キングギドラへの攻撃は

控えられたしっ！以上っ！』

「なっ、怪獣だって……!?!」

突然の連絡に慎二は困惑する。孝之も同様で、一瞬思考が止まってしまった。

と、その時。

『カッ!!!』

「ん?」

孝之は重金屬雲の向こうで何かが光ったような気がした。

と、その時。

『ブワッ!!!』

突如として、何かが空を覆い尽くしていた重金屬雲を吹き飛ばしてしまった。

『『『キュルアアアアアアアッ!!!』』』

そして、青い空をバックに、空に浮かび咆哮するキングギドラを目にする孝之と慎二。更に彼等だけではなく、多くの者達が空に浮かぶキングギドラを見上げていた。

しかしそれも束の間。すぐさま各地に展開する光線属種による狙撃がキングギドラに襲いかかった。だが……。

その攻撃は、ギドラの周囲に浮かぶ黄金の粒子によって周囲へと散らされ、逸らされる。

「ッ!?マジ、かよ」

それを見上げながら呆然と呟く孝之。

彼の傍の慎二も、呆然とそれを見ている事しか出来なかった。

だがそれだけではない。ギドラはその粒子でレーザー攻撃のエネルギーを

吸収していたのだ。そして、ギドラの

周りで暴風のように吹き荒れていた粒子が、

ギドラ本体並みの巨大な光球、『ビッグ

スパークボール』となって、BETAの群れ

のど真ん中に落とされた。  
直後。

『ドオオオオオオオオオンツ!!!』

核爆弾でも落とされたのではないかと疑い  
そうな規模の爆発。振動。爆風。

それがBETAの群れ一つをまとめて  
吹き飛ばしたのだ。

更に、間髪入れずにキングゴドラはその3本の  
首から『引力光線』を放ち、BETAの群れを  
なぎ払っていく。

そして、この引力光線は受けた相手に対して  
引力や斥力、延いては重力を持って攻撃する。  
如何に強靱なボディを持っていようとも、  
重力で車裂きのように肉体をバラバラに  
されてしまえば同じ事。それ故に、突撃級の  
強固な生体装甲も意味をなさない。  
要塞級の巨大で肉厚なボディも、まるで内側  
から裂けるようにしてバラバラにされる。

そして、空中からBETAを攻撃していた  
キングゴドラは、偶然にも孝之達の近くに  
着陸し、ノシノシと歩きながら引力光線で  
BETAを引き続きなぎ払っていく。

呆然とキングゴドラの背中を見つめていた  
2人と、その時。

「おいっ！その不知火2機！何を  
ボサツとしている！」

不意に聞こえたスピーカー越しの声に  
2人は驚いて振り返った。

すると彼等の傍に、赤と黄色の瑞鶴が  
1機ずつ。更に白い瑞鶴が無数に着地する。

そう、唯依達だ。

「む？その色、貴様等国連の衛士か？」

「あ、は、はい。国連太平洋方面軍所属、  
鳴海孝之少尉であります」

佳織からの通信にそう答える孝之。

『あれ？この声、もしかしてさっきの』

オープンチャンネルの』

更に彼は、彼女の声をから内心そう考える。

「そうか。我々は帝国斯衛軍、特殊調査班  
所属の者だ。ともかく、戦場でボサツと  
するなよ」

と言うと、瑞鶴達は再び浮かび上がり、  
前に向かおうとする。

「あっー！」

その時、孝之はすぐにG弾の事を思いだした。

「待って下さいっ！今すぐ後退をっ！」

「ッ、何？」

彼の言葉に、前進しようとしていた瑞鶴たち  
が足を止めた。

「G弾です！米国側の独断で、間もなくここ  
にG弾が落とされますっ！もし仮に

軌道上から落とされれば着弾まで15分

しかありませんっ！今のうちに出来る

だけハイヴから離れないとっ！」

孝之の言葉に、佳織はしばし押し黙った。  
だが……。

「忠告には感謝しよう。だが、であれば  
尚更我々は退けない」

「ッ!?何故っ！」

「……前線で戦っている戦友を、1人に  
する事は出来ない」

そう呟いた彼女と、更には唯依達の瑞鶴が遠くで戦うキングギドラの方へ視線を向ける。

「しかしっ！」

なおも食い下がろうとしない孝之。

「心配いらないうっての」

しかしそれを遮るように、そこに安芸が通信を繋いだ。

「G弾だか何だか知らないけど、私らには

キングギドラが、最強の聖獣がいるんだ。

何とかなるさ」

そう言って笑みを浮かべる安芸。

更に……。

「もし、貴方方が1人でも多く救いたいと言う

のなら、我々が彼と共にBETAの相手をして

注意を引きます。その隙に帝国軍や我々

斯衛軍にこの情報を流して退避を呼びかけて

下さい」

上総が通信で促す。

「そういうわけだ少尉。中隊各機っ！これより

前進し、キングギドラの援護をする！

行くぞっ！」

「「「了解っ！」「「「「

佳織の指示に従って瑞鶴12機が浮かび上がりキングギドラを追って移動する。

それを見送りながらも、孝之は決心を決め、

そして彼に説得された慎二もまた、1人でも

多くの人々を救うために、周辺部隊へ退避

を促し始めた。

一方、キングギドラ出現の報告を聞いていた米軍の司令官は、すぐさま自分の更に上の

存在へと連絡を取っていた。そして彼の元に指示が飛んできた。

それは、『可及的速やかにG弾2発を投下し、ハイヴ及び怪獣に対する戦果などを確認せよ』と言うような旨の命令だった。

彼はすぐさまその命令を、地球の衛星軌道上に展開する宇宙軍に伝えた。更に彼は他の軍に対して退避するよう指示を出させたりしていた。だが、そんな中で彼には不安があつた。

彼は今も、モニター越しにBETAを蹂躪するキングギドラを見つめていた。そして思う。

『本当に奴に、G弾が通用するのか』と。

そして、その疑問の答え合わせは、すぐに行われた。

数分前。最前線で戦うキングギドラは、3本の首という手数之多さを生かして周辺のBETAやハイヴ付近から狙撃してくる光線属種を焼き払っていた。

だが背面はどうしても手が回らず、周りこんだ戦車級と要撃級が後ろから襲いかかろうとしてくる。

「させるかあああつー！」

しかし、それを唯依達の瑞鶴が上手くカバーしていた。

雄叫びのような声を上げながら突撃砲を撃ちまくる安芸。

今の彼女達は、キングギドラのカバーに徹していた。彼の後ろや側面から

襲いかかりそうな敵を迎撃していたのだ。

加えて、彼女達がピンチになると、確実に

左右どちらかの首が対応し、巻き込まない  
ように出力を絞った引力光線がBETAを  
撃破する。

そうやってお互いをカバーしながら  
戦っていた怪獣と戦術機たち。そして、  
粗方のBETAをキングギドラと共に掃討  
し終えた時だった。

『『ビーツー！ビーツー！』』

しかし、そんな彼女達の耳に響くアラーム音。

「ツ！まさかG弾が投下されたの!？」

その意味を理解して唯依が叫ぶ。

「そんなっ！この状況で使う必要あるのっ!？」

BETAだってギドラのおかげで殆ど

倒せたのにっ!」

彼女に続いて志摩子も叫ぶ。

実際、序盤のビッグスパークボールで

大きな群れを撃破出来た事とその後の

彼女達とギドラの、空中からの爆撃のような

引力光線の雨によって既に大半のBETAは

屠られた。今更G弾を使う意味は無い。

と、普通に考えればそうだろう。

だが、米国側の狙いは別だった。BETA

殲滅と言うのは、今となっては殆ど

建前に過ぎない。

一つは未だに実戦で使った事の無いG弾を

使った効果を見るため。

もう一つは、このG弾で怪獣を消滅させ、

怪獣よりも自分達の科学力の方が優れている

と言う理想を確かめたいが為に。

これが、人類側の圧倒的有利な状況の中で米国が

G弾使用に踏み切った理由だ。

そして米軍から退避を促す通信が飛んでくる。だが、今更だ。ハイヴ近くで戦っていた部隊が、今更10分程度でG弾の降下範囲外に出るのは無理に等しい。まだ光線属種も少数ながら生存しているのだ。下手に飛び上がれば撃ち抜かれて撃墜される。

だが、こんな中で諦めていない者達がいた。唯依達だ。

「ねえ、ギドラ」

和泉の瑞鶴が、ギドラの傍に歩み寄り、声をかける。するとギドラの3本首が、彼女の瑞鶴を見つめる。

「本当に、頼ってばかりでごめんね。」

でも、ギドラなら、アレをどうにか出来る？」静かに問いかける和泉。他の面々も、静かに彼女とギドラを見守っていた。

すると、ギドラは『任せて』と言わんばかりに鳴くと、大きな翼を広げて飛び上がった。それを見送る唯依達の瑞鶴。

更に、あちこちで戦っていた衛士や兵士達。国や立場を問わず、大勢の人間が空へと上がっていくキングギドラを見上げていた。

一方、落とされたG弾は、地表から放たれた光線属種による狙撃を特殊な重力場、

『ラザフォード場』、または『ラザフォード・フィールド』と呼ばれる偏向重力場によって防ぎながら落下していた。

G弾周囲の重力は歪められ、あらゆる物を



逸らせる。それは光線属種のレーザーも同じだ。

理論状、これを阻止出来るのは同じ力場を持つG弾だけ、のはずだった。

だが、今のキングギドラには、重力に関する物全てを操る力がある。だからこそ、G弾を『捕える』事も可能なのだ。

上空へと飛翔していたキングギドラはまず邪魔をされないように地表の残存光線属種を一掃する。そして、

その目で落下中のG弾2発を捉えた。

直後、左右の首から引力光線が放たれ、それが命中したG弾は、何と落下を

止めてその場にフヨフヨと漂っている。

今、キングギドラは重力を操る力で

G弾のラザフォード・フィールドを

中和し、引力光線でG弾を捉えたのだ。

「何、だど？」

そして、それを見ていた米軍の司令官は、

戸惑いながらも内心、『やはりか』と

思っ居た。

そして、中央の首が一声、咆哮を上げると落下していたG弾2発は、まるで戻るように上へ上へ押し上げられ始めた。

そのままG弾は、地球の重力圏を突破。

更に衛星軌道上に展開する米国宇宙軍の

艦隊を超えて、完全に地球の外へと

放り出されてしまった。

漆黒の闇へと追放された兵器。そして、

それを為した黄金の三つ首龍によって、結果的に多くの人々が救われる結果となった。そして、G弾を空へと追放したキングギドラは下降しながら、まるで『神の雷』のように引力光線を放ち眼下の大地に巣くう残存BETAを焼き払う。

そして、BETAを全て破壊したキングギドラは、ゆっくりとハイヴの『地表構造物』、『モニュメント』の上に降り立つ。

『『キュルアアアアアアッ!!』』

そして、キングギドラは勝利を宣言するかのように、勝ち鬨の咆哮を上げるのだった。誰もがその様子を見つめていた。

そんな中で、唯依達の瑞鶴が広い場所に歩み寄る。すると、モニュメントの上からそれに気づいたキングギドラは、そこから降りて、唯依達の傍に着地する。そして左右2本の首が、小さく喉を鳴らす。

すると、安芸と和泉は何を思ったのか瑞鶴のkokopittoハッチを開け、外へと体を晒した。

僅かに漂うBETAの体液の悪臭に顔をしかめつつも、目の前のギドラを自分達の目で見上げる安芸と和泉。

すると、2人に1本ずつ首が伸びてくる。そしてあと少し、2人が手を伸ばせば触れられる距離に顔が近づく。そして、2人は静かにキングギドラの、黄金の皮膚に触れる。

「……温かい」

衛士のパイロットスーツ、強化装備越しに

でも感じるその温もりに、和泉は笑みを浮かべながら眩き、そしてギドラの頭を両手で抱き、顔や胸を預ける。

安芸は、ゆっくりとギドラの皮膚を撫でる。

「ありがとうな、ギドラ。私達を、この国を。みんなを護ってくれて」

彼女は笑みを浮かべながらギドラを優しく撫でる。それが気持ちいいのか、ギドラは嬉しそうに喉を鳴らす。

そして、その光景を周辺に集まってきていた各国軍の戦術機たちが遠巻きに見つめていた。  
やがて……。

「なあ、ギドラ。お前は、これからも

私達と一緒に戦ってくれるか？」

安芸が静かに問いかけると、ギドラはすぐに『もちろん』と言わんばかりに小さく鳴く。

「そうか」

安芸は、その言葉に頷くと、和泉の  
ように体を預け……。

「なら、今度こそ私達も、お前と、お前達と一緒に戦うよ。これまでの恩返しとして。……今まで、ありがとう。」

そして、これからよろしく。お前達は私達の、大切な『仲間』だ」

彼女は笑みを浮かべながらそう語った。  
そして更に……。

『チュッ』

彼女はギドラの顔に、小さく口づけをするのだった。

すると、ギドラもそれに答えるように舌で

優しく安芸の顔を舐めるのだった。

「アハハ、くすぐりたいってばっ！」

そうやってじゃれ合う安芸を見て、志摩子や上総。更には他の女子達も瑞鶴から出て、ギドラと触れあう。中隊長の佳織からすれば、浮ついた様子を一喝するべきなんだろうが、彼女もやれやれ、と言わんばかりの表情で苦笑を浮かべる事しかなかったのだった。

そして、戦いを終えたキングギドラは最後に一度、大きく咆えるとその翼を広げて西の空へと飛び去っていった。

それを、大手を振って見送る上総たち。

こうして、明星作戦は勝利を収めた。

しかもギドラの活躍もあってG弾の投下は阻止された。

そして、唯依達から少し離れた所で

飛び去っていくギドラを見送っている男達があった。孝之と慎二だ。

彼等もまた、ギドラの活躍によって

結果的に一命を取り留めたのだ。

「怪獣、か」

ギドラを見送りながらポツリと呟く孝之。

「あれ、聞いた話じゃ護国聖獣って奴

らしいぜ？」

そんな彼に声を掛ける慎二。

「……国を護る聖なる獣、か。この国には、いや、世界にはまだまだ俺達の知らない奴らがたくさん居るんだろうな」

「ああ」

彼の呟きに、慎二は頷く。

「ふふっ」

しかし、そんな中で不意に笑みを浮かべる孝之。

「ど、どうした？何笑ってんだ？」

「いや。ただ驚きすぎて笑えてくるだけだ。」

……この国には、あんな凄い味方が

いたんだなって」

「ああ、そうだな」

孝之と慎二は、既に見えなくなった

ギドラの去っていた西の空を見上げる

のだった。

横浜での戦いの後、帝国ではギドラの話題

で盛り上がっていた。バラゴンとガーディー

と言う護国聖獣と同一の存在、と言うのは

ギドラに対して肯定的な意見を後押しした。

だが、ゴジラによってもたらされた放射能

汚染や、大勢の人が熱線によって焼かれた

と言う現実から、ゴジラと同じ怪獣である

キングギドラに対して否定的な意見も

決して少ないわけではない。

だが、それを押さえ込み、キングギドラに

対して肯定的な意見を後押しする一枚の

写真が公開された。

それが、明星作戦終了後に、キングギドラと

触れあっていた唯依達の画像だった。

それはたまたま、その様子を見ていた

佳織の瑞鶴の動画データの一部だ。

しかし、それが大きな反響を呼んだ。

『キングギドラと触れあう少女達の写真』

は瞬く間に新聞社を通して日本全国に

広がりを見せた。無論、彼女達の事を

悪く言う人間は少なく無い。

だが、予想外にも彼女達の味方となったのは前線で戦っていた衛士達だった。

彼等もまた、キングギドラやガーディー、バラゴンの活躍で戦いを生き延びていた。だからこそ、彼女達とギドラを擁護する側に回ったのだ。

更にキングギドラを擁護するために

モナークから発表された護国聖獣に関する論文も、これを後押ししていた。

加えて、この論文によって護国聖獣伝記も大いに注目を集める結果となり、その熱によって人々の間に『神道』が再び浸透しつつあった。

強大な存在を神と崇める神道。

更に、今のBETAに侵略されつつある現状。ハイヴを撃破し圧倒的な力を見せつけたキングギドラ。

そんなギドラと触れあう少女達の姿。

それらが合わさった結果、絶望の中にあつた人々は継るべき希望をキングギドラに見いだしたのだ。

黄金龍と呼ぶに相応しい、煌びやかで

神々しい姿も、その信仰に拍車を掛けていた。やがて世間では、キングギドラを

『護国龍神』や『千年竜王』という敬称で

呼び、ギドラを信仰する人々が現れ始めた。

これは特に、前線でギドラに助けられた衛士達を中心に、帝国内で急速な広がりを見せていたのだった。

と、ここで更に注目を集めた存在があつた。

それが唯依達。つまり特別調査班の実動部隊である彼女達だ。

彼女達はこれまで、バラゴンやガーディーと共に戦い、キングギドラとも一緒に戦った。

そこへ来てあの触れあう画像だ。

それもあつて、新聞社などが誇張を込めて

彼女達を『龍神の姫巫女たち』などと

言い出したのだ。

それを知った唯依達は赤面したが、なにげにギドラを崇拜する人々の間にこの呼び名が浸透し始めていた。

そして、そんな時だった。

佳織と唯依達の合計6人が、斯衛の護るべき

存在である五摂家当主達と、今の政威

大將軍、『煌武院 悠陽（ゆうひ）』に招集を受けたのは。

今、彼女達は緊張した面持ちだ。

相手は五摂家の当主4人と政威大將軍。

とても斯衛軍の一衛士達が早々会える

相手ではない。

そして、上座に悠陽が座り、更にU字型を

描くように唯依達の左右に2人ずつ、

残りの4人が腰を下ろす。そして4人と悠陽の

傍には警護の者達もいる。そして当然

その者達も皆、有力武家の出だ。そうそうたる

メンバーを前に二十歳前の彼女達が緊張

するな、と言うのが無理な話だ。

そして、お互いに名乗りを終えた後。

早速、悠陽から話が始まった。

「忙しい中、皆よくぞ来てくれました」

「いえ。斯衛の衛士たる者、お呼びとあれば即座に」

6人を代表として、佳織が形式的な答えを返す。

「今回貴女方をお呼びした理由は一つです。

例の黄金の籠、キングギドラについて

直接貴女方6人から話を聞きたいと

考えていたからです」

「我々から、直接、ですか？」

「ええ。特別調査班から送られてくる

報告書にも目を通してはいます。が、

それだけではなく実戦の中で彼等と

共に戦い、生き残った貴女方自身の

話を聞きたいのです」

そう言うと、悠陽は6人を見回し、まずは

安芸に視線を向けた。

「石見安芸少尉」

「は、はいっ！」

将軍である悠陽に名を呼ばれ、安芸は緊張

した面持ちだ。

「あなたにとって、キングギドラとはどの

ような存在ですか？」

「え、えっと、わ、私にとっては……」

緊張のあまり、考えが上手くまとまらない安芸。

「どうか落ち着いて下さい。ゆっくりで

構いませんか」

そう言つて笑みを浮かべる悠陽。

「あ、ありがとうございます」

そう言つて、安芸は頭を下げてから

考えをまとめ、数秒の間を置いた後に

その視線を上げた。



「私にとって、キングギドラはかけがえのない戦友であり、仲間です」

「……仲間、ですか？」

「はい」

「言葉を交わす事は出来なくても、自らの理解を超えた存在であっても、ですか？」

「どこか、試すような口調で問いかけてくる悠陽。」

「それでも、です。……私は、何度も彼奴ら

と、バラゴンや、ガーディー。それに

キングギドラとも触れあってきました。

彼奴ら、私の瑞鶴で撫でてやると気持ち

良さそうに喉を鳴らすんです」

安芸は、恥ずかしそうに笑みを浮かべながら

語った。しかし、その表情がすぐに陰る。

「でも、あの戦いの時、彼奴らは私達を

庇って、一度は消滅してしまった。

……あの時まで、私は心の中で彼奴らの

事を頼りっぱなしでした。バラゴン達が

来てくれるから大丈夫、なんて樂觀した

考えまで持っていました。……でも、

自分の弱さのせいで、一度は彼奴らを

死なせてしまった。今は、それもとても

後悔しています」

「……であれば、その後悔を償いたい、と？」

「はい。それも無い訳ではありません。

でも、今はそれ以上に、キングギドラと

一緒に戦いたい。一緒に飛びたい。

弱い自分を捨てて、一緒にこの国を

護りたい。だからこそ、私にとって

キングギドラは戦友なんです」

安芸は、確固たる信念を浮かべた瞳で真っ直ぐ

悠陽を見つめていた。

「そうですか。ありがとうございます。ございます。石見少尉。では……」

そう言っつて他の面々を見回す悠陽。

「山城上総少尉」

「はいっ」

今度は上総だった。

「あなたは、キングギドラが帝国の守護神になるとお考えですか？それとも、横浜に出現した300メートル級の超大型怪獣のような脅威になると？」

「……それについては、私たち人類の対応次第かと、私は考えます」

「と言うと？」

「護国聖獣は、大和言葉の『くに』。つまり特定の国家や組織、人種ではなく自然や命を守る存在です。更に言えば、自然界の調和を護ろうとする存在。我々人類が、その調和を乱すこと無く生きるのであれば、彼等が私たちの敵となる事は無いでしょう。しかし、逆に我々人類がこの星の王者として命や自然を蔑ろにし、傲慢な暴君のように振る舞えば、何時の日か彼等が私たちの敵となるでしょう」

「だからこそ、彼等が我々の脅威となるかは我々自身の選択次第。そう仰りたいのですね？」

「はい。……今の彼等は、人間以上にこの星を滅ぼす存在であるBETAと戦っています。ですが、BETAが駆逐されれば残るのは怪獣達と、我々人類。」

そして次に試されるのは人類です。彼等によつて、この星に生きる命として赦されるのか。或いは排除すべき存在として攻撃されるのか。まだ幾分先になる話でしようが、その可能性はがあると、私は考えます」

「そうですね。ありがとうございます」

山城少尉

そう言うと、次に悠陽は志摩子を見つめた。

「甲斐志摩子少尉」

「はいっ」

「あなたは、彼等との共存は出来ると

お考えですか？」

「……正直、それは難しいと思います」

「何故？」

「一つは、やっぱり横浜に現れた

300メートル級の超大型怪獣の存在です。

あれは他の怪獣達よりも強く、単独で

ハイヴを攻略出来る存在。BETAを倒す

存在としてはとても頼りになるかも知

れません。でも、存在するだけで土地を

放射能で汚染し、私達人類が生活出来る

場所を奪ってしまう。これがあの怪獣だけ

なのかは今も分かりません。でも、同じよう

に何らかの方法で大地を汚染してしまう

怪獣が居たら、人との共存は難しく

なってしまうかも知れません。……でも、

私は不可能じゃないと思つて居ます」

「その理由は？」

「……彼等にも、私達人間と同じ心があります。

撫でられれば喜び、攻撃を受ければ痛そう

な声を上げて怒って。私達の事を心配もしてくれて。……彼等には、間違い無く喜怒哀楽を感じる心があります。だからこそ、私達と喜びや悲しみを分かち合う事は出来ません。決して楽な道ではないとしても、端から共生を諦めるのは間違いだと私は考えます」

「分かりました。ありがとうございます。ごいます甲斐少尉。では……」

次に白羽の矢が立ったのは和泉だ。

「能登和泉少尉」

「は、はいっ」

「もし、今後特別調査班の実動部隊である貴女方に、これからの任務として

キングギドラとの共闘を命じられたら

あなたは素直に従えますか？」

「……はい」

悠陽の言葉に、和泉はすぐに頷いた。

「構わないのですか？彼との共闘はつまり、

最前線へ行く事に他ならないのですよ？」

「はい。それでも、構いません」

「何故？死の危険が、怖くはないのですか？」

「……死ぬのが怖く無いって言えば、嘘になります」

静かに、僅かに下を向く和泉。

「でも……」

だが彼女はすぐに視線を上げ、悠陽を真っ直ぐ見つめる。

「私はあの子を、キングギドラを信じている。

そして私も安芸のように、彼等に護られた

恩を返したい。何より今度こそ、私は目の前

で戦友が消えていくのを見たくない。

もう二度と、失いたく無いんです。

だから戦います」

一度は恋人を失い、二度目は目の前でバラゴンの消滅を目撃した彼女だからこそその言葉だった。

「分かりました。では最後に。」

篁唯依少尉」

「はいっ」

「あなたは、現状配備されている戦術機、

瑞鶴に満足していますか？」

「ツ。失礼ながら、それはどう言う意味でしょうか？」

「要は、今の瑞鶴でキングギドラと共に戦う

事は可能なのか、と言う事です。

如何ですか？」

その言葉に、唯依は数秒迷った後。

「正直な所を申し上げれば、キングギドラとの

共闘を考えた場合、第1世代機の瑞鶴では

力不足かと」

「何故ですか？」

「一つは機動性です。第2世代、第3世代と

比較して重装甲な第1世代機の機動性では

キングギドラの歩行速度には追従出来ても

飛行速度には全く追従出来ません。

第2に、我々がキングギドラと共闘するので

あれば我々の任務は彼の死角のカバーです。

キングギドラの死角をカバーし、彼がより

戦いやすいよう群がるBETAを排除し

サポートする。しかしそうになると必然的に

近接格闘戦の可能性が高まります。

ですが、今の重い第1世代機では近接格闘戦

には不向きです。この機動性と格闘性能の

問題を考えると、今の瑞鶴ではキングギドラの『随伴機』としては、誠に失礼ながら力不足かと存じます」

衛士としての率直な感想を述べる唯依。

「ありがとうございます篁少尉」

それについて悠陽はそう語ると、6人の周囲に座る4人の当主の様子を伺った。

誰も、事前に悠陽が決めていた『提案』に反対するつもりは無いようだ。

「ありがとうございます。貴女方の話は

大変参考になりました。そして、貴女方に通達があります」

通達、と言う言葉に6人は表情を引き締める。しかも大將軍直々だ。緊張するのも無理は無い。

「本日付で特別調査班実動部隊は解散」

突然の言葉に、唯依達は一瞬驚く。が……。

「その後兵力を大隊規模に増員した上で

特別調査班より独立。『斯衛軍特別遊撃隊』

として再編成。軍備拡張として帝国軍

より97式高等練習機『吹雪』を受領。

以降はこれを主力機としつつ活動。

また、将来的には現在開発が進んでいる

試製98式の配備も検討しています」

悠陽の言っている事は、つまり部隊を

再編成して新しい部隊を作ると言う事だ。

「旧特別調査班実動部隊は現状、この

特別遊撃隊へ編成される予定です」

そして、そこに唯依達は編入される事になる。

突然の事態に唯依達は戸惑っていた。

と、そこへ。

「皆さん」

悠陽が声を掛けた事で我に返った5人。

「……今現在、この国はBETAの侵略に晒され、多くの人が絶望に打ちひしがれています」

静かに語る悠陽の言葉を、彼女達は真剣な様子で聞き入っていた。

「そんな中で現れたキングギドラの存在は、彼等の中で希望となりつつあります。そして、貴方達も」

「ッ、私達も、ですか？」

悠陽の言葉に、咄嗟に上総が聞き返した。

「ええ。……怪獣と、『巨大生物と

共に生きる世界』のお手本として、人々は貴方達に注目しています。

だからこそ、これからも貴方達に期待しています。『彼』と共に、これからも我が国を守る為に、その力を使いなさい。期待していますよ？」

「「「はいっ！」「」」」

悠陽の言葉に、力強く返事を返す5人。

そうして、唯依達はキングギドラと共に戦う道を選んだ。

それから数日後。佐渡島から襲いかかるBETAに対してはバランスが倒し、大陸などから海を渡って侵攻してくるBETAには、キングギドラが対応するようになっていった。

そして、帝国内部では怪獣を、特にギドラ

を信仰する動きが見られ始めた。  
最も新しい神としてギドラを、怪獣を人々が崇める。

そしてそれは、後々『怪獣教』、別名『タイタニズム』と呼ばれる怪獣信仰の。

BETAを人類の滅びと受け入れる

『キリスト恭順派』にとって代わり、

急速に勢力を広げる新たな宗教の

始まりであった。

そして、更に……。

太平洋のどこか。そこに浮かぶ小さな島。  
夜空の月と星々がその島のどこかにある、  
天井に穴が空いた洞窟の中を照らし出す。  
そこでは……。

「モスラくや、モスラく」

『巨大な2つの繭』を前にした、『小人』と  
表現出来そうな、小さな2人の少女が  
繭に向かって歌いかけていた。

まるで、『白い繭』と『黒い繭』の中に  
いる『何か』の『覚醒』を促すように。

そしてほんの一瞬、白い方の繭から

『淡い緑色』の光が漏れる。

だが、『彼女』と『彼』の覚醒は、まだだ。  
のちに『守護女神』と称される怪獣と。

『戦闘破壊獣』と称される怪獣の覚醒は、  
もう少し先の事であった。

第7話 END



## 第8話 小さな来訪者

覚醒したキングギドラは、横浜に巣くうBETAの巣窟、横浜ハイヴ攻略作戦である明星作戦に乱入するような形で参戦しBETA群を撃滅。

更に投下されたG弾2発を宇宙へ追放することで無効化し、人類の作戦成功に寄与するのだった。その後、唯依達はこの国のトップとも言うべき政威大將軍である煌武院悠陽らとの会談を経て新たな部隊へと配属が決まったのだった。

横浜ハイヴが攻略されて、既に1ヶ月以上が経過していた。

明星作戦以降、ギドラは主に富士山付近に出現してはBETAを迎撃。

更に大陸からの大規模なBETA侵攻に対しても、大体一人（一匹？）でこれを撃滅していた。

無論帝国軍も黙って見ているわけではないが、侵攻の報告を受けて迎撃に軍を動かしても、

それより先にギドラがこれを迎撃してしまうので、『急ぎ足で駆けつけても出番無し』の状況が続いていた。

そしてその結果、帝国の軍備再建や拡張。BETAの侵攻を受けて半壊した市街地の

復旧作業などに人員が当てられ、横浜を中心とした街も既に復興が始まり、前線ラインの

再構築も始まっていた。

横浜の街にそびえ立っていたハイヴのモニュメントも、今は爆破解体され欠片も残っていない。

ハイヴが攻略され、横浜が解放されたという事で人々の間には希望が芽生えつつあった。

そしてその中心にある存在がキングギドラだ。

圧倒的な、人知の及ばない力を行使するこの国の救世主的存在とし

て、既に国民の間では怪獣信仰、延いてはギドラ崇拜が浸透しつつあった。

一方、それとは逆に帝国民の反発を強めたのが米国だ。

その理由は言わずもがな、事前通告無しのG弾の一方的な使用である。

キングギドラのおかげで最悪の事態は回避されたとは言え、落とされた事には間違い無い。更に言えば、米軍が1998年に撤退した理由も『帝国側の度重なる命令不服従』なのだが肝心の米国はこの時既に戦術核やG弾による焦土作戦を展開しようとしていたのだ。要は自国を守る為に他国の今後を一切無視した戦術を取ろうとしていたのだ。

これでは帝国民が米国に良い感情を抱くはずもない。そんなこんなで、帝国における怪獣の評価が上がる一方、米国への信頼は急降下し続けていた。

そんな中、横浜のハイヴ跡地に国連軍の基地が作られる事になった。

この基地はオルタネイティブ4のための本拠地となる予定だ。

とは言え、跡地とは言えハイヴがあった場所での作業だ。

念には念を入れて、戦術機と衛士込みの警備部隊が周辺に配置される事となり、そこに明星作戦を生き延びた孝之と慎二も配属される事になった。

とは言え、衛士の本分は戦術機に乗っての戦闘だ。

二人はどちらかという監視の目を増やすために、まあ、言ってみれば少しでも監視を強化するための頭数として配置されている感があった。

建設予定地付近の、仮設基地で休憩を取る孝之と慎二。

「なあ聞いたか孝之。今朝のニュース」

「ああ。フランスの『リヨンハイヴ』が『ゴジラ』に落とされた、って話だろ？今朝からテレビや新聞で大騒ぎだったからな」

「……ゴジラ、かあ」

ポツリと呟く慎二。

今や、その名前を知らない者は居ない。

今から2週間ほど前、モナークによって全世界に『ゴジラ』の名前が公表された。

命名者は、一番最初にその存在を示唆した芹沢だ。

彼の故郷の『大戸島』に伝わる伝説の怪物の名を取って付けられたその名。

そしてその名を更に広めたのが、ほんの2日前。

フランスに上陸したゴジラによってリヨンハイヴが破壊されたと言うニュースだった。

「実際、圧倒的としか言いようがねえよなあ。あの青白い光線、高加速荷電粒子砲らしいぜ」

「……どうやったら生物の体からそんなの放てるんだよ」

あきれ顔で首をかしげる孝之。

「俺が知るかよそんなの。実際、荷電粒子砲ってのは俺等の技術でも作る事は出来るらしいぜ？まあ、バカみたいな電力量が必要だから、実用化サイズは作れないらしいが」

「……何でお前がそんなこと知ってるんだよ？」

と、純粹に疑問を口にする孝之。

返ってきた答えは……。

「暇だから暇つぶしで色々調べた」

だった。

そして、更に彼等が暇を持て余していた時だった。

「なあ孝之」

「ん？」

「俺らって、もしかして将来怪獣と戦う事になるのかな？」

「……可能性はあるんじゃないか？まあ戦った所で、一瞬で終わりだろうが」

「それは俺達が圧勝って意味で？」

「逆。容赦無く一方的に虐殺されそうで」

「だよなあ」

彼等もその目でキングギドラの活躍を見てきたのだ。

あんなレベルの存在と戦えなんて冗談じゃない、と言うのが二人の認識だった。

と、そこへ。

「二人して何駄弁ってんのよ」

「つと、水月」

青い髪の女性衛士がやってきた。

彼女は『速瀬 水月』。

彼女は孝之や慎二の幼馴染みであり、共にこの横浜で育った女友達だ。

そして今は同じA―01部隊の仲間だ。

まあそれぞれ所属する中隊が違うのだが。

「はいこれ。遙から二人に差し入れ」

そう言って水月が2人に渡したのはお弁当だった。

「おおっ！マジかっ！」

お弁当、と言う事で笑みを浮かべる慎二。

実際、もう時間的にはお昼時だ。

「これはありがたい。でも、よく作れたな。俺達衛士もだが、遙だって今はCPのオペレーターだろ？」

「まあそれは、最近この辺りが平和だからじゃない？余裕が出来てきたって言うか」

そう話ながらも、ちゃっかり孝之の隣の椅子に腰を下ろす水月。

ちなみに、遙というのは『涼宮 遙』という女性の事だ。

孝之、慎二、水月、遙の4人はこの横浜で出会った。

そして今もこうして、同じ部隊に所属し共に戦っている。

と言っても、水月と遙は諸事情で明星作戦の後に任官した為、まだまだ新入りだ。

そして彼女もどこからか取り出すお弁当。

「あれ？水月も弁当？」

「そうよ。お裾分けって事で遙が作ってくれたのよ」

首をかしげる孝之に答える水月。

「って言うか、肝心の遙は？一緒じゃないのか？」

「遙は今書類と格闘中。ちよつと忙しそうだから手伝おうか、って言ったら代わりに届けてほしいって渡されたのよ」

「ああそれで」

と、水月の言葉に頷く慎二。

って事で、3人でお弁当を食べていながらも、彼等は談笑していた。で、話題に上がったのは、ギドラだった。

「しっかし、キングギドラのおかげで俺達はこうしてられる訳か」

ポツリと呟いた慎二の言葉に、孝之と水月の手が止まる。

「そうだな。あの時、キングギドラがG弾をどうにかしてなかったら、俺達は今頃どうなってた事か」

「結果的に、2人はキングギドラに助けられたって訳ね」

「世の中じゃ、キングギドラを神様みたいに崇め始める人達も増え始めてるってさ」

「ああ、聞いたわ。怪獣信仰って奴でしょ？」

慎二の言葉に相槌を打つ水月。

「実際、怪獣ってすげえ強いからなあ。ゴジラは単独でハイヴを落とせるし、キングギドラだって単独で数万のBETA群を撃退出来るんだからよ。単独であるの化け物の群れとやり合えるんだから、それこそ化け物だよなあ」

「だからこそ、敵に回したくはないよな」

「そうねえ」

孝之の言葉に頷く水月。

「それに、横浜が今のままなのも、キングギドラのおかげよね？」

「……ああ」

水月の呟きに、孝之は真剣な表情で頷き、慎二も箸を止めた。

「G弾が落ちてたら、この辺り一帯はもつと酷い事になってたらしいぜ。下手すりゃ、放射能汚染とまでは行かなくても環境に影響が出たかもしれないって、香月博士が言ってたぜ？」

香月博士、と言うのは孝之達が所属する国連の計画、『オルタネイ

タイプ4』の

中心人物、『香月 夕呼（ゆうこ）』の事だ。

そもそもこの横浜基地建設も彼女の提案である。

「……他国がどうなろうと知った事じゃないと言わんばかりに、兵器の実験場としてこの国を、横浜を犠牲にしようとした米国と、純粹にこの国を護ってくれた怪獣。 ……同じ人間よりも信頼出来るのは言葉の通じない怪獣、か。何て言うか皮肉だな」

「全くだ」

孝之の言葉に慎二が頷く。

「怪獣かあ」

ポツリと水月は呟きながらも、ふと視線を窓の外に向けた。

そしてその時。

「ん?!」

彼女は、窓の外の『異様な光景』を見て、慌てて目を擦った。

そして再び外を見るが、その『異様な光景』、『小さな女の子2人がカラフルな蝶に乗っていた』、と言う異様な光景は消えていた。

「どうした水月?」

「あ、ううん!何でも無いっ!ちょっと疲れてるのかな?変なのが見えちゃった」

「変なの?」

戸惑う水月に孝之が声を掛けるが、彼女はそう言うだけだ。

慎二は首をかしげながらも窓の方に視線を向ける。

「何も無いけど?」

「きつと鳥よ。それが一瞬変な風に見えただけでしょ」

そう言っつて、半ば自分自身を納得させると水月は食事を再開し、孝之と慎二も同じくお弁当に視線を戻して箸を動かす。

だが、水月が見たのは間違い無く存在していた。

そして、その小人の2人、『コスモス』は、カラフルな蝶、『フェアリー』に乗り、帝国各地を巡っていた。

全ては、自らの存在を伝え、そして彼女達の同胞である『先住民族

コスモス』の技術データを収めた、先史文明の遺産たる『パンドラボックス』を授けるに値する存在を探すために。

そして、明星作戦から3ヶ月ほどが経ち、キングギドラの活躍もあつて帝国はそこそこ平和な年末を迎えつつあつた。

そんな、ある日の事だつた。

「ふう」

夜遅く、芹沢は東京にあるモナークの施設に戻ってきていた。

ギドラの活躍で関東圏が安全になつた事もあつて、彼は再び東京に戻ってきたのだ。

そして、最近の彼の仕事と言えば怪獣の調査に加えて、その存在の専門家として政治家や軍人たちに対する怪獣の説明などの仕事をしていた。

最近ではテレビのコメンテーターとして呼ばれる事もある程、何気に多忙な芹沢。

そして芹沢は施設内にある自分の執務部屋に戻ってくる。

時計は既に12時を超えている。

芹沢は着ていたスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを緩めるとソファに腰を下ろした。

『このまま横になるか』、と彼が睡魔に負けてそんな事を考え始めた時。

「はじめまして。芹沢大助博士」

「ッ!?!」

突如聞こえた声に、芹沢の眠気が吹き飛ぶ。

「誰だっ!?!」

彼は声を荒らげながら周囲を見回すが、部屋には彼以外誰も居ない。

「ここです博士」

「?」

芹沢は声のする方、執務机の方に目を向けるが、そこには誰も居な

い。

「一体どこに……」

更に彼が周囲を見回していると……。

「ここです」

執務机の上に重ねられた本の山の影から、小さな少女が2人、現れた。

「なっ……!?!」

小人と言う、おとぎ話から現れたかのような存在の来訪に、芹沢も戸惑い思わず後退って

しまった。

「き、君たちは一体……!?!人、なのか?」

「いいえ。私達は人ではありません。言うなれば、先史文明です」

「先史文明?」

「そうです。1万年以上前、私達『コスモス』は高度な文明を誇る社会を築き上げていました」

芹沢の問いかけに、片方のコスモスが答える。

「コスモス?それが、君たちの種族名なのか?」

「はい」

「そうか。しかし、ました、と言う過去形という事は……」

「お察しの通りです。既にコスモスの文明は崩壊しています」

「そうだったのか。しかし、高度な文明を誇っていたのなら、何故だ?」

と、純粹な疑問を口にする芹沢。

「確かに、私達コスモスは繁栄を享受していました」

「発展した文明の果て、一部の科学者たちは天候をも自由自在に操ろうとしました。しかし、それによって」

「地球生命の怒りを買ったのです」

その話を聞きながら、芹沢は静かに、執務机の椅子に腰を下ろすと彼女達と向き合った。

「教えてくれ。君たちが何故私の元に現れたのか。地球生命の怒りとは何なのか」



「はい」

そうして、コスモスは語り始めた。

「当時、我々コスモスはある2匹の怪獣を神と崇めていました」  
「ですが、地球生命の怒りを買った事で、その一方、『バトラ』が私達の敵となったのです」

「では、君たちはそのバトラに攻撃を受け、文明は崩壊したと?」

「いいえ。もう一方の神、『モスラ』はバトラと戦いながら必死に彼を説得しようとしていました。ですが、そこにバトラ以上の脅威が現れたのです」

「それは一体……?」

「我々はそれをアースと呼んでいました」

「そして今、人間が『ゴジラ』と呼ぶ存在です」

「ツ!?ゴジラがっ!」

「はい。当時のゴジラは、今のゴジラほど大きくはありませんでした」  
「ですがそれでも、我々の力も、モスラとバトラの力も及ばない程に強大な存在でした」

その話を聞き、しばし考える芹沢。

「ゴジラは自然界の調和を保つ存在だ。それ故に、バランスを崩しかねないコスモスを、彼は許さなかった?」

「はい。その通りです」

「そして、ゴジラに挑んだモスラとバトラはその圧倒的な力の前に敗れ、瀕死になりながらも自分達の子供を産み、命を落としました」

「子供?二匹の子供がいるのか!?それは今どこで何をっ!」

「今、モスラとバトラの子供達は、インフアント島という島で力を蓄えています」

「繭となって既に1万年。来たるべき日、『審判の日』を彼等は待っていたのです」

「その、審判の日、と言うのは?」

「人類は、これまで多くの事をしてきました。戦争、環境破壊。そして地球を滅ぼしてしまうかもしれない兵器までも、創り出してしまっ

たのです」

「……原水爆か」

「そうです。そして人類の存在が、地球生命。即ちこの星にとって危険だと判断された場合、『裁定の獣』が現れるはずでした」

「それがゴジラか」

「はい」

「地球生命の意思によって、この星の脅威となる存在を排除する、言わば『地球生命の使者』。それがゴジラです」

「そしてモスラとバトラは、その審判の日が訪れた時、ゴジラと戦うために力を蓄えていました。ですが……」

「今では人間よりも、BETAの方がこの地球にとって有害な存在だ。だからゴジラは、BETAを相手にしている、と言う事で良いのか？」

「ええ」

「ですがそれも、人間とBETAを比較して、BETAの方が脅威であると判断されただけでしよう」

「そうなれば例えBETAを退けたとしても、その先に待っているのは人間と怪獣の戦争」

「そして我々と同じく、滅びの運命です」

「……今の人類では、ゴジラには勝てないか？」

「はい」

「正直に言えば、今の人類の技術レベルは我々コスモスよりも劣ります」

「この程度の技術力では、ゴジラを倒すなど夢のまた夢」

「そうか」

芹沢は、コスモスの言葉に頷いた。

まあ彼自身分かっていた事だ。

人類に出来ない事を、ハイヴ攻略を軽々とやってのける存在に、その人類が勝てる訳がないのは百も承知。

「つまり、君たち2人は我々人類に対して警告をするために来た、と言う事で間違い無いのか？」

「はい。そしてもう一つ」

「ん？」

「我々コスモスの遺産を託するに値する人に託す為です」

「コスモスの、遺産？」

「そうです。我々コスモスは、自らの過ちを理解し、最後はゴジラによつて滅ぼされました。今生き残っているのは、私達だけ」

「そして私達に与えられた使命は、何時の日か私達と同じように知的生命体が現れた時、彼等に私達と同じ過ちを繰り返さないように警告することです」

「そして、もし私達の遺産を託すに相応しい人が居るのなら、その人に遺産を託す事です」

「その遺産、と言うのは一体何なんだ？」

「それは、私達コスモスの技術の全てを収めた、言わばデータバンクです」

「ですがこの中のデータは扱いを間違えれば、まず間違い無く私達と同じ運命を辿る危険な物です」

「扱いを間違えれば、人を滅ぼす存在。福音であり、同時に滅びの象徴。それがコスモスの遺産ですか」

「はい。私達はこれを『パンドラボックス』と呼んでいます」

「……パンドラの箱。様々な災いが収められ、ひとたび開かれればそれが世界に襲いかかる。だが、開かれた箱の中には一欠片の希望が残されていた、か。皮肉なまでにぴったりの名前だ」

そう言つて芹沢は苦笑を浮かべた。

「使い方を間違えれば、それは人類の滅亡に直結します」

「ですが逆に、間違えなければそれは人類を未来に導く希望になります」

「全ては、『使い方次第』か」

2人の言葉に芹沢はポツリと呟いた。

「私達が博士にお会いしたのは、仲介をお願いしたいからです」

「仲介ですか？私に？」

「はい。今この世界で最も怪獣、延いてはゴジラに理解があるのはあなたです。芹沢博士」

「パンドラボックスを託す為にも、私達は相手を見極めなければなりません」

「ですが私達には人族との繋がりはありません。そして更にはパンドラボックスを手にする事の危険性を伝えなくてはなりません」

「パンドラボックスの使用を誤ればゴジラによつて滅ぼされるから、か」

「はい」

「だからこそ、ゴジラの強さ、危険性を分かっている博士に仲介をお願いしたいのです」

「分かりました」

そう答えた後芹沢は、話し合いは後日で良いか？とコスモスの2人に確認を取つて、OKを貰つたのでその日は別れた。フェアリーと呼ばれる小さな蝶に乗り、帰つて行つたコスモスを見送つた芹沢は今度こそ眠りに付くのだつた。

そして、数日後の夜。再び彼の元をコスモスが訪れて居た。

そんな2人に芹沢がまず答えた事なのだが、『まず国家は信用出来ない』だつた。

どういうことか？とコスモスが問いかけると芹沢は説明を始めた。

「この国、帝国は行政のトップに政威大將軍という方がいるのですが、現在彼女には大した発言力も無い様子。となれば仮に彼女にパンドラボックスが渡つたとしても、どうなるか。むしろ帝国の野心的な連中に奪われ良いように使われるのが関の山でしょう」

「では、他の国は？」

「残念ながら、似たり寄つたりでしょう。アメリカとソビエトはお互い相手を超えるために余念が無い。パンドラボックスを手にするれば、十中八九BETAとの戦い以外に利用してしまうでしょう。かといつてそれ以外の第三国に流しても、その国はパンドラボックスの技術力によつて大国に成り代わる事を画策し、結果的に争いを増長してしまう可能性があります。なので、結論から言ってしまうえば信用出来る国家が無い、と言うべきか。……と言うより、どこの国にもパンドラボックスを悪用するであろう人間が居そうなので国家に渡すべき

ではないと言うべきか」

「では、個人ではどうでしょうか？」

「どなたか、信用出来る方は居ませんか？」

「信用出来る人、か」

彼は考えた。今彼が信用出来る人間を脳内にリストアップしている。

更に彼はそこからゴジラの脅威を理解している者達へとリストを絞っていく。

そのリストの中には唯依達も居たが、立場や発言力などの弱さから早々に除外されてしまう。

そして彼が唸ること数分。

「……1人だけ、『彼女』なら或いは……」

「その彼女、と言うのは？」

「私も、少し前に出会ったばかりの女性です。しかし、何とか話をしている内に彼女は芯の通った女性だと感じました。目的に対して努力を惜しまない。悪い言い方をすれば目的達成のためには手段を選ばない女性のようなでしたが、むしろその方が信頼出来るのではないかと考えての事です」

「その方は、信じられるのですか？」

「少なくとも、彼女は理解力のある女性です。それに、国連の最重要計画の中心人物でもあります。少なくとも彼女ならば、他国なども早々手出しは出来ないでしょう。それを考えれば特定の国に渡すよりは安全かと」

「二分かりました。それで、その女性の名前を教えてくださいても？」

「彼女は『香月 夕呼』博士。オルタネイティブ4と呼ばれる計画の責任者です」

こうして、芹沢はパンドラボックスを託すべき相手を決めるのだった。

それから数日後。芹沢はコスモスと共に夕呼に会う約束を取り付

けた。

もちろんコスモスの存在は今、彼以外に知る人物はいない。会う予定の夕呼もだ。

彼等の話し合いの場所は、未完ではあるが横浜基地の一角、と言う事になった。

芹沢は鞆にコスモスの2人を隠し、案内役の兵士に連れられて夕呼の待つ、仮設の応接室へと連れて行かれた。

「お待たせして申し訳無い、香月博士」

「いいえ。どうぞお気になさらず」

芹沢が中に入ると、そこには国連軍の制服の上に白衣を纏った女性、つまり夕呼が待っていた。挨拶をしながらも、彼女の向かい側のソファに腰を下ろす芹沢。

「それで、博士から話とは一体？」

そう言って首をかしげる夕呼。

「それについては、私ではなく『彼女達から』と言うべきでしょうか?」  
「彼女、たち?」

芹沢は、首をかしげる夕呼の前に鞆の中からコスモスを自分の手の上に乗せて出すと2人の間にあるテーブルの上に下ろす。

「こんにちは、香月夕呼博士」

「……私、夢を見ているのかしら?それとも徹夜のせいかしら?」

そう言って彼女は苦笑しながら目頭を揉む。

「いいえ。夢ではありません」

「今日は、私達から香月博士にお話があつて、芹沢博士に連れてきて貰ったのです」

「……話って、私に?」

「はい」

「そう。……それで、話つて?」

未だに理解不能な様子だが、話を聞くだけならと言う様子で夕呼はコスモスの話を聞き始めた。

コスモスは芹沢に語ったように、自分達の種族の事。それが滅んだ事。その原因がゴジラである事。もしこのままであれば、人類はコス

モスと同じように地球生命の怒りを買ってそのゴジラに滅ぼされる可能性のある事。

そして、最後にパンドラボックスの事を彼女に語った。

「お話は大体分かりました。で、なんで私なんですか？聞いた所では、芹沢博士の推薦のようですが？」

「それについては、いつぞやお話した時の事を覚えていますか？あの時私が最後にした質問を」

「それって確か。……『もし怪獣と敵対するか共生するかを選択を迫られた場合、どちらを選ぶか？』、だったかしら？」

「ええ。あの時、香月博士は言った。『どちらのケースも想定し、あらゆる情報をかき集め、その上で対策を練る。出来る事をする。何を犠牲にしても人類が生き残る為に』。と。この答えを聞いた時、失礼ながら私は貴女を、目的のためなら手段を選ばない人だと思った」

「……その通り、だと言っておきましょう。生憎ですが私は超人でも英雄でも無い。所詮は天才。出来る事と言えばそれくらいですから」  
芹沢の言葉に、夕呼はそう答えた。

「でも、だからこそ信頼に足るのではないかと私は考えました。あらゆる状況を客観的に分析出来るのであれば、当然ゴジラと戦う事がどういうことなのかも理解出来るはず。プライドに縛られ、ゴジラを一匹の獣と侮る連中より、その危険性を十二分に理解出来るであろう貴女に、私はコスモスの遺産、パンドラボックスを託すべきだと考えました」

その言葉に彼女は、しばし考えた後。

「まあ、分かりました。現代技術をも上回る技術データの塊なら正直私も欲しい、と言うのが正直な所。それで、そのパンドラボックスとこののはどこに？」

「ここにはありません。あるのは、太平洋のとある島。インフアント島です」

「分かったわ。……なら、善は急げと言う訳じゃないけど、取りに行きましようか？」

「え？今からか？」

夕呼の言葉に戸惑う芹沢。

「まさか。もちろん準備をしてから、ですよ」

彼女はそう言って笑みを浮かべながらも、コスモスへ目を向けた。「案内をお願い出来るかしら？パンドラの箱が眠る場所まで」

そして彼女たちは向かう事になった。

コスモスの遺産、パンドラボックスの眠る場所。

そして、『モスラ』と『バトラ』の眠る場所。

インファント島へ。

第8話 END



## 第9話 インフアント島

キングギドラの活躍で解放された横浜。そんな横浜の一角に新しい国連軍の基地が建設されることになり、明星作戦を生き延びた孝之や慎二は、生まれ故郷の横浜へと戻ってくるのだった。

そんな中、新たな来訪者として先史文明の生き残りであるコスモスが芹沢の元を訪れ、警告と自分達の遺産、パンドラボックスを託す相手を探していることを告げる。

その後芹沢は、考え抜いた末にパンドラボックスを1人の女性、香月夕呼に託すべきだとして彼女の元へコスモスを連れて行き、その話をするのだった。

話を聞いた彼女は、即決しパンドラボックスの回収に向かうのだった。

2000年1月。太平洋上。

今、太平洋のど真ん中を、モナーク所属の大隈級戦術機揚陸艦が進んでいる。

大隈級には、夕呼が連れてきたA-01連隊の内の一個中隊、別名『伊隅ヴァルキリーズ』と呼ばれる第9中隊の衛士とその戦術機、不知火（UNカラー）が12機搭載されていた。

そして、船内の小さな会議室には中隊長である『伊隅みちる』大尉を始めとしたヴァルキリーズのメンバーが集められていた。

そしてそのメンバーの中には水月や遙の姿もある。

ちなみに、ヴァルキリーズという名称の由来は隊長のみちる以下メンバーが全員女性であることから付けられている。

そして、そんなヴァルキリーズの前に夕呼がいて、更に近くにドールハウスを持った芹沢がいる。水月は『何である人ドールハウス持つてるの?』と思いつながらも、夕呼の話に耳を傾けた。

『今回の貴方達の任務は、この先にある島、インフアント島に存在する『ある物』を回収する事。そして回収作業中の私達の護衛。それが大まかな任務の内容よ』

と、夕呼が言うともちるが手を上げた。

「その回収する物と言うのは？」

「それについては、私じゃなくて彼女達から説明して貰うわ」

「彼女たち？」

首をかしげるみちる。すると夕呼の近くで控えていた芹沢が彼女の前の教壇の上にドールハウスを置いた。

「何をしてるんだろう？」と言わんばかりに皆が戸惑っていると……。

「はじめまして。皆さん」

中からコスモスが現れ、皆驚きから絶句してしまった。

そして三度、彼女達の口からコスモスの事や自分達の文明がゴジラに滅ぼされたこと。そしてその過ちを繰り返さない為に警告に来た事と、コスモスの遺産を託す為に芹沢を通して夕呼に接触した事などが話された。

「それで、その遺産というのは？具体的な事を聞いても良いだろうか？」

「二はい。それはコスモスが残した『基地』と『戦艦』です」

と、ここでコスモスは『事前に夕呼から指示されていた』、『偽の遺産』の情報を流した。

正確に言えば、彼女達の言う基地と戦艦も、パンドラボックス込みで夕呼に与えられる予定だった。だが、パンドラボックスに関しては不用意に口にしないように夕呼からコスモスに指示していたのだ。

その理由は情報漏洩を避けるためだ。

『壁に耳あり障子に目あり』という諺があるように、どこの誰がどんな所から話を盗み聞きや盗み見ているか分からないからこそ、パンドラボックスの事を隠したのだ。

今現在、パンドラボックスの存在を知っているのはコスモスを除けば夕呼と芹沢だけだ。

で、話を戻すと……。

「その戦艦、と言うのは？」

衛士の1人、『宗像（むなかた） 美冴（みさえ）』中尉が手を上げて質問する。

「私達コスモスが技術の粋を集めて開発、建造した最強の船です」  
「ですが、ゴジラの圧倒的な力の前に敗北と文明崩壊を察した私達は  
この船を、最後に残された基地、インフアント島の地下に封印しまし  
た」

「成程」

と、コスモスの話に頷く美冴。

「しかし、その基地はよくゴジラの攻撃を受けませんでしたね」

そう問いかけるのは、『風間 栲子（とうこ）』少尉。

「恐らく、ゴジラはそれを脅威と判断しなかったのでしょう。扱う事  
の出来る存在も、もう殆ど残っていませんでしたから。そして更に、  
私達の後に生まれる文明に対する、警告の意味も込めて、残したのだ  
と思います」

「警告、ですか？」

「はい。『コスモスほどの技術力があってもゴジラには勝てない』、と  
言う警告です」

「……………」

2人の言葉に、衛士達は皆押し黙る。

「過ちを繰り返し、この地球の怒りを買ったときどうなるか。その末  
路を示唆するためにゴジラはコスモス最後の基地を破壊しなかった  
と言う訳か」

ポツリと呟く芹沢。

「とにかく。今の私達の任務は、第1目標は戦艦の回収。第2目標は  
基地施設の状況観察。可能であればこれを接收する予定よ。良い？」  
と言うと…………。

「あ、あの」

水月が挙手した。

「作戦とかは分かるんですけど、それを私達が回収して大丈夫なんで  
でしょうか？それだけでゴジラに標的にされる、なんて事は…………」

と、思った不安を口にする水月。しかし彼女の不安は他の衛士達か  
らしても最もだ。

「それについては、コスモスの2人に聞いた方が良いでしょうね。そ

れで？お二人の判断は？」

「ゴジラはあくまでも、この星の脅威、つまり自然や他種族を蔑ろにする存在の敵となります。回収するだけであれば問題無いと思われ  
ます」

「まあ、実際の所問題は回収した後なんだけどね」

と、コスモスの話を補足する夕呼。

「とにかく任務は今言ったとおり。まずインフロント島沖に到着後、私と芹沢博士は貴方達の不知火に便乗して島に上陸。半分を上陸地点の警備に残して、他は私達と一緒に基地へ向かう。道中何かあるか分からないから警護をよろしくね。……誰か質問は？」

と言うが、皆手を上げない。質問は無いようだ。

「それじゃ到着するまでに準備をよろしく。あああと、コスモスの二人のことも一応機密事項だから、不用意に喋らない事。じゃあ一時解散」

そう言つて部屋を出て行く夕呼。

残されたみちる達も各々部屋を後にし、それぞれの準備を始めた。

そして水月も、出撃前に自分の愛機の確認作業をしていた。

「……ゴジラに滅ぼされた文明の戦艦かあ。どんなのなんだろう」

そんな事を考えながら愛機の確認をしていると。

「水月ちゃん」

「あつ、遙。どうしたの？」

CP将校、所謂オペレーターの制服姿の遙がやってきた。

「これ。インフロント島の地図だつて。伊隅大尉が水月ちゃんにも見せておけて」

「あくありがとう遙」

水月は遙の持っていたタブレットを手に取り、インフロント島の地形に目を通しておく。

そんなときだった。

「ねえ、水月ちゃんはその、ゴジラの事をどう思う？」

「え？どうつて？」

「ゴジラは、私達よりすごい技術を持っていたコスモスを滅ぼしたんで

しよ？だったら、今の私達じゃゴジラに勝てないって事だけど、だからってゴジラを放置したら放射能をまき散らすし」

「……そうね」

水月は彼女の言葉に頷く。そして遙のどこか不安な様子にも彼女は納得してしまう。

横浜は一度、ゴジラによって汚染されてしまったのだ。結果的にBETAがそれを中和したから良い物の、故郷が汚染されたとあっては良い感情は持てないだろう。

だからこそ彼女はまた故郷がゴジラに汚染される事を恐れているのだ。

ゴジラの存在は、人間にとってメリットとデメリットがある。

メリットはBETAを倒してくれる可能性がある事。

デメリットは高濃度の放射能を出現地点にばらまく事だ。

そしてどちらかと言えば、デメリットの方が大きいかもしれない。

放射能に汚染された大地を、人々は捨てなくてはならない。

そのことを考えていた時、水月はふと……。

「もしかしたら、ゴジラ自体が核兵器とかに対する警告なのかもね」

「え？」

「放射能汚染の事よ。『存在するだけで世界を汚す』。そのことの警告のために、ゴジラは放射能をまき散らしてるのかもね。『お前達が核兵器を作り続けたら、こんな風に住めない土地が増えるんだぞ』って」

「そう、なのかな？」

「まあ、私の勝手な推測、ってか妄想だけだよ」

と、二人が話していると……。

『当艦は間もなくインフアント島近海に到着します。衛士各員は強化装備を装着の上待機されたし。繰り返しします。……』

艦内放送が流れた。

「つと、じゃあ私着替えに行かないと。じゃあね遙！」

そう言っつて、水月は遙にタブレットを渡すと足早にその場を後にした。

「……ゴジラの存在自体が、警告かあ」

遙は、それだけ眩くと数秒して気持ちを切り替え自分の持ち場に戻った。

その後、芹沢とコスモスは椅子の不知火に乗せて貰い、夕呼も水月の不知火に乗せて貰いながら大隈級を出発した。

戦術機には、パイロット以外に人間を乗せる装置がある。

とは言え、戦術機が戦闘するとなればかなりのGがかかる。加えて装置はあっても簡易的な物なので、これを使って居る人物の安全を考えると高Gがかかる戦闘機動は避けなければならぬ。

まあ、今は実際戦闘中でないから良かった。

だが、それならばヘリを使えば良いのでは？と思うだろうが、夕呼の提案で今回のインファント島行きに付いてくる人間は、極力少なくてほしい。と言うのでこうなった。

どういふことかと言えば、まあ情報漏洩を警戒しているからだ。

一人でも関わる人間を少なくすれば、それだけ情報が漏れる心配も無い。更に関わる人間が多すぎると、仮にスパイが紛れ込んでも分りにくくなる。

だからこそ夕呼は関わる人間の数を最低限にしたかったのだ。

そして、彼女達はフェアリーに乗って空を飛ぶコスモスたちの後に続いてインファント島に上陸した。

しかし、傍目からは普通の無人島にしか見えないインファント島。規模自体は結構大きな島だが、周辺に大きな陸地や人間の住む島が無い事や、航路から外れた場所に在るため訪れる者の居ない無人島のままだったのだ。

そして、コスモスに乗せたフェアリーはインファント島の一角の平野へと降りていく。それを確認した12機の不知火達も次々と着地しながら周辺を警戒している。

「ここからは入り口の洞窟まで歩きになります」

との事だったので、事前に決められていたメンバーが不知火を降りて、残りは不知火に

乗ったままこの広場で待機となった。

フェアリーに乗ってゆつくりと進むコスモスに続く芹沢、夕呼。更にその護衛としてみちるや美冴、椅子や水月などが拳銃を手に続く。ちなみに芹沢も夕呼も、今は動きやすい服装だ。流石にいつもの格好では島は歩けないからだった。

コスモス曰く、『歩いて数分』との事だったが、島自体が全く舗装も整備もされていない無人島だったため、目的地に着くには10分以上掛かってしまった。

「ここです」

そして10分以上かけてたどり着いたには、見た目はありふれた洞窟だった。

『本当にこの下に基地なんてあるの?』

と、水月はそんな疑問を感じつつも、拳銃に装着されているライトのスイッチを入れる。

芹沢や夕呼もそれぞれライトを取り出し、中へと入っていった。

洞窟の中自体も、普通の物だった。人為的に作られたと思わせる部分は無く、如何にも天然の洞窟と言う感じだ。なので足場も悪く、慎重に進んでいく事5分。

「ッ、行き止まりか?」

先頭を歩いていたみちるが、目の前に現れた壁を見てそう呟く。

「いいえ。行き止まりではありません」

すると後ろからフェアリーに乗ったコスモスが彼女の前に出て、そしてフェアリーから降りると目の前の壁に触れた。

直後。

壁面を、水面が波打つように光が走った。直後、壁そのものが粒子のようになつて消滅してしまった。まさかの開け方に彼女達が戸惑う。だが、本当の戸惑いはそこからだった。

「さあ、皆さんこちらへ」

再びフェアリーに乗ったコスモスに促されるまま、彼女達は歩みを進めた。

そして開いたドアの先には、全く別の世界が広がっていた。

白を基調とする綺麗な通路が広がる。とても数千年放置されてい

たとは思えない、清潔さを保った通路だった。驚きながらもその通路を進んでいくと、彼女達の前に大きな扉が現れた。

するとコスモスはフェアリーを降りて、左右に分かれる。すると扉の隅っこに、コスモスサイズの小さなハンドスキャナーが出現した。二人は互いにうなずき合うと、同じタイミングでスキャン装置に触れた。

レーザーが2人の手をスキャンすると……。

『コスモス2名を確認しました』

どこからともなく電子音声响起る。

『基地施設のロック解除。全システム、復旧します』

すると、電子音声に次いで『プシュウツ』と言う音と共に、大きな扉が左右に開く。

そして長い間封印されてきたコスモス最後の基地に、電力と言う名の息吹きが吹き込まれ、再び動き出した。

大きな扉を越えたその先は、基地全体を見渡せる高台となっていた。芹沢やみちる達、夕呼でさえも愕然とした表情で眼下に見える基地を見回していた。

基地には、人が暮らせるのか隊舎のような建物や、戦車や戦闘機を格納できそうな倉庫。更に一番奥には、同じく一番大きなドックらしき建物も見える。他にも生産工場らしき施設などが散見される。

正にSF小説に出てきそうな、近未来的な光景が彼女達の前に広がっていた。

「こ、ここが、コスモスの基地?」

呆然と、周囲を見回す水月。

「そうですね。さあ、皆さんこちらへ」

そう言つて、コスモスは彼女達を促す。驚きのまま2人についていく芹沢たち。

そして彼女達が、高台の一部にある丸い円形の上に乗ると、コスモスが彼女達サイズの小さな端末に触れた。すると、円形の物体に走るラインが緑色の光を放ちながら浮かび上がった。そして彼女達を乗せたまま、音も立てずに動き出したのだ。



「これは……。まさか重力制御技術？」

目立った推進機関も無い円形の物体が動く事に、夕呼は驚きながらもそう呟いている。

「それに、操縦桿のような操作に使う端末のような物もない。ちよつと、これってどうやって動かしているの？」

「これは、この触れている場所を通して私達のイメージを送り込んでいます」

「そのイメージを機械が読み取って動かしているんです」

「この基地内の行きたい場所をイメージすれば、そこへ連れて行ってくれるんです」

「つまり、イメージインターフェースと言う訳ね。それも大きさからして、現行の戦術機に搭載されているものよりもずつと性能の高い物。この乗り物だけでも、どれだけの技術が詰まっている事か」

そう言つて、何やら笑みを浮かべる夕呼。

ちなみにだが、戦術機にはその操作に当って、操縦桿やペダルだけでなく間接思考制御と言う物が使われている。これは簡単に言うと、衛士の『こう言う動きをしたい』というイメージによる指示を機体が受け取って、機体側が実行。そこから細かい動作をパイロットが操縦桿などで行う、と言うものだ。

そして、そうこうしている内にフライングボード、彼等の乗る円形の乗り物は基地の奥にある一番巨大なドックへと到着。それを降りると、再びコスモス2人のハンドスキャンで扉を開放した。

そして、開いた扉の先で彼女達を待ち受けていたのは……。

「これは……」

「……大きい」

ポツリと呟く美冴と榊子。

彼女達の視線の先にあるのは、巨大な漆黒の船だった。

流線型の船体。現代の『船』という常識的概念から外れた形の船。

しかし何と言つても目を引くのは、船首に取り付けられた巨大なドリルだった。

「これが、コスモスの戦艦か？」

「はい、そうです。私達は『轟天号』と呼んでいました」

船、轟天号を見上げながら呟く芹沢にコスモスたちが答える。  
「轟天号」

ポツリとその名前をリピートする水月。

「それで、こいつの武装とかの説明は？」

「それでしたら、『ゼア』がしてくれます」

「ゼア？」

問いかけた夕呼は、2人の言うゼアという単語に首をかしげた。

「ゼア。そこに居ますか？」

2人が、まるで基地に向かって呼びかけるように声を発した。周りの者達が『何を？』と首をかしげていると……。

『お呼びでしょうか？』

どこからともなく、女性のような声が響き渡る。

「ねえ、この声って……」

「この声の主はゼア。コスモスが生み出し、この基地の管理を任せているマスターAIです」

と、夕呼の問いかけにコスモスが答える。

「ゼア。皆さんに轟天号の事を教えてあげて下さい」

『分かりました』

と言う訳で、人工知能であるゼアから夕呼達に轟天号の説明がなされた。元々轟天号は対ゴジラ用に開発された決戦兵器の一つで、破壊力を優先して開発された事。そのために艦首でもあるドリル周りに武装が集中している事。いざとなれば轟天号そのものを弾丸として、ゴジラに突っ込む事も想定されていた事などを、ゼアが説明してくれた。

更に飛行能力や動力源などの詳しい話もされたが、水月などはちんぷんかんぷんだった。

「もし良ければ、轟天号の中もご覧になりますか？」

「ええ。それじゃあ見せて貰おうかしら」

と言う事で夕呼と芹沢はコスモスの案内で中に入る事に。

「それじゃあ、貴方達は外で待機しつつ基地の状況を確認。って言っても分からない所だらけだろうから、とりあえず破損してそうな箇所や施設が無いか確認よろしく」

「了解しました」

そしてみちる達には外で待機するように指示を出した。

「では。ゼア。もしもの時は皆さんの質問の答えてあげてください」

『かしこまりました。個人の顔データを識別中。……完了。』

6人をゲストとして一時登録します』

「これで、もしもの時はゼアが答えてくれます」

「ご配慮、感謝します」

コスモスの言葉にそう言って頭を下げるみちる。

そうして、みちる達は轟天号の外を見て回り、夕呼達は轟天号の中へと入っていった。

轟天号の中も中で、近未来SF的な作りになっていた。

中に入ってからコスモスが真っ先に案内したのは、轟天号の船長室だった。

そして、その中の透明なケースの中にパンドラボックスが保管されていたのだった。

パンドラボックスは、ボックスの名の通り正六面体の構造物だった。

だが、夕呼は機材を接続出来る穴もないその構造を見て、どうやってアクセスするのか？と内心首をかしげていた。

そうこうしている内に、コスモスが透明なケースに触れると、ケースが粒子となって消滅しパンドラボックスが露わになった。

「ねえ、これってどうやって情報を引き出すの？見たところ外部装置の接続口も見当たらないけど？」

「それについては、直接触れてみて下さい」

「触れるって、ボックスに？」

「はい。害は無いので、触れてみて下さい」

「……そう」

夕呼は、内心緊張しながらも静かにパンドラボックスに手を伸ばし、そして触れた。

『カアアアアアアッ!』

するとパンドラボックスが独りでに光を放ち始めた。

その光量に咄嗟に視線を逸らす夕呼。

だが、直後夕呼は『意識が引つ張られるような感覚』に陥った。そして一瞬瞬きをした直後、彼女の目の前には、『無数の本棚が広がる世界』が続いていた。

「なっ!？」

これには夕呼も驚いてボックスから手を離してしまった。

すると、景色は元の艦長室に戻る。慌てて夕呼は周囲を見回す。

「今のは……」

「今、香月博士の意識は、一時的にボックス内部のデータベースへとアクセスしていました」

「ッ!?何ですって?つまり、このボックスは……。触れた人間の意識を一時的に引つ張り寄せる事が出来るの?」

「その認識で間違いありません。そして、このボックスにアクセス出来るのは私達の許可を得た人間だけです」

「成程ね。許可の無い人間はどうやってデータベースにアクセスする事が出来ない。しかもネットワークから独立していれば外部から電子的に侵入される心配も無い。ねえ、アクセス認証が出来るのって、貴方達だけ?」

「いいえ。ゼアにもその権限がありますが、そちらは私達の意味で取り消す事が出来ます」

「つまり、確実にアクセスするのなら貴方達の同意が必要不可欠って訳ね。となると強引にボックスだけが奪われたとしても、誰も中を見ることは出来ない」

「その通りです」

その時。

「香月博士は、もしかしてこれを狙って、しかも武力攻撃を仕掛けて来る連中がいると考えているのですか?」

そう問いかける芹沢。

「……ええ。正直、これの存在が表に出ればどうなるか。下手をすれば大国同士がボックス欲しさに大軍を動かす可能性だってあります。それを考えれば、これは災いの元。正しく様々な厄災を収めたと言う、パンドラの箱と言う名に相応しい存在です。ひとたび存在が明るみに出れば、戦争と言う厄災の火種になりますからね」

「……ならば、尚更これの存在を公にするわけには行かない、と言う事ですね」

「ええ」

そして2人は、人類の希望にも絶望にもなり得る箱を見つめるのだった。

一方その頃、水月は他のメンバーと別れて基地内を探索しながら、状況確認を行っていた。とは言え、ゼアによる管理がしっかりしていたのか目立った損傷どころか汚れた場所すら無い現状だった。

そして水月が見て回った先では、倉庫の中に『四つ足の戦車』だったり『バイクサイズのホバーバイク』があったり、更には装備生産用の『多次元プリンターザット』まであったりした。そして見る物全てが驚異的過ぎてコスモスの技術レベルの高さに何度ため息が出た。「ホント、びっくりするくらい色々あるわね……」

戸惑いながらも足を進めていた水月。しかしふと、彼女が視線を上げると……。

「……って、教会？」

目の前に教会の大聖堂のような建物があった。周囲のSF的な空間とはどこかミスマッチな教会に、水月は興味を引かれて中へと入っていた。

そして中に進むと、降り注ぐ光が天井のステンドグラスを通って形を為し、大聖堂の真ん中に『紋章』のような物を描いていた。

「これって……」

『それは、モスラの紋章です』

ポツリと水月が呟くと、どこからともなくゼアの声が聞こえる。

「うわっ!?びつくりしたっ!」

突然話しかけられ驚く水月。

「……って、モスラって何?」

やがて驚いたのも束の間。水月はゼアに向かって呼びかけた。

『はい。モスラとは、かつて存在したコスモスの文明が女神として崇めていた存在です。今貴方様の前にある紋章は、そのモスラを表す物です』

「モスラかあ」

そう言つて大聖堂の中を見回す水月。として彼女は大聖堂の奥にある巨大な蝶のような銅像を見つけた。

「ねえ、もしかしてモスラってあの蝶の事」

『はい。ですが正確には、モスラは蝶ではなく蛾に近い存在です』

「え? そうなの?」

ゼアの答えを聞き、驚きながらも水月はモスラの像を見上げていた。と、その時。

『こちらヴァルキリー。各員聞こえるか?』

みちるから基地内に居るメンバーに通信が届いた。

『博士が轟天号から出てきた。各自一旦集合しろ。場所は轟天号の前だ』

『『了解』』』

彼女達はすぐに返事をして、水月も踵を返して大聖堂を後にしようとした。

その時。

『キュアアアアアアツ………』

「え?」

彼女は、『何かの甲高い咆哮』が聞こえた気がして足を止めた。振り返って周囲を見回すながらも耳を澄ますが、再びその咆哮が聞こえる事は無かった。

「……気のせい?」

水月はそう言うと、足早に大聖堂を後にした。

だが、それは気のせいではなかった。

インファント島の奥にある白い繭の中で、緑色の光が胎動するように規則的に明滅する。

そして、それに呼応するようにその隣にある黒い繭の中でも、紫色の光が明滅する。

ゴジラ、キングギドラとならび、神や女神とまで称される事になる新たな怪獣の目覚めは近い。

第9話 END

## 第10話 双翼の神々

コスモスの案内の元、インフアント島へとやってきた夕呼や芹沢たち。そこで彼女達は近未来的なコスモスの基地と、その技術によって作られた轟天号を目にする。そして夕呼はその轟天号の船長室に保管されていたパンドラボックスを静かに手にするのだった。一方基地の中を見て回っていた水月は、モスラの名を聞くのだった。

招集を受けて水月たちが轟天号の前に戻ってくる。

「ご苦労さん。で、どうだった？どこか破損したりしている施設はあった？」

と、夕呼が問いかけるが皆一様に首を横に振った。

「どうやら、ゼアによる管理が徹底しているようです。我々が見た限りでは特に破損しているような施設は発見出来ませんでした」

「そう。ともかくご苦労様」

みちるの報告に頷く夕呼。

「それじゃあ私達は一度帝国に戻るけど、コスモスとしてはまだ私達に見せたい物とかってあるかしら？」

そう言つてコスモスに問いかける夕呼。

「では、最後に皆さんにお見せしたい存在が。どうぞこちらへ」  
そう言つて、コスモスに促されるまま、彼女達は足を進めた。

向かったのは基地の最深部だった。いくつもの重厚な扉を越えて、たどり着いた場所は吹き抜けの神殿のような場所だった。天井部分に穴が空いていて、太陽の光が降り注ぐ。そして神殿の中心にある、巨大な二つの繭が光に照らされ輝いていた。

「あれって、繭？」

ポツリと呟く水月。

「そうです。あれは私達コスモスが神と崇めた存在。先代モスラとバトラの子供達があの中で眠っています」

「あの中で……」

芹沢は静かに歩みを進め、純白の繭と漆黒の繭を見つめていた。



「ねえ、単刀直入に聞きたいんだけど、モスラとバトラの強さってどれくらいなのかしら?」

「と、言うど?」

「純粋な力量、って言うか戦闘力?それをゴジラや他の怪獣と比較したとしてモスラとバトラはどれくらい的位置に居るのか、ちよつと気になったのよ」

そう言つてコスモスに質問する夕呼。

「モスラとバトラは、単独ではあのキングギドラと互角。或いはギドラが少し優勢と言つた所でしょう」

「ですがモスラとバトラは番いの怪獣です。敵には共に立ち向かうでしょう」

そう語るコスモス。

「つまり、常に共に行動する、って事ね。そしてその場合の強さはギドラ以上ゴジラ未満って事で良いのかしら?」

「はい。概ねその通りです」

「あのキングギドラ以上」

横浜ハイヴ攻略に最も貢献し、尚且つ今現在帝国において守護神として崇められているキングギドラ以上、と言う言葉に水月だけでなく美冨やみちる達も密かに驚いていた。

と、その時。

「霊長類、か。ホント、聞いてて呆れるわね」

「香月博士?」

ポツリと呟かれた夕呼の言葉にみちるが反応する。

「人類はこの星の王者なんかじゃなかった、って事よ。芹沢博士やコスモスの話を統合すれば、かつてこの星には巨大生物が生きていた。その生き残りや進化した子孫が今の怪獣って事よ。そして、彼等はやがて眠りに付き、彼等が座っていた『生命の玉座』は空席となった。人間はその空席を我が物顔で奪つたに過ぎない。でも、その生命の玉座に座っていた存在である怪獣達、つまり『真の霊長類』である彼等が帰還した今、人類は生命の頂点、つまり玉座を追われる」

「え、えつと、それってつまり?」

夕呼の言い分に首をかしげる水月。

「要は、私達人類はもはやこの星において最強ではない、って事よ。私達はこれから真の霊長類である怪獣達とよろしくやっていく以外に生き残る術は無いって事」

「そうだ」

夕呼の言葉に、芹沢が頷く。

「君たちも知っているだろう。ギドラやゴジラの力を。今の人類が、仮にコスモスの技術を吸収し兵器を強化したところで怪獣に、特にゴジラには敵わない。彼等に挑む事は自分に向けて銃の引き金を引くのと同じだ。自殺行為以外の何者でもない。そして、それ以上に彼等はこの星を護る存在だ。守護神に等しい存在だ。……我々人類は、これから先彼等と折り合いと付けていくしかないんだ」

その言葉に、水月は眼前にある巨大な二つの繭に目を向けた。

「怪獣が、真の霊長類かあ」

ポツリと彼女が呟いた直後。

『ポウ……い！』

「え？光った？」

純白の繭が僅かに緑色の光を放った。それに気づいて水月が呟いた。その時。

『キュアアアアアアツ……い！』

彼女達の耳に甲高い咆哮が響いた。

「ツ!?この声は……!?!」

驚き後退る椅子。

「モスラですっ!モスラの声ですっ!」

「ツ!?まさか、覚醒の時が近いのか!?!」

コスモスの言葉に芹沢が驚く。だが、それだけではない。

『キュガアアアアアツ……い！』

まるでモスラの咆哮に答えるように、漆黒の繭からも咆哮が響く。「こっちはバトラの物ですっ!」

「目覚めようとしているのか、やはり……！」

芹沢は、驚愕とも喜びとも付かぬ表情で繭を見つめていた。

その後、夕呼達はコスモスたちと別れて大隈級に戻り、そのまま帝国へと戻っていった。本来ならばコスモスたちも一緒に来て、その存在を国連に知らせる使者となるはずだったが、モスラとバトラの目覚めが近いと言う事で島に残った。代わり、と言っては何だが夕呼達はコスモスの基地からその証拠として『ホバーバイク』を数台持ち出していた。

そして、帝国に戻る最中、水月は大隈級の甲板からインフロント島が見えなくなるまで、

島を見つめていたのだった。

その後、帝国に戻った夕呼達はすぐに国連司令部にコスモスのインフロント島基地の事を報告した。その際には芹沢がカメラで撮ってきた写真を添付したが、もちろん簡単に信じられる物ではない。なので国連内部では彼女の話信じる者と疑う者たちが論争を繰り返した。

が、それも夕呼が疑う者達をコスモスの基地に連れて行った事ですぐに終了してしまった。

次に、夕呼によってこの基地をオルタネイティブ4のために接收すると言う話が持ち上がったが、これには当然と言うか国連を始め各国政府より反発を生んだ。オルタネイティブ計画を快く思わない者達はこれ以上彼女達に力を与えないために。力や技術を求める者はそれを手にするために。そう言った思惑もあつて夕呼の話は通らない。そう思われた。だが、それをひっくり返したのがコスモスだ。

彼女達は夕呼によって国連の会議の場に呼び出され、ある事を言った。

それを簡潔にまとめると……。

「あの基地は正当な所有者である私達から博士に贈られた物。よって第三者の承認は一切必要としない」、だ。

更に簡単に言えば……。

「他人のあなた達がどう言おうと基地は彼女に与えられた」、だ。

だがこれだけの説明で納得出来るほど、彼等は無欲ではない。当然反発を招いた。だが、そんな彼等を納得させるために夕呼が一つ、提案をした。

それは『轟天号』をベースに、グレードダウンと引き換えに生産性を向上させた空中戦艦を量産し、国連軍や延いては各国軍に与える、と言う物だった。

当然、これでも納得出来ない所は彼等にはあった。だが、これ以上ごねて何も貰えない、は避けたかった彼等は渋々これです承した。

その後、コスモスの基地の多次元プリンターザットの力で、ゼアが設計・開発した新型空中戦艦3隻、『火龍』、『エクレール』、『ランブリング』の3隻がまず就航し、国連軍に与えられた。そして夕呼の提案で、国連軍内部にこの3隻を練習艦として空中戦艦の船員を育成するための機関、(空中戦艦、スカイバトルシップの名を取って)『SBS機関』と呼ばれる訓練機関が設立された。

このSBS機関は各国より選ばれた兵士達に空中戦艦の操縦を学ばせるために出来た訳だが、まだ教官となれる人間も居ないため、まずはSBS機関に属する教官たちの勉強が始まった。

だが、この3隻にはゼアによつて、密かにその航行システム内部にバックドアが仕掛けられていた。これは、万が一にも空中戦艦がゼアやコスモスの意に反する行動をした場合、特に『思いついてゴジラに攻撃を仕掛ける』というバカな行動をしそうになった場合外部から強制的にシステム権限を奪うために埋め込まれた。そして当然、これから量産されるであろう空中戦艦にもこのバックドアは仕掛けられる予定だ。

そして、そんな慌ただしい数ヶ月が過ぎた2000年3月もあと少しで終わると言う所。横浜基地自体は未完成だが、オルタネイティブ4に関係する計画の占有区画は稼働を開始。それに伴って夕呼もそちらに研究拠点を移していた。そしてそんな彼女の元にコスモスが現れ、こう告げた。

「もう間もなく、モスラとバトラが目覚める」と。

その数日後。夕呼は芹沢、更には護衛として孝之たちが属するデリング中隊とみちる達のヴァルキリー中隊の二個中隊らと共にインフアント島のコスモス基地、『国連太平洋方面軍・特殊管理基地』と名付けられ、更には『コスモスベース』とまで呼ばれるようになったその基地へと足を運んでいた。

既にここには何度か国連の調査員が派遣されているが、彼等は誰一人としてモスラとバトラの神殿に足を踏み入れる事を赦されなかった。それ故に、モスラとバトラの詳細を知っているのはコスモスと芹沢を除けば後は夕呼やみちる達だけだ。

そして更に2人、モスラとバトラの繭の元に足を踏み入れる事を赦された存在がいた。

1人は『パウル・ラダビノッド』准将。国連より派遣されているオルタネイティブ4の監査役であり最高責任者だ。そして未完成だが横浜基地の基地司令も兼ねている。

もう1人は『イリーナ・ピアティフ』中尉。今は夕呼の秘書やオペレーターとして活動しているが、かつては衛士として明星作戦にも参加経験のある女性士官だ。

そして、2人ともモスラとバトラの繭を前にするといつかの水月達のように驚愕で目を見開いた。

「……香月博士より話は聞いていたが、この中に怪獣がいるのか」  
「……」

ポツリと呟くラダビノッドの隣で、ピアティフは驚きながらも唯々繭を見つめる事しか出来なかった。

しかし、そんな2人の傍では水月や孝之、更には技術士官たちが臨時の司令部を設営していた。その理由はただ一つ。『モスラとバトラの戦闘データを取得するため』だ。

コスモスによって目覚めの時が近い事が示され、更にゼアによって予測が為された。ゼアの予測によれば、モスラとバトラは覚醒後、すぐにインフアント島から最も近いハイヴ。つまり帝国の『佐渡島ハイ

ヴ』を攻撃するだろうと判断された。

怪獣とBETAの戦闘データは貴重だ。怪獣の力量を推し量る意味でも。人間の無力さと怪獣の強大さを比較する意味でも。

この司令部の目的は誕生直後のモスラとバトラのデータを収める事。そのため既に島の周囲にも不知火数機が待機している。更に、佐渡島周辺にも国連軍権限で国連軍の観測用部隊とモナークの少ない艦艇が展開されている。人工衛星も、可能な限りデータを取れる範囲で取る予定だ。

全ては、怪獣の事を知るために。そのために多くの用意が為された。

そしてちょうどコスモスベースの神殿に、臨時の観測所兼司令部が完成した時だった。

「モスラ〜ヤ、モスラ〜」

コスモスが2つの繭に向かって歌い始めた。更にそれに合わせて、基地施設のスピーカーから伴奏となる音楽が流れ始める。

「これ、って」

その歌に、孝之を始め水月やみちる達までもが手を止めて歌に聴き入っていた。

「芹沢博士、これは……」

「言語はインドネシア語ですね。私もマスターしているわけでは無いので歌詞の断片的な意味しか分かりませんが、どうやらモスラを神と称え、自分達の事をその下僕とも呼んでいるようです」

「……正に、コスモスにとって『神を称える賛歌』ですね」

夕呼は、芹沢の言葉を聞きそう呟いた。

と、その時。

『ピシッ！ピシピシッ！！』

まるで歌に答えるように、2つの繭に罅が入った。

「ッ!?撮影班っ！モスラとバトラの覚醒よっ！撮影準備っ！早くっ！」

夕呼は、今正に二匹が目覚めようとしていると理解しすぐに指示を飛ばした。彼女の指示に従って、コスモスの歌を聞き入っていた周囲

の者達が慌てて動き出す。

そして各箇所のカメラが回り始め、それらの映像が観測所のPCに送られてくる。今回は、帝国軍が横浜戦の際ゴジラの起こした電磁波で通信などを妨害された、と言う同じ轍を踏まないため、念のためとして有線で接続している。

そして、準備が出来たその時。

『バリバリバリッ！』

繭を突き破って、まず最初にモスラが姿を現した。

だが……。

誰もがモスラの姿に驚き、その手を止めてしまった。緑色の大きな複眼。黒と白の、柔らかそうな毛並みに覆われた頭と体。そして広げた翼を彩る緑色の紋様。誰もが、予想以外のその姿に目を奪われていた。

ここに居る者達の殆どは、怪獣と聞いて厳つい存在をイメージしていた。だが、その予想に反して現れたのは、どこか愛嬌や優しさを思わせる存在だった。

「美しい……！」

モスラを見て、ポツリと呟く芹沢。

「これが、コスモスの守護神」

その隣で、夕呼もまた驚愕の表情でモスラを見つめていた。

『キュアアアアアアアツッ！』

2代目のモスラとして生まれたモスラは、その存在を周囲に知らしめるように咆哮する。

だが、目覚めたのは『彼女』だけではない。

『カッ！』

漆黒の、バトラの繭の中から紫色の光が漏れ出した。かと思った次の瞬間、繭を引き裂いて成虫となったバトラが現れた。

モスラとは対照的に、怪獣に相応しい厳ついイメージのバトラ。それは見る物を畏怖させた。

バトラの出現に人々が恐れを抱き始める中、水月はモスラとバトラを見上げていた。

「これが、怪獣。モスラとバトラ」

初めて自分の目で見る怪獣に、水月は呆然と彼等を見つめる事しか出来なかった。

『キュアアアアアアアッ！』

『キュガアアアアアアッ！』

モスラとバトラは、互いに向かい合い彼等にだけ分かる言葉で、意思疎通をしていた。そして、遂には2匹ともその巨大な羽を羽ばたかせ、天井に空いた穴から外へと飛び出して行ってしまった。

2匹の起こしていた暴風から顔を護っていた夕呼は、風が収まるとすぐに通信機を取り出して通信を開いた。

「こちら神殿内部。たった今モスラとバトラが飛び立ったわ。そっちはどう？」

彼女は島の周囲に展開している不知火の部隊に通信を繋いだのだ。

『こちら確認しました。モスラとバトラの2匹は、島から北西方面に向かって飛行中』

「了解。涼宮っ、すぐに2匹の進路予想をっ」

「はいっ！」

夕呼はすぐに遙に指示を出す。桃色の髪の少女、遙はPCを操作して2匹の進路を割り出す。それは……。

「間違いありませんっ。ゼアの予測通り、2匹は佐渡島ハイヴを目指して一直線に太平洋上を飛行していますっ！」

人工知能ゼアの予測通り、2匹はここから最も近いハイヴである佐渡島のハイヴを目指していた。

「やはり、か。……すぐに帝国軍に連絡っ！モスラとバトラに対して攻撃をしないように伝えなさいっ！それと、佐渡島近海に展開中の部隊にも通達っ！可能であれば戦闘開始と共にドローンを発艦させて情報収集をっ！それと、帝国軍がどさくさ紛れでG元素の回収をしないかよく監視するように言っときなさいっ！」

「は、はいっ！」

遙や周囲のオペレーター達が指示を受けて慌ただしく動きだす。

そんな中で夕呼は……。



「それじゃあ、見せて貰いましょうか。怪獣の力を」  
期待と恐れが混じり合ったような表情を浮かべているのだった。

太平洋を横断したモスラとバトラは、そのまま更に帝国を横断した。夕呼達の通達もあつて帝国軍による迎撃はされなかった。また、モスラとバトラの姿を見ていた人々の多くが、まるで神に祈りを捧げるようにその姿を見ると手を合わせたと言う。

そして、唯依達もまた配備された新型、『武御雷』の慣熟訓練の最中だった。彼女達の頭上をモスラとバトラが通過していく。そして、唯依達はそれを見送る。そんな中で安芸が……。

「お〜〜い！頑張れよ〜〜！」

白い武御雷で手を振りながら、二匹を見送るのだった。

そしてそんな安芸を、唯依達が笑みを浮かべながら見つめているのだった。

そして、2匹がついに佐渡島近くまで到達した。

既にフェイズ3まで到達しつつある佐渡島ハイヴ。その内部にいるBETAの個体数は20万に届く可能性さえある。

そして、ハイヴから早速光線属種による迎撃のレーザーが放たれた。だがそれは、1万年にも及ぶ進化によって以前のモスラとバトラよりも強化された、今の2匹には通用しない。

『ビシユウウウウツ!!』

逆に、グリーンモスラの放った『クロスヒート・レーザー』とバトラの『プリズム光線』が光線属種を軒並み焼き払っていく。そしてモスラとバトラは高速でハイヴの真横を通過していく。それだけで発生した爆風が小型の戦車級などを吹き飛ばす。

そしてバトラとモスラは左右に分かれた。モスラは、その体を小さな光のモスラに分裂させ相手を攻撃する、『イシュージョン・ミラージユ』で要撃級の群れへと突進しなぎ払う。バトラのプリズム光線が、突撃級の群れを背後から焼き払う。

そして、左右に並んだモスラとバトラは、マツハ80を超える超高

速で敵に体当たりを放つ技、『エクセル・ダッシュ』で地表スレスレを駆け抜ける。発生したソニックブームはいつも容易く要塞級や戦車級の体を引き裂き、体当たりを喰らった要塞級がまるで木の葉のように天高く、バラバラにされながら打ち上げられる。

そして再び別れたモスラとバトラ。するとハイヴの中から出現した新たな光線属種がモスラを狙ってレーザーを放つ。だが、モスラに気を取られている間に旋回して戻ってきたバトラのプリズム光線がこれをなぎ払う。かといってバトラに集中すれば、今度はモスラのクロスヒート・レーザーで焼き払われる。

お互いがお互いをカバーする絶妙なコンビネーションの前に、BETAは瞬く間にその姿を減らしていった。

そして、最後の仕上げと言わんばかりに、モスラはその体から緑色の粒子を放出し始めた。

周囲に撒かれた粒子、鱗粉がレンズの役割を果たしハイヴ周囲のBETAを高温の光で焼き払っていく。そしてモスラが鱗粉を散布するほど、熱量は上がっていく。しまいにはBETAが蒸発し始めた。

これこそが、今のモスラの最強の必殺技、鱗粉のレンズによって太陽の光を増幅し、超高温の光を放つ、『シャイン・ストライク・バスター』だ。

最大時には太陽表面の20%にも到達する光が、BETAを焼き払い、ハイヴモニュメントを溶解させる。

そして、ハイヴモニュメントの真上で放たれたシャイン・ストライク・バスターの高温は地下深くにある反応炉をも焼き尽くしてしまった。直後に行き場の無くなったエネルギーが大爆発を起こした。爆風がハイヴ内部を駆け巡り、各地の門から爆炎と砂煙が飛び出す。

そこから更に、モスラとバトラが光線で残っていたBETA群を焼き払う。

そして、動く物の無くなった大地にただ2人。モスラとバトラが降り立つ。

そんな二匹の様子を、ドローンや人工衛星の映像越しに見つめていた夕呼や芹沢。更にはみちる達や観測班の兵士達。

人類は今、新たにタッグでハイヴを攻略する力を持った存在を前にしていた。

誰もがその力に驚き、愕然としていた。

だが、本当の驚愕はこれからだった。

『キュアアアアアアッ』

モスラが一度、咆哮を上げると飛び上がった。そして佐渡島の周囲を飛びながら、翼より緑色の粒子をまき散らす。

『戦いは終わったのに何を？』。多くの人々は内心そう思っていた。

そして、モスラは『奇跡』を起こした。

BETAによつて食い荒らされ、もはや土ばかりしか無い佐渡島の大地に草花が咲き誇り始めた。

それこそが、モスラの起こす奇跡、『パルセフォニック・シャワー』の力だった。

荒れ果てていた島を、自然の緑が覆い尽くす。

誰しもが、モスラの起こす奇跡を前に驚き、愕然としていた。今のモスラは正に、『生命の女神』と呼ぶに相応しい力を発揮していた。そして……。

「そうか。そう言う事だったのか」

遙か後方、インフアント島の基地の中で、事態を見守っていた芹沢がポツリと呟く。

「博士？」

それに気づいて孝之が声を掛けた。

「やはり、彼等こそがこの星の王なのだ。人間には為しえなかつた、BETAによる破壊を癒やす力をモスラは持っている。かつてコスモスがモスラを神と崇めた事は、間違いでは無い。彼女こそが、『女神』と呼ばれるに相応しい存在だからだ。彼女こそが、命を繋げる力を持った存在なのだ」

「モスラが、女神」

孝之は、そう呟きながらモニターへと視線を戻す。彼の見つめるモニターの前では、ほんの数分前まで荒れ果てた大地だった佐渡島が、今は緑溢れる島へと変貌していた。

『これが、怪獣かよ』

改めて、孝之はその力に驚嘆し、恐れ、そして理解した。してしまった。

G弾をも歯牙に掛けぬ力を持ったキングギドラ。

荒れた大地をも癒やす力を持ったモスラ。

そして、ハイヴすらも易々と打倒するゴジラ。

これまで見てきた怪獣の力の前に、人類が無力である事を彼は理解した。そして同時に、彼等が『王』と呼ばれるに相応しい存在である事を。

そうやって、モスラとバトラの協力によって佐渡島ハイヴは、たった数十分で陥落してしまった。そしてこれは、帝国内部で更なる怪獣信仰を加速させる結果となった。横浜ハイヴを落としたキングギドラと、佐渡島ハイヴを落としたモスラとバトラ。

その存在は、帝国内部で瞬く間に大きく取り上げられ、そして人々の信仰心を集めた。

だが、これは帝国だけに限った話ではない。

佐渡島ハイヴ攻略の数日後。その頃、マレー半島やタイ、カンボジアを中心とした東南アジア戦線では人類とBETAによる攻防戦が日夜続いていた。

そしてその日も、大東亜連合軍を主体とする部隊とBETA群の戦いが行われていた。

F-4ファントムや『F-5フリーダムファイター』という第1世代の戦術機を中心とした部隊が展開し戦闘を繰り広げていた。元々、大東亜連合軍は1990年代後半に差し掛かった段階で第2世代戦術機、『F-15イーグル』などの機種転換を始めたばかりだ。なので戦力の大半は第1世代機なのだ。

そして、そんな第1世代に乗る衛士の1人である青年は、賢明に戦っていた。

F-4ファントムに乗り、突撃砲を撃ちまくる。何とか襲いかかっ

てくる戦車級の群れを仲間と共に退けたが、その奥には、その群れが小さく思える程の膨大な数のBETAが存在し、今もこちらに向かつて来ている。

『畜生っ！畜生っ!!』

既に何度目かも忘れた悪態を付きながら、彼は空になった36ミリ砲弾のマガジンを捨て新しいのを装填する。

そして、再び発砲しようとした、その時。

『コマンドポストより各隊へっ！太平洋側から未確認飛行物体を確認っ！その数2！速度はマッハ2で接近中っ！航空機ではないっ！各隊留意せよっ！』

前線指揮所であるコマンドポストより通信が届く。だが、大勢の兵士達にそれを冷静に聞く余裕はなかった。

と、その時。

『カッ！ドオオオオオンッ！』

彼等の戦術機の後方から飛来した光が、BETA群を貫く。

「ッ!?何だっ!？」

彼は驚き慌てて振り返った。直後、彼やその仲間の戦術機の脇を通り抜けるように、モスラのイリユージョン・ミラージュが駆け抜け、BETA群に突撃していく。

「な、何だ？あれ？」

彼は、あまりにも現実離れたその光景に、戦闘中だというのに呆然となってしまった。

その時。

『コマンドポストより全隊へ！未確認飛行物体は先日出現が確認された怪獣、モスラ及びバトラと思われる！各隊怪獣への発砲は極力控えつつ防衛線を維持せよっ！』

再びコマンドポストから届く通信。しかし今度の彼等にはそれを聞く余裕があった。

「か、怪獣、だど？」

彼は驚きながらも、空中で分身を再合体させるモスラを見上げていた。

更に彼からは見えない場所で、バトラもまたプリズム光線を撃ちまくりながらBETAと戦っていた。

モスラは、再合体と同時に周辺に鱗粉を散布し始めた。すると撒かれた鱗粉の結界から幾重もの光の柱が落下し、BETAを轢殺していく。これもモスラの技、『スパークリング・パイルロード』だ。次々とBETAが大地のシミになっていく。

モスラとバトラは、その力でBETAを蹂躪していった。

その戦闘時間は、精々10分程度。軍隊が総力を挙げて、食い止めるのがやっとのBETAの大軍を僅か10分程度で壊滅させてしまった。

その現実には、衛士や兵士の多くは喜ぶよりも打ちひしがれた。

『あんな怪物には勝てない』。そんな現実が彼等にのし掛かった。

だが、その絶望をも、モスラは祓って見せた。

戦いを終えたはずのモスラが、小高い丘の上に降り立ち戦術機部隊の方を、人間たちの方を見つめている。既に戦意を喪失しつつあった戦術機たちは、ジリジリと後退を始めた。

だが、次の瞬間。

『キユアアアアアアッ！』

モスラが咆哮し、翼を広げた。すると翼から粒子、『パルセフォニック・シャワー』の光が周囲に広がっていく。そしてその力で、荒れた大地に緑が戻っていく。重金属雲の雲も消え、青空が広がる。そして……。

彼等の後方にある基地の中や戦場で、瀕死の重傷を負って今際の際にあった兵士達の傷すらも、モスラはその力で癒やして見せた。

傷ついた人々は立ち上がり、人々は奇跡によって復活した大地をその足で踏みしめる。曇天の空が吹き飛び、青空が広がる。

灰色に染まっていた、デイストピアもかくやの荒れ果てた戦場が、一瞬で緑に覆われ太陽に照らされる大地へと変貌した。

そして、歩兵達は1人、また1人とその場に膝を突き、まるで神に

頭を垂れるようにしてモスラを崇め始めた。中には涙を流し大地の復活を喜ぶ者や、今際の際から生きて生還した事を歓喜する者達もいた。

そしてモスラは、再び咆哮を上げると飛び上がり、バトラと共にどこかへと去って行った。

そしてそれ以降、世界各地の戦線にモスラとバトラが共に現れるようになった。

BETAを倒す力もさる事ながら、大地や命を復活させるその力も相まって、モスラを生命の女神と奉る人々も増え始めていた。

こうして、世界に怪獣信仰は広まりつつあった。

そして更に……。

ソビエト軍、某所にある研究施設で、怪獣の事が書かれた新聞を手に入っていた男がいた。

彼の名は『アレキエフ・マエロフ』。ソビエトの設計技師で戦術機関発などに関わっていた1人だ。だが、そんな彼は今……。

「ああー何と喜ばしい日だっ！また新しい神々が顕現なされたあっ！命を繋ぐ力を持った女神モスラッ！女神の番いにして破壊の化身男神バトラっ！ああ本当に喜ばしいっ！アハハハハハハッ！」

狂ったように笑みを浮かべるマエロフ。既に42歳と中年な彼がこうなった理由。それは以前、ゴジラがブラゴエスチエンスクハイヴを攻撃していた時、彼が携わって居た『あるプロジェクト』の関係で『出来るだけ生のゴジラが見たい』、と言う事で彼は可能な限りハイヴに近づき、戦うゴジラの姿を目にした。目にしてしまった。

そして、その結果彼は『狂信者』となってしまうのだ。彼はゴジラを『黙示録の獣』、『神々の王』、『真の霊長類』、『圧倒的支配者』として称え始めたのだ。最もその結果、プロジェクトから外され今は閑職に追いやられてしまった。ギリギリ、兵器開発に関してはそのこの経験と知識、実績があつた為、用済みで捨てられる事は無かったのが現状だ。

だが今の彼にとつてもはやそんな事はどうでも良い。なぜなら、そんな事よりも彼にとつて重要なのは『怪獣』なのだから。

「ああっ！ああクソツ！私はなぜこんな所に居るんだっ！写真じゃ無い！生だっ！生で神々のご尊顔を拝したいっ！だがここに居る限りそれは不可能に近いっ！しかしどうすれば……。ブツブツ……。」

あちこちを行ったり来たりしながら何やらブツブツと呟くマエロフ。

そして、それから数日後。マエロフは研究施設を脱走。帝国へと『亡命』するのだった。

のちに『ソビエトの狂人』と揶揄されながらも夕呼達に協力し、『ある兵器』を生み出す男が帝国へとやってくるのだった。

第10話 END



## 第11話 出雲攻略作戦

インフアント島のコスモス基地を調べていた夕呼達は、モスラとバトラの覚醒が近い事を知る。そして夕呼は、轟天号をベースにしつつ新たに3隻の空中戦艦を、基地の力であるザットを利用して開発。これを国連に提供する事などを条件に基地の所有権を獲得した。そんな中でモスラとバトラが覚醒。2匹は早速佐渡島ハイヴを崩壊させ、その後も各地の戦線に現れてはBETAを倒し大地と傷ついた人々を癒やすのだった。

モスラとバトラの出現から2週間ほど経った4月上旬。

あれからというもの、夕呼は横浜基地から機材をいくつかこつちのコスモスベースへと運び込んでいた。そして人工知能であり、優れた演算能力を持つゼアの力と、パンドラボックスに内包されている知識を使って研究を行っていた。そしてその護衛の為に、デリング中隊とヴァルキリー中隊がコスモスベースに常駐するようになっていた。

そして今は基地内の隊舎で生活しているみちるや水月、美冨たちヴァルキリーズの女性衛士や孝之たち男性衛士。とは言え隊舎の作りがしっかりとおり風呂なども性別で分けられた作りになったりと、かなり生活しやすい空間になっていた。

更に彼等にとつて嬉しいのは、現在の人類の主な食料源となっている『合成食料』よりも美味しい食事が食えている事だった。BETAの侵略によって動植物が激減している今の世界で、人間が、特に最前線の衛士達が食べるのは『合成食料』を使って作られた料理だ。これが本物の料理や食材と比較して『不味い』のだ。良く言っても『美味しくは無い』が精々な合成食料由来の食事。

これまで水月や孝之たちが居た横浜基地では『京塚 志津江(しずえ)』と言うPX(一言で言うと購買部)を仕切っていた女性の料理の腕前のおかげで合成食料の料理でもまあまあ美味しい料理は食べられていた。しかしその横浜基地を離れる、と言う事になって孝之や慎二は内心ため息をついていた。もちろん水月達もだ。

しかし、そんな中でゼアが夕呼にある提案をした。基地に来ていた彼等の会話を監視カメラ越しに聞いたゼアが、『食事の質の悪さは土気の低下に繋がるため、早急にこの問題に対処すべきです』と夕呼に言ったのだ。夕呼にしてみれば、ゼアのリソースをオルタネイティブ4関係に注ぎ込みたかつたが、彼女も合成食の味の悪さは知っていたので、渋々ゼアの提案を受諾した。それが数日前のことだ。そしてゼアは、夕呼が持ってきた合成食料のデータを見た後、数時間で『新たな調味料』を開発し生み出した。夕呼はこれを使って、女性衛士の1人に料理をさせた。彼女の料理の腕は平均的なレベルだ。なので料理は出来ても合成食料の『不味さ』をどうにかすると言う志津江さんほどの腕は無かった。

しかし、作られた料理の味は普段口にしていた合成食料の料理とは比較にならないほどのおいしさだった。これには、実際に食事をした夕呼も驚かざるを得なかった。そして翌日には、彼女から国連を経由して全世界に向けてこの調味料のレシピが公開され、世界の食事情は以前よりもマシになった。

そして結果的に、ゼアの力を周囲に広める結果にもなってしまった。

「……どう思われますか？これを」

某国の会議室に、いつぞやの時のように数人の男女が集められていた。そして発言した1人の男性の手元には、夕呼がゼアを使って開発した調味料が置かれている。

「今回の一件で、あの基地の価値は更に上がった」

「例の人工知能ですか？」

議長である男性の言葉に、女性の1人が問いかける。

「そうだ。あれには自分で判断を下す人格があるようだ。国連に提出された報告書によれば、元々この調味料は人工知能であるゼアの提案によって開発されたようだ」

「つまり、そのゼアには情報さえあれば新兵器を開発出来る、と言う事ですね？」

「そうだ。情報を得て、分析し、最適な答えを人間に提示する。そして許可が下りれば、その答えを生み出す。ゼアの存在があれば、どれほどの力となるか想像も付かない」

「……では、破壊を？」

その時、男の1人が物騒な事を言い出した。ゼアの大本はコスモスベースにある。ゼアの破壊はつまりコスモスベースへの攻撃に他ならない。

「いや。壊すには惜しい存在だ。それに今はまだその時ではない。ただでさえモスラの奇跡にも等しい技のおかげで、インフアント島への人々の興味は強い。下手に動けば感づかれる可能性もある」

「しばらくは、様子見ですか？」

「そうだ。それに、早急に対怪獣用兵器の設計開発とテストをしなければならん。万が一あれらの存在が我が祖国の敵となった時、戦い勝つためにもな」

その時。

「勝てますかね？あんな存在に」

1人の男が弱気なことを言い出した。あんな存在、とは当然ゴジラやギドラを指す。

「例えどれだけ不利であろうと、矛と盾は必要であろう？それが無ければ、我が国の国民が奴らによって蹂躪されるだけだぞ。……備えは、必要なのだ」

議長である男の言葉に、誰も何も言わなくなった。

「全ては、祖国と、この国で暮す『アメリカ』国民のために」

彼等にとつて、最も優先されるべきは祖国、アメリカ合衆国の事であった。だが、それ故に他国を利用する事も辞さず、それ故に他国からの反発も強い。そしてまた、その強い愛国心故に、道を踏み外そうとしていた。

そして皮肉かな、今この場にそれを正せる人間は1人も居なかったのだった。

一方、コスモスベースでは日々新兵器の開発も続いていた。

夕呼はパンドラボックス内部に残っていたデータベースから人間が使う銃器サイズのレールガンである『電磁加速小銃』と、同様の原理の『電磁加速拳銃』（※アニゴジでハル才達が装備していた銃）を開発。ザットの力で数丁を生産し、基地施設内部の試射場で水月や孝之達に試させた後、これを国連軍司令部へと提出した。

そうやって、国連軍に対して次々と兵器を提供する夕呼。もちろんこれには裏がある。それは国連、延いてはその後ろに居る米国などに貸しを作る為だ。

そんなある日。

「博士、少し良いか？」

コスモスベースに創られた夕呼の部屋にパウルが訪れた。

「あら司令？何か御用ですか？」

「ああ。少し話を聞いておきたくてね」

「と言うと？」

「……単刀直入に聞くが博士。この設備があれば怪獣を倒す事の出来る装備を開発出来るのか？」

「……」

パウルの言葉に、夕呼は無言で表情を引き締める。やがて彼女は静かに立ち上がると、部屋の壁に立てかけてある施設の見取り図の前に立った。

「その質問の答えは、可です。ですが、相手の能力や格にもよります」と言うかと？」

「怪獣にもランクと言いますか、実力には差があります。例えば中国やロシアなどで活動が確認されているアンギラスや帝国の balan。あれ位であれば何とかなる兵器を作れるでしょう。しかしそれ以上、例えばモスラやバトラ、キングギドラほどとなると不可能です。当然この3匹より格上のゴジラもです。ですがそもそもな話、彼等と戦おうとする事自体が間違いだと私は考えます」

「どういうことかな？」

「現状、私達人類と怪獣の関係は『敵の敵は味方』という言葉が似合います。ですがより正確に言えば『敵でも味方でもない』、つまり『中立』

です。ゴジラの侵攻によって帝国でも少なく無い被害が出ましたが、あれはゴジラに敵意があった訳ではありません。犠牲者には申し訳無いですが、『巻き込まれた』、『運が悪かった』としか言えませんね」

「……あれでかなりの人間が死んだ。遺族はそんな言葉では納得しないだろう」

「ええ。ですが、現にそうとしか言えません。実際ゴジラが人間を巻き込んだのは帝国の一件だけですからね」

「むう。……それで、彼等を敵にする事が間違い、とは？」

「その言葉通りの意味です。彼等の今の立場は中立。彼等を我々人類の敵とするか味方とするかは我々の行動次第。……ですが、ただでさえBETAに押されていた我々人類がここから更に人類、怪獣、BETAの三つ巴の大戦を繰り広げたとして、司令には人類が生き残れる未来が予想出来ませんか？」

「……出来ぬ」

夕呼の言葉に、パウルは正直にそう答えた。実際、ただでさえBETA相手に苦戦していたのに、そこで更にBETA以上に強力な怪獣とも戦ったとして、誰が『勝てる』と言えるのか。

「そう。その通りです。そしてそれを考えれば現状怪獣も含めた三つ巴の戦いは、愚策中の愚策。それを考えれば彼等と敵対するよりも、共闘、とまでは行かなくても上手く利用し人類が生き残れるようにした方が賢くはありませんか？」

「……そうだな博士。帝国の、龍神の姫巫女達という前例もある事だからな。当面はやはり、怪獣の様子を観察し情報を集めるほか無いか」

「ええ。彼等と上手く付き合っていくためにもね」

パウルは夕呼の言葉に頷いた。

そして少し計画の進捗状況について話をしたあと、パウルは部屋を後にしようとした。

「ああ、そう言えば」

そう言っただけで足を止めて振り返るパウル。

「帝国では出雲攻略戦が行われるそうだが、博士はどう思う？この作

戦について」

「それはもちろん、キングギドラ次第かと」

「やはりそうである、か。では失礼する」

「そう言って部屋を後にするパウル。」

そして、彼の言うとおり、2000年5月。帝国は奪われた中部地方より西を奪還するために帝国陸軍や斯衛軍が合同で、島根県の出雲市や松江市一帯をBETAから奪還する『出雲奪還作戦』を決行する事にした。

そして、この作戦には五摂家の1つ、崇宰家当主、崇宰恭子も青い武御雷に乗って自身の部隊である『斯衛軍第3大隊』を率いながら参加していた。しかし、やはり物量で勝っているBETAの前に彼女達も苦戦を強いられていた。

「くっ!?!」

時間が経てば経つほど、被害が広がっていく。通信機越しに聞こえる悲鳴のような報告に彼女が歯がみしていた、その時。

『『ビィィィィィィィィィッ!!!』』

彼女たちに向かって来ていたBETAの群れを、雷撃のような光線、引力光線がなぎ払った。

「ッ?!まさかっ!」

彼女が振り返ると、そこには黄金の粒子を周囲に浮かべながらこちらに向かって飛んでくるキングギドラだった。

そして更に、そのキングギドラの『周囲を固める12機の武御雷と24機の瑞鶴』。

キングギドラは、引力光線を撃ちまくる。それに負けじと光線属種がレーザーを放ってくるが、それもギドラが周囲に展開した黄金の粒子による結界に阻まれ、ギドラは愚かその周囲を飛行する戦術機を落とす事も出来ない。

『『キュルアアアアアアアッ!!!』』

そしてギドラが叫ぶと、ギドラの必殺技でもあるビッグスパークボールがBETA群の中央に着弾。大爆発を起こし一気に数千のB

E T A を吹っ飛ばした。

その隙について着陸するギドラ。更にその周囲に降り立つ武御雷と瑞鶴。

「大隊長より各機へー！」

そして、赤い武御雷、所謂『F型』に乗る佳織から指示が飛んだ。今の彼女は部隊再編に当たって大尉に昇格。更に唯依たち初期メンバーである12人も既に中尉へと昇格していた。

「これより我々はキングギドラを援護しつつ付近のB E T Aを掃討するっ！」

「「了解っ！」」

佳織の言葉に唯依達、つまり歴戦の衛士となった彼女達が答える。

唯依が乗っているのは黄色い武御雷。これは佳織のF型と同じ仕様である。それ以外の上総や志摩子達は白い『A型』と呼ばれる武御雷に乗っている。そんな彼女達も既にキングギドラと共に戦った戦闘の数は二桁を超えている。

それもあつてか、彼女達もすっかりベテラン衛士の仲間入りを果たしている。

「良いか新兵共っ！」

更に佳織は後ろの瑞鶴に乗る衛士達に向かって叫んだ。今現在、唯依達の部隊に追加要員として配属された衛士の殆どはかつての唯依達と同じ新兵だった。彼女たちも、既に特別遊撃隊の衛士として戦った経験はあるが、それもせいぜい数回。しかもこれほど大規模な戦闘は初めてなのだ。緊張するな、と言うのは無理な話だ。

それ故に新兵である彼女達も冷や汗を浮かべながら指示を聞いていた。

「我々の主任務は『キングギドラの援護』だっ！要塞級、突撃級、光線級はキングギドラが倒してくれるが、戦車級や要撃級は数が多いっ！そこで我々はキングギドラに群がるこれら2種を優先的に対処するっ！行くぞっ！各機兵器使用自由っ！ギドラを援護せよっ！」

「「了解っ！」」

佳織の指示に従って、戦闘を行うギドラの周囲に部隊が展開され

る。

ギドラを中心としてその周囲に、円形に部隊が展開され、迫り来る戦車級に対して優先的に対処していく。そんな中で唯依達は……。

「おおおおおおおつー！」

安芸は武御雷の両手に握った突撃砲。更には背面の『可動兵装担架システム』を使って脇の下から覗かせた2門の突撃砲。合計4門の突撃砲を撃ちまくる。更に彼女の周囲に展開する瑞鶴たちも突撃砲を撃ちまくり銃弾の壁を形成し戦車級を蹴散らしていく。

「安芸っ！最初から飛ばしすぎっ！」

志摩子はそんな彼女の様子に気づいてそう注意しながら支援突撃砲で正確に要撃級の胴体を撃ち抜いていく。

「全く。フオローしますわっ！」

すると上総の武御雷と部下の瑞鶴数機が安芸たちの後方に展開。支援突撃砲を手に迫り来る要撃級の群れへと攻撃を開始した。

更に彼女たちから少し離れた所でも、唯依と和泉が部隊を率いて戦っていた。

「無理に接近戦は仕掛けないでっ！今はとにかく距離を保ちつつ射撃を継続してっ！」

「「「りよ、了解っ！」「」」

和泉の指示に部下の少女達が頷きながら、射撃を継続する。

「はあああああつー！」

唯依は、両手で長刀を持ち戦車級の群れに突進する。振るわれる刃が戦車級を何匹もなぎ払い、それを部下の瑞鶴たちが援護する。

その傍でキングギドラが3本の首から放つ引力光線で、次々とBE TAの群れを撃破していく。更に……。

「ハイドラーより各機へー！」

恭子はギドラの登場に合わせて指示を出した。

「これより我々は特別遊撃隊と共闘しBETA群を殲滅するっ！」

「「「「了解っ！」「」」」」

恭子の指示に従い、残っていた戦術機たちが合流し部隊を立て直す。と佳織達の特別遊撃隊と合流し戦闘を開始した。



「助かります崇宰大尉」

「いいや。礼を言うのはこちらの方だ」

通信でやり取りをする佳織と恭子。階級は同じ2人だが、立場的には恭子の方が上だ。

そんな2人の視線の先では、合計で60機を超える戦術機が戦っていた。

しかしその戦術機部隊を、配下を従えるようにして戦う存在がいた。キングギドラだ。

ギドラの戦う傍で戦術機たちが彼を守りフォローする。

それはまるで、ギドラの花道を戦術機たちが作るような。

或いは『王の歩みを進めるための露払い』をしているようであった。

それはまるで、神に仕える戦乙女、ヴァルキリーが神と共に戦場を戦っているようであった。

ギドラが飛び上がり、ビックスパークボールで最後の群れをなぎ払う。僅かに生き残った戦車級などを戦術機部隊が殲滅する。

そして、その場での戦いは終わった。だが美保湾から旧米子市に向けて大陸からBETAが上陸しようとしていた。それを察したキングギドラは威嚇するようになり声を上げるとすぐに飛び上がり、飛んでいった。そして佳織達も、何度もギドラと共に戦ってきたのだ。僅かな声のトーンからギドラの様子を察した佳織は……。

「各機っ！残弾及び推進剤の残りを確認っ！動ける者はギドラに続けっ！」

「……了解っ！……」

佳織が咄嗟に指示を出し、36機の戦術機がギドラの後を追って飛んでいく。

それを見送る恭子の青い、『R型』の武御雷。

「大尉、我々は……」

その時部下の1人が声を掛けてきた。指示を待っているのだ。

恭子は一瞬沈黙した後。

「私達も行くぞ。ギドラ及び特別遊撃隊を援護するっ！」

斯衛軍の矜持を、異星起源種に見せつけるっ！」

「「「はいっ！」「」」」

そして、恭子達も唯依達の後を、更にはギドラの後を追った。

その後、米子市に設置されたH Q、司令部にB E T Aが迫りあわや壊滅か？となったがそれもギドラと唯依や恭子たちの活躍で免れたのだった。

そして戦闘終了後には、B E T Aの屍の山の上で雄叫びを上げるギドラに対し、多くの衛士や兵士達が歓声を上げた。

それから少しした後、恭子や唯依達は機体をH Q近くの仮設格納庫へと入れた。その後恭子は大隊長としてH Qへ報告に向かった。そして報告が終わり、仮設の建物を出ると、そこではったり、唯依と出くわした。彼女は水のボトルを数本手にし、強化装備の上にジャケット、『Cウォーニングジャケット』というパイロットスーツである衛士強化装備の内蔵バッテリーの消費を抑えるジャケットを纏っていた。

余談だが、衛士強化装備には電子機器などが搭載されており、それらは当然バッテリーで駆動する。戦術機に搭乗していれば、それらは機体から電力が供給されるが通常時はそうもいかないので、今のよう  
に待機中は外部バッテリーの役割を果たすCウォーニングジャケットを羽織って居るのだ。

「ああ、篁中尉」

「ッ！崇宰大尉！」

咄嗟にボトルを左手にまとめて右手で敬礼する唯依。一応2人は血縁関係にあるが、ここは戦場。なので今はお互い衛士としての立場を考えなければならぬ。

「お疲れ様です中尉。今は待機任務中？」

「はい。我々の部隊は現在、B E T Aの奇襲を想定して準待機中となっております。しかし格納庫には水のボトルが無かったので、私が仲間と共にここへ取りに」

「そうだったの」

と、呟く恭子だが、彼女はふと疑問に思った。

「えっと、仮設の格納庫はあっちのはずじゃ？」

恭子の言うとおりに、格納庫は今彼女が出てきた仮設司令部の反対側だ。ならば何故唯依はこっちにいるのか？と彼女が疑問に思っても仕方無い。

「あ、その、実は今、仲間たちはギドラと一緒にして……」

唯依は聞かれ、戸惑いながらも答えたのだが……。

「え？」

恭子は一瞬その言葉の意味が分からなかった。そして彼女は以前からギドラに興味があった事や、彼女もしばらくは待機で急いでやる事も無かったので、唯依についていってその言葉の意味を確かめてみる事にした。

そして、たどり着くなり驚いた。

見ると、前方の少し離れた平地にギドラが横になっているのだ。腹ばいの姿勢で横になり翼も畳んで3つの頭も、顎を大地に付けている。それはまるで動物が眠っているような姿勢だった。

だが恭子が驚いたのはそこでは無い。

彼女が驚いたのは、志摩子や和泉、安芸、上総。更には唯依たちと嵐山防衛中隊の頃からの同期である少女達が、ギドラの巨大な頭に背中を預けた姿勢で眠っていたのだ。更にその傍では、瓦礫に腰掛けた佳織がやれやれと言わんばかりの表情で苦笑しながら水のボトルに口を付けているし、同じく瓦礫に座りながら新兵の少女達が先輩である安芸たちの様子を見ていた。

「これは、また……。何と言うべきか」

目の前の光景に、恭子は戸惑った様子だ。それもそうだろう。アリとゾウほどの身長差がある人間と怪獣が寄り添って寝ているのだ。驚くなど言うのが無理な話だ。

「ギドラも流石に疲れたみたいで。戦いが終わった後私達に付いて来てここで眠り始めてしまったんです。なので、それを見守るつもりだったのですが……」

そう言って、一緒に寝ている安芸たちを見つめて苦笑する唯依。

しかし恭子からしてみれば、そんな事より彼女達が怪獣と一緒に寝ている事の方が仰天以外の何者でもなかった。

「あ、その、唯依?」

そして驚きのせいか、ついつい下の名前で彼女を呼んでしまう恭子。

「え?はい」

「貴女達って、こんなに怪獣と、ギドラと触れあう機会が多いのかしら?」

「ええまあ。武御雷は指先までスーパーカーボン製のブレードを装備していますから。流石にあの手で撫でてあげる事は出来ませんし」

そう返す唯依だが、恭子からすれば『いやそうじゃなくて』と言いたかった。

「今のはその、質問が悪かったわね。貴女達はあぁやって、生身でギドラと触れあう事が多いの?」

「はい。横浜での作戦の時、戦闘終了後に安芸と和泉が自分でギドラを撫でたりしたのがきっかけ。少し前には新兵達にもギドラを触らせたんです。安芸が『通過儀礼だ』とか言って。まあ、彼女達の方はまだ少し怖いのか積極的ではありませんが、私や安芸たち、あとはたまに如月大尉もギドラを撫でたりしていますよ」

「そう」  
恭子は唯依の言葉に頷きながらも、ギドラの傍で眠る志摩子達に目を向けた。

彼女達もギドラも、夕暮れ時の中で静かに眠っている。

その表情はとても穏やかで、お互いを信頼している事を伺わせた。

そして……。

「ねえ唯依。ちよつと、五摂家の当主としてではなく1人の人間として。貴女の従妹叔母として聞きたいのだけど、良いかしら?」

「え?はい。何でしょうか、恭子様」

「あなたにとってギドラとは、どういう存在なのかしら?」

「どういった存在、ですか?」

唯依はその質問にしばし悩んだ後。

「ギドラは、彼は、私達の戦友であり、仲間であり、守護神ですね」

彼女は笑みを浮かべながらそう答えた。

「私はギドラが、バラゴンやガーディーが居たから今もこうして皆と笑っていられるのだと考えています。でなければ、あの京都の戦いで私や彼女達もどうなっていた事か」

「……そう」

初めての初陣である京都での戦い。そしてその時出会った怪獣達、バラゴンとガーディー。

「あの時、バラゴン達と出会った『縁』があるからこそ、私達はここまで生きて来れたのだと、私は思います」

そう言つて唯依は、ギドラを暖かい表情で見つめていた。

「そう。ありがとう唯依。話を聞けて良かったわ」

「いえ。それでは私はこれで」

「ええ」

恭子は佳織たちの方へと歩いて行く唯依を見送った。

そして恭子は、今も眠るギドラへと目を向けた。

彼女にとつて、唯依は血縁に当る存在。故に時折彼女の事が心配になる事もあった。しかし今こうして唯依は仲間たちと笑っている。

『これも全て、あなたのおかげなのでしょうね。キングギドラ』

恭子は理解する。キングギドラがこれまで護ってきた存在の中に、『唯依達の笑顔』もまた含まれていた事を。そして更には、多くの命と幸せが、ギドラによつて護られている事を。

もちろんギドラが意図している訳では無い。彼は唯依達とは明確な絆を紡いでいるが、それ以外は違う。しかしギドラの護国聖獣として命を守ると言う使命が、結果的に大勢の人々を助け、大切な人々を失うと言う絶望を破壊しているのだ。

大切な家族、友人、恋人。BETAとの戦争の中で、そう言った人々との別れは付きものだった。しかしバラゴンやガーディー、そしてキングギドラの出現以降帝国内での戦死者の数は激減している。つまり、その減った分だけギドラは人を助け、更に助けた兵士達の周りにはいる人々の幸せも護ったと言う事だ。

「ありがとう」

そして恭子は、眠っているギドラに小さくそう呟くとその場を後に

した。

その後、出雲作戦もキングギドラの活躍で被害を出しながらも成功。旧米子市を中心に部隊が配置され以降の戦いの前線基地となる。そして唯依達は、今は復興が進んでいる京都の仮設基地を拠点としており、出雲作戦後にそこへ戻っていた。

更に京都と言う都市そのものを要塞化する意見が出てきた為、現在京都付近では要塞化に向けた建設工事が至るところで行われていた。そんな中で、恭子もまた京都にある基地の1つからテレビ会議を行っていた。相手は同じく五摂家の人間である斑鳩や悠陽たちだ。

そんな彼等の議題、と言うのが……。

「特別遊撃隊を更に拡充する」、と言う話題だった。

『それは少し、早急過ぎるのではないかな?』

恭子の言葉に、五摂家の1つ、斑鳩家当主の『斑鳩 崇継（たかつぐ）』がそう言って首をかしげる。

『彼女達の部隊は設立から大して時間が経っていない。その上でまた拡充したとしても、彼女達が慣れないだけではないかな?』

「少佐のお言葉も最もです。無論、今すぐと言う訳ではありません。が、ギドラと共に戦う彼女達の存在は帝国民の間でも大きな希望となつていきます。だからこそ、彼女達が功績を挙げ今よりも強くなつたとき、速やかにその存在を大きく出来ないかと考え、こうして通信をさせていただきました」

『成程』

崇継は恭子の言葉に頷く。更に彼は、他の2人に意見を求めるが、反対意見は無かった。

『では、悠陽様。貴方の意見をお聞きしてもよろしいですか?』

そう言って悠陽に問いかける崇継。

『そうですね。私も恭子様 의견には賛成です。なので、将来的な拡充を今の段階から検討しておく、と言う事でよろしいでしょうか?』

「はい。構いません。ありがとうございます。悠陽様」

そう言って頭を下げる恭子。

『しかし、仮にその拡充案を採用したとして次は連隊規模。そうなれば戦術機の数は一〇八機に登る。とてもこの数の武御雷は揃えられない。かといって瑞鶴では少々心許ないのも事実。どうしたものか』  
そう言つて悩んだ様子の崇継。  
すると……。

『その事なのですが、私からも一つ提案をしてもよろしいでしょうか？』

そう言つて声を上げる悠陽。

「何でしょうか悠陽様」

『今し方思いついた事なのですが、その連隊を、帝国陸軍と合同で設立するのは如何でしょうか？』

「つ、帝国陸軍と、ですか？」

『はい。斯衛軍と陸軍から衛士や戦術機を出し合い、兵員と物資などを揃えた上で一つの軍とするのです』

「しかし、そうなると指揮系統にも問題が生じると。仮にその一軍を為したとしても連隊長は一人です。それを斯衛と帝国陸軍のどちらかにするしかないとなれば、現場での反発も無いとは……」

『ええ。それももちろんです。ですが、現場指揮官と後方指揮官を一人ずつ、と言うのは如何でしょうか？例えば、現場で戦術機部隊を指揮する者を一人。基地など後方から部隊を指揮する者を一人。こうすることで、現場で臨機応変に対応する事を可能にした上で、二人の指揮官の立場を対等にすればよろしいのでは無いかと考えます』

「成程。しかし指揮官を二人にするとは言え、それは誰が？」

『あくまでも私個人の意見ですから別の方に代る可能性はありますが、陸軍からは彩峰菡閣中将を。斯衛からは、貴女にお願いしようかと考えています。崇宰恭子様』

「え？わ、私がですか？」

『ええ』

戸惑う恭子に、悠陽はそう言つて頷くだけだ。

『しかし、そうなるともはやその一軍は斯衛でも陸軍でも無い。帝国内部の新たな軍となるでしょう。陸軍、海軍、宇宙軍、斯衛軍に続く

第5の軍という事になるだろう』

と、語る崇継。

「怪獣、キングギドラと共に戦うことを前提とした第5の軍」  
ポツリと呟く恭子。

『その設立も、恐らくはもう少し先になるでしょう。ですが私はその第5軍がこの国の希望になるとも考えています』

悠陽は、そう言って4人に語りかけた。

『ならば、先に名前だけでも決めておくのは如何でしょうか？』

『そうですね』

斑鳩の言葉に悠陽はしばし迷った後。

『では仮に、ですが。ギドラという大いなる力と共に戦う軍、と言う事でギドラの頭文字を取って《Gフォース》と言うのは如何でしょうか？』

「G、フォース」

その名をリピートする恭子。不思議と、その単語が良いような気がした彼女は……。

「それで、私は良いと思います」

そう言って静かに頷いた。

更に他の3人も異議などは無く、結果的に第5軍の仮の名として『Gフォース』という名前が採用されたのだった。

そして恭子がテレビ会議を終えて部屋に戻るとき、小さき笑みを浮かべながら思ってた。

『唯依に面白い土産話が出来たなあ』と。

Gフォース。それはのちにこの国を護る猛者達が怪獣と共に異星起源種に立ち向かう軍となるのだが、それはもう少しだけ、先のお話。

第11話 END



## 第12話 希望作戦

国連軍、オルタネイティブ計画の基地となったインフロント島のコスモス基地。そこで生活をしながら夕呼は研究に勤しんでいた。そんな中、帝国ではBETAに奪われた京都より以西の本土奪還作戦の一環として出雲攻略作戦を決行。当初は数で勝るBETAに苦戦を強いられるが、キングギドラの加勢によって形勢は逆転する。そんな中で五摂家当主が1人、崇宰恭子はギドラの存在の大きさを認めるのだった。更に彼女は唯依達の部隊を拡充すべきと他の当主である崇継や悠陽と話し合い、将来的に新たな軍、『Gフォース』を設立する事になるのだった。

そして、2000年6月。夕呼はいつも通りコスモスベースの自室で様々な研究と模索をしていたのだが……。

「今更ですが、オルタネイティブ4の計画を根本から変えてみるのは如何ですか？」

「……」

突然彼女の部屋に呼び出されたパウルが、用件は？と聞いて帰ってきたのがこの言葉だ。突然の話に彼が頭を抱えたのは悪く無い。

「なぜそう言う話になるのか、教えてくれないか博士？」

「ええ。……そもそもこのオルタネイティブ4の目的は、前の第3計画から得られたデータを元に、BETAに対する諜報員を生み出しそこからBETA側の情報を引き出すことが大本の目的でした」

「そうだ。そのために博士は日夜研究をしていたはずだ。しかし肝心の博士が何故そのような事を言い出したのですか？」

「一言で言えば、状況がかなり変わってきたから、としか言えませんね」

「……。怪獣、ですか？」

「ええ」

パウルの言葉に夕呼は静かに頷く。

「現在怪獣によって落とされたハイヴの数は5つ。リヨン、マンダ

レー、ブラゴエスチエンスク、横浜、佐渡島。内訳はゴジラが3。ギドラが1。モスラとバトラが1。……仮に人間が大軍でもって行えば、数万の犠牲を出して失敗しかねない可能性すらあるハイヴ攻略を単独で、或いは数体で簡単に攻略してしまった怪獣の存在。……更にはこの基地も怪獣モスラとバトラに縁のあるコスモスによってもたらされています。結果的に怪獣たちによって帝国は持ち直し、欧州各国や大東亜連合軍内部でも既に怪獣崇拜、特にモスラとバトラに対する崇拜者が増加傾向にあるとか」

「むう。……怪獣ほど、今のこの世界に変化をもたらした存在は他に無い、か」

「かつて存在した宗教の多くは、BETAという存在に対して私達人類に何ら救いを与える事が出来ずに人々の信頼を失って失墜。結果的にBETAを滅びと受け入れる恭順派が派閥を広げてきた訳ですが、今度はそれに取って代わるように怪獣信仰が広がりつつある」

「人はいつでも、信じたい物を信じると言う事ですな」

「ええ。恭順という名の諦め、絶望。しかしそれをひっくり返すかもしれない怪獣の出現によって、人々は希望を見いだした。それが怪獣信仰の根っこです」

「むう。……それで、その状況の変化に対応するために計画を根底から変える、と?」

「そもそもオルタネイティブ計画全体の目的はBETAの情報収集です。何故情報を集めるのか。それはBETAの弱点を探り勝つ為です。それは私なんかよりも軍人である司令の方が良く理解しているはずですね?」

「うむ。戦争において情報は貴重な物だ。だからこそこの計画は人類の行く末を担う重大

な計画だと私は考えている」

「しかし、その重大な計画よりも今人類の未来を担っているのは怪獣です。そして現に国連内部では反オルタネイティブ派が勢力を伸ばしつつある。そしてその派閥の中には怪獣信仰の信者も多いとか」

「つまり、その反オルタネイティブ派に対する牽制として計画を修正

する、と?」

「それも無い訳ではありませんが、一番の理由はオルタネイティブ5への牽制ですね」

「むっ…どういふことかな?」

『『オルタネイティブ5』の内容は、司令もご存じでしょう?あれが発動されるという事は、人類がBETAに負けた事に他なりません。それは、最も避けるべき事態です。だからこそ、ここで必要なのは、この基地のゼアとザットの力です』

「どういう事かな?」

「今現在、人類にとって怪獣は守護神、神に近い存在です。その神がBETAやハイヴをぶちのめしている事によって人々に希望がもたらされ、結果各地では戦意向上などが見受けられます。そこで、更なる戦意向上を後押しする策として考えられるのは『オルタネイティブ計画など不要』と思わせる程の戦果を人々にあげさせる事です」

「……成程。少しは読めてきた。つまりこの基地の設備で新兵器を作り、それによつてBETAを圧倒し、オルタネイティブ5。つまり地球からの脱出などしなくても良いと人々に理解させるわけかね?」

「その通りです。確かにオルタネイティブ計画自体は重大な計画です。ですがそもそもこの計画の最終的な目的は人類が生き残る事。更にオルタネイティブ計画自体は、こう言つては何ですが対BETA諜報員の育成など、BETAを直接ぶつ潰すような直接的な勝利をもたらず物ではありません。奴らの情報を集めると言う、人類の勝利に間接的に関わる計画と言つても良いかもしれません。そして直接的ではないからこそ、この計画に懐疑的な連中もいるのかもしれない。『BETAの情報を集めて弱点が見つかるのか?』、『そんな事に金や労力を割くくらいなら、新しい兵器開発に割くべきだろう』、とね。そしてそんな連中を黙らせる為に必要なのは、純粋にBETAをぶつ潰す『破壊力』、『直接的な戦闘力』です」

「成程。形はどうあれ、最終目的である人類の生存を考えればその過程を変更することもやぶさかではない。それが博士の言い分な訳か」  
「ええ。もちろん、従来の計画を進めながら新兵器の開発なども可能

です。なにせ、私の『新しい助手』は優秀ですから」  
そう言つて夕呼は笑みを浮かべる。

「……分かった。ならば妥協案という事で、新兵器の開発と従来通りの計画を同時進行という事にしよう。幸い怪獣の活躍で、今の人類には些か余裕があるからな。これでどうかな?」

「ええ。分かりました」

彼女が頷くと、パウルは部屋を後にしようとした。

「ああそうだ司令。少しよろしいですか?」

「ん?何かな博士?」

「下りるかどうかは分かりませんが、国連軍司令部に打診しておいてほしいのです」

「打診?何を?」

「それはもちろん、『ハイヴ攻略作戦』の打診ですよ」

そう言つて夕呼は笑みを浮かべるのだった。

と言う事で、計画に新たな方向性が付け加えられた一方で……。

インファント島の一部に作られた戦術機用の試験場では、水月や孝之、みちる達が『強化型不知火』の運用試験を行っていた。

デリング中隊とヴァルキリー中隊が島に常駐するようになって数ヶ月。そんなある日、戦術機のデータを見ていたゼアから戦術機の改修案が提案され、夕呼はみちる達に相談した後、部隊の一部の不知火を強化改修。見た目はこれまでと同じだが、搭載されているコンピューターや機体運用に関わるOS、装甲素材。ジェネレーターからアクチュエーターまで。外見以外はもはや別物と言つても良いくらい改良された不知火。その動きはもはや戦術機の常識以上の物であった。

これまでの戦術機よりも速く、堅く、力強い。この強化型不知火に乗った孝之達の意見としては、『今すぐ部隊の全ての不知火を強化型にするべき』と言わしめる程だった。

その後は帝国横浜基地から代る代る不知火が搬入され強化改修を受け数日の慣熟訓練の後に帝国本土へと戻される日々が続いた。

そして今日も今日とて強化型不知火の慣熟訓練を終えた孝之、慎

二、水月たちが隊舎の食堂に集まって駄弁っていた。

「いやしくしかし凄いやなく強化型不知火」

ドリンクに口を付けながらそう語る慎二。

「やっぱり、そんなに凄いの？」

「まあね」

衛士では無いので分からず首をかしげる遙に水月が頷いた。

「反応速度とかパワー。スピード。全部強化されてる感じ。正直、初めて撃震から吹雪に乗り換えた時くらいに衝撃だったわね」

「ああ。実際、最初はその変化に戸惑って上手く扱えなかったが、慣れてみれば凄い物だよ」

水月の言葉に頷く孝之。

「って言うか、こんな強化型の開発まで出来るゼアってスゲえよな」  
「確かに」

慎二の言葉に水月が頷く。

「俺は何でも生み出せるザットの方が凄いなと思うんだが」

「あ、私も」

逆に孝之と遙はザットが凄いなと思って居た。のだが……。

「まあ実際どっちも凄いなんだけどな」

「二うんうん」

孝之の言葉に他の3人が頷いた。

その後。

「しっかし、キングギドラのおかげで帝国も随分落ち着いてきたよな」

「そうねえ。前は国内にハイヴを2つも抱えてたのに、今じゃギドラと協力して西部方面の奪還作戦やってるくらいだし」

慎二の言葉に水月が頷く。

「この前ちよつと横浜の町を見てきたけど、そこそこ復興は進んでたよ」

「マジか。どんな感じだった？」

遙の言葉に孝之が興味を示す。

「まだ瓦礫とかがある場所もあったけど、町の大部分は復興して、人も住み始めてみたい。お店も少しだけと始まってたし」

「そっか。横浜も、少しずつ回復して行ってるんだな」

故郷の復興の兆しに、孝之は笑みを浮かべる。だが彼だけでなく、水月や慎二も嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「あつ、後はやっぱり人にも活気があったかな。何て言うか、前までは皆沈んだ感じだったけど、今は前向きって言うか」

「そっか。やっぱりギドラのおかげかな？」

「多分。水月ちゃんが言った通りだと思うんだけど、町で木彫りのギドラとかモスラの像を見かけたことがあるし。新しく出来た神社も見てきたけど、仏像じゃなくてギドラとモスラの像が飾ってあつてびっくりしたよ」

そう言つて笑みを浮かべる遙。

「やつぱ怪獣崇拜つて結構な速度で広がってるんだな」

と眩きながら天井を見上げる慎二。

「なあ遙、その神社つて結構人居たか？」

「うん。そもそも私も、人がたくさん集まつたから何だろう？つて思つて行つてみたから」

孝之の言葉に頷き応える遙。

「そっかこの前、テレビ番組で話題になつたな。怪獣信仰の事」

ポツリと眩く慎二。

「え？それ私見てないんだけど。どんな内容だった？」

「ああまあ、最初は帝国で怪獣信仰が活発な事とか、最近だと仏像の代わりに怪獣の像を造ってる所があるとか。まあ普通つて言うか遙が聞いたのと大して変わんない話だったけど。」

あ。そっか最近世界各地、特に欧州とかアジア方面で急速に怪獣信仰の信者が増えてるつて話してたな」

「欧州やアジアで？」

「ああ」

水月の言葉に頷く慎二。

「やつぱ、この前のモスラとバトラの活躍のおかげじゃねえかな？ほら、佐渡島ハイヴを落とした後、モスラとバトラつて世界各地を回つてたみたいだからさ」

「あく。そう言えばニュースになってたわね。世界各地に蝶の怪獣現る、って。まあでもモスラもバトラも蛾の怪獣らしいけど」

「でも、あんまり蛾って感じはしないよね、モスラって」

「確かに」

遙の言葉に孝之が頷く。

「私、あのもふもふの背中に寝っ転がってみたいなく」

「それは、分からなくも無いな」

水月の言葉に慎二も頷く。

「ってか聞いた話だと、怪獣信仰の信者の人達ってモスラを女神って崇めてるらしいぞ?」

「モスラを? 何で?」

と、首をかしげる水月。

「そりゃあ、第1にハイヴをぶっ潰す力がある。第2にすっかり荒廃した大地を生き返らせて尚且つ瀕死の重傷者を助ける力がある。2番目のなんかもうほとんど神の御業ってやつじゃね?」

「まあ確かに」

慎二の言葉に孝之が頷く。

「それに、モスラってあんまり怖くないよね。大きな瞳が可愛いし、あのモフモフの体も、なんだかぬいぐるみたいで」

「あくわかる。モスラって可愛いわよね」

軍人としての責務を一旦は忘れ、年ごろの少女らしい会話をすると水月。

そんな話をしていた時。

「そ〜いやさ」

慎二のつぶやきに他の3人の視線が彼に集まる。

「帝国じゃ斯衛軍の特別遊撃隊がキングギドラと一緒に戦ってBET A相手に快勝繰り返してるって話聞くけど、もしかしたら俺たちもそのうち、モスラやバトラと一緒に戦う事になったりしてな」

「いやいや。でも私達だけじゃ足引っ張るだけじゃない? それに見たでしょ? モスラのあの必殺技。下手したら私達まで巻き込まれるって。それを考えれば、流石に無いんじゃない?」

そう言って慎二の言葉に苦笑しながら首をかしげる水月。

「そくだよなく。まあ俺たちの援護なんかそもそも要らねえか」

そう言って苦笑する慎二。

だったのだが、数か月後のある日。

「へ？ハイヴ攻略作戦？」

特に事前連絡もなく、コスモスベースの会議室に呼び出されたみちる達、A―01連隊の衛士たち。そしてそんな彼ら、彼女らに伝えられ慎二が首を傾げたのが、『ハイヴ攻略作戦』だった。

「そうよ。この作戦名は『オペレーション・ホープ』。つまり希望作戦って所かしら」

「希望」

夕呼の言葉を聞き、その単語をリピートする水月。

「今回の目標は朝鮮半島のH20、鉄原ハイヴよ。幸いこの鉄原ハイヴはまだ若い方。なので、ここで叩き潰す」

「……それで、戦力の程は？」

静かに問いかけるみちる。

「今回はあなた達A―01連隊を含めた国連軍、帝国軍、大東亜連合軍の3軍連合によるハイヴ攻略よ。兵力は各軍合わせて、およそ2万」  
「「「ツ」」」

彼女の言葉に、大半の者は息を呑んだ。それもそうだ。2万という兵力はハイヴ攻略を考えれば『少なすぎる数字』なのだ。いくら若いと言っても数万のBETAを要するハイヴにこの程度では攻略出来ない。

「これは、いくら何でも少なすぎるのではないですか？」

そして皆を代表して挙手し発言するみちる。しかし彼女達からこの言葉が出るのは夕呼も想定済みだ。

「まああなた達の意見も最もね。でも大丈夫よ。何せ今回は、モスラとバトラ、更に帝国のキングギドラが『参加』する予定だから」  
「「えっ!？」」

夕呼の言葉に孝之と慎二は声を揃えて驚く。



すると、それに合わせるかのように夕呼の背後にあつた大きなモニターが鉄原ハイヴ周辺の地図を映し出した。

「今回の主役はモスラ、バトラ、キングギドラの3大怪獣よ。この3体がハイヴを攻撃し、私達はそれをサポートする。細かい作戦日程や行程は後で各隊の隊長から聞いて貰う事になるだろうからここからはざっくりとした説明だけど、まず、3大怪獣がハイヴを攻撃しBETAを殲滅。あなた達はそれを後方から支援。……って言っても精々撃ち漏らしの小型種を倒す程度でしょうけど。その後、BETA殲滅後にハイヴ内部の各所に爆弾、『S—11』を設置。全機が、もちろん怪獣も含めて安全圏に退避後にこれを起爆し、ハイヴを完全に破壊する。これが大まかな予定よ。誰か質問は？」

夕呼の言葉に、孝之たちが所属するデリング中隊の隊長である『大和田大尉』が手を上げた。

「バトラとモスラはともかく、キングギドラは参戦してくれるのでしょうか？」

「それについては大丈夫よ。ギドラの方は、芹沢博士を通じて斯衛軍の特別遊撃隊に依頼してあるから。相手側もOKしてくれたみたいだし」

そう言つて笑みを浮かべる夕呼に、多くの者達が驚いていた。

そうして、鉄原ハイヴ攻略作戦が開始される事となり、それに参加する部隊は慌ただしく動き出していた。

そんな風に動きが慌ただしくなる少し前。夕呼がパウルを通じて鉄原ハイヴ攻略の許可を何とか国連からもぎ取った頃。夕呼が言ったように芹沢を通じて唯依達にこの話が飛んできた。

「ええ!?!鉄原のハイヴを攻略するっ!?!」

芹沢から聞いた事に安芸が驚いて聞き返してしまった。更に周囲に居る唯依達も驚いた様子だった。

「ああ。モスラとバトラ、キングギドラを主力とし、更にそれをサポートする軍として君たちを含めた帝国軍、国連軍、大東亜連合軍の3軍による部隊を展開。鉄原ハイヴを攻撃するとの事だ」

「しかし、キングギドラも、ですか？彼はあくまでもこの国を護る聖獣です。鉄原ハイヴを

攻撃すると言う事は国外への遠征を意味します。……彼が来てくれるかどうか」

そう言つて難しい顔をする上総。

「それは、提案者である香月博士も承知の上だった。だからこそ、君たちにお願ひしたいのだ。ギドラを説得して欲しい」

そう言つて頭を下げる芹沢。

その姿に5人はしばし黙り込んだ。が……。

「正直、好きになれない」

「安芸？」

ポツリと呟いた安芸の言葉に唯依が反応する。

「私達の恩人を、私達の勝手な理由で引つ張り出そうとしてるのは、正直ギドラに悪い気がして好きになれない」

「うん」

「そうだね」

彼女の言葉に、和泉と志摩子が頷く。

「だから、私達から条件を出す。鉄原ハイヴの作戦には私達も参加する。これは絶対だ。でももし、ギドラが少しでも嫌がったら、ギドラは参加させない。ギドラは私達の仲間で戦友だ。都合良く頼れる存在じゃない。だから私達はギドラを尊重する。……そしてもし、無理矢理にでもギドラを参戦させようとしたら……」

「……」

芹沢は、黙つて安芸の次の言葉を待った。

「少なくとも私は、アンタ達の敵になるよ」

安芸は、凄みのある表情でそう呟き、芹沢を睨み付けた。

芹沢は彼女のその怒気を含んだオーラに気圧され僅かに息を呑んだ。

だが、それは彼も理解していた事だった。彼女達にとってギドラがどういった存在なのかは百も承知だ。だからこそ……。

「分かった。その条件を呑もう。ギドラが拒否すればそれ以上参加を

要請することはしない。香月博士には私からそう言っておく」  
彼にその条件を拒否する理由は無かったのだった。

その数日後。唯依達は武御雷に乗ってギドラと話をするために、富士の樹海跡地となった『草原』を目指していた。

かつてはBETAの侵攻で荒れ果てたこの土地も、モスラのパルセフォニック・シャワーの力で緑を取り戻していたのだ。

そしてたどり着いた草原の一角に、ポツリと大きな穴が空いていた。それこそがかつてギドラが眠っていた場所であり、今のギドラの住処だ。ちなみに、ここから数キロの所にギドラの様子を監視するモナークの小規模な基地、アウトポストが設置されている。監視と言ってもギドラは人類に友好的な怪獣なので、目的は監視よりも見守る、と言う事や万が一様子が異変があればそれを安芸達に知らせるのが主な役目となっている。ちなみに何故安芸達に知らせるのか？と聞かれれば、それは彼女達が巷で話題の『龍神の姫巫女』として有名だからだ。実際、この国でギドラと一番親しいのは彼女達だ。だからそれも別段おかしい事ではない。まあ最も、当の本人達は変なあだ名で呼ばれる事とても恥ずかしがっているのだが。

話を戻し、武御雷が大きな穴の傍に着地すると、中から唯依達の5人が降りてきて穴の中へと入っていった。見た目は洞窟なのだが、唯依達が何度かここに足を運んだ事もあり滑落防止の為に入り口からの降り口にはロープが垂らされたりしていた。

そして奥へ進んでいくと、大きな平べったい岩の上でギドラが眠っていた。

『キュルル……？』

しかし来客に気づいたのか、ギドラは小さく喉を鳴らしながら目を開き首を動かした。

「お〜いー！ギドラ〜！」

まるで親しい友人に声を掛けるかのような気軽さで声を掛ける安芸。

するとギドラも彼女達の来訪を喜んだのか、キュルルと左右の首が

嬉しそうに喉を鳴らした。

そして、いつものように少し撫でてあげたあと。

「あのさ、ギドラ。実は今日は大事な話があって来たんだ」

彼女達を代表するように安芸が一步前に出て話し始めた。

近々国外にあるハイヴを攻撃する事。そのためにギドラの力を貸して欲しい事を。

「……その、本当にイヤなら断つてくれて良いんだ。ギドラは私達の恩人だ。だから無理強いはしたくない」

そう語る安芸だが、直後に彼女の手が震える。

彼女達はこれまでギドラに護られてきた。だがギドラが断れば、今度はそうはいかない。ギドラが傍に居ないと言う事は死ぬ確率が跳ね上がるのだ。

それ故に、彼女達は恐れる。だが安芸はそれを必死に隠し気丈に振る舞おうとした。

「大丈夫だ。大丈夫」

そして自分に言い聞かせるように呟き、彼女は強引に笑みを浮かべた。

「何かギドラ以外にも怪獣と一緒に戦ってくれるみたいだから、ギドラが無理して参加する必要は……」

そう、言いかけた時。

『キュルアアア』

左側の首が、彼女の頬を舌先で舐めた。そして彼女を心配するように、小さく喉を鳴らす。

すると、それがスイッチとなって安芸の心を決壊させる。彼女の目から涙が溢れ出す。

「ご、ごめん。ごめん、ギドラ。卑怯だって、ズルだって、都合が良いって、わか、分かってる。でも、でもやっぱり私達だけじゃ怖くて。だから、だから……」

そう言っつて必死に流れる涙を拭う安芸。

どれだけ実戦を経験しても、どれだけ高性能な機体に乗っついても、どれだけ強い武器を手にしても、彼女達はまだうら若き少女

たち。そして、死の恐怖はそう簡単に克服できるものではない。だからこそ恐れる。普段はギドラと共に居る事でそれを克服していたのだ。

安芸は自分達の都合でギドラを巻き込みたくなかった。自分達人間の都合に、恩人を利用しようとしていることが、恩義に対する背信のようで情けなかった。だからこそ、死ぬ確率を上げる物だとしても無理強いはしたくなかった。だがそれも、ギドラの声を聞き、彼女の本音が漏れ出した。

すると、左右の首が中央の首に向かって何かを訴えるように喉を鳴らした。中央の首は、しばし沈黙した後、静かに頷くように喉を鳴らした。

すると左の首は喜ぶように喉を鳴らし、もう一度安芸の頬を舐めた。

「ギドラ、一緒に戦って、くれるのか？」

彼女が問いかけると、ギドラは『もちろん』と言わんばかりに喉を鳴らす。

「ホント、ごめん。ごめんな。いつも頼ってばかりでさ」

安芸は涙を流しながらも笑みを浮かべ、ギドラの頭を抱きしめる。

「でも、ありがとう、ギドラ」

涙を流す安芸。そんな彼女を慰めるように、ギドラは小さく喉を鳴らすのだった。

こうして、ギドラの参戦は決定したのだった。

そして時間は戻り、希望作戦の決行日が迫る中、唯依達は京都にある舞鶴の軍港へ集結していた。その軍港には唯依達を始め、恭子の第3大隊と言った斯衛軍の部隊や帝国陸軍の戦術機部隊が集まっていた。そして唯依達の元に恭子が訪れて居た。

「この前の出雲作戦以来ですね」

「お久しぶりです崇宰大尉。お元気そうで何よりです」

5人を代表するように敬礼をしながらそう返す唯依。

そして、恭子は周囲を見回すと、今だけは1人の女性となった。

「唯依もみんなも元気そうね。ホントに良かったわ」

そう言っただけは唯依の頭を撫でる。

「えっ！ き、恭子様？ 何を……」

「私は貴女の従妹叔母でしょ？ たまにはそう言う事もしないよね」

そう言っただけは笑みを浮かべる恭子。唯依は戸惑いながらも、撫でられ顔を赤くしていた。

しかしは後ろで安芸達がニヤニヤしているのに気づいて更に顔を赤くしたのだった。

その後。

「それにしても、まさか恭子様まで参加されていたとは。驚きました」

「まあそれについては、私の方から志願したの」

「え？ 恭子様ご自身で、ですか？」

彼女の言葉に志摩子が驚く。

「ええ。私としても、モスラとバトラと言う怪獣を近くで見えたかったのもあるし。怪獣が一緒なら大丈夫って言う確信もあったから」

恭子はそう言っただけ。

「あ。そうだった。怪獣と言えば、唯依達に話しておきたい事があったんだった」

「え？ それは一体？」

首をかしげる唯依達に、恭子は少し前、五撰家当主陣との会議で議題に上がったGフォースの事を彼女達に話した。

「G、フォース。帝国第5の軍、ですか？」

「ええ。言わば、ギドラと共に戦うギドラにとっての斯衛軍と言った所かしら」

「ギドラにとつての斯衛軍。それを、私達が？」

そう言っただけは恭子に問いかける安芸。

「ええ。と言っただけはまだ明確に設立が決まった訳じゃないの。だからそこまで期待しない方が良くもしいないけど、そうなるかもって事だけは覚えておいて」

そう言うと、恭子は部下が呼びに来たので唯依達から離れて行っ

た。

そして恭子が去った後。

「Gフォース、かぁ」

ポツリと志摩子が呟いた。

「皆はどう思う？Gフォースっての」

「私は、良いと思うな」

志摩子の問いかけに、安芸はそう呟く。

「ギドラと戦う。一緒に。一緒に戦って、この国を護る。それって最高じゃん」

そう言っただけで彼女は笑みを浮かべ、他の4人も同意するように笑みを浮かべるのだった。

そして更にそのまま駄弁っていると、1人の人影が近づいてきた。

「元氣そうだな、お前達」

「え?!」

聞こえた声に驚きながら5人が振り返ると、そこに居たのは彼女達が京都の衛士訓練学校に居た時の恩師、『真田晃蔵』だった。

「さ、真田教官っ!」

「ふっ、俺はもう教官ではない。今は陸軍の原隊に復帰した身だ。ここでは大尉と呼べ」

「失礼しました、大尉」

驚き戸惑う唯依にそう呟く真田。慌てて訂正する唯依。

「まあ良い。それにしても……」

5人を見回す真田。そして彼は小さく笑みを浮かべた。

「全員、あの頃よりは幾ばくか衛士らしい顔つきになったものだ」

「あ、ありがとうございます。大尉」

普段は厳しかった真田からの褒め言葉に戸惑いながらも頭を下げる唯依。

「もしかして大尉も今回の作戦に？」

「ああ」

と、話をしていると、唯依達の少し離れた場所で将官の軍服を着た男性が娘と妻と思われる女性2人と向かい合っていた。

「あれって、もしかして」

「ん？ああ。あの男性が彩峰中将だ。光州作戦の指揮官であり、世界で初めて怪獣を目撃した人の1人。一緒に居るのは、恐らく奥様と娘さんだろう。確かあれくらいの歳になる娘が居ると聞いた事がある」  
「へ〜」

唯依達が見つめる視線の先では、彼女達より1〜2歳ほど年下と思われる少女が母親と共に父、彩峰中将の見送りに来ていた。

「それじゃあ、行ってくる」

「ええ。どうかお気を付けて」

彼の事を気遣う奥さんと思われる女性。

「ああ」

萩閣は頷くと、彼女の隣に居た娘、『彩峰慧』へと視線を向けた。

「慧、俺が留守の間、お母さんを頼んだぞ」

「……うん。いつてらっしゃい」

小さく笑みを浮かべながら慧は父、萩閣を見送る。そして彼は待っていた部下と共に軍港の建物の方に行ってしまった。それを見送った後、慧も母親に連れられて軍港を後にした。

それを遠くから見守っていた唯依達と真田。

「さて、と。俺もそろそろ行く。お前達の元気そうな顔が見られて何よりだ。ではな」

そう言っつて真田を離れていった。彼を、無言の敬礼で見送る唯依達。

そんな時。

「負けられないよね」

和泉がポツリと呟いた。

「和泉？」

「さっきの女の子、多分私達より少し年下なだけだよ？だから、もしかしたら後数年で兵士として徴兵されるかもしれないって事だよ」

「……」

和泉の言葉に、4人は黙り込む。

帝国では1996年より16歳以上の男女は徴兵の対象になって



いる。これはつまり学徒動員に他ならないのだ。

「ほんのちよつと年上つてだけかもしれないけど。でも自分たちより年下の子達が戦場で戦わされるのは、見てられないなって思つて」

「そうですね。それを考えれば負けられませんか」

和泉の言葉に上総が頷く。

「だったら、勝つただけだろ」

と、その時、安芸がそう言つてパンツと拳をぶつけ合う。

「油断大敵なのは分かつてる。でも、私達にはギドラとそれにモスラとバトラも居るんだ。だったらハイヴをぶつ潰して、この国を少しでも平和にする。そうだろ？」

安芸の強気な態度に、他の4人も笑みを浮かべる。

「そうね。勝ちましょう。勝つて、この国の人々に希望を灯そう」

唯依の言葉に、4人は頷く。

そして、数日後。舞鶴の軍港に国連軍や帝国軍の艦艇が集結する。更にその傍にはギドラとモスラ、バトラの姿があつた。

『全軍へ』

そんな中、国連軍の総指揮官を任されたパウルの声が通信を通して軍港に居る者達の耳に届く。

『これより我々は朝鮮半島の鉄原ハイヴを攻略する。……人類とBETAの戦争が始まつて既に数十年。これまで人類はずつと後退を続けてきた』

パウルの演説が、唯依や真田、萩閣と言つた帝国軍の面々や、大隈級の不知火に搭乗したまま発進の機会を待つみちる達や孝之達の耳に届く。

『その度に領土を奪われてきた。だが、今の我々には怪獣という心強い味方がいる。言葉を交わす事は出来ずとも、この星に生きる同じ命として、この危機に立ち向かう味方が。彼等の力を借りた我々にもはや敵はない。……だからこそ、諸君等の手で勝利を勝ち取つて欲しい。BETAには勝てないと言う絶望を破壊するために、異星起源種共に勝てるという現実を証明するためにつ！諸君等の手でつ！歴史

に勝利を刻んで欲しいっ！』

それが、パウルの演説。士気を爆発させるための言葉。

一瞬の静寂。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

あちこちで兵士達の歓声上がる。文字通り、士気の爆発。

数十秒の間を置いてそれが落ち着いた頃。

『それではこれより、鉄原ハイヴ攻略作戦、オペレーション・ホープを開始するっ！』

そして、パウルの言葉に応じて艦艇のエンジンが唸りを上げ動き出す。更に、彼等の先頭をキングギドラ、モスラ、バトラが飛んでいく。船は3匹の神を追って海原を駆ける。

人類に希望の火を灯すため、彼等は神々と共に異星起源種の巣窟へと向かう。

神々と共に戦い、勝利するために。

神々は人と共に進む。今、『三大怪獣による総攻撃』が始まろうとしている。

第12話 END

## 第13話 ギドラ・モスラ・バトラ 三大怪獣総攻撃

怪獣の登場によって情勢が変化しつつある中、夕呼はオルタネイティブ4の計画内容に部分的な変更を加え、直接的な力となる新兵器開発を従来の計画と並行して行うと言い出したのだった。そんな中、夕呼は朝鮮半島の鉄原ハイヴを攻略するために希望作戦という名の攻略作戦を提案する。これにはみちる達を始めとした国連軍や帝国軍から唯依や恭子、真田達などが参加する事になり、更にこれの援軍としてモスラ、バトラ、キングギドラが参戦するのだった。

今、日本海を飛行するギドラ、モスラ、バトラの3匹。その後ろを随伴するように無数の船が海をかき分け進んでいく。

そんな無数の船の1つに、パウルと夕呼が乗り込んでいた。艦長席の隣に作られた臨時の椅子2つに2人はそれぞれ腰を下ろしていた。

そして2人は、艦橋から見えるギドラ、モスラ、バトラの後ろ姿を見つめていた。

「……ハア」

そんな中でため息をつく夕呼。それを横目に確認するパウル。

「そんなに轟天号の参戦が間に合わなかったのが不服ですか？」

「そりゃあね」

彼の言葉に夕呼は頷く。

今回の作戦、夕呼は轟天号の参加を強く希望した。理由としてはその超兵器の力を戦果として周囲に報告し、空中戦艦の力を周囲に理解させるためだった。更に、怪獣と共に戦う事で怪獣と空中戦艦のスコアの差を見せつけ、空中戦艦一隻程度ではBETAには有利でも怪獣には勝てないと分からせる為でもあった。

しかし、肝心のクルーの育成が間に合って居らず、今回の参加は見送られたのだ。

「それにしても、よく国連が今回の作戦を許可しましたね。『あれ』の流出をかかぬ国はとても警戒しているはずですが？」

パウルの言うあれ、はG元素の事でありかの国はアメリカの事だ。

そして、ハイヴ攻略には国連の許可がいる。これは、『不用意な攻略作戦で重要な戦力を減少させる事を防ぐため』という大義名分があるが、実際には国連を影から操る米国が他国の軍を不用意にハイヴへ近づけないために許可制にしたのだ。これらは1979年に結ばれた『バンクーバー協定』によって正式な物になっている。

このバンクーバー協定にはハイヴ鹵獲品を国連管理下にする事や、核兵器の使用制限など様々な規定が盛り込まれている。そしてそれは、自国にハイヴを持たない米国が他国にG元素などが流出することを恐れて発行させたのだ。もちろん中国やソ連と言った国々はこのバンクーバー協定の真の目的を理解していた。だが、当時国内が壊滅的な状態だった二国は国連軍の助力を受けざるを得ない状況であった為、米国に異を唱える事が出来なかったのだ。

「そうですね。実際反発はありました。でも少し前のG弾の性能評価試験データとかが暴露されて、G弾脅威論が噴出してホットになってた時期でしたから。国連内部の反G弾を掲げるメンバーを上手く言いくるめてこちらの後ろ盾にしたのが、上手く許可を取り付けた要因です」

夕呼の言うとおりのほんの少し前、国連軍のBETA恭順派に傾倒していた職員がG弾の実験データを世界に暴露したのだ。これが元で世論ではG弾脅威論が囁かれるようになった。更にこれに拍車を掛け、反米国の機運を高めた理由があった。

米国は、隣国であるカナダの一部でG弾の起爆実験を行っていたのだ。実は今、カナダはその大半が放射能に汚染されて人の住めない国となっている。

その理由は、BETAの地球降下初期にまで遡る。実はBETAが月から降着ユニットを落としたのは2箇所あった。1つが全てのハイヴの元となったオリジナルハイヴが在る場所、つまりカシユガルだ。そしてもう一つ、それが落ちたのがカナダの『アサバスカ』という場所だった。

しかしカシユガルの前例があった為に、米軍は降着ユニットが着陸するのと同時に大量の戦術核をぶち込んでこれを撃破。北米大陸を

BETAの脅威から守ったのだが、引き換えにカナダの大半は放射能汚染によって人の住める場所では無くなったのだ。

そしてその誰も居ないカナダの一部を、明星作戦で不発に終わったG弾の試験場代わりに米軍が使って居たと言うデータが公開されたのだ。これによって反米国の機運が高まりつつあった。

しかしこれは夕呼にとってむしろ好都合だったのだ。夕呼は半ば脅すようにG弾脅威論を後押しするようなデータをチラつかせ、更に反米感情が高まっていた人々を後ろ盾とする事で今回のオペレーションホープを実行させる事が出来たのだ。

とは言え、米国も黙ってこれを見過ごす事はせず、交換条件としてハイヴを完全に破壊する事と、万が一作戦が失敗したのなら夕呼は即刻第4計画から外す事を提示してきた。しかし夕呼はこれを分の悪い賭けとは考えなかった。なのでOKを出し、作戦を決行したと言う事だ。

「最近、怪獣信仰という単語をよく目にします」

「……そうですね」

パウルの言葉に夕呼は頷く。

「世界各地で、特に最前線の衛士達を中心に急速に広がりを見せているとか。一説には、BETA恭順派に代る新たな一大信仰になるとも」

「それはそれで良い事だと私は思いますが？」

パウルの言葉に夕呼はそう言って首をかしげた。

「実際、BETAに対して戦う事を諦めた自殺志願者の集団なんかよ、そう言った怪獣を信仰してでも、生きよう、BETAに抗おうと言う気持ちがあるのであれば恭順派なんて言う連中が横行するよりよっぽど良いとは思いませんか？」

「それは確かに。しかし宗教には過激派と呼ばれる連中が付きものです。それを考えれば、やはり不安もあります」

「……それはまあ、そうですね」

夕呼はポツリとパウルの言葉に頷いた。そして……。

「怪獣信仰、怪獣教、タイタニズム、か」

彼女は艦橋から見えるモスラ達の背中を見つめながらポツリと呟くのだった。

『怪獣という神々と、私達人類。もはや神話と現実の境界は無くなった。怪獣という神話が現代に目覚めた今、私達は怪獣という神話の神々の生き証人。……彼等がこの時代に目覚めた事はある種の救い。しかし彼等の登場で、人類は霊長類の座から落とされる。真の霊長類は怪獣。……けど、全ての人間がそれを受け入れられる訳じゃない。強欲で傲慢な人間ほど、支配したがる癖に支配されるのを嫌う。こう言うのは国のトップとか政治家に多いし。対して弱者は、怪獣たちが現れる以前は世界に絶望していた。その絶望を破壊し希望を与えつつあるのが怪獣。そう言う連中はこぞって神に縋る。つまり怪獣に縋る。そしてタイタニズムの信奉者となる。……現状、私達人類の怪獣に関する反応は大まかに分けて3つ。今も観察を続ける中立。その存在を疎ましく思う反対派。その存在を迎合する信者派』

そこまで考えると、夕呼はシートに体を預けて天井を見上げる。『仮にBETA大戦が怪獣の勝利に終わったとしても、これから先人類は怪獣への対応を迫られる。その存在を排除しようとするのか、神として崇め奉るのか。……前者ならば戦争。後者ならば……。まあ、今はそこを考える必要は無い、か。今は目の前の事に集中しないからね』

そう言って夕呼は視線を前方に戻すのだった。

そうして大艦隊が海原を進み、朝鮮半島の陸地が見えてきた。それを確認するとパウルは通信機を掴んで立ち上がった。

『全軍に伝達。これより我々は、鉄原ハイヴ攻略作戦を開始する。大まかな計画の段取りは分かっていると思うが、まず、ギドラ、モスラ、バトラの3体によって上陸拠点を確保。その後戦術機部隊は即座に発艦。最低限の拠点防衛部隊を残しハイヴへ前進。3体と協力しBETAを殲滅せよっ』

通信機を通して全軍に響き渡るパウルの指示。

「いよいよですわね」

上総はそれを自分の武御雷の傍で聞いていた。更に彼女の傍には唯依達の姿もある。

今彼女達が立つのは、大隈級の甲板の上。そして甲板から見えるギドラ、モスラ、バトラの後ろ姿。彼女達は静かに、3体の後ろ姿を見つめていた。

そこへ。

『衛士各員へ！これより戦術機部隊の発艦準備に入るっ！衛士は自機に搭乗せよ！』

マイクを通して響く指示。

「皆、行こう」

その指示を聞き、呟く志摩子。他の4人が静かに頷くと、彼女達はそれぞれ自分の武御雷へと乗り込んだ。

更にはこの時、同じようにみちる達や孝之たち。更に別の大隈級に乗っていた真田と言った国連軍や陸軍の衛士達もそれぞれの愛機に乗り込み、出撃の瞬間を待っていた。

そうこうしている内に、ついに3体が沿岸部に差し掛かった。

直後、BETA光線級による射撃が3体に向かって放たれた。だがそれは、キングギドラの周囲に浮かぶ黄金の粒子に阻まれる。

『『キュルアアアアアアッ!!』』

そしてギドラが叫ぶと、ビックスパークボールが放たれBETAの群れのど真ん中に着弾し数千のBETAを一気に吹き飛ばした。

『キュアアアアアッ!』

『キュガアアアアッ!』

するとギドラを左右から追い越したモスラとバトラがそれぞれクロスヒート・レーザーとプリズム光線で光線属種を優先的に攻撃していく。

更に海岸線に音を立てて着地したギドラの放つ引力光線が向かってくる突撃級の群れをバラバラに引き裂いていく。

その様子を、みちる達や水月たち、孝之たちは展開中のUAVのカメラ越しに見ていた。

「……あれこそ正に地獄絵図って感じだな」

ポツリと呟く慎二。

「本当に怪獣が敵じゃなくて良かったって心の底から思うよ」

慎二の言葉に応えるように、孝之はため息をつきながらそう語った。

と、そこへ。

『無駄話はそこまでよ』

別の船の艦橋に居る夕呼から通信が届いた。

『怪獣により上陸地点が確保されたわ。アンタ達はすぐに発艦。上陸地点を防衛しなさい。今回は心強い怪獣がアンタ達の味方してくれるんだから、コスモスとギドラを説得してくれた斯衛の巫女達に感謝しながら出撃しなさい。……それじゃ、作戦開始よ』

「……了解っ！」「……」

夕呼の言葉を聞き、A-01連隊の衛士たちは力強く頷く。

そして無数の不知火が大隈級から発艦していく。

「デリング中隊っ！出るぞー！」

「……了解っ！」「……」

「ヴァルキリー中隊っ！出撃するっ！」

「……了解っ！」「……」

それぞれの隊長に率いられ、水月達や孝之達もそれぞれの艦から発艦する。更にそれに続くように、帝国軍の船から真田の『不知火壱型丙』や唯依達の武御雷も発艦し、次々と海岸に向かって飛行し上陸していく。

そして各隊が上陸した頃には……。

『『キュルアアアアアアアッ！』『』』

『キュアアアアアアアッ！』

『キュガアアアアアッ！』

ギドラとモスラ、バトラの3匹が声高に勝利の咆哮を上げていた。

「……っか、もう終わってるのかよ」

上陸して早々、慎二は苦笑しながらそう漏らす。

「……数万規模のBETAが居たはずだが、3体揃えばそれも烏合の





『キュアアアアアアアアッ!!!』

『キュガアアアアアアアッ!!!』

「ッ!?モスラも!」

「バトラまで……」

突然、モスラとバトラも大音量の咆哮を上げた。これに驚く水月と孝之。

最初、共に進軍する彼等は戸惑った。何故ここで咆哮するのか？と。人間と怪獣では同じ言葉を交わす事は出来ない。だが、それでも……。

『これって……』

ギドラの咆哮を聞いていた志摩子は、いつの間にか自分の中にあつた恐怖心が消えている事に気づいて内心首をかしげた。だがそれだけではない。直後、彼女の内側から体が熱くなつていくのが分かつた。

『ああ。そっか。これってギドラ達なりの激励なんだ』

理解した瞬間、志摩子は笑みを浮かべながら操縦桿を握りしめる。そして彼女のように、唯依達が。恭子達が。みちる達が。真田たちが。数多の兵士達が怪獣の咆哮の意味を、心で、魂で理解する。論理的な証拠が在るわけではない。だが、不思議と彼等の咆哮が兵士達の魂を震わせ、脆くなりつつあつた心を奮い立たせた。

「おおおおおおおっ!」

その時、誰かがオープンチャンネルでギドラ達に負け時と咆哮を上げた。直後。

「「「「「おおおおおおおっ!!」」」」」

それが周囲に伝播し、国も階級も性別も関係無く、無数の男たちと女たちが怪獣に負けないように声を張り上げた。

そして、そうこうしている内にハイヴまでもう少し、と言う距離に近づいた。するとハイヴから先頭のギドラ目がけて光線級によるレーザーの雨が降り注ぐ。しかしそれも、いつものようにギドラの黄金の粒子による盾を突破する事は出来ない。更にギドラは粒子の盾

を周囲に広く展開する事でモスラとバトラ、更には戦術機部隊までも護って見せた。

だが、ギドラはそこからいつものようにビッグスパークボールで撃ち返しはせず、黄金の粒子を体内へと取り込んだ。

『いつもと違う?』

それに気づいて内心首をかしげる上総。すると、次の瞬間、ギドラの体の黄金の輝きが更に増していった。

『『『キュルアアアアアアアアッ!』』』

そして、咆哮と共にギドラの口から放たれたエネルギーがその眼前で1つとなり、球状に変化していく。

『何だ?何をやる気だギドラ』

これまで共に戦ってきたが、初めて見せる技に内心戸惑う佳織。

そんな彼女の不安を余所に、ギドラはその光球を発射した。

レーザーがその光球を撃ち落とそうとするが、光球は向かってくるレーザーを『ねじ曲げながら』直進し、ハイヴのモニュメントに直撃した。

直後。

『グオオオオオオオオオッ!』

高速で光球が膨張し、それはさながら『黄金の太陽』と言うべき形となった。だが、それは太陽ほど生易しい物ではない。

『ガラガラガラッ!』

何と、ハイヴモニュメントが瓦解し始めたのだ。更に瓦解した瓦礫や周囲に居たBETAがその黄金の太陽に吸い込まれていく。

「あれって……!?!」

「まさかっ!?!」

その光景に、志摩子と安芸が驚く。そして……。

「……黄金の、ブラックホール?」

ポツリと唯依が呟いた。

黄金の太陽は、唯依の言うとおりのブラックホールの一種である。重力を始め、引力や斥力を操るギドラが、膨大なエネルギーを使って生み出した黄金のブラックホール。それを、今回は光線属種のレーザー





言う手があるのだが今彼等の周囲にBETAは居ない。

『このままでは不味いつ！』

ギドラ達に続いて、戦術機部隊の先頭を走る佳織はそう思った。だが……。

「ッ!?これは……」

気づいた時には、モスラの翼から大量の鱗粉が撒かれ、キラキラと輝きながら周囲に浮かんで居た。彼女は『何故こんな物を今ここで?』と内心首をかしげた。そして、それ故に光線属種への警戒が疎かになっていた。

『『『『カッ!』』』』』

「ッ!?しまっ!?」

遠方で輝く光に、彼女は歯を食いしばった。誰かがやられる。誰だ? 私か? 私の部下か? それとも……。そんな考えが佳織の脳裏によぎる。

だが、光線属種のレーザーが怪獣を、戦術機を貫く事は無かった。放たれたレーザーは、モスラの散布した鱗粉の結界の中で乱反射し、屈折を繰り返した挙げ句に放った光線属種の群れの場所へ向かっていき、無数の光線属種を蒸発させてしまった。

「なっ!?」

「うそ……!?」

レーザーを受け止めるところか、屈折・反射させ撃ち返してしまつたモスラの鱗粉の凄さに、それを見ていたみちるや水月は驚愕せざるを得なかった。

更にレーザーを撃ってくる光線属種。しかし、重光線級のレーザーでさえ、鱗粉の結界を貫く事は出来なかった。こちらは撃ち返される事は無かったが、結界の中でレーザーを分散され無力化されていた。

そして、鱗粉による結界の恩恵を受けていたのはモスラだけではない。戦術機部隊も、今はその恩恵を受けていたのだ。彼等に向かつて放たれたレーザーも、全て結界に阻まれあらゆる方向へ逸らされるか無効化されるだけ。

これまで、数多くの戦術機を撃ち落としてきたレーザーの光。それ

は必殺の光として多くの衛士達に恐れられていた。だがそれも、モスラの放つ結界の前には無力だった。そして、その現実が衛士達の士気を高める。更には……。

「うおおおおっ！ 守護神モスラに続けえええええっ！」

オーブンチャネルで衛士の誰かが叫んだ。そして……。

「「「「「おおおおおおおおおっ！」「」」」」」

一気に衛士達の間を波及し士気を最高潮まで高めていく。

そこに、ゲートから出現した戦車級と要撃級の群れが現れ、戦術機部隊に向かつていく。

「来るぞっ！ 各自、兵器使用自由っ！」

佳織は咄嗟に唯依達に指示を出す。だがそれは彼女だけではなく、みちるや大和田と言った各部隊の長も同じ。

そして、彼等は異口同音を叫ぶ。

「「「「「BETAを迎撃せよっ！」「」」」」」

「「「「「了解っ！！」「」」」」」

そして、彼等はそれぞれの機体を持つ武器で攻撃を開始した。無数の火線が、向かってくるBETAの群れを穿ち撃ち抜いていく。後続のBETA群もゲートから現れるが、姿を見せた所をバトラのプリズム光線が蒸発させる。

と、そこに左右から迂回するようにして戦車級の群れが向かってくる。左右合わせて2千。片方1000ずつだ。これを迎撃したのが……。

「ヴァルキリー中隊っ！ 2時の方向より迫る戦車級を迎撃するぞっ！」

「デリング中隊っ！ 俺達は11時の方角だっ！ 行くぞっ！」

ヴァルキリー中隊とデリング中隊だった。

進撃する戦術機部隊から離れた合計24機の不知火が、戦車級の迎撃に向かう。

「おおおおおおおっ！」

慎二の不知火が、両手に持った突撃砲を撃ちまくる。放たれた弾丸の雨が数体の戦車級をズタズタに引き裂く。だが、同族の屍を超えて

現れた戦車級がデリング中隊の不知火に向かって飛びかかってきた。  
「ッ！散開ッ！」

大和田の指示を受け周囲に散る不知火。そしてそれぞれが時に単独で、時に仲間と連携しながら、戦車級を次々と蹴散らしていった。  
『動くっ！動くぞっ！前よりも、もつと早くっ！正確にっ！』

そんな中で孝之の不知火は、群れの中を縦横無尽に動き回りながら、突撃砲で1匹ずつ、確実に仕留めていった。

『行けるっ！この強化型不知火ならっ！いや、コスモスの技術と、怪獣達と一緒に戦ってくれるのならっ！』

「俺達は、BETAに勝てるっ!!」

コクピットの中で叫びながら、彼は戦車級を蹴散らしていった。

一方、前進する唯依達を含めた戦術機部隊。途中、彼等を包囲しようとして左右から戦車級や要撃級の群れが向かってくるが、それらも戦術機部隊と、光線属種による『レーザーの迎撃』が無くなって十全に機能するようになった艦砲射撃の連携によって悉く撃破されていった。

そしてハイヴの跡地となったクレーターまでもう少し、と言う所で、まるでクレーターから溢れ出るように無数のBETAが現れた。

「ッ!?まだあんなに居たのかよっ！」

それを確認した安芸が叫ぶ。しかし……。

「いいえっ！」

それを上総が通信で遮った。

「これまで出現したBETAの大凡の数。更にギドラ達の攻撃で駆逐されたであろう数などを計算して考えると、既に15万近いのBETAが屠られた事になりますっ！となれば、残っているであろうBETAは多く見積もっても8万前後っ！それを考えれば……！」

「あれが最後の群れって事だよねっ！」

上総の言わんとしている事を理解した志摩子が叫ぶ。

「そう言う事ですわっ！」

「よしっ！各機っ！ここからが正念場だぞっ！BETAの群れを駆逐し、我々人類の歴史に勝利を刻むっ！総員っ！怪獣に続けえっ！」



「了解っ！了解っ！」

佳織の激励を受け、唯依達の武御雷が前に出る。更に彼女達に続いて、帝国陸軍や他の国の部隊も前へ前へ進んでいく。

そんな中で、キングギドラが荒れ果てた大地の上に降り立った。と同時に、その周囲に即座に展開される佳織以下、特別遊撃隊の唯依達の戦術機。

「各機、攻撃開始っ！」

「了解っ！了解っ！」

佳織の指示を受け、彼女達は突撃砲で戦車級や要撃級を優先的に攻撃していく。そして、彼女達の援護を受けてギドラは自由に暴れ回った。

これまでの戦いを見ると、怪獣こそが勝利の鍵であり唯依達は脇役という感じはどうしても否めない。だが、それは少々誤解がある。

怪獣の持つ破壊力の大きさは、既に誰もが認める事実だ。だが、ギドラの攻撃に関して『連射能力』という意味では戦術機の武装に劣るのだ。もちろんギドラの技はどれをとっても一撃で数千のBETAを屠れる力がある。だが、引力光線なども、一気に何十回と連射出来る訳ではない。そこには必ずインターバルが存在する。そしてBETAは、そのインターバルの合間に距離を詰めてくる。それを護るのが、唯依達なのだ。

戦車級や要撃級は、BETA群の中でも特に数が多い。更に言えば戦車級は、BETA群の大半を占める。しかし、数は多くとも戦術機の突撃砲であれば容易に撃破出来る。しかし逆に、戦術機では突撃級や要塞級、光線属種の相手は不利だ。それを覆すのが怪獣であり、そして怪獣に迫る要撃級や戦車級を戦術機部隊が倒し援護する。

お互いをカバーしあう戦い方を、唯依達は実行していた。そして唯依達のカバーがあるからこそ、ギドラは戦車級などを半ば放置して自由に戦えているのだ。

1箇所陣取ったギドラの引力光線による砲撃と、唯依達の戦術機

部隊による弾丸の雨がBETAを次々と屠っていく。更に彼等の周囲に展開した各国戦術機部隊も、それを援護していた。更に、戦車級の群れを撃破した孝之達までも合流してきた事で、数千に及ぶ火線が戦車級や要撃級の群れをミンチに変えていく。

一方、クレーター上空に到達したモスラはそこから円を描くように飛行し、周囲に鱗粉を撒いて結界を作って居た。そんなモスラを、地上のBETAの群れは見上げる事しか出来ない。光線属種のレーザーを封じられた今、BETAに対空攻撃能力は無いのだ。

空を悠々と飛び回りながら鱗粉を散布するモスラ。そして、バトラは1箇所に残まりながら浮いていた。

『キュガアアアアッ！』

そしてバトラが咆哮を上げると、その額にある角に雷のような黄色いエネルギーが収束していく。と、次の瞬間、バトラがもう一度咆哮を上げ角を振り下ろした。すると角から雷のようなエネルギーが照射される。だが、放たれたエネルギーはモスラの鱗粉結界によって分散され、まるで部屋の中をミラーボールが跳ね回るように四方八方へ無規則に散らばり反射を繰り返す。

1が2へ。2が4へ。4が8へ。8が16へ。16が32へ。32が64へ。64が128へ。分散されたエネルギーがねずみ算式に増えていきながら結界の中を縦横無尽に飛び回る。

そのどこか幻想的な状況に、モスラとバトラの援護を命じられ2体の後を追っていた戦術機部隊の衛士達は呆然となっていた。しかし彼等はふと思った。『バトラは何故、結界のせいで光線が使えないのに、その光線を使ったのか?』と。

しかしバトラは分かっている。光線を使ったのだ。なぜならこれは、モスラとバトラの合体技の準備に過ぎないのだから。

『キュアアアアアッ！』

不意に響き渡るモスラの叫び。すると、これまで不規則に飛び交っていたエネルギーが突如として一点に向かって反射。そしてその一点に集まり、膨大なエネルギーとして収束していった。

如何に怪獣と言えど、一度に放てるエネルギーには限界がある。だが、それを応用で回避したのが、モスラとバトラの合体技なのだ。バトラの放ったエネルギーが、空中で紫電を纏った雷球となる。そして……。

『キュアアアアアアアアッ！』

『キュガアアアアアアアッ！』

2体の咆哮が轟いた刹那。

『カッ!!』

一瞬の閃光。直後、クレーターに向かって真っ直ぐに放たれる極大な紫電の柱。

そして着弾と同時に紫電の荒波が、四方へ走る。

『『『バリバリバリバリバリッ!!』』』』

紫電の荒波がBETAの群れの中を走り抜け、全ての個体を内側から破壊する。その紫電の圧倒的な出力によって、着弾点に近かったBETAの群れはその殆どが炭化する程だった。

これこそが、モスラの鱗粉とバトラのプリズム光線の合体技、『プリズム・バスター』。

そして放たれたプリズム・バスターは、ハイヴモニュメントのあった場所のほぼ真上で放たれたのだ。そのため、プリズム・バスターの紫電はハイヴ内部を駆け巡り、地下深くにあった反応炉をも直撃。

『ドオオオオオオオオンッ！』

大爆発を起こし爆炎がクレーター中央や各地のゲートから上がる。

そして、それとほぼ同時に……。

『おおおおおおおおっ！』

『はあああああああっ！』

上総と安芸の武御雷が、最後に残っていた要塞級の足の付け根を長刀で切り裂いた。体液を吹き出しながら倒れる要塞級。

『はああああっ！』

そして、倒れた要塞級の頭を唯依の武御雷の長刀で切り裂いた。

最後の要塞級が倒れた事で、戦術機たちは動きを止めた。

「あ、あれ？BETAは？」

慎二は戸惑いながらも周囲を見回し、レーダーも見つめる。だがレーダーにもカメラにも、動くBETAの影は見られなかった。

だがそれは慎二だけではない。他の者達も、敵はどこだ？BETAはどこだ？と言わんばかりに周囲を見回す。だが、戦いは終わったのだ。

『前線部隊の各員へ通達する』

そこに、後方のパウルから全部隊に通信が届いた。

『ハイヴ周辺におけるBETA掃討を確認した。もはや周辺にBETAはいない。更に、モスラとバトラの攻撃で鉄原ハイヴの反応炉も完全に破壊された。本来は攻略後に我々が破壊する予定だったが、必要無くなったようだ』

「じ、じゃあ……」

ポツリと、パウルの言葉を聞いて漏らす志摩子。他の者達も、まさかと言わんばかりの表情だ。いや、だが彼等が呆然としているのは無理も無い。これまでずっと、人類を脅かしてきたBETAの牙城であるハイヴを、人の手で攻略した事など一度も無い。彼等が『勝利』を実感出来なかったとしても、可笑しくは無いのだ。

と、その時。

『キュアアアアアアアアッ！』

モスラの技、パルセフォニック・シャワーの光が大地に降り注ぎ、荒野となった大地を緑が覆い尽くす。吹き飛ばされた暗雲。そして広がる青空と、彼等を祝福するように降り注ぐ太陽の光。

誰もが、その光景に呆然となっていた。そんな中で……。

「う、ううっ」

衛士の1人が、感極まってその目に涙を溜める。だがそれは彼だけではない。多くの衛士達が、自らの愛機の中で涙を浮かべていた。

そして……。

『諸君。我々はハイヴを攻略した。つまり、BETAに勝利したのだっ！』

パウルの言葉が、彼等の我慢というダムを決壊させる。

「！！！！うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

多くの男達が、涙を流しながら喜びの咆哮を上げる。

『『キュルアアアアアアアアアアアッ！』』

『キュアアアアアアアアッ！』

『キュガアアアアアアッ！』

そして、彼等と共に勝利を喜ぶかのように、ギドラ・モスラ・バトラもまた勝利の咆哮を響かせるのだった。

ここに、オペレーションホープ、希望作戦は怪獣達の協力の下、人間側の完全勝利で幕を下ろしたのだった。

それから数日後。オペレーションホープ成功のニュースは瞬く間に世界中を駆け巡った。怪獣ありきとは言え、勝利は勝利。しかもBETAの巣窟であるハイヴを完全に破壊したのだ。

瞬く間に世界各地で市民による歓声が巻き起こった。これまで数十年間、ずっと後退を続けていた人類が初めて、ハイヴを攻略し領土を奪還したのだ。それも、本来予想されていたハイヴ攻略に必要な兵力の、10分の1以下の戦力でだ。

この事実が、人々に『BETAに勝てる』という可能性の未来を与え、未来への希望を抱かせた。希望作戦のその名の通り、この勝利は人々の希望となった。

そして同時に、さらなる怪獣信仰を呼び起こした。帝国ではギドラを祀る社があちこちに建てられ、世界各地では女神としてモスラを。戦神としてバトラを信仰する動きが急速に広まりつつある。

そして更に、この勝利がとある組織の設立を後押しした。

オペレーションホープから約1週間後。

帝国の某所にて、五撰家の当主5人が集まっていた。

その話題が、Gフォースについてだったのだ。

「え？Gフォースの設立が、決定したと言うのですか？」

呼び出された恭子は、その言葉に戸惑った。

「はい。但し、正確に言えば設立の決定がほぼ確実、と言う所でしょうか」

恭子にそう答える悠陽。

「既に斯衛軍上層部はこの決定に賛成している。あとは帝国議会と帝国軍の説得だけど、それも大して問題無いだろうと言うのが我々の考えだ」

斑鳩の言葉に、恭子は内心戸惑った。

「帝国議会や軍が、そう簡単に納得するでしょうか？第5の軍としてGフォースを設立するとなれば予算などの関係で議会が反発する可能性もありますか？」

「それについては心配無い。如何に議会と言えど、民衆の反対をこり押し出来る程ではないさ」

「民衆の反対、ですか？」

斑鳩の言葉に恭子は首をかしげた。

「そう。現在帝国民の間で怪獣信仰が深く浸透しているのは周知の事実。そして帝国の守護神と名高いギドラとの共闘を前提にした部隊の創設を、政威大將軍である悠陽様が提案した訳だけど、それを議会が突っぱねたとしたら、それは帝国議会が自分達よりも立場の上である政威大將軍を疎かにしている事に他ならない。そしてその事実を国民達に伝える事にもなる。更に怪獣信仰の信者は前線で戦う軍人達、つまり軍部にも多い。下手にGフォース設立を却下すれば、議会と軍部の間に亀裂を入れる事にもなりかねない。そして極めつけが、今人類は希望を見いだした状態だ。そこに怪獣と共闘を前提とした部隊。これは我々帝国民の希望を後押しするものだ。まあつまり、反対すれば民衆や軍部からの反発の可能性もあるし、逆に受け入れれば帝国民の士気高揚にも繋がる。断るデメリットが大きく、受け入れるメリットはそれ以上に大きい。……政治家とはそう言う損得勘定に聡い生き物だからね。だからこそ彼等はGフォース設立を受け入れるだろう」

「成程。しかしGフォースの設立がこれほど早く決まるとは。正直驚きです」

「ええ、恭子様の言葉も最もです。ですが、希望作戦で人々の心に灯った希望。それを消えさせるわけには参りません。これからもBET

Aとの戦いは続きます。そんな彼等の希望となる旗印が必要なのです」

「それが、キングギドラとGフォース、と言う訳ですね」

恭子は、静かに息を呑んだ。

「ええ。そして、そのGフォースをまとめる1人として、改めて指揮官の任を受けてもらえますか？ 崇宰恭子大尉」

「はっ。謹んで、拝命致します」

そうやって、Gフォース設立の動きが加速する。

希望作戦の勝利は、文字通り人類に希望を灯した。

そして、人類の反撃が始まるのだった。

第13話 END

## 第14話 別つ道

ギドラ、モスラ、バトラと共に鉄原ハイヴ攻略を目指す帝国軍、国連軍、大東亜連合軍の3軍合同部隊。3大怪獣の活躍もあって、朝鮮半島に上陸した部隊はそのまま鉄原ハイヴを攻略する。ハイヴからは膨大な量のBETAが現れるが、驚異的な力を持つギドラやモスラ・バトラの力の前にBETAと鉄原ハイヴは殲滅された。初めての領土奪還に全世界が沸く中、帝国では予想に反してGフォース設立がほぼ確定していくのだった。

希望作戦から約2週間後。帝国内部では連日テレビや新聞で『帝国第5の軍、Gフォース設立』という話題が取り上げられていた。事の発端は数日前、悠陽が帝国議会にGフォース設立を提案した事だった。加えてこの提案は斑鳩達によって世間に密かに公表されていた。そして、斑鳩の読み通りGフォース設立を容認するメリットと拒否するデメリットを考えて、議会のトップである『榊 是親(これちか)総理大臣』はGフォース設立を容認。

帝国内部では、ギドラとの共闘を前提としたGフォース設立に民衆は沸いていた。更にGフォースのアイドル、言わば偶像のような存在として唯依達がGフォースの広報を担当する事になったのだ。

元々、この帝国で最初に怪獣と共闘し、更には龍神の姫巫女たちとまで呼ばれていた事もあってか、広報の為に写真を撮られる日々が続く唯依達。

そんなGフォースには、当初の悠陽が想定していた以上の軍が集まっていた。と言うより、志願者が多かったと言うべきか。

悠陽が当初想定していたのは、まず佳織や唯依達、特別遊撃隊の1個大隊。恭子が率いる斯衛第3大隊。更に帝国陸軍から参加する1個大隊を合わせて連隊規模の戦術機部隊を創る事。それ以降は戦果を積んでいきながら、段階的に部隊を拡充していく予定だった。

しかし、最近のキングギドラの活躍や怪獣信仰の盛り上がりもあってか陸軍内部でGフォースに出向扱いとなる衛士を募った所、定員の



10倍以上の衛士が集まったのだ。更に斯衛軍内部でもGフォースへの出向を望む衛士達の声が多く、悠陽は議会との話し合いの末に、当初の1個連隊規模から倍の2個連隊規模の部隊とする事を決定。その結果、斯衛と陸軍からそれぞれ1個連隊規模の部隊を抽出して2個連隊の部隊を創設する事になった。

そうしてGフォース設立が決定した事で東京にGフォースの司令部が置かれる事になった。その司令部も、今後各地に置かれる予定のGフォース基地を統括すると言う目的を始め、戦闘部隊の為の格納庫や滑走路。更に衛士達や整備士、基地に勤務する者達の宿舎など様々な目的のために創られる為規模は必然的に大きくなる。なので今は仮設の司令部に身を寄せている唯依達。

ちなみに、悠陽の想定通り、Gフォースのトップには2人の人物がいた。1人が実動部隊の総指揮官である崇宰恭子『少佐』。恭子はGフォースへの出向に合わせて大尉から少佐へと昇級していた。もう1人が、基地の運営全般や他の軍との会議など裏方を担う彩峰菫閣中将だ。現在、2人の部下として配されている衛士達の中には唯依達。更に陸軍からは唯依たちの恩師でもある真田も部隊に参加していた。他の衛士達も、あちこちから集められた熟練の衛士達が大半を占める。

とは言え、Gフォースの必要性を疑う声も少なくは無い。理由として挙がるのは、帝国がBETAを退け前線を押し返した事にある。現在、朝鮮半島は大東亜連合軍により前線が構築されている。現状、帝国が抱える戦線は無いに等しい。警戒するべき点としては、ソ連領内に建造されたオリョクミンスクハイヴからBETAが東進し、日本海側を渡って来る可能性がある事だ。しかし、現状その可能性は低いのだ。理由は1つ。ソビエト領内では当初からアンギラスが暴れていた事だ。

世界で最初に目撃されたアンギラスの戦闘能力は、バラゴンやガーデー以上でありモスラ・バトラ、キングギドラ以下というレベルの物だ。そのため単独でハイヴを攻略するのは難しいが、BETAの間引きという点ではその力を遺憾なく発揮していた。

なので現在、アジア方面ではアンギラスの活躍もあつて欧州や南アジア方面と比べてBETAの活動は抑えられつつある。

そのため、現状Gフォースの衛士や兵士達がやる事と言えば、陸軍と斯衛軍という2つの異なる組織から合流してきた者同士、親交を深めつつも部隊としての練度や技術を磨く演習を繰り返す事くらいだった。

とまあ、設立したのは良い物の、あまり出番があるとは言えないGフォース。今はもっぱら大きな戦いに備えている、と言う状態だ。ただ、そう言えば聞こえは良いが実際には手持ち無沙汰とも取れる。しかも軍を維持するには金が掛かる。だからこそ、優勢な今の状況下で金の掛かる新しい軍を創る、と言う事に少なからず反発があつただ。

とは言え、その反発も多いわけではない。大抵の市民や軍人たち、更に世論の状況を気にしている政治家たちはGフォースの存在を喜んで受け入れた。

とまあ、そんな感じの中設立されたGフォース。そしてその部隊に配属になった唯依達。彼女達は今日も今日とて演習を終え、今は食堂に集まつてお茶を飲みながら、恩師である真田を交えて話をしていった。

「しかしまあ、まさかお前達と同じ部隊で肩を並べて戦える日が来るとはな。人生何があるか分からん物だな」

と、教え子である唯依達の成長を前に、真田はそんな事を呟いた。「それは私達もですよ。……まさか死の8分を超えて、最新鋭の第3世代に乗れる日が来るなんて、思つても居ませんでした」

真田の言葉にそう返す和泉。更に彼女の傍に居た志摩子や安芸たちが頷く。

「……まだ2年も経つてないのに。気がつくとも随分遠い所に来たよな、私らつて」

ポツリと呟く安芸。そして彼女達はふと顔を思い返す。

訓練校での日々。絶望的な状況の中、出会ったバラゴンとガーデー。彼等と共に戦い、一度はその終わりを見送り、絶望に暮れた

日々。そして今度は、蘇ったキングギドラと共に戦場を駆け抜けた日々。京都防衛戦から始まり、明星作戦、出雲攻略戦、希望作戦。彼女達は数多の戦場を聖獣、怪獣と共に駆け抜け、共に戦い、生き残った。そして今、彼女達は1つの軍の、エースパイロットとなった。

それが精々、1年半前から続いていた彼女達の軌跡だった。

「本当に、こんな所まで来たんだね」

そう言つて志摩子は、纏っていたGフォース隊員を示すジャケットの、その右胸に描かれたワツペンに優しく触れる。

そのワツペンは、中央にキングギドラが描かれ、それを囲うように筆記体で描かれた大文字のG。そのマークこそが、彼等がGフォースの兵士である証。そして更には、唯依達にとって『ギドラと共に歩むと誓った証』でもあった。

と、彼女達が思い出話でしんみりしていた時だった。

「篁中尉」

食堂に現れた彼女達の隊長である佳織。

「ッ、如月大尉」

名を呼ばれた唯依は席を立てて敬礼をする。

「ちようど良かった。お前に連絡が来ていたぞ」

「私に、ですか？」

「ああ。帝国陸軍技術廠の巖谷中佐から連絡があつてな。明日、第壱開発局の自分の所へ来て欲しいそうだ。幸い明日は特に予定が無かつたのでこちらで問題無いと伝えていたが、良かったか？」

「はい。ありがとうございます」

『巖谷のおじさま、私に何の用だろうか？』

と、内心唯依は首をかしげていた。

翌日、唯依は呼ばれた通り、第壱開発局へと向かった。

今回彼女を呼び出したのは『巖谷（いわや） 榮二（えいじ）』中佐。唯依にとっては親戚のおじさんのような人で、唯依の父、『篁 裕唯（ゆい）』中佐は斯衛の戦術機である瑞鶴の開発に関わっていた。更に元々、榮二は斯衛軍の開発衛士、いわゆるテストパイロットとして活躍していたのだが、実戦へ参加するために帝国軍に移った経緯があ

る。そのため唯依の父と榮二は顔見知りであり共に仕事をした中だ。それもあつてか榮二も唯依を実の娘のように可愛がっていた。おかげで唯依からは巖谷のおじ様、とも呼ばれている。

そんな彼が唯依を呼び出したのだ。唯依は内心不思議だった。彼とはここ最近、会っていなかったからだ。特別調査隊の設立以降、唯依は仲間たちやギドラと共にずっと前線で戦っていたからだ。実際、最前線部隊である唯依はここ最近、母と顔を合わせた事も少ないのだ。

何故だろう？と彼女は内心考えながらも、榮二の待つ部屋にたどり着いた。

『コンコンッ』

「はい？」

唯依がドアをノックすると中から男性の声が聞こえた。

「招集により参上しました。Gフォース所属、篁唯依中尉であります。入室してもよろしいでしょうか？」

「ああ。どうぞ」

「失礼します」

促されるまま、中に入る唯依。そして部屋の奥にある執務机には、左頬に大きな傷を負った男性が座っていた。

「急に呼び出してしまつてすまない篁中尉。どうしても貴官に話しておきたい事があつてな」

「話、でありますか？」

「ああ」

唯依はじつと自分を見せる榮二を前に内心、呼び出された理由が分からず戸惑い冷や汗を流していた。……のだが……。

「くっ、ははははっ」

「ちゆ、中佐？」

突然榮二が笑い出したのだ。これには唯依も戸惑うばかりだ。

「そんな堅苦しい態度はやめて良いぞ。唯依ちゃん」

「お、おじさまっ！それはやめてくださいっ！今の私はもう立派な衛士なんですよ?!」

突然の昔の呼び方に、唯依は顔を赤くして狼狽した。

「ははっ。すまんすまん」

そう言つて笑みを浮かべる榮二。しかし彼はやがて、父親が娘を見るような優しい目で唯依を見つめる。

「しかし、しばらく会わない間に随分立派になったな、唯依ちゃん」

「は、はい。ありがとうございます、おじ様」

彼からの褒め言葉に、唯依は顔を赤くしながら笑みを浮かべていた。

そんな中で榮二は……。

『唯依ちゃんのような年頃の少女が、長く戦場に身を置いていたんだ。精神的な傷を負ってないかと心配していたのだが、どうやら問題なさそうだな。これも、唯依ちゃんや彼女の仲間を護ったキングギドラのおかげか』

と、内心唯依の事を心配していたのだが、今まで通りで安心していった。

「さて。今日ここに君を呼んだのは実はある提案があるからなんだ」

「提案、ですか？」

「ああ。一応先に言っておくと強制力のある命令ではない。提案というか、お願い、依頼のような物かな」

「はあ。それで、そのお願いというのは？」

首をかしげながらも話の先を促す唯依。

「実は、唯依ちゃんに斯衛軍のホワイトファンクスに入つて欲しいんだ」

「斯衛のホワイトファンクス、と言うと確か装備実験部隊でしたか？」

「ああ。新装備を戦場などで実際に使つてその効果や問題点の洗い出しなどを行う試験部隊だ。……実は、この話は君の父親、篁中佐からの提案なんだ」

「え？お父様の？」

「ああ。まあ何というか、親馬鹿、かな。アイツや梅納（せんな）さん（※唯依の母親）は最前線に出ずっぱりの唯依ちゃんを本当に心配している。そんな中、BETAの脅威は帝国から遠ざけられた。2人に

してみれば、今のうちに唯依ちゃんを少しでも安全な所に行かせたい  
んだろう。で、武御雷の事とかで忙しいアイツに変わって俺がこの話  
を唯依ちゃんにする事になったんだが」

「……………」

榮二の言葉に唯依はしばし黙り込んでしまった。彼女も、両親から  
心配されている事に悪い気はしていない。それが愛情表現のような  
物であるのは分かる。分かるが、今の彼女に前線から離れる気は無  
かった。

今、彼女の脳裏に浮かぶのは戦場の情景だった。

かつては絶望しか無かった戦場を、最新鋭の戦術機を駆って仲間達  
と共に駆け抜け、そしてギドラと共に空を飛び戦う。愛機を駆って、  
仲間と、人ならざる戦友と戦い勝利する。そんな情景が彼女の脳裏に  
浮かぶ。

榮二の提案を受け入れる事は、その場所から離れると言う事に他な  
らない。だから最初、唯依は断るつもりだった。だがふと、彼女は  
思った。それはかつて彼女自身が戦いの中で思った事が発端だった。

「巖谷中佐。…………その提案、受けさせて下さい」

「ッ？良いのか唯依ちゃん。俺は正直、Gフォースから離れる事にな  
るから断られるかと思っていたんだが？」

彼女の答えは榮二も予想外の言葉だった。そのため驚いた様子の  
榮二。

「…………正直、Gフォースを離れる事に未練があるかと問われれば、あり  
ます。でも、ギドラと一番近い所で共に戦っていた1人として、私に  
は思う所があるんです」

「と言うと？」

「元々、私達が武御雷に機種転換をしたのは瑞鶴ではギドラの随伴機  
として力不足だったからです。実際、武御雷や不知火のような第3世  
代機レベルでなければギドラに随伴するのは難しいでしょう。しか  
しその第3世代機である武御雷であっても、戦術機の根本的な武装が  
変わらない以上、射撃による攻撃力の点で言えば瑞鶴と大した違いは

ありません」

「……確かに、第1世代や第3世代とは言え、使う突撃砲は同一の物だ。武装による攻撃力という点では、確かに瑞鶴と武御雷でも大した差はない」

「はい。……確かに武御雷は優れた機体です。ですがギドラと共に戦うのならば、もっと強い武器が必要だと考えます」

「成程。……そのために、ホワイトファンクスに移る、と?」

「はい。……来たるべき決戦の時、私達が戦術機を駆って怪獣と、ギドラやモスラ、バトラ。多くの怪獣たちと肩を並べて戦う為に。少しでも、彼等の力になれる武器を作るために」

そう言って、唯依は真っ直ぐ榮二を見つめる。榮二は、彼女の瞳の奥で炎が揺らめくのを幻視した。

「ふっ、そうか」

そして彼は笑みを浮かべながら頷いた。

『変わってないっと思っていたが、立派になったな唯依ちゃん。今の君は、立派な衛士だ』

娘のような存在だった唯依の成長ぶりに、内心溢れそうになる涙を堪える榮二。そして彼は口を開く。

「ならば笹唯依中尉。貴官の働きに期待するぞ」

「はっ! 必ずや、ご期待に添えるよう努力する所存でありますっ!」

唯依は、元気の良い返事と共に敬礼をした。

彼女は、今だけはGフォースを離れる決心をした。しかしそれは別れではない。一度は道を別とうとも、再び唯依と仲間たちの道は交わる。そして再び共に歩みを進めるとき、今よりも強くなって共に異星起源種と戦う為に。

また出会う事を誓いながら、唯依は一度、仲間たちと別の道を歩む決心をするのだった。

その後、唯依は基地に戻りこのことを隊長である佳織や志摩子達に報告した。佳織の方は『分かった』と言って納得するだけだったが、志

摩子達はやはり悲しそうだった。

「唯依、本当に斯衛に戻るの？」

「うん。ごめんね和泉。もう、決めた事なの」

和泉の悲しそうな表情を前にしても、唯依の決心は固かった。

「本当に、行くんだな？唯依」

「ええ」

安芸の問いかけにも、彼女は静かに頷く。

そんな安芸の隣では、志摩子が悲しそうな表情を浮かべていた。

だが……。

「皆さん、これは別れではありませんよ」

上総がそう言って3人の顔を上げさせる。

「いずれまた、戻ってくるのでしょうか？唯依」

「ええ。もちろん」

上総の問いかけに、唯依は笑みを浮かべながら頷いた。

「何年後になるか分からないけど、今ある兵器や戦術機よりも、もっと強い武器や戦術機をお土産に私はGフォースに戻ってくる。そのつもりよ」

それが唯依の決心だった。

「何年後になるか分からない。でも、私は必ず戻ってくる。そしてまた皆と。ギドラと一緒に戦う」

彼女の言葉に3人は戸惑いながらも、やがて笑みを浮かべた。

そして安芸が唯依の方に拳を突出した。

「約束だぞ、唯依。必ず戻ってこいよ」

「ええ。もちろん」

唯依は、安芸の言葉に応えながら彼女の拳に自分の拳を合わせる。すると、更に上総も拳を合わせて来た。

「例え、今は違う道を進むとしても目指す未来は同じですわ」  
「そうだね」

更に志摩子も頷きながら拳を合わせる。

「ギドラと一緒に戦って、BETAをこの星から追い出す」  
「それが、私達のゴール」



そして和泉も拳を合わせる。

5人の少女達は拳を合わせながら、お互いの顔を見つめ笑みを浮かべる。

「「「いつかまた、一緒に戦う日まで」」」

そして異口同音の言葉を呟き、しばしの別れといつかの未来で再会し共に戦う事を決意するのだった。

そして、彼女達の居る食堂のドアの外。そこに真田の姿があった。しかし彼は『俺の役目は無いか』と、笑みを浮かべながらポツリと呟くとその場を後にするのだった。

それから数日後。唯依は正式な辞令によって斯衛軍の装備試験部隊である『白い牙中隊』、ホワイトファンクスに異動する事になった。今日から数日後には、唯依はGフォースを離れる事になる。

そんな中安芸が、『このことはギドラにも話さないとな』と言ってギドラの元に行こうと言いだしたのだ。幸い、BETAとの戦線がほぼ消滅状態の帝国は平和であった為、彼女達5人が出した休暇申請は受理された。

そして彼女達は休日を使って富士の樹海を目指していった。

バスなどに揺られる事、数時間。唯依達5人はとある場所に到着した。そこは、明星作戦の頃はBETAによる侵攻で荒れ果てた大地だったが、モスラのパルセフォニック・シャワーによって今は緑溢れる草原になっていた。そしてその草原の一角に巨大な神社があった。

その神社の名は『魏怒羅神社』。早い話がキングギドラを祀っている神社だ。

そしてこの魏怒羅神社は今、大勢の参拝客で溢れかえっていた。彼等は皆、神社の奥にある木製のギドラの像を参拝するためにここに来ていたのだ。そもそも唯依達がここに来たのもこの魏怒羅神社へ来るバスの路線を使ったからだ。

ただし、唯依達は神社に用があったのではない。彼女達は神社のすぐ後ろにある、フェンスに囲まれた大きなゲートへと向かった。この

フェンスはモナークと帝国軍によって作られたのだ。このフェンスを越えて少し歩いた場所に、ギドラの眠る洞窟がある。しかし今は無闇に人が近づかないよう、こうしてフェンスが作られたのだ。加えて、このフェンスの内側は国有地扱いとなっているので軍人と言えどもそう簡単に中に入る事は出来ない。

ただし、例外的な人物が5人ほど居る。そう、唯依たちだ。

で、彼女達はフェンスの向こうに行くゲートに向かっていった。……のだが。

「っ！お、おいあれっ」

「ああ。間違い無い。姫巫女様たちだ」

参拝客が唯依たちに気づいた。

「ありがたや、ありがたや」

更に年配の参拝客達は彼女達に向かって手を合わせ始めた。

するとそれにつられて他の参拝客達までもが唯依達に向かって手を合わせ始めたのだ。

「な、何か私達凄く注目されてない」

「い、急ぎますわよっ」

戸惑う志摩子の言葉に、上総はそう答えた。そして5人は顔を赤くしながら急ぎ足でゲートへ向かうのだった。

そして、ゲートに付くなり、手荷物検査など一切無しに顔パスで通された5人。ゲートを越えて歩く事数分。彼女達はギドラの眠る洞窟までやってきた。

そして中に降りる5人。

「お〜い、ギドラ〜」

真っ先に降りた安芸が、洞窟の奥で眠っていたギドラに声を掛ける。

『キュルア』

すると、ギドラは欠伸をしながら目を覚まし体をブルリと震わせてから来客、唯依達へと目を向けた。

『キュルルッ』

そして彼女達の来訪を喜ぶかのように喉を鳴らした。

「あのさ、ギドラ」

『『キュルルッ?』』

安芸が声を掛けると、左右の頭が首をかしげた。

「実は、唯依の事で話さなきゃいけない事があるんだ」

そうして、5人はギドラに語った。唯依が別の部隊に行くこと。だからこれから一緒に戦えない事。しばらく別れる事になる事。でも唯依は必ず帰ってくる事。

そして5人が話を終わると……。

『『キュルルルウ』』

ギドラの左右の首は、悲しそうに喉を鳴らした。

ギドラは、彼女達の言葉を100%理解している訳ではない。それでも、彼女達の話聞き理解出来ない訳ではない。そして理解したからこそ、しばらく唯依に会えない事を知って悲しそうな声を漏らしたのだ。

「ギドラ」

唯依が他の4人から離れ、ギドラの傍に歩み寄る。すると左右の首が彼女の元に伸びてくる。彼女は、両手でギドラの2つの頭の顎をそれぞれ撫でる。

「ごめんねギドラ。急な話になっちゃって。でも、約束する。私は必ず戻ってくるから。だから待ってて。きつと強くなつて戻ってくるから。だからお願い。その時まで待ってて」

そう言って、唯依はギドラの事を撫でる。そして撫でること約1分。唯依が手を離した後退ると、左右の頭も伸ばしていた首を戻した。だが……。

『『キュルル』』

『『キュルルアアア』』

左右の首はお互いに向かい合い、何かを話しているようだった。唯依達が何を?と内心首をかしげていると、不意に唯依達から見て左側の首が、右側の首の中腹辺りにその鼻先をゴシゴシと擦りつけ始めたのだ。

「ギドラ?何を?」

唯依が戸惑いながら声を掛けると……。

『パキッ』

何かが割れるような乾いた音と共に、洞窟の天井から僅かに光を反射しながら『何か』が唯依の前に落ちてきた。唯依はそれを拾い上げる。それは……。

「これって。ギドラの、鱗の欠片？」

彼女の前に落ちてきた物。それは金色に輝くギドラの鱗の欠片だった。大きさは、彼女の掌に乗る程小さい。

それは、千年竜王からの贈り物であった。

重光線級のレーザーをも弾き返す竜王の鎧。

その鎧の一欠片が、今彼女の手の中にある。

これはそう、ギドラから唯依へ送られた『お守り』なのだ。

そして、その意図を察してか、唯依は静かに涙を目尻に溜めながらギドラを見上げる。

「ありがとう、ギドラ。必ず戻ってくるから。それまで待っていてね」

『『キュルアアア』』

唯依の言葉に頷くように、左右の首は喉を鳴らし、中央の首も頷くように頭を上下に振る。

そして、唯依が泣き止んだ後。

「なあギドラっ！実は私たちからお前に見せたい物があるんだっ！」

『『キュル？』』

安芸の言葉に首をかしげるギドラ。安芸は『ちよつと待っていてくれよな！』というと、他の4人と共に岩陰でガサゴソと物音をさせながら何かの準備をしていた。

そして数分後。岩陰から出てきた彼女達の姿は、変わっていた。

来た時の私服ではなく、白と赤の服装、『巫女服』を纏った5人。その手には鈴が握られていた。

そして5人はギドラの前に横一列で並ぶ。

「これまで、ギドラにはたくさん世話になってきたよな」

そう言って、安芸が鈴を掲げる。

「だからこれは私達からのお礼」

続いて和泉が鈴を掲げる。

「皆で一緒に考えて練習して、頑張ったんだ」

更に志摩子が鈴を掲げる。

「まだまだ拙い所があるかもしれませんが」

上総が鈴を掲げる。

「それでも、どうか見て下さい。私達の舞を」

そして、唯依が鈴を掲げる。

『『『『シヤンッ！』』』』』

鈴の音が洞窟の中に中に鳴り響き、そして彼女達の舞は始まった。ゆったりした動きのまま5人が動き回り、時折鈴の音が洞窟に響く。

キングギドラは、それを静かに見守っていた。

シヤン、シヤンと鈴を鳴らしながら5人は舞う。

もちろん、本格的な練習をした訳ではない。衛士としての本分をこなす合間に集まって練習した程度だ。だから動きも所々ぎこちない。

それでも、彼女達の『想い』は。キングギドラという戦友に確かに届いた。

『『『『シヤンッ』』』』』

そして最後、鈴を一齐に鳴らした所で唯依たちは動きを止めた。

『『『『キュルアアア』』』』』

するとギドラが満足そうに喉を鳴らす。

でも、贈り物は舞だけではなかった。志摩子と和泉が作ってきた、デフォルメされたギドラのぬいぐるみが、洞窟の隅、平たい石の上に置かれる。もちろん、濡れたりしないようケースに覆われた状態で、だが。

更に、記念写真にと安芸が持ってきていたカメラで5人とキングギドラの写真を撮った。

そして、唯依達は最後にギドラの頭を撫でると洞窟を後にした。

それから数日後。唯依は正式に斯衛軍のホワイトファンクスへ異

動となり、荷物をまとめて迎えに来た斯衛軍衛士の運転する車に彼女は乗り込んだ。そして唯依は上総たちに見送られながら、Gフォース基地を後にした。

そして、唯依はそのまま車の中で揺られていた。しかし唯依は徐に、首から下げていたネックレスを取り出す。ネックレスの先には丸い中くらいのケースが付いており、中を開けるとそこにはキングギドラの鱗の欠片が収められていた。

鱗の欠片を見つめた後、それをしまおうと唯依はポケットの中から一枚の写真を取り出した。

そこには、キングギドラの3本の首と唯依達5人が描かれていた。それはあの日、洞窟で撮られた写真だ。

「いつてきます」

そして唯依は、遠くに居る戦友、ギドラに語りかけるように小さく呟きながら笑みを浮かべた。

そして遠く離れたギドラの眠る洞窟の中。

その一角にあるデフォルメされたギドラのぬいぐるみ。

その隣に、唯依の持つ物と同じ写真を収めた写真立てが飾られていたのだった。

例え今は道を別つとしても、いつかまた、共に戦う事を信じて。唯依は己の道を進むのだった。

第14話 END

## 第15話 覚醒

希望作戦を経て、帝国内部に結成される事になった新たな軍、Gフォース。しかしそんな中、唯依は両親や親しい知人である巖谷榮二中佐の勧めを受け、帝国斯衛軍の装備実験部隊、ホワイトファンクスに移籍する事になった。彼女は、来たるべき決戦の日に備えて、今よりも強い武器や戦術機を作りたいと言う思いからホワイトファンクスに異動する事を決意。

そして彼女は上総たちと共に、その事をキングギドラへ伝える為富士の樹海跡地となった草原へとやってきた。そしてギドラから鱗をお守りとして受け取ったり、これまでのお礼として舞を披露した唯依達。そして数日後、唯依は正式にホワイトファンクスへ異動となった。

Gフォース設立から、既に1ヶ月ほどが経過した2000年12月。あともう少しで新年と言う事だが、今年も去年よりも平和な新年が祝えそうな雰囲気の帝国。理由は言わずもがな。ギドラとモスラ、バトラ、更に大陸のアンギラスの活躍によってBETAが退けられているからだ。

そんな中で、上総や安芸たちはGフォースの衛士として訓練を続けていた。所変わって、国連軍所属の夕呼やパウル、更にはみちる達衛士も、コスモスベースと横浜基地という往来こそあるが、戦闘は皆無と言って良い状況だった。

今は帝国全体が平和を謳歌していたのだった。

とは言えBETAとの大戦に勝利したわけではない。なので軍部は今のように軍備再編と軍備拡張を急いでいる。新しく斯衛のホワイトファンクスに移った唯依も、今は新しい環境に慣れようと忙しい日々を送っていた。

まあ、それでも最前線で戦うよりは平和な日常なのだが。

だが、今現在平和なのは最前線から遠い北米や南米、オーストラリ

ア。あとは今のよう

前線を押し返した帝国くらいだ。他の国はそうも言ってもらえない。特に欧州は激戦区だ。

キングギドラのように特定の地域を護る怪獣は今も発見されていない。定期的にモスラとバトラがやってきてはBETAの間引きを行っているが、それでも帝国などに比べると怪獣の影響力は大きいとは言えなかった。

かつてゴジラによってリヨンハイヴが撃破された後、リヨンハイヴ一帯は放射能に汚染された。それもBETAの光線種変異種、清掃級によって除染されたため、今はEU、欧州連合軍による欧州奪還に向けたBETAとの戦いがあちこちで行われていた。

そして今日も。欧州各国の軍が最前線に展開され、西進してくるBETAの群れを相手に戦っていた。

今現在、欧州では独自開発された第3世代戦術機が戦線に投入されている。イギリスの『EF-2000タイフーン』、フランスの『ラファール』。スウェーデンの『JAS-39グリペン』。だが、第3世代機は第1世代機や第2世代機と比較して数が少ない。なのでEU軍の主力戦術機は今も第2世代機などが中心だ。

そんな第2世代機中心のEU軍。彼等は立派に戦っていたが、それでもやはり戦術機部隊だけではBETAの大軍を退ける事は簡単ではない。

「おおおおおおおっー！」

絶望的な戦場。それでも兵士たちは必死に戦っていた。生き残る為、誰かを守るために。

それを嘲笑うかのように、倒しても倒してもBETAは向かってくる。その絶望が多くの兵士達の心をへし折る。

だが……。

『グララッ！』

「っ!?何だっ!?」

突如として大地が揺れ始めた。多くの衛士達は、『BETAの地下侵攻かっ!?』と考え顔を青くしていた。だが違った。



『ドバアアアアアッ!』

突如、E U軍戦術機部隊と向かってくるBETAの中間地点付近の大地が吹き飛んだ。さらのその余波で周囲に砂煙が立ち上る。

「何だ!?何が起きたっ!」

通信の中で状況を確認しようと衛士達が叫ぶ。彼等は咄嗟に戦術機の跳躍ユニットを吹かす事で砂煙を吹き飛ばした。

そして彼等は見つけた。

赤いトゲトゲとした体。四足歩行に長い尻尾。両手両足の長い爪。そう、それは……。

「か、怪獣!」

そう、正しく怪獣であった。

『ギウアアアアアアッ!』

そして怪獣、『電撃怪獣ボルギルス』は咆哮を上げた。

突然現れた怪獣に、戦術機部隊は戸惑いながら動きを止めてしまった。

「HQ!HQ!緊急連絡っ!前線戦闘地帯にて怪獣出現っ!繰り返すっ!怪獣出現っ!」

その時、中隊指揮官であった1人の男がすぐさま後方の司令部へ通信を繋げ報告をした。

「何っ!?怪獣が出ただど!?でその怪獣はっ!?モスラか!?バトラか!」

『いえっ!データベースに該当する怪獣は居ませんっ!新種ですっ!』

「っ!?ここへ来て、新たな怪獣だど!」

後方にいる将官たちは前線からの報告に戸惑った。彼等が怪獣出現を素直に喜べないのには理由があった。その理由がゴジラだ。怪獣についてはまだ分かっていない事が殆どで、今回出現したボルギルスの特性やゴジラの放射能汚染のように、周辺に何らかの汚染を広げるのではと危惧していたのだ。

しかし、ボルギルスにそういった物はなかった。そしてボルギルスは、眼前に迫るBETAの群れを発見すると、猛然と突進していった。「ッ!怪獣っ、BETA群に向かっていきますっ!」

「見れば分かるっ！総員、警戒態勢のまましばらく様子を見るっ！」  
部下の衛士からの報告を受けて、大隊長である1人の衛士はそう指示を飛ばした。

猛然と突進していくボルギルス。そのボルギルスに対して光線属種がレーザーを放つ。

だが、それは無意味だった。なぜならレーザーが全て、ボルギルスの背中にある角に吸収されてしまうからだ。むしろこれがボルギルスにエネルギーを与える結果となってしまうた。

ボルギルスは、お返しとばかりにその口から火炎弾を発射しBETAの群れを焼き払う。更にそのままボルギルスはBETAの群れに突進していった。先鋒の突撃級を踏み潰し、後続の戦車級や要撃級までも踏み潰し、更に停止してその場で大回転。鞭の如くしなる巨大な尻尾の一撃がBETA群を吹っ飛ばしてしまった。

すると、そこに無数の戦車級がボルギルスの体に飛びついた。1匹、2匹と続いて続々と飛びかかる戦車級。終いにはボルギルスの体が見えなくなってしまうた。

「ああっ！」

それを見ていた衛士の1人が悲痛な声を上げた。だが……。

『バリバリバリバリッ!!』

覆い尽くされたボルギルスの体から放たれた放電が、取り付いた戦車級を内側から焼き払い、黒い煙を上げながら戦車級がボロボロと地面に落ちる。

そしてもう一度回転による尻尾攻撃で周囲のBETAをなぎ払うと更に火球を放ちBETAを焼き払う。

そんなボルギルスの戦いを後方から見つめていたEU軍。しかし、彼らの中にも既に怪獣信仰の種が根付いていた。回数は少ないとは言え、モスラとバトラは何度かこの地に現れて戦った事があるからだ。そして、モスラとバトラによって植え付けられた種は、今芽吹く。

「ッ！各機っ！あの怪獣を援護しつつBETAを殲滅するぞっ！」

「「「了解っ！」」」」

1つの部隊がボルギルスを援護するために飛び出した。するとそ

れに続いて、2つ、3つと部隊が次々と動き出した。

『『『『ドドドドドドドドドッ！』』』』』

無数の火線を放ちながら戦術機部隊がBETAに向かっていく。そしてボルギルスは、一度彼等に目を向けると、すぐに前を向いて駆け出した。

ズズンツ、ズズンツと足音を響かせながら突進し、立ち塞がるBETA全てをその足で、巨体で、粉碎しながら突き進んでいく。ボルギルス突進力の前には、要塞級ですら軽々と弾き飛ばされ宙を舞う。

そして真っ直ぐに、BETAの群れの中に1本の道が出来た。その道筋には、踏み潰されグチャグチャになったBETAの死骸が無数にあった。

そしてついにボルギルスはBETAの群れを突破した。だがそれに留まらず砂煙を上げながら急停止した彼は、振り返ってその口から火炎弾を放った。

BETA群の最後衛には基本的に光線属種や要塞級が居る。だから光線属種が無数のレーザーを放つ。だが、その全てがボルギルスの背中の角に吸収され彼のエネルギーとなる。そしてそのエネルギーを使って繰り出された火炎弾がBETAを焼き払う。更にボルギルスが軍団の後方に抜けた事で、殆どのBETAが反転。結果的に人類側に背を見せる形となった。

「ッ!?今だっ！BETA共の背を攻撃しろっ！一気に殲滅するっ！」

「『『了解っ！』』』』」

各軍、各部隊の隊長達は同じような指示を出してBETAの背後を攻撃させた。

怪獣ボルギルスとEU軍による挟撃。それは、数万は居たBETA軍団をあっという間に壊滅させてしまったのだった。

そして、戦闘終了後にボルギルスは、何と原型を留めていた要塞級の体を食べ始めたのだ。

これには多くの衛士達は戸惑ったが、ボルギルスは本来、莫大なエネルギーを求める怪獣だった。これまでは地下奥深くに潜り、地球そのものからエネルギーを得ていたが、今回の一件でボルギルスは新た

なエネルギー原、つまりBETA、延いてはG元素に目を付けたのだ。やがて光線属種のレーザーを吸収してエネルギーにした事もあつてか、ボルギルスは最後に一声、大きく咆哮を上げると地中へと帰っていった。

こうして、欧州で最初の怪獣、ボルギルスが目撃されたのだった。だが、彼と同時期に他の怪獣が現れたのだ。

場所はインドシナ半島。そこでは今日も、BETAを相手に人類は戦っていた。そんな時だった。

「報告っ！後方より前線に向かう飛行物体をレーダーが捉えましたっ！航空機ではない模様っ！」

「おおっ、ではモスラとバトラか？」

通信士の報告を聞き、司令部に居た将官の1人が喜びの声を上げた。この東南アジア戦線にもモスラとバトラは度々出現している。なので、航空機ではない飛行物体、と聞けば真っ先にその2匹を思い浮かべても可笑しくない。

だが……。

「い、いえ。それが、レーダーで捉えたのは1匹だけです。また、速度もモスラやバトラとは違うようで……」

「ッ。何だと？」

その将官は通信士の報告に首をかしげた。

『モスラとバトラではない？ではまさか、キングギドラか？いや、ギドラは基本的に帝国からは出てこない。オペレーションホープは例外だったと。他に飛行できる怪獣は現在まで発見されていない。と言う事はまさか……』

「新しい、怪獣？」

彼がポツリと呟いた時。

「報告っ！前線の部隊が未確認飛行物体を確認っ！物体はBETA群と戦闘を開始っ！物体は、新種の怪獣の模様っ！」

『『ザワザワッ！』』

その報告に司令部はざわついた。

「おいつ！前線の部隊からデータリンクで怪獣の画像を入手出来るかっ!?」

「はいっ！やってみますっ！」

将官の指示を受けてすぐにPCを叩く通信士。

「画像データ取得しましたっ！メインモニターに映しますっ！」

直後、メインモニターに映った映像に映っていたのは……。

「ぎよ、巨大な、マンティスだど？」

巨大なカマキリが、今正にBETAに向かって巨大な鎌を振り下ろす所だった。

一方、最前線ではその怪獣、『かまきり怪獣カマキラス』が暴れていた。独特な羽音と共にソニックブームを発生させながら飛行して戦車級などの小型種を吹き飛ばし、その手に備わった鎌から繰り出す必殺の一撃、『ハーケン・クラッシュ』は突撃級をその生体鎧ごと切り裂く。と、そこに突撃級の群れが四方八方から向かってくる。周辺を囲まれたカマキラス。

『キシィィィィッ!!』

だが、カマキラスが咆哮を上げた直後、陽炎のように揺らめいてその体が見えなくなった。

目標を見失って無数の突撃級が右往左往していた。と、その時。

『ズバッ!』

いつの間にか群れの背後に回り込んだカマキラスが保護色を解除して現れ、突撃級の群れを後ろから鎌で切り刻んでいく。

咄嗟に無数の突撃級が振り向くが遅い。振り返る頃には切り刻まれ、大地の上に横たわる屍になった。生き残っている個体が再び襲いかかるが、カマキラスは飛び上がった攻撃を避ける。更に保護色、いや、もはやステルス迷彩や光学迷彩と言っても過言ではない隠密に特化したその体で敵から隠れ、死角から襲いかかる。

鎌による一撃は、まるで死神が生者の魂を鎌で刈り取るようにBETAを切り刻む。保護色を生かした奇襲と高速飛行による離脱。それはファンタジーの中の忍者のように。更に狙う相手を見失った光

線属種はレーザーを撃てない。と、直後光線属種の群れのど真ん中にカマキラスが現れ、振るわれた鎌の一撃が無数の光線属種を切り裂く。

一撃必殺、一撃離脱。正に疾風迅雷。正に死神。

カマキラスの刃が振るわれる度、無数のBETAが切り裂かれその亡骸が宙を舞う。

そしてその戦いを、人類軍は見守る事しか出来なかった。理由は一つ。カマキラスの動きが速すぎるからだ。下手に撃てば流れ弾がカマキラスに命中して自分達を敵と見なすのでは？と言う疑問から彼等は撃てなかったのだ。

そして、約20分間にカマキラスは、3万は居た軍団規模のBETAをバラバラにしてしまった。

『キシィィィィッ!!』

そして戦いが終わった後、カマキラスはカマキリが獲物を補食するように、器用に前足でBETAの屍肉を掴んで喰らい腹を満たすと、羽を広げてどこかへと飛び去っていった。

それを多くの兵士達は、呆然と見送る事しか出来ないのだった。

それから数日後。2体の怪獣出現の報告が各地のモナーク支部からモナーク本部を経由して東京に居る芹沢の元に届けられた。部下が持ってきた報告書に目を通す芹沢。

「そうか。欧州と東南アジアでも怪獣が」

「はい。欧州の怪獣は、ケルト神話の数少ない文献に記述が。かつて噴火する火山の火口付近に現れ、一瞬にして火山から何かを吸い取り活火山を休火山に変えたそうです」

「……恐らく火山、いや、内部にあるマグマの熱エネルギーを奪ったんだろう。送られてきた資料によれば、光線属種のレーザーをも背中の中角で吸収したとある。それで、怪獣の名前は？」

「資料では、この怪獣は古代ケルトの言葉で、『火を喰らう者』という意味のボルギルスと呼ばれていたようです。この怪獣が過去に出現

した者と同一個体かその子孫なのかは不明ですが、欧州の支部はこのボルギルスという名前をそのまま使うそうです」

「そうか。……東南アジアに出現したカマキリ型の怪獣の方は？」

「そちらについては、参考となる資料などは発見されていません。便宜上、今はカマキリとマンティスを掛け合わせてカマキラスと呼ばれているそうです」

「そうか」

部下から説明を聞きながら、資料に目を通す芹沢。

「君は、この報告書に目を通したか？」

「はい。さつとですが」

「そうか。……君はこの報告書を見て、どう思った？」

「どうと言われても。……でも、そうですね。ここへ来ていきなり怪獣が新たに2体も現れたのは、正直頼もしいって思ってます。でもやっぱり、不安ですね。彼等がいつ俺達の敵になるんじゃないかって思うと。どうしても……」

「そうだな。だが、だからこそ今我々が怪獣とどう向き合うかが問われている。お互い、離れて行くのか共にBETAに立ち向かうのか。それは全て、我々人類の行動次第だ」

「人類、次第」

芹沢の言葉を受けて、部下の男はポツリと呟いた。

と、その時。

『ドンドンッ！』

部屋のドアが乱暴に叩かれた。

「芹沢博士っ！大至急連絡がっ！」

「開いてるっ、入ってくれっ」

「失礼しますっ！」

彼が促すと、息を切らした男が1人、慌てた様子で入ってきた。

「どうした？何があった」

「そ、それが、先ほどソビエトの最前線で、『新種の怪獣』が確認されましたっ！」

「ッ!?!」

彼の報告に芹沢は息を呑んだ。そして、彼は静かに窓の外へと目を向けた。

「まだまだこの星には、我々の常識が通用しない存在がいると言う事か」

そして彼は、小さくそう呟くのだった。

時間は少しばかり遡り、数日前。ソビエトの某最前線に、『彼女』は部下たちと共に派遣されていた。『ファイカーツィア・ラトロワ』中佐。彼女は『Su-37チエルミナートル』。その最新型である『Su-37M2』を駆る『ジャール大隊』という戦術機部隊の隊長をしている。

そして、彼女は今日も部下達を率いてソビエトの戦線で戦っていた。

『ガガガガガッ!』

チエルミナートルの手にした突撃砲2門が戦車級の群れを穿つ。

彼女は手早く残弾、推進剤の残り、部隊の配置、残存BETAの数や配置などを確認しつつ部下達に飛ばす指示を考えていた。

だが……。

『中佐っ!CPより通信がっ!』

彼女が指示を出すよりも早く、部隊の副官でもある『ナスターシャ・イヴァノア』大尉が通信を繋げてきた。だが、映し出された通信用ディスプレイに映ったのは、まだ10代半ば、京都防衛戦当時の唯依達よりも幼く見える少女だった。

実はこのジャール大隊の衛士は、隊長であるラトロワ中佐を除いた全てが少年少女で構成されているのだ。

『どうした大尉?BETAの新手か?』

ラトロワは冷静にBETAへ攻撃を加えながら問いかける。

『いえっ!それが太平洋側よりこの前線に向かって西進してくる飛行物体をレーダーが捉えた模様ですっ!』

「飛行物体?数は?」

『数は1。しかしレーダーの反応からして航空機ではないと連絡が』



「何?」

彼女は一瞬だけ指先をピク付かせた後、すぐに戦闘に意識を戻した。

「それで?その物体が到達するまでの時間は?」

『それが、恐らくもうっ……!』

と、ナスターシャの声を聞いていた直後。

『中佐っ!後方より高速で向かってくる飛行物体を発見っ!速度はマツハ3っ!間もなく戦域に到達しますっ!』

「ッ!」

この報告にはラトロワも一瞬驚いた。次いで、彼女は咄嗟に指示を出した。長い戦いの中で培ってきた経験が、感となって彼女に告げる。『危険だ』と。

「大隊各機全速後退っ!バックブーストで下がれっ!」

「「「「りよ、了解っ!」」」」

最前線で戦っていたジャール大隊の戦術機、『Su-27ジユラーブリク』が跳躍ユニットを吹かして後方へと急速後退した。

直後。

『キユオオオオオオオオンツ!!!』

甲高い咆哮が響き渡った。そして……。

『カッ!』

一瞬彼らの視界の隅で光が瞬いた。直後、光の奔流とも言える光線が、BETAの群れをなぎ払った。

「な、何だあ!?!」

「何が起こったの!?!」

突然の事に、ジャール大隊の少年少女達は戸惑う。

咄嗟にラトロワ中佐が『狼狽えるなっ!』と一喝しようと息を吸い込んだ。

『バサッ!』

しかし、その言葉は彼等の頭上を横切った影に気を取られて消えてしまった。

彼等の頭上、雲の合間から漏れる光を受けながら、巨大な翼を広げ

た『それ』が高速で、自由自在に空を飛び回っていた。

大きな翼を広げての飛行は、固定翼機である戦闘機などよりも激しい軌道での急旋回を可能とし、旋回して戻ってきた『それ』が口から放った光線、『ウラニウム光線』がBETAの先鋒、突撃級の群れをなぎ払った。

そして『それ』は荒れ果てた大地の上に降り立った。

『キユオオオオオオオンツ!!』

巨大な翼を広げながら雄叫びを上げるそれ、『翼竜怪獣ラドン』。

「な、何だよあれ」

「まさか、怪獣?」

突然のラドンの出現に、ジャール大隊の衛士達は戸惑う。

「各機、この状況はイレギュラーだがまだ戦闘が終わった訳ではない。各機はBETAを警戒しつつ、あの怪獣には手を出すな。この状況でBETAと怪獣の双方を相手にするのは得策ではない。しばらく様子を見る」

『『『『りよ、了解』』』』』

「それと大尉。CPを通して他の部隊に、無闇に奴を攻撃しないように命令させる」

『はっ!』

部下たちに指示を出したラトロワは、ラドンの背中を見つめる。

『ここに来て怪獣か。さて、どうでる? 怪獣』

彼女はラドンに対しても警戒を緩めずに居た。

しかし肝心のラドンは戦闘機部隊には興味が無いのか一瞥すらしない。

『バサアツ!バサアツ!』

そしてラドンはその巨大な翼を動かし始めた。すると……。

『ゴオオオオオオオオオオツ!』

その巨大な翼から放たれる風は、もはや暴風。いや、それすらも凌駕する程凄まじい物だった。砂煙が立ち上り、比較的軽いBETA、戦車級や光線級が巻き上げられ宙を舞い、そして落下し地面に叩き付けられた。

BETA小型種の雨が、要撃級や突撃級の上に降り注ぐ。更に暴風に煽られ、ラドンに向かって突進していた突撃級がひっくり返り、動けずに足をバタバタとバタつかせた。そしてひっくり返った突撃級が、結果的に同類である要撃級達の足を止める壁となった。

そしてその隙に、ラドンの放ったウラム光線がBETA群を焼き払う。暴風と光の奔流の前に、BETAは一步を前に進むことが出来なかった。

これまで何十、何百と人間の防衛線を突破してきたBETAが、である。

圧倒的なまでの巨大な壁、怪獣という壁がBETAの前に立ち塞がった。

そしてラドンによる蹂躪劇を後方から見守っていたラトロワ中佐以下、ジャール大隊の衛士達。彼等は、ただただ呆然とラドンの猛威を見守る事しか出来なかった。戦場に居ると言うのに、突撃砲を構える事すら忘れ、ただただ目の前の戦いを見入る少年少女達。

そんな中で……。

「これが、怪獣の力」

どこか冷徹な、しかし諦めが混じったような表情でラトロワはラドンの背中を見つめていたのだった。

それから約20分後。ラドンの前には吹き飛ばされて叩き付けられ潰れたBETAや、光線を喰らって炭化した『BETAだった物』が広がっていた。

『キュオオオオオオオオンッ！』

そしてラドンはそれを見回し一瞥すると、咆哮を上げてどこかへと飛び去っていった。それを見送るラトロワ達。

「中佐っ！司令部から通信っ！出現した怪獣を追跡せよと……」

「もう遅い」

ナスターシャの言葉をそう言って遮るラトロワ。

「見なさいターシャ」

そう言つて、ラトロワは片手の突撃砲でラドンが飛び去って行った

方向を指さした。ナスターシャが視線を向けた頃には、ラドンは既に遙か遠くを飛んでいた。

「戦術機で奴を追うのは無理だ。司令部にもそう伝えろ大尉」  
「はっ！」

「大隊各機へっ！戦闘終了っ！基地へ帰投するぞっ！」

『『『了解っ！』』』』

隊長である彼女の指示を受けて、無数の戦術機が戦闘地帯から離れていった。そんな中で帰還途中にラトロワは思った。

『司令部の豚どもがああ怪獣を敵認定し、我々と戦わせるような事が無いと良いが』、と。

新たな怪獣の出現に、不安を胸の内に抱えながら中佐は部下と共に基地へと戻っていったのだった。

新たに現れた怪獣達。欧州でボルギルス。東南アジアでカマキラス。そしてソビエトに現れた怪獣には、プテラノドンの変異種のように、と言う事から『ラドン』という名前が付けられた。

新たに現れた怪獣達。果たして彼等が人類にもたらすのは希望か？絶望か？

だが、そんな中で……。

『ウジュル、ウジュル』

どこかのハイヴの奥深く。光も届かない漆黒の闇の中で、『ヘドロ』のような物が静かにうごめいていた。そして、『赤い光彩と黄色い瞳の双眸』が、静かに天井を見上げていた。

『キュロロロロロッ！』

そして世にも不気味な咆哮が、ハイヴの中に木霊するのだった。

## 第16話 狂人現る

希望作戦後、欧州で新たにボルギルス。東南アジアでカマキラス。ソビエトでラドンと言う新たな怪獣が続々と出現。各々がその力を振るいBETAを撃滅していった。一方で、どこかのハイヴで新たな敵が生まれようとしているのだった。

インフアント島内部、コスモスペースにて。

その日、夕呼は研究室と兼用の自室でモナークから上がって来ていた怪獣に関する報告書に目を通していった。

「欧州のボルギルス。東南アジアのカマキラス。そしてソビエトのラドン。ここに来て一気に怪獣たちが現れて来たわね」

夕呼は、誰に言うでもなく呟きながらも、知人である芹沢経由で届いたモナークからの資料に目を通していった。

そこには戦場で確認された怪獣たちのスペックや能力が記載されていた。

『光線属種のレーザーを吸収して自分の力に変えるボルギルス。完全な光学迷彩を獲得したカマキラス。ヘリコプター並みの旋回性能を持つ、戦闘機並みの飛行速度を有するラドン』

「……はつきり言って、どれも人間の持つ力を超えた存在よねえ」

夕呼はそう呟くと手にした資料を机の上に放った。ちなみに、なぜ夕呼の元に怪獣の報告書が届いているのかと言うと、それを夕呼自身が望んだからである。

現在彼女は、オルタネイティブ4の本来の計画と並行して新型兵器の開発も行っている。そして今、怪獣のデータを求める理由。それは『怪獣の力の模倣』を目指しているからである。

より正確に言えば、怪獣の驚異的な力の一部でも良いから人類の技術で再現できないか?と考えているのである。例えばキングギドラの引力光線。あれは相手の防御力を無視した攻撃が出来るのだ。真似る事が出来れば突撃級の生体装甲を貫いて攻撃が出来る。しかし、人知を超えた怪獣たちの力を真似るなど常人の頭では到底不可能だ。

だからこそ夕呼もまた色々行き詰っていたのだ。

というか、夕呼は兵器開発に関してそこまでの知識と経験があるわけではないのもつばらゼアに頼ってしまう。だが、本来の第4計画の方にもリソースを割かなくてはならないので、うまくいっていないのが現状だった。

「ハア、もうこんな時間？ちよつと何か食べて来ようかしら」

彼女は時計を見て12時を過ぎている事に気づき、リフレッシュをする意味でも一度部屋を出て食堂に向かおうとした。だが、部屋を出た直後：

「おや？香月博士」

「ッ」

不意に、背後から男性に声をかけられた夕呼は『まさか？』と思いつながら振り返った。そして相手を理解するなり、彼女は眉をひそめた。

「どういう事かしら？『あなた』が来るなんて一言も聞いてないし、アポを取ったなんて話も聞いてないんだけど？」

そこに立っていたのは男だった。しかしただの男ではない。彼の名は『鎧衣 左近(さこん)』。帝国の情報省外務二課長という立場にいる男だ。そして、情報省とは言わば諜報機関。更に付け加えるのなら、この左近という男は諜報の世界ではそこそこの知れた存在だ。

そんな男が許可も無くこのコスモスベースに居るという事は、色々疑わしい事だ。だからこそ夕呼は眉をひそめた。

「これは失礼。しかし私の方も少々込み入った事情がありましたね。失礼とは思いましたが、アポなしで来させていただきました」

「……こっちはその事情とやらの興味が無いんだけど。まあ良いわ。単刀直入に聞くけど要件は？あなたの事だから下らない理由でこんな場所に来るとは思えないんだけど？」

「いやいや。そんな事はありませんよ。私も男ですからねえ。超古代文明コスモスの残した基地、というのは興味を惹かれる存在です。……まあ、確かにおっしゃる通り基地を見るのはついで、といった所ですが」

「そう。で、何をしにこんな場所へ？」

「実は、香月博士にある人物を預かってほしいのですよ」

「人を預かるですって？ここは託児所じゃないし私も保育士じゃないの。そう言うのなら他所に行つて欲しいんだけど？」

「まあまあそう言わずに。それに、預かるとは言いましたがおそらく博士のお力になれる人物だと思いますよ？」

『ピクツ』

夕呼は鎧衣の言葉に眉をわずかに動かした。

「私の力になれる人物つて、どういう事？」

「時に香月博士は、少し前にソビエトから帝国に亡命未遂騒ぎがあつたのをご存じですか？」

「ええ。一応は。ソビエトから帝国に亡命しようとした技術者を乗せた船が、帝国の領海内部で撃沈された話でしょ？領海侵犯だと非難する帝国と、技術漏洩を防ぐためと主張するソビエトが揉めてた話は今も覚えてるわ。……で？それがどう関係してくるのかしら？」

「実はその亡命者というのは、生きていますよ。撃沈された船は囷という奴です。実際、帝国海軍が動いた事もあつてソビエトは遺体の確認までは出来ませんでしたからな」

「……まさかその密かに生きていた亡命者をここで預かれ、つて事じゃないでしょうね？」

「いいえ。まさにその通りです」

夕呼の言葉に、左近は笑みを浮かべたまま頷く。

「ハア。良い？ここに部外者を匿うほどの余裕は無いの。ただでさえ計画の関係でどこにスパイやら何やらが居るか分からないのに、部外者をここに住まわせる事なんて無理に近いのよ」

「おっしゃる事は最もなのですが、何分本人がここへの定住を強く希望しておりますなあ」

「はあ？ここへの定住つて。理由は？」

「それが、毎日女神と男神に謁見し祈りをささげるため、などと申しております」

「……は？」

夕呼が左近の言葉を理解できないのも無理はない。それほどまでに予想外な理由だったからだ。

「ち、ちよつと待ちなさい。何よ女神と男神って。そんなのここには……」

居ない、と言いかけた夕呼。そんな彼女の脳裏にふとよぎったのが、モスラとバトラだった。

「ねえ、もしかしてその人物って……」

「ええ。お察しの通りだと思いますが、狂信的なタイタニスト、怪獣教の信者です」

「ハア」

左近の言葉に夕呼はため息をついた。まあ、実際ため息をつきたいだろう。なにせ熱狂的な信者は何を引き起こすか分からない。BE TA 恭順派が良い例だ。それを身近に置いておきたいとは思えないのも無理はない。特に夕呼の場合、彼女はパンドラボックスを秘匿しているのだ。下手に人が増えれば、その情報が外に漏れて戦争の火種になりかねないのだ。

「そんなのを受け入れられる訳ないでしょ？ 悪いけど、ここに入れる訳にはいかないわ」

と、夕呼が言うと左近は笑みを浮かべたまま何も言わない。それを見て夕呼は一拍間をおいてから『まさか』と思った。

「もしかして、もうここに連れてきてるの?」

「ええ。しかもCP将校の方をお願いして、本人曰く『聖堂』に向かわれましたよ。少々強引に、ですが」

「ツ！つたく何を勝手にっ！」

そう言っつて夕呼は左近を放つて歩き出した。のだが……。

「何で付いてくるのかしら?」

「なに、私は『彼』の保護者みたいな者ですから」

「全く……！人の許可も無く赤の他人を軍事基地に連れてきて目を放しておいて何が保護者よっ……！」

「いやはや、これは面目ない」

そう言っつて謝罪しているが、全く悪びれる様子が無い事が夕呼に



とって更に腹立たしかった。

が、今はそうも言つてられないので彼女は不本意ながら左近と共にモスラとバトラの元に向かった。そして、モスラとバトラの住まいとも言える基地最深部にたどり着くと……。

「ああ、今日は実に素晴らしい。この目で女神モスラと男神バトラのご尊顔を拝する事が出来ようとは……!」

良い歳の男が、床に膝をつき笑みを浮かべながら泣いていたのだ。中年の眼鏡を掛けた細身の男性が泣いているさまは些かシユールだった。その傍では、案内役をさせられてた遙が若干引いていた。モスラとバトラも、珍客に困っているのか彼の方を見つめたまま殆ど固まっているだ。

そして、男は泣きながら手を合わせ何かをぶつぶつと呟いている。その隙に、夕呼は遙に声をかけた。

「ちよつと。何でここに部外者を連れ込んだのよ」

「う、す、すみません。でもすごい血走った目で強引に迫られて。どうしようもなくて」

そう語る遙は今にも泣きそうだった。  
すると……。

「ミスターマエロフ。お祈りも大事ですが、この基地の責任者をお連れしました。彼女に話があるのではありませんかな?」

「ん?おお、そうであった」

左近の言葉を聞き、男、アレキエフ・マエロフは立ち上がり夕呼の方へと歩み寄ってきた。

「はじめまして、ミスコーツキ。話は彼から聞いている。私はアレキエフ・マエロフ。元ソビエトの技術者だ」

「……はじめまして。で、早速だけど本題に入って良いかしら。あなた、ここに定住したいと言ったそうね」

「如何にも。私はここへの定住を強く希望している」

「……なら教えてあげる。ここは国連軍の最重要計画の基地なの。おいそれと部外者を入れる事は不可能。理解していただけたかしら?」  
「それに関しては十分承知している。オルタネイティブ4、であろう」



そこに声が響いた。夕呼と遙、左近、マエロフが声の方へ視線を向けると、そこには宙に浮く小さな円盤に乗ったコスモスの2人と、2人の護衛なのか孝之と慎二が立っていた。

「お、おおっ！ま、まさかあなた方は、コスモスっ！女神モスラと男神バトラの巫女っ!？」

「はい。私達はそのような存在と言っても良いでしょう」

と、コスモスが肯定しながら頷くと、マエロフは咄嗟にその場に膝をついた。

「お初にお目にかかります巫女様。我が名はアレキエフ・マエロフ。矮小なわが身で、御身の前に立つことお許しく下さい」

「いいえ。どうかお気になさらず、顔を上げてください」

「お二人がそう言われるのであれば。失礼いたします」

そう言つて立ち上がるマエロフ。ちなみにだが、今の彼の頭の中の序列形式は、『自分⇨人類⇨コスモス⇨怪獣』という形になっており、一番上に怪獣が居て、その下にコスモス。さらにその下に自分を含めた人類がいるという形になっている。

「お話はゼアを通して聞いていました。ここへの定住をお考えのようですね？」

「はいっ。女神モスラと男神バトラへ日々の祈りを捧げるため。そしてそんな神々のお役に立つ為に、ここへの定住を希望いたします。聞けばこちらには、巨大な生産設備があるとか。神々への日々の祈りを捧げる事が出来、且つ神々への助力となれる兵器を作るのに適したここ以上の環境はありません。故に、不肖アレキエフ・マエロフはこの地への定住を希望致します」

彼の言葉に、夕呼も遙も、更に孝之や慎二も難しい顔をする。

しかし、肝心なコスモスは笑みを浮かべたままだ。

「そうですか。時に、あなたにとつて怪獣とはどのような存在ですか？」

「はっ。私にとって怪獣はすなわち神っ！この世界に君臨された真なる霊長類っ！そして矮小なるわが身が仕えるに値する、君主のような存在と捉えております」

「では、あなたは怪獣のためにならば命をも投げ出せると?」

「はっ! 既に我が身、我が命、我が魂を神たる怪獣に捧げる覚悟は出来ております。必要とあらば、我が命、贄として彼らに差し出す覚悟は当に出来ておりまする」

そんな言葉に、夕呼たちはマエロフの狂信的な一面を見た気がした。しかしそれでもコスモスは動じない。

「貴方の怪獣に対する気持ちは分かりました」

「ですが勘違いしないでください。モスラもバトラも、この星に生きる命を守る守護神のような存在。無為に命が奪われるのを嫌います」  
「だからこそ、その命を無駄にする事なくモスラとバトラの助けになつてあげてください」

「ツ!? コスモス様っ! それはどういう...!?」

と、マエロフが問いかけようとした時。

『キュアアアアアアアッ!』

『キュガアアアアアアッ!』

モスラとバトラの咆哮が響き渡った。

「モスラとバトラにもあなたの思いが、純粹に怪獣たちの役に立ちたいと言う思いが届いたようです」

「彼らが言っています。『自分達の力になってほしい』と」

と、コスモスの2人が言うと……。

「ああ、ああっ! 女神モスラよっ! 男神バトラよっ! 喜んでっ! 喜んでお二方の力となるために不肖マエロフっ! 邁進してまいりますっ!」

マエロフは涙を流しながら笑みを浮かべ、手を合わせながら叫んだ。

しかしそれに驚いたのは夕呼だ。彼女は静かにコスモスの傍に歩み寄る。

「ちよつと良いの? 確かにここはあなた達の基地だから、あなた達が良いと言うのなら反対はしないけど、あの男は狂信的な男よ?」

「確かに、傍目にはそう見えるでしょう」

「ですが彼の、怪獣の役に立ちたいという思いは本物だと私達2人と

ゼアが判断しました」

「ッ、ゼアが？」

「はい。だからこそ彼をここへ受け入れても良いと考えています。あわよくば、あの箱の事を伝えても良いとも考えています」

「ッ……!?本気？」

夕呼が驚くのも無理はない。あの箱とはつまり、パンドラボックスの事だ。

「はい。例え狂信的に見えても、あの人の信じる心は本物です」

コスモスの2人は、夕呼を真つすぐ見つめながら語った。

やがて……。

「ハア。分かったわ。あなた達2人とゼア、それにモスラとバトラが認めたのに今更私達が反対しても意味なさそうだし。涼宮」

「あ、は、はいっ」

「悪いけど、大至急その男の部屋を用意させて。とりあえず空き部屋の一つに表札でもつけとけばいいから」

「よろしいのですか？」

と、そこへ孝之が心配そうに声をかけて来た。まあ実際あんな狂信的な男を基地に入れるのに不安を覚えるのはおかしくない。が……。

「本来の所有者が良いって言っているのよ？例え今の私達が基地の運用を仕切つてるとは言え、彼女たちが許可したのを私達が突っぱねてもね。ここは、コスモスたちの言葉を信じましょう。それに、余計な事に対立して時間を無為に消費したくないの。分かった？」

「はい。分かりました」

やはりまだ完全に納得出来た、と言う訳にはいかないが孝之もある程度は納得した様子だった。

こうして、ソビエトの技術者、アレキエフ・マエロフがコスモスベールで生活する事になったのだった。

だが、左近が帰る時。

「言つとくけど、これで情報省に貸し一つだからね？いつか利子もきつちり揃えて返してもらおうから、覚悟しておきなさいよ？」

と、夕呼が左近を睨みつけながら語っていた。

「はい。上の者にしっかり伝えておきますとも。では……」

そう言つて、左近は去つて行つた。それを見送つた夕呼は深いため息をついた。そして彼女は今もモスラ達に祈りを捧げるマエロフを見て、もう一度、深い、深くくいたため息をついたのだった。

それから数日が経過し、マエロフはコスモスベースで生活するようになった。しかし彼は色々、他の面々と違つた。まず、朝の礼拝と称して彼が聖堂と呼ぶモスラとバトラの部屋へ行つて祈りを捧げる所から始まり、昼と夜にも基地内の教会で2体の像に祈りを捧げている。それが毎日だ。基地に居る衛士や兵士たちは、そんなマエロフに積極的に声をかけようとはせず、むしろ腫物を扱うような態度で接していた。一方でマエロフも彼らと積極的に仲を深める気は無い様子だった。

そんなある日。

「失礼するわよ」

夕呼が彼の部屋を訪れた。

「む？これは司令。私に何か御用でしょうか？」

「ええ。コスモスがあなたに用があるそうよ」

「何とつ!? 巫女様がつ！ならばすぐにつ！」

「落ち着きなさい。こつちよ」

そう言つて歩き出す夕呼に、マエロフは興奮した様子で続いた。そして二人はそのまま轟天号へとやってきた。

「これは、なぜ轟天号に？ここに巫女様がいらつしやるのか？」

「ええ。だから黙つて付いてきなさい」

そう言つて歩き、夕呼はマエロフを轟天号の艦長室へと彼を連れて来た。現在、この艦長室に入れるのは夕呼とコスモス。あとは芹沢くらいだ。入り口には網膜と指紋をスキャンするスキャナーがあり、コスモス以外はこのスキャナーにデータを登録しなければならぬ。そしてその登録にもコスモスとゼアの許可が必要なのだ。つまり、2人とゼアの許可の無い者は艦長室に入る事すら許されない。

今はマエロフに対してゼアからゲストとして仮の許可のような物が下りているから入れるのだ。

そして、中に入ればそこにはコスモスの2人が待っていた。

「お待ちしていました、マエロフさん」

「はっ。不肖マエロフ。お呼びとの事でしたので参上いたしました。それで、私に用との事でしたか?」

「はい。実は、貴方にある権限を与えようと考えています」

「ある権限、ですか?」

と、マエロフが首をかしげていると、夕呼は2人の傍に置かれた箱、パンドラボックスの傍に立った。

「この2人があなたに与えるって言っているのは、こいつへのアクセス権よ」

「その箱は?ただの箱にしか見えないが?」

「それは、パンドラボックス。私達コスモスのありとあらゆる技術を収めた箱です」

「ツ!?では、私がこれまで閲覧した資料室にあったデータは!」

「あれは重要度の低い技術データよ。私も、何度かこれの中にアクセスして情報を閲覧した事があるけど、あそこのデータとは比べ物にならないわよ。そして、今現在このパンドラボックスの存在は秘匿されている。今のところ、これの存在を知っているのは私と、あなた。それと以前ここに来た事のあるモナークの芹沢博士の3人だけ」

「そ、それで、なぜ私にアクセス権を?」

「それは、あなたならこのパンドラボックスのデータを使って、さらなる力を生み出せるのではと考えたからです」

「ツ!わ、私がつ!」

「はい。夕呼さんからお話は聞きました。マエロフさんは、以前兵器の開発に関わっていた技術者だと」

「そんなあなたなら、このパンドラボックスの中にある技術を生かせると私達は考えました」

「で、ではっ!」

「はい。このパンドラボックスの中にある知識と、あなたの技術を生

かして。どうかモスラとバトラの助けとなる力を生み出してください」

そんなコスモスの言葉にマエロフは……。

「ははあっ！このアレキエフ・マエロフツ！必ずや神々、モスラとバトラの支えとなる兵器を生み出して御覧に入れましょうっ！」

その場で膝をついて涙を浮かべ歓喜の表情でそう答えた。

「期待していますよ。マエロフさん」

「はっ！その期待に沿えるよう、邁進していく所存でありますっ！」

こうして、新たにマエロフはパンドラボックスへのアクセス権を獲得したのだった。その後、マエロフはすぐにパンドラボックス内部、無数の本棚が並ぶ電子空間へと向かいある程度の情報を引き出すと、急ぎ足で艦長室を飛び出した。

『ああ素晴らしいっ！先史文明の技術が私にインスピレーションを齎してくれるっ！早く戻らなければあっ！』などと叫びながら彼は轟天号を出て行った。夕呼は、下手にパンドラボックスの情報を外部に漏らさないか心配で、再び長くくいたため息をついたのだった。

それから約2か月後。2001年2月。

「ミスコーツキっ！」

「ちよっ!?!な、何よっ!?!」

ある日、自室で夕呼が仕事をしているとマエロフがいきなり入ってきて彼女は戸惑った。しかもマエロフは、数日は徹夜をしたのか目元に隈が出来ていたし目も血走っていた。更には身だしなみを整える時間も削って開発でもしていたのか、無精ひげまで生えている始末だ。

「すまないが今すぐ基地の外にある演習場と衛士数人を貸してほしいっ！彼らに試してもらいたい兵器の試作機が完成したのだっ！」

「え？完成したって、あれからまだ2か月しか経ってないんじや……」

「何を言うっ！まだではないっ！もう2か月だっ！これほど長い間、巫女様たちをお待たせしてしまった自分の無力さに憤りを感じてい



るくらいだっ！しかし出来上がった試作機も所詮は『雛型』。くっ！私にもっと才能と技術、体力があればっ！」

「はいはい。アンタが悔やんでるのはよくわかったから。とりあえず一度寝て休んで、身だしなみを整えて後食事も取ってきなさい。その間に準備とかしとくから」

「すまないミスコーツキッ！では頼むぞっ！」

そう言っつてマエロフは、徹夜の影響かハイテンションのまま部屋を後にした。

それから数時間後。基地の外、インフアント島の一部を開墾して作られた演習場に、夕呼とマエロフ。更にコスモス。基地の整備兵や、みちる達と言った衛士たちが集まっていた。そんな彼らの視線の先にあるのは、サイズの戦術機の5分の1程度の大きさの白いロボットが数機、起立していた。

「それでマエロフ博士？これは？」

と、夕呼が直接マエロフに問いかけた。

「ああ。では説明を始めさせてもらう。この機体は、私の持つ戦術機開発などで得られた知識や技術と、このコスモスベースに保管されていた技術を掛け合わせて作った、次世代兵器の元となる兵器。その試作機だ。一応機体名として、『機動戦闘服タイプ01』。君たちの祖国、帝国風に言えば『01式』と言った所だろう。まあ、私はもっぱらパワードスーツと呼称しているが」

「成程。で、こいつの武装は？」

「このパワードスーツは今も言ったように、あくまでも次世代機の元となる基礎のような機体だ。なので武装は最小限だ。とはいえ、両腕に一門ずつレールガン、つまり電磁投射砲を装備している」

「ッ。それはまた、凄い物を取り付けたわね」

と、夕呼は呆れとも驚嘆とも取れる感想を漏らした。そもそもレールガンとは、従来の火薬による爆発の力で銃弾を撃ちだすのではなく、電磁力とその反発力を生かして弾頭を射出する武器だ。しかしその使用には莫大なエネルギーが必要になるため、戦術機サイズでの採用は現時点では不可能。そもそもまだ試作実験機のレベルだった。

だが、現在においてみちる達が携行している拳銃は、パンドラボックスの技術を元に生産された小型のレールガンなのだ。ただ、やはり小型であるため貫徹能力は一般的な拳銃と比べても上回っているが、だからと言って一丁で大砲クラスの威力があるわけではない。

そして実際、夕呼も『すごい物』と評した訳だが、だからと言って威力が凄まじい訳ではない。

「で、口径と計算上の威力は？」

「うむ。レールガンの口径は20ミリ。戦術機が持つ突撃砲の36ミリ機関砲と同程度の威力を持つ。ただし、レールガンの加速度を持っているので貫徹能力に関しては突撃砲を上回っている」

と、説明をしていると……。

「あの〜」

近くにいた水月が挙手した。

「どうしてレールガンだと突撃砲より貫徹力が上回ってるんですか？」

「ああ、その事か。簡単に説明してしまうと、火薬を用いた銃火器はその火薬の爆発で弾頭を射出する。しかしこの撃発の際、エネルギーの大半が熱エネルギーに変換されてしまう。そのため、火薬を用いた射出方式は君たちが思っているよりも無駄が多いのだよ」

「それはつまり、撃ちだす力の大半が熱になってしまうから、ですか？」

「そうだ。そう言う意味では火薬式の射出方式は、火薬の爆発力を十分に生かし切れていないと言う訳だ。対してレールガン、つまり電磁投射砲は大小の差があれど、弾頭を加速させるという意味では火薬式にも勝る。そしてそれは、銃弾の速度にも影響する。速度が早ければそれだけ貫徹能力に影響するという事だ。そのため、口径は従来の突撃砲より小さくとも同程度の威力を出す事が出来る、と言う訳だよ」

と、マエロフは水月に説明するが、肝心の彼女や周囲の孝之達。更に美冴や禰子までもが、どこかほかくんとしていた。

いや、まあ普段からマエロフの狂気的な一面を見ていたからこそだった。何故なら今のマエロフは、普通の技術者に見えてしまうから

だ。普段とのギャップに驚いている衛士たち。

「さて、では次は試運転だ。頼むぞ諸君」

「「りよ、了解っ」」

マエロフが声をかけると、今回試運転をするパイロットに指名された水月、孝之、慎二の3人が返事をし、それぞれ割り振られていたワードスーツに乗り込んだ。

ちなみに、既に3人はこのワードスーツの操縦方法を学んでいた。その方法、というのが人工知能であるゼアと特殊なベルトを介して繋がり、脳空間でラーニングを行う、という物だった。

しかも、僅か数秒である程度のラーニングを終えてしまったのだから、夕呼は驚き、マエロフはゼアの力を褒めたたえた。

と、まあそんな事もありつつ、ワードスーツに乗り込んだ3人はマエロフの指示を受けながら見事それを操作してみせた。そのワードスーツの性能自体は、決して高い物ではなかった。しかしレールガンと言う新機軸の武器を採用している事。更に土木建設用に精密な作業が出来るマニピレーターを備えていた事。短距離とはいえ飛行や跳躍が出来る事は水月たちの操作で判明した。夕呼はこれを、戦場の第一線での使用は出来ずとも、後方での作業やその護衛。戦車級や『兵士（ソルジャー）級』、『闘士（ウォリアー）級』と言った、小型種のBETAを狭い空間などで殲滅するのに使えるのでは？と提案し、早速試作機とそのデータを国連軍に提供すると言ったのだ。マエロフの方は、それに対して『巫女様たちやゼアが許可を出せば構わない』、と言ってOKを出した。

しかし、先ほどマエロフが言ったようにこのワードスーツ自体は所詮、雛型。まだまだ試作機や実験機のような存在だ。

その後、マエロフはこのワードスーツをベースに新型機を開発するのだが、それはもう少し先のお話。

そして更には、その新型機、漆黒の翼を持つ機動兵器。猛禽類の名を持つ兵器を扱う4人の少年少女がこの場所へやってくるのも、もう少し先のお話。

## 第17話 光と陰

インフアント島のコスモスベースにてオルタネイティブ計画のための研究に勤しんでいた夕呼。そんな彼女の元に帝国から鎧衣左近という男がやってきた。事前の連絡が一切無い中での鎧衣の来訪を警戒する夕呼。そんな鎧衣の目的は密かに帝国へ亡命していたソビエトの技術者をここに連れてくる事だった。そしてその技術者であるアレキエフ・マエロフは狂信的なタイタニストであり、本人の希望とコスモスたちが許可した事もあってコスモスベースで技術者として兵器開発をする事に。そうして彼は2ヶ月後、見事に新型兵器の試作機を完成させてしまうのだった。

くく時は少し巻戻り、コスモスベースにマエロフがやってきた頃く

ある日の帝国。Gフォースの総司令部にて。

「……広報活動、ですか？」

「はい」

恭子は萩閣から渡された書類に目を通してから彼の方に視線を向け呟いた。

今は基地司令である萩閣の部屋で彼と恭子の2人だけで会議中だ。

ちなみに、恭子は少佐で萩閣は中将。階級的にはかなり差があるが、お互い斯衛と陸軍のトップという立場である事や、片や前線指揮官。片や総指揮官。と言う事もあってお互いに基本は敬語で話している。

「上の連中の強い要望でしてね。官民の士気向上も兼ねて、国防の要であるキングギドラと共に戦うことを前提にして我々Gフォースを広告塔にしたいようです。噂では、国連からも広報の人間を連れてきてGフォースの存在を諸外国にも宣伝するつもりなのでしょうよ」

「……役人の考えそうな発想ですね」

「巻き込まれる我々に見ればたまたまった物ではありませんが、今の我々には実戦というものが皆無です。出番の無い軍隊は金食い虫だ、

などと世論に叩かれなかったためにもこう言った事は必要なのでしょうか」

「そうですね。分かりました。書類には撮影のメインに龍神の姫巫女達、と言う事ですから、如月大尉たちには私の方から伝えておきます」  
「お願いします」

と、それからも2、3今後の話をした後。2人は中將の秘書官が用意してくれたお茶で喉を潤した。

やがて萩閣は座っていたソファから立ち上がると、窓の外から遠目に見える東京の街並みへ目を向けた。

「……平和になりましたな。この国も」

「ええ」

萩閣の言葉に頷きながら恭子も窓の傍に歩み寄る。

「少し前までは、ここも最前線だったと言うのに」

「横浜に出来たハイヴ。更には佐渡島まで。国土の大半がBETA支配領域となったにも関わらず、出現したキングギドラによって横浜は奪還。中部地方の奪還にも成功。更にモスラとバトラによって佐渡島ハイヴも攻略され、中国・四国地方の攻略も始まり、挙げ句には半島の鉄原ハイヴも攻略。いや、破壊する事に成功。この1年程度で、帝国は随分と変わりましたな」

「ええ。激動の1年でした」

恭子は萩閣の言葉に頷く。

「しかし、軍人としては情けない限りですな。怪獣に頼らなければ国1つ満足に守れないとは」

「それほどまでにBETAが強大であると気を引き締めるべきか。或いはそれすらも単独で凌駕する怪獣に畏敬と畏怖の念を抱くべきか。中將は如何ですか？」

「両方、でしょうなあ。今後を考えれば。時に少佐の方は如何ですか？」

「残念ながら、私も両方です。……出雲攻略作戦の時には、湧き出てくるBETAに絶望しかけ、しかしそこを聖獣キングギドラに救われた」

「それは私も同じですな。光州作戦の時、アンギラスが現れなければ私もどうなっていたか。……お互い、怪獣の力で生き延びたとも言えるのでしょうか？」

「ええ、恐らく。しかしそれは我々だけではありますまい。今この国で生きる人々。兵士達も。一体どれほどの命が、彼等によって救われたのか。それは私達には想像も出来ません」

しばし2人は、平和な東京の街並みへ目を向けた。明星作戦直後は、ホームレスや難民なども目立っていたが、今はその姿は見る影も無い。今日本全国での復興が進んでいるため、建設業などの人材が足りていないとまで言われる。それほどまでに、帝国は今復興と軍備増強を急いでいる。

「……本当に、彼等には何から何まで世話になった気分だ。そんな彼等に報いる方法があるとすれば……」

「ええ。来たるべき決戦の時。少しでも彼等の隣で戦えるように、兵士達の練兵や新兵器の開発、ですね」

「ああ」

萩閣は恭子の言葉に頷くと自分の机に戻った。

「さて、そろそろ仕事をしますかな。最近、事務仕事ばかりでどうにも肩が凝る。歳かなあ」

「ふふっ。ですが中将。事務仕事の事で愚痴を言っていられるだけ、私達はまだ幸せな方ではありませんか？」

そう言って苦笑する恭子。

「確かに。それもそうだなあ。平和は良いが、事務仕事ばかりで肩が凝る、なんて言ったらられるのも平和な証拠か。さて、ならばその平和のために我々も努力しませんとな」

そう言って、萩閣の方も笑みを浮かべている。

「ええ。では私もこれで」

「ああ」

そうして2人はそれぞれの仕事へと戻った。その後、恭子から撮影の話を書く上総たち。しかし話を聞いた後の4人はかなりげんなり

していた。それもそのはず。そもそも彼女達4人と唯依は、龍神の姫巫女と呼ばれる事をあまり良く思っ居ない。そもそもこのあだ名はどこかの新聞社が誇張のために勝手に付けた物だ。

「あゝあ、また撮影か〜」

「ホント、嫌になりますわね」

気怠げに呟く安芸と上総。

「うう、私撮影とか苦手なのに」

「しょうが無い、で納得出来れば良いんだけどね〜」

更にその傍にいる和泉と志摩子もげんがりしていた。

彼女達は、今のGフォースに移る前、斯衛の特別遊撃隊として活動を開始した頃、つまり明星作戦の後くらいから、今のあだ名で呼ばれるようになった。そして広告塔のように4人と唯依は取材を受ける事が多くなった。官民含めて土気高揚のために、彼女達はプロパガンダに利用され取材などをたくさん受けるハメになった。しかし肝心の彼女達はうら若き少女たちなのだ。取材なんて受けた事が無いし映像を撮るにしたってそれ相応の演技や態度が求められる。素人の動画撮影じゃないんだから、とシーンを取るのにダメだしを貰ったりした事もあって、すっかり撮影や取材が嫌になっていた4人。

なので、この取材地獄から抜けられた唯依をちよつとだけ恨めしく思っ居た。

まあ、肝心の唯依も唯依で……。

「篁中尉ってGフォースに居たんですよね!?どんな感じなんですかGフォースって!」

「え、ええつと、良い所、ですよ?」

「中尉ってキングギドラに直に触った事あるんですよ!?どんな感じですか!?!」

「え、ええつと、金色でゴツゴツしてて……」

と、Gフォースから移ってきた唯依が珍しい、と言うか龍神の姫巫女とまで言われた1人である彼女が自分達の所に来た事自体、ホワイトファンク所属の彼女達には予想外すぎた。なので来たばかりの頃は唯依も何だかんだで動物園のパンダみたいな状況が続いたり

した。

で、話を戻して数日後。Gフォースの基地に広報官たちが無数にやってきたのだが、何とそこには『国連軍の広報部隊』まで居るのだ。これには当初撮影は『帝国軍の広報部隊だけ』と聞いていた上総たちも驚いていた。

「な、なんで国連軍の広報部隊まで居るの?」

遠巻きに彼等を見つめながらも戸惑った様子の子摩子。と、その時彼女達の近くにたまたま恭子が通り掛かった。

「あつ!すみません少佐っ!」

彼女に気づいて、咄嗟に安芸が声を掛けた。

「何か?」

「い、いえ。恐れながら、何故国連軍の広報部隊までここに?事前に渡されていた書類によれば、来るのは帝国軍の広報部隊とだけ聞いていたのですが?」

「ああ。正直、それについてはすまないと思ってる。実は国連の広報部隊が来たのは、本当に急だったのだ。急な話で軍上層部は返答を迷ったが、『帝国の力を諸外国に示す良い機会だ』と一部の議員達の強い要望があり、結果この通り、と言う訳だ」

「つまり、私達は国の政治の駒になれと?」

「ち、ちよつと安芸!」

恭子に対する仏頂面な安芸の物言いにギョツとする志摩子。しかし安芸も、ただでさえ嫌いな撮影任務なのに、更に国連軍の広報部隊が来ているとあつて不機嫌だ。

「まあ、石見少尉の態度も分かるが、これも宿命だ」

そう言つて苦笑する恭子。

「日々を平和に暮らせているのだ。激戦区に放り込まれる事に比べれば、これ位の任務など楽な物だろう?違うか?」

「うっ、そ、それは確かにそうですね……」

「そう言う事だ。諦めてしつかり仕事を全うせよ」

「り、了解しました。少佐」



「うむ。では私はこれで」

そう言つて離れて行く恭子。しかしそれでも、安芸達はどこか気怠げだ。

そしてそれに拍車を掛けてしまったのが……。

「おお！もしや君たちが『ドラゴンウィッチーズ』かな!？」

「え!?!だ、誰!?!」

不意に、何やらテンシヨンの高い白人らしき男性が声を掛けてきたので、驚く和泉。

「ああこれは失礼！私は国連軍広報部隊所属の、『オルソン』という者だ。階級は大尉だ」

「は、はあ。国連軍の」

オルソンを相手に、半ば戸惑いながらも返事を返す上総。

「今日は君たちの取材をさせて貰うので、よろしく頼むぞ！」

「は、はあ」

テンシヨンの高いオルソンと対照的に、テンシヨンがだだ下がりな安芸たち。

で、結局撮影をすることになったのだが……。

「なんでこんな格好させられてるんだ私達はあ！」

控え室、兼、更衣室の中で叫ぶ安芸。しかしそれもそのはず。なぜなら今の彼女達は『巫女服』を着せられていたからだ。

そもそも何故こうなったのかと言うと、原因はオルソンだったのだ。上総達は最初、士官の制服や衛士のパイロットスーツである強化装備姿で、乗機の武御雷などをバックにしながら撮影などをしていたのだ。しかし、オルソンが……。

「帝国には帝国のウィッチが着る衣装があると聞いた事があります。それは使わないのですか!？」と問いかけたのが理由だ。ちなみに、ウィッチには魔女以外にも巫女の意味がある。

なので、先ほどオルソンが言ったドラゴンウィッチーズも龍神の姫巫女達を英語風に言い換えた物だ。

で、話を戻すと、オルソンの提案もあつて帝国軍の方の広報部隊も納得。急遽巫女服が用意されてしまった、と言う訳だ。

「ま、まあまあ安芸。落ち着いて？ね？」

そう言って彼女を宥める志摩子。彼女は更に……。

「この仕事は終わったら、また休暇を取ってギドラの所に行こう。ね？最近出撃が無くてあんまり会えてなかったし。ね？」

「……うん」

志摩子にギドラの名前を出された事で安芸も落ち着いた様子だった。何だかんだで彼女達とギドラの付き合いは1年以上になる。そして、今の志摩子や上総たちにとって、ギドラとは心の安らぎであり、支えでもあった。

世の医療関係の単語に、『アニマルセラピー』という物がある。これは動物を使ったセラピー療法の1つで、動物とのふれあいの中で人の心にある傷を癒やしたりするために行われるが、今の志摩子達にとってギドラの存在はこれに近い物があった。

彼女達にとってギドラは『戦友』であり『恩人』であり『友達』であり『英雄』であり、そして何よりも『精神の拠り所』なのだ。少し悪く言えば『依存』しているとと言っても良い。

これまで彼女達は多くの戦場をギドラと共にした。共に戦場を駆け抜け、共にBETAを駆逐し、共に生き残ってきた。そして、ギドラを神と人々が崇める程の圧倒的な力を、最も近くで見てきたのは他ならぬ志摩子達だ。

そしてだからこそ、彼女達にとって戦場においてギドラが居ないだけで士気が下がるし、逆にギドラが居れば士気は最高潮まで高まる。『依存』という単語は些か言いすぎかもしれないが、皆その一歩手前なのはもはや確実だ。

ギドラとのふれあいは彼女達にとって心の癒やしでもあるし、その力にこれまで守られてきた。志摩子達は『ギドラの加護』を受けていたと言っても過言ではないだろう。

それ故に、彼女達にとってギドラは言葉では言い表せない程に『大切な存在』なのだ。だからこそ、志摩子がギドラの名を出した事で安芸は落ち着きを取り戻したのだ。

しかし、それから数日後。志摩子たち4人は休暇申請を出し、受理されたのでギドラに会えると皆喜んでいた。だが、いきなり休暇前日になって通達があった。それは、帝国の広報部隊と国連軍の広報部隊も、一緒にギドラの眠る洞窟に行きたいと言ってきたのだ。

これに真つ先に怒ったのは安芸だ。彼女は制止する志摩子達を振り切つて恭子の部屋へと突撃した。

「どういうことですか少佐っ！なんで広報の連中が私達に付いてくるんですか!？」

怒りを滲ませる安芸。彼女にとって、あの洞窟は自分達とギドラだけの『特別な場所』という思いがあった。そのため、広報の連中が付いてくる事に我慢ならなかった。彼女にしてみれば、我が家に赤の他人が土足で上がり込んでくるような気分だった。

「ちよつと安芸っ！」

それを追いついた志摩子や和泉が宥めようとするが、安芸は聞く耳を持たない。

「皆だつてそうだろ!?あそこは、私達とギドラの思い出がある場所だろっ!?!そこに、部外者を入れる事に何の嫌悪感も感じないのか!？」

「そ、それは……」

「……」

安芸の言葉に志摩子は言葉を濁し和泉も俯いてしまう。

なぜなら、彼女達も安芸の言う事に一理あつたからだ。安芸ほどではないにしても、部外者である男達があそこに立ち入る事に、二人は嫌悪感を覚えて居た。しかし、そんな中でも比較的冷静だった上総が安芸を宥めた後、恭子の前に立つ。

「少佐。無礼を承知でお聞きしますが、何故洞窟に広報の部隊を?下手にギドラを刺激すれば、最悪死人が出る可能性があります。願わくば、私達が納得出来る説明をお願いしたく思います」

上総も冷静ではあつたが、他の3人と同様に、広報部隊の同行には否定的だった。

「そうだな。良いだろう。ならば話してやる。お前達が納得出来るかは別だが」

そう言うと、恭子は手にしていたペンを置き、話し始めた。

「お前達は、最近各地で怪獣が出現しているのを知っているな？」

「はい。欧州のボルギルス。東南アジアのカマキラス。それとソビエトの『ラドン』ですね？」

「そうだ。世界各地で新たな怪獣が出現した訳だが、帝国議会はこれ見よがしに自らの成功を売り込みみたい訳だ」

恭子は上総の言葉に頷きながら話を続けた。

「売り込む、と言うと？」

しかし、その言葉の意味が分からず首をかしげる和泉。

「帝国はギドラやモスラ、バトラ。つまり怪獣との共闘の結果国土を奪還し、更には希望作戦でもハイヴ攻略に貢献している。加えて、単独でハイヴを攻略するゴジラ。こう言った怪獣達をどう扱うか、いや、彼等とどう接していくかはBETA大戦後の、我々人類の運命を決める分水嶺となるだろう」

「分水嶺、ですか？」

「現在世界における怪獣に対する反応は2つ。BETA共々排除すべきと言う考え方。それとは逆に、BETAとは異なりこの地球で共に生きていく命として受け入れると言う考え方。そしてお前達は正に後者を体現した存在だ。ギドラと心を通わせているからな。だが逆に、前者の急先鋒として有名なのは米国のタカ派だ。軍人や軍産複合体と繋がりのある政治家連中にしてみれば、自分達の作る武器よりも、単独で尚勝る圧倒的な怪獣の存在は邪魔でしかない。……いや、自分達の力が及ばないことを恐れていると言っても良い。故に、排除したがつている」

「排除したいって、その力がまず及ばないのにどう排除する気だよ」

恭子の言葉に吐き捨てるように呟く安芸。

「それは連中も分かっているだろう。だが、奴らはそれでも恐れている。怪獣をな。だが、我が帝国議会、もっと言えば政威大將軍である悠陽様は逆の考えを持っておられる」

「つまり、怪獣との共存、ですね？」

「そうだ」

恭子は上総の言葉に頷く。

「Gフォースの結成から、徐々に悠陽様は力を付けてきている。特に軍内部では悠陽様を支持する者達が増えつつある」

「どうしてですか？支持者が増えてるって……」

と、首をかしげる志摩子。

「軍内部ともなれば、一般市民や政治家たち以上に前線で怪獣達に助けられた者も多く、その大半が怪獣教を信奉している。そこへ来て、怪獣との共闘を前提としたGフォース。更に怪獣との共存を考えていると言う噂が広まったのだ。軍人たちの多くが悠陽様を支持するのは確実だろう。……そして、その流れに帝国議会が乗ったと言う訳だ」

「成程、今の話を聞いていて何となく分かってきましたわ」

「え？ど、どういうことだよ上総？」

理解した、と言わんばかりに小さく頷く上総と、訳が分からず問いかける安芸。

「つまり帝国は、米国とは逆に、共存派の先鋒に立ち上がったと言いう訳ですわ」

「ど、どういうことだよ？」

「現状、我々人類の怪獣に対する反応は先ほど崇宰少佐の仰ったように、敵対するか、共存するかの二択です。そして敵対する者達のトップが米国であるのなら、共存派のトップは、今は空席と言う事になります」

「ツ!?じゃあまさかっ！」

「ええ。帝国は、その共存派のトップという椅子を狙っているのですわ」

上総の言葉に、安芸はしばし目を見開いた。

「BETA大戦が終われば、次に待っているのは怪獣とどう在るべきかと言う論争です。そして今現在、この世界は怪獣によってBETAの侵略を退けられているのが現状。加えて怪獣教が世界レベルで急速に浸透している今だからこそ、共存派が将来有利になるであろうと考えた帝国議会は、共存を強く主張したい。そして、そのために……」

「私達と、ギドラを利用して言うのか!? そのための広報だつて言うのか!? じゃあ国連の広報部隊は!？」

「……恐らく、世界により広く、私達を。もつと言えば共存派の旗印として私達を宣伝させるために敢えて許可を出したのでしよう」

その言葉に安芸はブルブルと拳を振るわせ……。

「ふざけるなっ!!!」

思い切り叫んだ。

「ギドラを、ギドラを政治の道具にするのなんて絶対に許せないっ!! アイツは、そんな事のために利用して良い存在なんかじゃないんだっ!!!」

安芸の怒声が響き渡る。しばし、彼女は肩で息をしていたが誰も何も言わない。安芸のハアハアと言う息づかいだけが響く。

上総も、志摩子も和泉も、安芸の言葉に内心同意していたからだ。戦友であり恩人でもあるギドラが政治の道具にされる事は、彼女達にしてみれば嫌悪対象以外の何者でもなかった。そして恭子もまた、その事は分かっていた。分かっていたのだが……。

「それでも、これは命令だ」

彼女は軍人なのだ。彼女は毅然とした態度で彼女達に言い放った。

「この広報活動は、軍上層部も期待されている。陸軍も、斯衛もだ。今更お前達が断ろうとしても、覆る事は無い」

「でも少佐っ!」

「お前達の憤りも理解出来る。ここに居る誰よりもギドラに近い存在なのはお前達4人だ。それを疑うつもりは無い。……しかし、上から下された命令は絶対なんだ。それが、軍隊と言う組織なんだ」

「ツ・そんなのっ! ギドラには関係無い事じゃっ!」

言いかけた安芸の背中に、上総が静かに手を置く。安芸が振り返れると、彼女は静かに首を横に振った。それは『もう止そう』という意思表示だった。安芸はその仕草を前に歯を食いしばった。彼女自身、もう自分達が騒いだ所で覆らない任務なのは分かっていた。

それでも、ギドラを政治に利用する事が、どうしても許せなかったのだ。だが上総に止められた安芸は、他の3人と共に『失礼します』と

言って部屋を後にしようとした。

が、その時。

「今の組織に不満があるのなら、上を目指さない」「え？」

不意に聞こえた声に振り返る安芸。そこでは、不敵な笑みを浮かべている恭子がいた。

「今の組織が嫌いなら、のし上がって、自分の力で変えられるように努力しなさい。それだけ言っておくわ」

そこに居たのは、時たま見せる、恭子の優しい一面の現れだった。それは彼女達の上に立つ者としてのアドバイスだった。

その後、上総たちはギドラの洞窟で撮影に臨んだのだ。どこの誰が悪乗りしたのか知らないが、撮影の最中にかなりきわどい水着を持ち込まれていた。これを着ての撮影を、と聞いた4人はすぐさま嫌そうな顔をした。すると……。

『『グルルルルッ!!』『』』

ギドラが威嚇のうなり声を上げ、更にその巨大な翼で4人を匿うように覆い隠した。そしてギドラの放つ殺気に当てられて何人かの撮影スタッフが泡を吹いて気絶する事態になってしまったので、きわどい水着での撮影は無しになった。

その後、撮影が終わった事で撮影スタッフ達は、ギドラの殺気に当てられて逃げるように洞窟をあとにしていた。しかし、上総たちだけは洞窟の中に残っていた。

「あ~~~~疲れた〜」

適当な岩にブルーシートをかけた所に、ぐでぐすと体を預ける安芸。相変わらずの取材やら撮影やら、慣れない笑顔やらで彼女も他の3人もお疲れ気味だ。

それを見ていた和泉は、静かにギドラの方へと歩み寄る。

「あのねギドラ。少しだけここで休んでいって良いかな?もう、時間も時間だし」

彼女が問いかけると……。

『キュルルウ』

良いよ、と言わんばかりにギドラが優しく喉を鳴らした。

「ありがとう、ギドラ」

その後、上総たちには基地に通信をした後、適当な場所にブルーシートを何枚か重ね、その上で横になった。毛布代わりに大きなシート一枚を掛けて、しばらくすると彼女達は眠りについてしまった。それを見守っていたギドラは……。

『ズシッ、ズシッ』

彼女達を起こさないように一步一步、静かに歩み寄る。そして、自らも横になりながら、翼で優しく彼女達の周りを守るように包み込んだ。

それはまるで、親が愛する我が子を両手で抱きしめ守るように。

それから数分後。安芸の寝相が少し悪いせいか、全員で被っていたシートがずれてしまう。季節もあるが、洞窟の中はそこそこ寒い。シートがずれて、和泉が無意識に体を震わせた。

すると、ギドラの中央の首がスツと伸びてきて、器用のずれたシートの上を口先でつまむと、上手く動かして和泉にシートを掛けた。和泉が寒さに震えなくなると、ギドラは安堵したように自分もまた眠りに付いた。

少女達が龍神を大切に思っているように。龍神もまた、彼女達との出会いの果てに紡いだ絆を大切にしていた。

だからこそ、ギドラは、そして今はその中にあるバラゴンもガーデーも思う。

『例え言葉を交わす事は出来ずとも、彼女達を守ろう』と。

彼等は誓う。聖獣の名に恥じぬ、その高潔なる魂に。

巫女たる少女達を守る事を。

しかし、一方で……。

欧州某所。夜。

とある場所で、数機の戦術機と歩兵たちが簡易なキャンプをしてい



た。彼等の任務は偵察と警戒だ。

通常、BETAの軍団の移動などはまず真つ先に人工衛星などで観測されるが、人工衛星による監視網も完璧ではない。その穴を埋めるために、前線の一部ではこうして人の眼による監視が行われているのだ。数十人の歩兵と彼等に乗せるためのトラックと装甲車。戦術機は米国製の第1世代機、『F-5フリーダムファイター』を欧州でライセンス生産した機体である『トーンード』だ。完全武装の戦術機が6機、2機を1分隊として、3個分隊+アルファの戦力が監視任務に就いている訳だ。

とは言え、ボルギルスの出現以降、『何故かBETAの活動が停滞』しているため、はつきり言つてこの監視キャンプの兵士達は油断していた。

だが……。

「ん？」

その時、戦術機に乗つてレーダーを監視していた1人の衛士が何かに気づいた。そして、すぐに通信機に向かって叫んだ。

「レーダーに感ありっ！動体反応検出っ！各自戦闘態勢！」

彼が叫ぶと、待機していた兵士や衛士達が慌てて動き出した。衛士達は戦術機に飛び乗り、歩兵達はライフルや無反動砲を構える。

BETAの物量の前には歩兵のライフルや無反動砲など、1匹を倒す事は出来ても、それが限界だ。しかし彼等の任務はあくまでも偵察であり戦闘ではない。だから護身目的でこれらの装備を持っているのだが……。

「ブラボーリーダーよりブラボー6！現状を報告せよっ！」

隊長各の衛士である男の声が通信機より響く。

「レーダーに映った目標の数は1っ！微速ながらもこちらへ接近中っ！」

「数は1だどっ!?それはBETAなのか!？」

「不明っ！音紋をデータベースで解析しましたがデータは無しっ！」

「データが無いっ!?まさか、新種だとしても言うのか!？」

隊長衛士は、静かに歯がみした。BETAで新種と言えば、5年ほ

ど前に初めて確認された兵士級がそうだ。

噂では、あれはBETAが捕食、ないし捕獲した人間をベースに作られたとも言われている。BETAの姿形はどれをとっても『醜悪』の一言に尽きる。その、醜悪な怪物の新種が誕生したかもしれないとあつては、誰だつて恐れる。

「念のため歩兵隊は下がらせろ！我々より約100メートル後方に後退後、照明弾の用意をっ！」

『『了解っ！』』

指示を受け、歩兵達を乗せたトラックがすぐさま発進し戦術機部隊の後方へと下がる。

そして、そうこうしている内に目標が戦術機部隊の傍まで迫る。

「照明弾、撃てっ！」

隊長衛士が指示を飛ばすと、後方の下がった歩兵隊からいくつもの照明弾が放たれ、それが夜の世界を照らす。そこに現れたのは、歪な怪物だった。

灰色一色の体に、不気味な赤い眼の、四足歩行の怪物。

『キュロロロロロッ！』

とてもこの世の動物が発するとは思えない不気味な鳴き声が、衛士達の恐怖を煽った。と、その時、風向きが変わって、怪物が風上になったのだが……。

「うぐっ!?何だこの臭いつ!？」

100メートル以上離れた歩兵達の鼻孔を突き刺す刺激臭に、兵士達の大半がたまらず鼻を押さえた。

戦術機に乗る衛士達は、臭いで鼻をやられる事は無いが目の前の怪物を警戒しながら冷や汗を流していた。各々突撃砲を構え、臨戦態勢だ。

だが、彼等は発砲する事を躊躇っていた。BETAはこんな風に単独で行動する事はない。『BETAではないのにこの巨体、ならば怪物なのでは?』と言う考えが彼らの頭の中にあつた。そして怪物はBETAと敵対する、言わば人類の救世主的存在。だからこそいきなり発砲する事を躊躇っていたのだ。だが……。

『キュロロロロッ！』

怪物が雄叫びを上げたかと思った次の瞬間、体の一部を戦術機部隊に飛ばしてきた。

「ッ!?全機回避っ！」

咄嗟に指示を出し、周囲へ散りながら回避するトーネード達。

『くっ!?奴が怪獣なのかBETAなのか分からないが、先に向こうが仕掛けたんだっ！正当防衛は成り立つだろうっ！』

「奴からの攻撃を確認っ！各自の自己判断で攻撃を許可するっ！」

『『『了解っ！』』』』

次の瞬間、6機の戦術機の突撃砲が火を噴いた。放たれる銃弾の雨。だが……。

いくら銃弾をたたき込もうとも、怪物は平然とした様子で向かってくる。

「くっ!?どうなってるんだっ！」

『野郎っ！これでも食らえっ！』

隊長が悪態を付いたとき、1機のトーネードが120ミリ滑空砲から粘着榴弾、『HESH弾』を放った。

放たれたHESH弾は怪物の前足近くに着弾した。爆発による爆煙が怪物の体を覆い隠す。彼等は距離を取って警戒をしていた。が……。

『キュロロロロッ！』

爆煙を越えて現れたのは、片足を失ってもなお向かってくる怪物だった。

「う、嘘だろっ!?なんで負傷したのに、血も流れてねえんだよっ!?」

BETAでさえ、負傷すれば血を流す。だがこの怪物は、負傷しても血すら流さない。明らかに化け物じみていた。

そして、その恐怖が彼等の『隙』となった。

『キュロロロロロッ！』

次の瞬間、怪物は雄叫びを上げながらその巨体には想像も出来ない跳躍力を持ってジャンプし、1機のトーネードに飛びかかった。その1機は、恐怖によって動けなかった。

避けられなかったトーネードに真上からのし掛かる怪物。

「ひいつ!? た、助けてくれエツ!」

中に居た衛士が叫ぶ。

「や、やめろおっ!」

仲間たちが怪物を引き剥がそうと突撃砲を放つが、怪物は退かない。そして、その隙に怪物の持つ『硫酸ミスト』が戦術機さえも『腐食』させていった。

「う、うぐあああああつ?!?!?」

そして、装甲を突き破った硫酸ミストは衛士さえも『溶かして』しまった。

仲間の最期を前にして恐怖を覚える衛士達。

「く、クソがあああああつ!」

仲間の死に錯乱した一人がやたらめつたらに突撃砲を撃ちまくった。

しかし、その一発が幸か不幸か推進剤の入った部分に命中し、瞬間に発火し……。

『ドゴオオオオオオンツ!』

溶かされつつあった戦術機と怪物を飲み込む程の爆発が起こった。

周囲に怪物の肉片と戦術機の残骸が飛び散る。

彼等は、しばし呆然としていた。が……。

「ツ!」

真っ先にリーダーの男が我に返った。

「緊急事態だつ! 今すぐ後方の基地へと下がり、事態を報告するつ! 行くぞつ!」

『『『りよ、了解つ!』』』

隊長の言葉で他の4人も我に返り、逃げ出すようにその場をあとにした。

あんな怪物が他にも居たら。

そんな恐怖が、彼等が逃げ出すようにこの場を離脱させる原因になった。

だからこそ、彼等は気づかない。

『ウジユル、ウジユル』

飛び散った怪物の肉塊が、今もまだ『生きて動いていた』事に。

怪獣の登場によって戦いは有利になったかと思われた人類。だが、そんな淡い希望を打ち砕かんと新たな『絶望』が現れたのだった。

第17話 END

## 第18話 熱砂の出会い

時は少しばかり遡り、某日。Gフォースに所属している上総たちは、ある日広報活動に追われていた。広報活動を苦手としながらも、任務としてしぶしぶこれに応じる彼女達。しかし、ギドラの存在を政治的に利用しようとする政府に彼女達は怒り心頭だった。だが、龍神の姫巫女と言われる彼女達でも、それを覆すことは出来ず、内心歯がみしながらも任務を行っていた。だが、そんな平和な帝国から離れた場所で、新たな脅威が生まれつつあった。

くくくまたしても時は遡りくくく

2000年のアメリカ、ネバダのグルームレイクにある基地。そこはアメリカの戦術機開発における最大規模の基地で『エリア51』とも言われている。

そこに一人の青年がいた。彼の名は『ユウヤ・ブリッジス』。そして、彼もまた、『怪獣』と関わる事になる一人の人間だった。

「つつ」

ある夜、ユウヤは不機嫌そうな表情で、左頬を赤くしながら基地内をブラついていた。

ユウヤは先ほどまで基地に所属する同僚の衛士と、酒に酔って喧嘩をしたばかりだ。頭を冷やしてこい、と上官に言われたのだが、こうしてあてどなく基地の中をブラつくばかりだ。しかしここはネバダ。冬の夜は寒く、その冷たさが、赤く腫れた頬に突き刺さる。

「ちっ」

それに舌打ちするユウヤ。何か気を紛らわせる物は無いかとポケットの中を探っていると……。

「あ？…これって……」

ポケットの中にあっただのは、ハーモニカだった。それは、喧嘩の現場になったバーを出るときに。

「はいユウヤ。これ」

「あ？何だよこれ」

今のユウヤの彼女でもある『シャロン・エイム』がこっさり渡してくれたものだ。

「音楽つてストレス発散に良いのよ？試して見たら？」

と、そう言つて渡されたものだった。

戻つて現在。

「ハーモニカ、ねえ」

ユウヤは気怠げに息を吐きながら、それを吹き始めるユウヤ。しかし経験などない楽器の演奏に彼は四苦八苦しめた。

「ちっ！このっ！」

そこに来て、ユウヤのプライドの高さが顔をのぞかせた。それから練習する事数十分。

「へっ、これでどくだ」

一応、そこそこは吹けるようになったユウヤ。そのまま基地内をぶらぶらしながらハーモニカの練習をしていると……。

『……アアアンツ』

「ん？」

ユウヤの耳に、聞きなれない声が聞こえて来た。彼は、何だ？と周囲を見回し歩き出した。しばらくすると……。

『…アアアンツ』

「っ、こっちか？」

先ほどよりはつきりと聞こえ始めた声に導かれるように、ユウヤは歩を進める。やがて彼は一つの大きな建物を見つけた。

「ここは、確か資材倉庫のはずじゃ？」

その建物は、ユウヤの知る限り戦術機の武器の予備パーツや弾薬、開発資材などを保管しておく『唯の倉庫』のはずだった。

『キュアアアアンツ』

「ツ……!?!」

しかし、その倉庫の中から聞こえるのは機械の駆動音でも人の声でも無い。それに戸惑い、ユウヤは咄嗟に身構えてしまった。

彼は鋭い視線で目の前の倉庫を見つめている。その時ふと、彼は近

くのドアが目に入った。ユウヤはゴクリと喉を鳴らし、ゆっくりとドアに近づきドアノブを捻った。

『ガチャリ』

すると音を立ててドアが開く。

『施錠されてないだど？まさか、誰かが侵入したのか？』

ユウヤはドアを開け、中をのぞき込む。中は薄暗く、分かるのは建物の見た目通りかなり広いと言う事だけだ。ユウヤは静かに中へと足を踏み入れる。そして、ユウヤは偶々入り口近くにあった鉄パイプを手に、明かりのスイッチを探すために壁に手を突きながら歩いて行く。

『スイッチは……。つと、これか？』

歩いていると、ユウヤは暗がりの壁に何かを発見した。そして、それを押した。すると……。

『パッ！パッ！パッ！』

ユウヤの考え通りそれは明かりのスイッチだった。建物内部にある照明が次々と点灯していくが……。

「うっ」

彼は突如明るくなった室内に、目を背けるように下を向いた。そして数回瞬きをした後、視線を戻したのだが……。

「なっ!？」

ユウヤは、驚愕の表情を浮かべた。

それもそのはずだ。

今、彼の眼前には巨大な檻があった。巨大な部屋の大半を占めるその檻。だが問題は檻の中身だ。

そこには、『青い巨鳥』が横たわり眠っていた。

青い体。赤い鶏冠。黄色い嘴を持つ巨鳥が横たわっていた。

「何だこいつ?!まさかBETAっ!？」

最前線から遠く離れた米国で育った衛士の中には、BETAをその目で見た事が無い者も多い。ユウヤも例に漏れず、実物のBETAを目にしたことが無い。だから目の前の存在をBETAか?!と疑っても仕方が無い。



すると……。

『キユウウウン?』

ユウヤの声に気づいたのか、眠っていた巨鳥が目覚めました。

「ッ!」

それに息を呑むユウヤ。すると、周囲を見回していた巨鳥がユウヤに気づいてそちらに目を向けてきた。

視線が交差するユウヤと巨鳥。ユウヤは目の前の存在に圧倒され、冷や汗を流しながらも声を上げる事なく、固まってしまっていた。

『キユウウウン?』

しかし目の前の巨鳥は、真夜中の来客を見つめるばかりで、威嚇したり怯えたりする事も無く、ただ来客、ユウヤを見つめながら首をかき上げていた。

しかし、肝心のユウヤは内心戸惑いを隠せないで居た。

『な、何だこいつは!?! BETA、なのか!?! にや、にしたって大きい!?! 要塞級クラスかつ!?! まさか新種っ!?! それを米軍が捕まえてたのか!?!』

知識と経験の無さ故か、目の前の巨鳥がBETAなのではと考え、恐れ戦くユウヤ。

と、その時。

「おいっ!?! そこで何をしているっ!」

突如声が掛けられた。ユウヤがそちらを向くと、そこに立っていたのは完全武装の警備員が数人と白衣姿の、如何にも研究員と思われる風体の男が数人だった。しかも警備員たちは手にしたサブマシンガンをユウヤに向けている。

慌ててユウヤは両手をホールドアップする。

「貴様、どうやってここに入った!?! ここは関係者以外立ち入り禁止区画だぞっ!」

「い、いや偶々だっ!?! 偶々あそこのドアが開いてたから入っただけだっ!?! 大体、ここは公式にはただの倉庫だったはずだろっ!?! 何なんだこのデカブツはっ!?!」

「貴様が知る必要は無いっ!」

警備員達は、ユウヤの言葉にそう怒鳴り返すとすぐさま彼の背後に

回り込み、床に倒して押さえ付けてしまった。

「ぐっ?!何すんだっ!」

「大人しくしろっ!貴様を拘束するっ!」

咄嗟に声を荒らげるユウヤ。だがそれも空しく、警備員の1人が手錠を取り出した。

『クソツ、最悪だっ!』

彼は内心悪態を付く。

と、その時。

『キュアアアアアンツ!キュアアアアアンツ!』

「ツ!?これは……!?!」

突如として巨鳥が声を上げた。それに戸惑い、研究員や警備員達の視線が動きを止めそちらを向く。

『キュアアアアアンツ!キュアアアアアンツ!』

巨鳥は、まるで『止めて』と言わんばかりの表情で何度も鳴いている。

「まさか、『リドリラス』が彼に反応しているのか?」

『ツ、リドリラス?』

ポツリと研究員が呟いた単語に、ユウヤは反応する。

「今まで人に反応することはあったが、まさかこれほどとは……!」

と、ブツブツと研究員が何かを喋っていると……。

「おいっ!何してる!?!」

「ツ、スヴェン大尉ツ!?!」

1人の男が現れた。それは『リック・スヴェン』大尉。ユウヤの直属の上司に当る男だ。

その後、スヴェンの取りなしもあった事やユウヤの供述通り、ドアが施錠されていなかった事から管理の方に問題があった事などが露呈し、結果的にユウヤはおとがめ無しとなった。

翌日。ユウヤはスヴェンの部屋に呼び出されていた。

「ブリッジス少尉。……お前は、あの鳥を見たな?」

「はい。確かに見ましたが、何なんですかアイツは?まさか、新種のB

ETAとか？」

「いや。あいつは『怪獣』だ。お前も怪獣くらいは知ってるだろ？」

「え、ええまあ。最近になって見つかった、変な力を持った化け物の事ですよ？」

「そうだ。そして、あの鳥、『リドリアス』もその怪獣の1匹だ」

「ッ。じゃあ米軍は怪獣を捕獲してたんですか!？」

「ああ。だが、何時どこで捕獲されたのかは、俺も詳しくは知らん。分かっているのは、アイツにリドリアスという名前が与えられていること。比較的温厚で、学者連中は『友好巨鳥』なんて呼んでる事。アイツが、温かい所が好きなのでここに居る事くらいだ。今はあぁして、カゴの中の鳥って訳だ」

「温かい所が好きって、だからこのグルームレイクに？」

「そうらしい。……この基地でリドリアスの存在を知っているのは最低でも部隊長クラスでなければならぬ」

「それで、下っ端の俺達には知らされてなかった、って事ですか？」

そう、吐き捨てるように呟くユウヤ。

「そう腐るな。……ただでさえ、近年は世界各地で怪獣を擁護する主張が騒がれてる。そんな中で米軍が怪獣を捕獲し実験材料にしたなんて知られれば、世間に格好の批判材料を与える事になる。特にメディア共は大衆受けする記事のネタを求めて奔走してるんだ。それをみすみす提供してやる気は無い、ってのが上の決定だ。お前が知らないのも無理は無い。それに、あんなデカいのがすぐ身近に居たってしれたら、大体の奴は騒ぐだろ？だから騒がれて情報漏洩しないように一部の人間しかリドリアスの事は知らされてなかったんだ」

「……そうっすか」

「とにかく。リドリアスの事は今のところ大半の奴らが知らない事だ。お前も、不用意に他人へ漏らすなよ。……話は以上だ。下がってよし」

「はっ。失礼しますっ」

そう言っユウヤはスヴェンの部屋を後にした。

だが、それから数日後。事件は起こった。

その日、ユウヤは部隊の仲間と共にとある機体の配備計画に関わっていた。その名を『ラプター配備計画』と言う。

現在、世界各地では第3世代戦術機の開発が盛んにおこなわれている。帝国の不知火や欧州のタイフーンやラファールなど、既に実機が戦線に投入されている。そんな中で米国が開発しているのは、『F-22A ラプター』という名前の第3世代戦術機だ。このラプターは、本来対BETA戦闘では不要と思われるステルス性能を付与されている。

そう、ラプターは『戦術機と戦う事を想定した戦術機』なのだ。この設計思想もまた、米国が対BETA戦後、地球で発生すると考えている資源争奪戦で他国と戦う場合、勝るためにという考えの元に生まれたのだ。

BETA大戦の終結も見えぬまま、このような機体を作る事は『捕らぬ狸の皮算用』と言わずして何という。しかし、米国の要人たちに言わせれば、それは『将来性を見据えた物』なのだ。彼らは勝利を確信している。『自分達ならばBETAに勝てる』と。そのための切り札がG弾なのだ。

そして大戦終了後、人と人の戦いに勝つために、こうしてラプターを開発していたのだ。

だが、開発されたラプターをいきなり実戦配備できるわけではない。今、基地ではユウヤのようなテストパイロットたちによる試験運用をして、問題点の洗い出しとその改善。そう言ったダメ出しをしてから、更に実戦配備型と言われるようなタイプになって初めて実戦に投入される。

そして今、ユウヤ達はそのラプターを改善するために色々とテストを行っていたのだ。

そして、今日も今日とてユウヤと、同僚の『レオン・クゼ』はラプターに乗り込み、データを取るためのチェイサー、2機の『F-15

E ストライクイーグル』にはシャロンと隊長のスヴェンが乗り込んでいる。

そしてデータ採取を終え、基地に戻ろうかという時だった。

『ゴースト小隊へっ！こちらHQ！緊急連絡っ！』

突如として4人の元へ通信が届いた。

「こちらゴースト1。どうした？何があつた？」

「基地施設内部より突如として怪獣が出現っ！資材用倉庫一つを破壊して飛び立ったっ！そちらに向かっているっ！警戒しろっ！」

『ッ!?なんだと!?!』

ユウヤはこの通信を聞いた時、脳裏にリドリアスの姿を思い浮かべた。

『まさか、あいつが脱走したのか？にしたって何だってこつちにつ!?!』

彼はすぐさま状況を整理する。今のラプターは武装らしい武装を持っていない。

「ちっ！」

彼は舌打ちをするとすぐさま他の3人に通信を繋げた。

「隊長っ！隊長は2人と下がって下さいっ！俺が囷になって時間を稼ぎますっ！」

「えっ!?ユウヤっ?!」

「お前何を勝手にっ！」

ユウヤの言葉にシャロンが戸惑い、レオンが声を荒らげた。

「うるせえっ！どのみち俺達にまともな武装は無いんだろうがっ！だったら1人が囷になるしかねえだろっ！かといって、隊長とシャロンはイーグル。で、俺とお前はラプターっ！性能を考えればどっちが囷になった方が良いか、分かるだろうがっ！」

「うっ」

ユウヤの言葉にレオンは一瞬言葉を詰まらせる。

ユウヤの言うとおり、まともな武装が無い中、4機で立ち向かって相手は怪獣。全滅させられる可能性はある。だったら1機が囷になって残りを逃がすのは合理的な判断だ。

「分かった。ゴースト2、俺達は下がる。だがこれだけは言っておく。

死ぬなよ」

「了解っ」

ユウヤはスヴェンの言葉にそう返すと、3機から離れて飛び出した。

『当たり前だ。こんな所で死ぬるかっ！俺はもっとっ！もっとっ！』

ユウヤは歯を食いしばりながら前に出る。そして、数秒してその姿をカメラが捉えた。リドリアスだ。背中の翼を広げたりドリアスが真っ直ぐユウヤの方に向かって来た。

「来やがれ鳥野郎っ！こっちだっ！」

ユウヤはマイクをオンにして叫ぶと、すぐさま方向転換して基地から離れるように飛んだ。

『キュアアアアアンツッ！』

すると、それを追うようにリドリアスがユウヤのラプターを追いかけ始めた。

『食いついたっ！落とせるもんなら、落として見やがれっ！』

ユウヤは更に高度を下げ、眼下に見える溪谷へと向かった。そこは戦術機のタイムアタックに使われているコースだ。溪谷は、翼を広げたりドリアスでは降りる事が出来ない。しかも溪谷内部はかなり入り組んでいるので、ユウヤはここでリドリアスを撒こうとも考えていた。

だが……。

「クソツッ！」

彼は悪態を付きながら網膜投影画像を注視する。現在、溪谷を駆け抜けるラプターの真上を、マツハ2の飛行速度を持つリドリアスが悠々と付いてくる。

溪谷内部で速度が出ないラプターでは、何も無い上空を飛べるリドリアスを撒くことが出来なかったのだ。そして、それ故に焦りが生まれる。

「ッ!?やべっー！」

ラプターがついに溪谷の行き止まりにたどり着いてしまった。慌てて着陸し振り返るが……。

『ズズンッ』

そこに降り立ったリドリラス。

「クソッ！」

ユウヤはラプターを後ずさりさせるが、すぐ後ろは断崖絶壁の崖。今から飛び上がるうとしても、戦術機より巨大なリドリラスに掴まれて終わりなのは、ユウヤでも分かる。かといって、リドリラスの脇をすり抜けられるほど渓谷は大きくない。

文字通り、万事休すかと思われた。……だが、そもそもユウヤの前提が間違っていたのだ。

『キュルルルウ』

リドリラスは、まるで『楽しかった』と言わんばかりに小さく喉を鳴らす。

「ッ。何だ？こいつ」

まるで襲ってくる気が無いリドリラスに、ユウヤは肩すかしを食らったようだった。

すると、リドリラスはもう一度鳴くと翼を広げて飛び上がった。そして上空を旋回し、眼下のユウヤのラプターに向かって更にもう一度鳴くと、基地の方へと戻って行ってしまった。

それを、訳が分からず呆然と見送る事しか出来ないユウヤ。

「ユウヤッ！ユウヤ大丈夫っ!?!」

そこに響くシャロンからの通信。更にスヴェンやレオンからも通信が届くのだが、ユウヤは呆然としながら空返事を返す事しか出来ないのだった。

その後、リドリラスは基地の方へと向かった。当然基地の戦術機部隊などが迎撃に上がった。しかし、基地内部の研究者たちから『貴重なサンプルだから無闇に攻撃するな』、と指示が飛んできた。『それどころじゃないだろっ!?!』と部隊の衛士が怒鳴り合っていると、リドリラスが基地に戻ってきてしまった。基地内なので、不用意に銃火器を使えない、と戸惑う戦術機部隊だったが、リドリラスはそんな彼等を一瞥すると、何と元の格納庫の中へと戻り、眠りについてしまったの

だ。

これに困惑したのは戦術機部隊の衛士たちだった。突然基地内部から現れた怪獣が、脱走したかと思えば、普通に戻ってきたのだ。彼等が困惑するのも無理は無い。

で結局、訳が分からない衛士達は基地の研究者たちに訳を説明するように詰め寄った。

その後は基地側から衛士達にリドリアスの事が説明された。更に……。

「アイツの脱走はどう説明するつもりだ？」

説明が為された後、スヴェンが研究者達に問いかけた。

研究者たちは、その答えとして『ストレスが溜まっていたための行動だろう』と答えた。彼等曰く、長い間倉庫の中で閉じ込められてストレスが溜まっていたリドリアスは、その翼を広げて空を飛びたいがために脱走。しかし基地を巣と考えているのか、空を飛びストレスが軽減されたため、帰巢本能によって巣である基地に戻ってきたのだろう、と言う事だった。

その後、結局リドリアスの存在は基地の全員が知る事になった。最初は怪獣というリドリアスの存在に懐疑的な者も多かった。

が、しかし……。

「リドリアス」

ある日の事。すっかりリドリアスの巣となった元偽装格納庫にシャロンが訪れて居た。

「キュルルルウ」

彼女の来訪を、喉を鳴らして喜びリドリアス。そしてリドリアスが嘴を近づけると、シャロンはそれを愛おしそうに撫でる。

「リドリアスは今日も元気ねえ」

そう言って、シャロンはリドリアスを撫でながら笑みを浮かべていた。その後、彼女が去った後も女性衛士や男性衛士達がリドリアスの元を訪れていた。

軍事基地でもあるこの基地では癒やしになる存在など滅多に無い。



その代替として男女が夜を共にしたり、酒を飲んだり、と言うのが現状だ。そんな中で現れたリドリアスは、普段は大人しく最近では戦術機と共に空を飛ぶ事もある。

友好巨鳥と言われるリドリアスだけあって、彼は訪れる人間達に好意的に接していた。

そして、そんなリドリアスの元によく足を運んでいたのが、ユウヤだった。

彼は部隊内でも浮いている存在なのだ。実は、ユウヤとレオンは日米混血の、日系アメリカ人だ。レオンはその事に誇りを持っているが、ユウヤは対照的に過去の経験などから、自らに流れる日本人としての血を嫌悪しており、それが帝国への嫌悪にも繋がっている。更に、部隊内ではその出生から来る差別に対して、拳で応じる事もあって喧嘩沙汰は絶えない。普段の、ユウヤ自身の周囲を鑑みない行動や発言のせいで敵は多いのだ。

そんなユウヤにとって、部隊内ではこれと言った居場所は無い。だからこそ、時間を持て余した時、ユウヤはこうしてリドリアスの元へ足を運ぶようになった。

そして、いつぞやシャロンより貰ったハーモニカを吹く。そうすると、リドリアスは静かにユウヤの演奏を聴き、それが終わると嬉しそうに鳴く。

そうやって、言葉を交わさずとも共に居る時間を過ごしていたユウヤとリドリアス。

ユウヤにとつて、周囲の人間と接することは得意ではなかったし、むしろ苦手だった。自意識が強い彼にとって、周囲の人間は時に敵とも言える者だったからだ。

だがリドリアスは時に彼の愚痴を聞き、心配そうな声を上げる。あるときは共に空を飛んだ事もある。

リドリアスにとって、彼がどこでどう生まれようが関係無かった。なぜなら、リドリアスにとって、ユウヤを含めた全員が『1人の人間』だったからだ。出生も階級も性別も関係無く、同じように接するその

姿は、奇しくもかつて、ユウヤを混血と蔑んだ人間達と正反対だった。それ故に、部隊に居場所のないユウヤはリドリアスの傍に居た方が落ち着けたのだ。

更にある日の事だった。ユウヤが一人、訓練で飛んでいるとリドリアスが傍にやってきたのだ。

「……お前、飛ぶのが好きなのか？」

ふと、通じないと分かっているユウヤはスピーカーを通してそう問いかけてしまった。すると……。

『キュルルッ！』

頷くようにリドリアスが喉を鳴らすのだった。

「そうか」

その答えにユウヤはそれだけ呟く。その後、ユウヤはこれまで以上にリドリアスの元へ足を運んではハーモニカを吹くようになった。リドリアスも、ユウヤがやってくると嬉しそうに鳴いていた。奇しくも、部隊の中で居場所のなかったユウヤが落ち着けるのは、人ならざる怪獣、リドリアスの傍だったのだ。

だが、そんな日々を繰り返していたある日。事故が起きてしまった。

ここ最近になって、ラプターの配備に関して懐疑的な話が持ち上がっていた。ラプターはその性能のため、1機当りのコストはかなりのものなのだ。そのため、懐疑論に端を発する開発予算の減少。それにもなう運用テストも遅れが出始めていた。

そして2000年8月。

開発予算の減少、運用テストの遅れ。それらはユウヤ達に『焦り』としてのし掛かった。このままではラプターの配備計画が頓挫する恐れがある。だからこそ、渓谷での機動性をテストする時、ユウヤは良い記録を叩きだそうと必死だった。

通常プランを無視した高速機動を続けるユウヤのラプター。それをチェイサーとして追いかけるスヴェンのストライクイーグル。ス

ヴエンはレオンのラプターとシャロンのストライクイーグルを下げさせ、自分がユウヤの後を追った。

その時だった。

「あんのバカッ！」

レオンはコクピットの中でスタンドプレーをするユウヤを罵っていた。と、その時。

「えっ?」

シャロンがリーダーを見て何か近づいてくるのに気づいた。

何かが高速で近づいてきた。戦術機の数ではない。慌ててカメラを動かしたその時、2人の傍を大きな影が通り過ぎていった。それは……。

「なっ!?リドリアスッ!」

「ッ!?なんでアイツがここにっ!」

それは基地にいるはずのリドリアスだった。2人はその出現に、ただ驚く事しか出来なかった。

そして、事件は発生した。

ユウヤは一瞬、後ろを走るスヴェンのイーグルに気を取られてしまった。気づいた時には崖が迫っていた。ユウヤはそれを、舌打ちをしながら見事に回避した。

だが、崖のすぐ近くで跳躍ユニットを吹かしたせいかは分からない。元々風化し脆くなっていたのかもしれない。だが、確実に崖崩れが発生した。

「ッ!」

瓦礫がスヴェンのイーグルの道を遮るように降り注ぐ。

「ぬおおおおおおおっ?!?!」

スヴェンはそれを避けきれず、瓦礫のシャワーへと突進してしまった。

と、その時。

『キュアアアアアアアンツ!!』

すんでの所で、リドリアスが滑り込んできたのだ。

そしてリドリラスとスヴェンの乗るイーグルは、瓦礫の中に消えていった。

「ッ!? 大尉っ!」

それを後ろから追いついたレオンが見ていて、声を荒らげた。ユウヤもラプターの高度を上げ滞空し振り返る。

3人は、まさか、と考えてしまった。と、その時。

『ゴガアアアアンツ!!』

瓦礫の山を粉碎してその下から現れた姿があった。それはリドリラスだった。しかもその腕には器用にスヴェンのイーグルが握られていた。まるでイーグルを守るように、リドリラスは両腕をイーグルの背中に回していた。

しかし、瓦礫を受けた影響か、翼は所々負傷していた。

「大尉っ! 無事ですすかっ!?! 大尉っ!」

レオンが通信機に向かってまくし立てる。

「あ、ああ。何とか、な」

そこに帰ってきたスヴェンの言葉に、3人は安堵した。

その後、試験は中止。リドリラスはユウヤ達4人に付き添われながらも帰還。だが、翼の傷もあってしばらくは安静にさせよう、と言うのが研究者たちの意見だった。更にリドリラスが飛び出したことに関しては、研究者たちは首をかしげた。一部では『リドリラスの第六感では』と言い出す始末だった。

一方で、衛士達もリドリラスが無事な事に安堵していた。しかし、リドリラスが傷を負った事に関する怒りが、ユウヤに向けられたのだ。

事故から数日したある日の事だった。

「惨めだなブリッジス」

「あ?」

食堂でユウヤが食事を取っていると、普段から因縁のある衛士の1人がそう言って声を掛けてきたのだ。

「試験の最中、上官が死にかけるは。その尻拭いでリドリラスが負傷するわっ! 何がエースだっ! 笑わせるなこの死神野郎がっ!」

「何だとテメエっ！」

相手の言葉に、手が出て喧嘩になるユウヤ。そして、殴り殴られ、頬を赤くしながらもユウヤはリドリアスの元を訪れた。

事故の後からユウヤがここを訪れるのは、初めての事だった。

『キュルツ？キュルルウツ』

リドリアスはユウヤに気づくとリドリアスは嬉しそうに喉を鳴らした。しかし、ユウヤの頬が赤いことに気づくと、心配そうにオロオロし始めた。

だが……。

「……何でだ？」

『キュルウ？』

ユウヤの小さな言葉に、リドリアスは戸惑い首をかしげる。  
すると……。

「なんでお前はそんな平然としてられるんだよっ！俺のせいで怪我したかもしれないんだぞっ！」

声を張り上げるユウヤ。幸い、今ここには彼とリドリアスしかない。  
い。

『キュルルウ』

するとリドリアスは、まるで『ごめんね』と言わんばかりに目を伏せ悲しそうな声を上げる。

「ツ!?……そうじゃねえ。……そうじゃねえだろっ！」

だが、それが却ってユウヤの心を逆なでしてしまった。

今のユウヤには、リドリアスに対して謝罪したい思いがあった。奇しくも、今現在ユウヤが最も信頼出来る相手に上げられるのが、リドリアスだった。裏表の無いリドリアスだからこそ、ユウヤはあの事件の前まで、少しづつリドリアスに心を開きかけていた。

だが、ここに来て事故でリドリアスに迷惑を掛けてしまった。だから、いつそリドリアスが怒ってくれば良かった。ユウヤはそう思っていたのだ。

だが、返ってきた反応は全くの正反対だった。だからこそ、彼は声

を荒らげてしまう。

しかしそれも逆効果だった。リドリアスはますます目を伏せてしまう。

そして、結局。

「クソツ……！」

怒りと謝罪したい思いがない交ぜになってグチャグチャになった心をどうしようも出来なくなったユウヤは、悪態を付いてその場を後にしてしまった。

そして、それ以降ユウヤがリドリアスの元を訪れる事は無かった。

それからしばらくして、ユウヤはネバダを離れてしまった。『XF J計画』というものを参加するためにだ。

果たして、ユウヤとリドリアスはこれからどうなるのか。

そして、ユウヤを待ち受ける出会いとは。

それはまだ、ユウヤ自身には分からない事だった。

ユウヤ・ブリッジス。彼もまた、1人の人間として怪獣と関わり始めたのだった。

第18話 END

## 第19話 怪物

2001年。コスモスベースに現れたソビエトの狂人、アレキエフ・マエロフによって新兵器の開発が進む一方、欧州では未確認の怪物が確認されたのだった。

2001年3月。マエロフによる機動兵器のひな形である『機動戦闘服タイプ01』が開発され、そのデータと実機が国連軍などに提供された。しかし……。

ある日の事だった。コスモスベースに滞在している夕呼を訪ねて、血相を変えた芹沢がやってきたのだ。その内容と言うのが……。

「はい？欧州で怪獣らしき存在が欧州軍を攻撃？」

正体不明の怪物、仮称として『ヘドラ』と名付けられた存在に関する事だった。

「ああ。1週間ほど前、欧州で未確認の生物と欧州軍の間で戦闘が発生した事は？」

「聞いていますが。確か死者も出たとか」

「そうだ。……だが今重要なのは、この生物の存在が『怪獣なのかBETAなのか分からない事』だ」

「と言うと？」

「BETAは本来、単独で行動する事はまずない。だから単独で現れたこの生物が、BETAではないと判断している者達が多い。そして、ではBETAでは無い怪物と言えは……」

「怪獣、ですね？」

「そうだ。モナーク上層部や欧州連合首脳部などはこのヘドラを、人類に敵対的な怪獣と判断しつつある。だが、私達としてはヘドラが怪獣なのかどうかを疑って反論している所だ」

「あら？芹沢博士はヘドラが怪獣ではないとお考えですか？」

「ああ。……怪獣にも、骨格などがある。バラゴンやバラン、ガーデー、ボルギルス。更に昆虫怪獣とも言えるモスラやバトラ、カマキラスでさえも、生物的には何ら可笑しくは無い骨格体型をしてい

る。だが今回現れたヘドラは、はつきり言つて『流体生物』とでも言える存在だ。加えて、戦闘アータを見たが片足を吹き飛ばされても出血すらしていなかった。もはや、ヘドラを『生物』と定義して良い物かと、モナーク内部や各国軍首脳部でも意見が真つ二つに割れている。ヘドラをBETAの新種とするのか、新たな怪獣とするのか」「前者であれば新たな脅威なのは確定。後者であれば、これまで人類の味方であった怪獣達への風当たりが強くなる、と言う事ですね?」「そう言う事だ。……だからこそ、ここにあるゼアの力でヘドラの事を解析出来ないかと思つてデータを持ち込んだんだが……」

「成程。仰つてる事は理解出来ました。では、ゼアに解析をさせましょう。少し時間を頂きますが、よろしいですか?」

「構わない。ヘドラによる怪獣達への風評被害を緩和出来れば御の字だ」

「では、早速……」

そう言つて夕呼が席を立った時。

「失礼するよ、ミスコーヅキ」

部屋にマエロフがやってきた。

「例の新兵器の進捗状況の報告を、つと。これは失礼。客人が来ていたのか」

資料に目を向けながらだったのか、入つてすぐに芹沢に気づかなかつたマエロフ。

一方の芹沢は初めて見るマエロフに少し首をかしげていた。

『彼は、ロシア人か?しかし何故ここに?国連軍の人間、と言う訳でも無さそうだが』

「香月博士?彼は?」

「ああ。彼は最近ここに来た技術者です。今はここでの新兵器開発を任されています」

そう言われ、改めてマエロフと向き合う芹沢。

「ミスコーヅキ、逆に私も質問したいのだが、彼は?」

「こつちの彼はモナークのアジア方面の責任者、芹沢大助博士よ」

「はじめまして。芹沢です」



「おおっ！ではあなたが主神ゴジラの名付け親のっ！会えて光栄です  
ミスターセリザワっ！」

芹沢が手を差し出すと、マエロフは笑みを浮かべながらそれを取って握手を交わした。

「確かにゴジラの名前を付けたのは私ですが、主神、と言うのは？」

「彼は熱狂的なタイタニストなんですよ」

疑問符を浮かべる芹沢に夕呼の方が答えた。

「元々、ここに来たのも自分の意思。怪獣モスラとバトラに仕えるため、だそうです」

「そ、そうだったのか」

まさかの理由に、怪獣にも好意的な芹沢も少々引いていた。

「それで、ミスターセリザワは何故こちらへ？」

「あ、ああ。実は、先日欧州で確認された未確認生物の調査の一件ですね。怪獣ともBETAとも判別できない存在だ。なので、ゼアに判断して貰おうとね」

「成程。欧州で確認された、と言うと例のあれですか？異様な臭気を放ちながら周辺を汚染していたと言う。たしか、ヘドロのような臭いからヘドラと名付けられましたかな？そちらはヘドラのデータですか？」

そう言つてマエロフは夕呼が手にしていた書類に目を向けた。

「ええ、そうよ」

「ミスターセリザワ、拝見しても？」

「あ、ああ。どうぞ」

彼の許しを得て、マエロフはヘドラのデータを見ていく。

「それで？ミスターセリザワはヘドラの分析か何かでここへ？」

彼は書類に目を向けたまま芹沢へ声を掛けた。

「そうだ。ヘドラについて、ゼアの意見を聞きに来たのだが……」

そう言つて難しい顔をする芹沢。彼にしてみれば、ヘドラが怪獣だとは判断されて欲しくなかったのだ。

すると……。

「であれば、ゼアの意見を聞くまでも無いでしょう。奴は紛うこと無

くBETAです」

「ッ、なぜそう思う？根拠は何だ？」

「何故、と仰られても。私はこれでもタイタニズムの信奉者です。怪獣については自主的に研究や調査をしております。まあ、今は本業の兵器開発で忙しいですが……」

そう言つてフツと笑みを浮かべるマエロフ。彼としてはここに居られて、モスラとバトラの傍に居られて嬉しい反面、日々を研究と開発に追われて最近では彼等の事を調べられないのが少し不満であった。

「そ、そうか。それで、話を戻すが根拠は何だね？」

「あの怪物、ヘドラがBETAな理由はその汚染物質をばらまく事です。現在出現している怪獣の中で、周囲に汚染物質をまき散らすのは主神ゴジラを例外とした場合存在しません。主神ゴジラが放射能を発している事は事実ですが、私が巫女であるコスモス様から聞いた話によれば、それは文明や生態系をリセットする、裁定の獣たるゴジラだからこそ、と伺っております」

「確かに、ゴジラは地球生命の使者とも言える存在だ。いざと言う時は、この星を脅かす存在の敵となり、更には地球をリセットする存在だ。現に過去、コスモスもそれで滅んだ」

「そうです。……であれば主神ゴジラが放射能を発するのにも理由が付きます。しかし、ではヘドラが汚染物質を垂れ流す理由は？それが奴にとって住みやすい環境を作る為、と言うのならまだ納得出来ます。しかし現在において確認されている怪獣は皆、現在の自然の調和を保つ存在。主神ゴジラを例外とすればモスラの自然さえも癒やす力が良い例です。つまり、ヘドラは現在の自然を破壊する存在。とても調和を保つ怪獣とは言えない」

「……確かに、マエロフ博士の言うとおりだ。それで、他にも根拠があるのか？」

「はい。我々が知る怪獣の共通点があります。それは口がある事。もつと言えば口による捕食が可能な事。現にカマキラスやボルギルスによる捕食行動が確認されています。これは経口摂取によるエネ

ルギー補給が可能であると思いますが、ヘドラにはそれが無い。では奴のエネルギー源は？そもそも怪獣の骨格は差異こそあれど地球上に存在する生物と似通っている。かのキングギドラでさえも、れっきとした骨格を持つ。しかしヘドラにはそれが無い。データによれば、まるで流体生物。ヘドロが集まって怪物になったような、そんな存在です。生物に近い体つきを持つ怪獣とは、一線を画しています」「でも、それなら単独行動はどう説明するの？BETAは個体で活動する事なんてまず無いわよ？」

そこに疑問を唱える夕呼。

「ふうむ。……あくまでも推測ですが、ヘドラを生み出したのがBETA、或いはハイヴだったとして、もしかするとヘドラは失敗作だったのでは無いでしょうか？」

「失敗作？つてどう言う意味？」

「現在においてオリジナルのカシユガルハイヴでは時折、何らかの物体が射出され外宇宙に向かっていている事が確認されています。更にBETAは、まるで資源を集めるように草木や瓦礫などを奪っていく。BETAによつて侵略された大地に、何も残らないのはそうやって資源を集めているから、と仮定します。しかしそうになると、奪う資源のある大地を汚染で汚す意味が無い。それでは資源を奪っても、汚染された資源でしかない」

「となると、BETAは怪獣の脅威に対して対抗出来る戦力としてヘドラを生み出した」

「でも生み出したは良い物の、同類であるBETAでさえも制御出来ない怪物が誕生してしまった、って事？」

マエロフの言葉を受けて、芹沢と夕呼が続け様に語る。

「恐らくは。そしてそうであれば、仮にヘドラがBETAだったとしても単独で行動している理由になります。それと、今すぐ国連に要請して欧州に近いハイヴの様子を確認させた方が良いでしょう」

「どうしようかと？」

「もし、ヘドラがハイヴで誕生し暴走しているのであれば、どこかのハイヴがヘドラによつて汚染されている可能性がありますからな」

そう夕呼に答えるマエロフ。

「すぐに調査させるわ」

そして夕呼は、真剣な表情で頷いた。

数日後。夕呼達の元に情報が届いた。すぐさま夕呼は自分の部屋にマエロフとコスモスペースに滞在していた芹沢を呼び出した。

「どうやら、マエロフの睨んだとおりですね」

呼び出して早々、そう言つて2人の前に資料を差し出す夕呼。それを受け取った芹沢が内容を確認し、隣に居たマエロフがそれをのぞき込んでいる。

「……ブダペストハイヴか」

「ええ。……11番目のハイヴであるブダペストハイヴ。衛星でその周囲を確認した所、無数のBETAの死骸が発見されました。それも、大地を覆い尽くす程の」

芹沢は資料の中にあつた衛星写真に目を向けた。画質が悪く、正確には分からなかったが、ハイヴ近くの荒れた大地の上をBETAの物らしき骸が覆い尽くしていた。

「これで、マエロフ博士の仮説が立証されたな。ヘドラはBETAが怪獣と戦う為に生み出した存在。言わばBETA版の怪獣」

「しかしそれはBETAでさえコントロールできない怪物となつた。そして、ヘドラはブダペストハイヴを内部から破壊しつつ、行動を開始した。と言う事ですか」

BETAが怪獣を生み出した、と言う事実には芹沢と夕呼は難しい表情を浮かべていた。

「2人とも、何を恐れる事がありますか？ヘドラは既に討伐された後です。加えてBETA側も失敗作となつたヘドラを再び生み出すとは考えられませんか？」

「むう、それはそうだが……」

マエロフの言葉を受け、芹沢はどこか戸惑いながらも頷いた。

しかし、彼は妙な胸騒ぎを覚えて居た。

数日後。芹沢はマエロフの仮説とそれを証明するデータを国連に

提出。その結果、ヘドラはBETAの一種とされた。多くの者は、既にヘドラが撃退されている事からBETAと分かった事に安堵するだけだった。

芹沢としては、BETAが怪獣並みの存在を生み出した事に危機感を覚えて居たが、多くの者は彼のそんな意見に耳を貸さなかった。

だが……。

国連での報告を終え、モナーク所有の船で太平洋を横断し日本へ戻ろうとしていた芹沢。

その時、彼の胸騒ぎは現実となった。

『ダダダッ!!』

「博士っ！大変です博士っ!!」

芹沢は艦内にあてがわれた自室で仕事をしていると、部下の1人が駆け込んできた。

「どうした？そんなに慌てて」

芹沢は冷静に対応しようとしたが……。

「ヘドラですっ!!」

「ッ?!何っ!?!」

唐突に出てきた名前に、彼は椅子から立ち上がった。

「どういうことだっ!?!」

「それが、欧州の最前線近くでヘドラらしき物体が確認されたんですっ!」

「何だどっ!?!ヘドラは数週間前、欧州軍のパトロール部隊との戦闘で木っ端微塵になったはずだろうっ!?!」

「そ、そのはずなんですがっ!似たような影を衛士達が見たとっ!それも複数人がっ!」

「ッ!まさか、新たな個体がっ!?!いや、仮にヘドラがBETAによる失敗の産物なら、BETAがまたヘドラを生み出す理由が無いっ!しかし何故っ!」

芹沢は立ち上がり、窓の方へと歩み寄った。外を見つめながら考えている彼の目に、海が飛び込んできた。そして、彼はある事に気づいた。

「待てっ！ヘドラには骨格が存在しない。筋肉もだ。体全体が流体で出来ているような存在だ。……ならば臓器はっ!?脳はどこにあるっ！着ぐるみじゃないんだっ！外側だけと言うのはあり得ないっ！」

彼の言うとおり、骨も筋肉も無い生物など、普通に考えればありえない。それはBETAも同じ。如何にグロテスクな怪物であつても、奴らには体を動かす筋肉がある。だがヘドラはその筋肉すら持つていない。

『ヘドラが再生したっ!?しかしどうやってっ!?確かに報告では木っ端微塵にっ!っ!!』

そこで彼は気づいた。

「木っ端微塵。つまり、無数の欠片に砕け散った、と言う事か。……それが集合し再結合したのだとしたら……。欠片そのものが生きている?そんな事があるのか。いや。BETAが生み出した怪獣なら可能性はありそうだ。……っ!そうなるか……っ!」

ブツブツと独り言を呟っていた芹沢。

「あ、あの。博士。我々はどうすれば……」

「ッ!そ、そうだったっ!今すぐ艦長へ言つて進路を帝国からインファント島へっ!それと欧州の軍や国連に急いで通達を出せっ!ヘドラとは、恐らく無数の小さな個体が集まって形成された巨大な群生生物だっ!下手に攻撃して、欠片が飛び散つたとなれば、そこからまたヘドラが増殖する可能性があるっ!」

「ッ!?そ、そんな……!?」

ヘドラが勝手に増殖すると聞けば、彼のように顔色を悪くしても可笑しくは無いだろう。

「とにかく急いで連絡をっ!下手に攻撃すれば、あとあと取り返しの付かない事になるっ!」

「りよ、了解ですっ!!!」

芹沢の指示を受けて青年は慌てた様子で飛び出して行った。

それを確認した芹沢は、海へと目を向けた。

「BETAが生み出した怪獣、か。これほど厄介だとはな……っ!」

彼は、静かに拳を握りしめながら呟くのだった。

その後、急遽インフロント島へやってきた芹沢はすぐさま夕呼とマエロフの2人と話し合いの席を設け、彼の考えついた仮説を話した。「成程。無数の個からなる巨大な一個体に見せた群体生物。確かにそれが事実なら、体が四散したとしてもヘドドラが生きている事の説明が出来ますね」

「加えて、群体生物であるヘドドラの四散による増殖。確かにこれも厄介だ」

2人とも、芹沢の仮説を真摯に聞き、事の重大さを理解していた様子だった。

「ヘドドラは周囲を汚染する性質から、放置すれば我々人類がBETAから奪還した地域を汚染されかねない。それではBETAに勝利しても意味は無い。かといって、下手な攻撃はヘドドラの四散、延いては第2第3のヘドドラ出現に繋がる可能性もあります」

「放置もダメ。しかし下手な攻撃もダメ。……八方塞がりですね」

夕呼は芹沢の言葉を聞き、ため息交じりにそう言っ腕を組んだ。

「……念のため、ゼアにヘドドラのデータ解析をさせるべきでは？弱点を探るのであればそれが必要でしょう」

「そうね」

マエロフの言葉に夕呼は頷き、彼女達は早速ゼアに、最優先でヘドドラの解析をさせた。

驚異的な処理速度を持つ人工知能であるゼアによる解析は、最優先事項にされた事もあって、数時間で終了した。そしてゼアによつてはじき出された情報を、3人は夕呼の部屋で確認する事にした。

「……結果から言うと、ヘドドラを倒す術はあるわ」

真つ先にデータを閲覧した夕呼は、2人にそう言った。

「その術というのは？」

「ゼアが提示した中で、最も可能性の高い方法はモスラの協力が必要よ」

芹沢の疑問符に彼女が答え、更に言葉を続ける。

「モスラの必殺技であるシャイン・ストライク・バスター。あれの熱量

でヘドドラを乾燥させ、体内の水分を蒸発させるのが一番の手みたいね。体全体が流体、つまり液体であるヘドドラは、体全体が乾燥すればボロボロに砕け散るのではないか、と言うのがゼアの予測。そしてモスラのシャイン・ストライク・バスターを使って一気に焼くのが、一番成功率の高い方法だそうよ」

「それが、ゼアの導き出した一番確実な方法という訳か」

芹沢はそう言って息をつく。

「……モスラの協力は、得られるだろうか？」

「彼等にとつても、地球環境を汚染するヘドドラを放置する理由はないと思いますが？マエロフ、あなたの意見は？」

「私もミスコーツキの意見に賛成だ。女神モスラは、並み居る怪獣たちの中でも守護神や地母神としての格を特に強く表している。BE TAによつて荒廃した大地を癒やし復活させている点から考えても、大地を汚すヘドドラを見過ごす事は無いだろう」

2人からすれば、モスラの協力は得られるだろうと言う考えだった。

だが……。

「でも、それだけに頼るのは危険ね」

「ん？」

不意に聞こえた夕呼の声に芹沢が反応する。

「ヘドドラと戦うために、モスラ単独に頼るには愚の骨頂、と言う事です。幸い、ゼアが他にもアイデアを提供してくれましたので」

そう言つて彼女は2人の前に一枚の資料を置いた。

『『メーサー、殺獣光線車』？博士、これは一体？』

「元々はコスモスが開発していた対怪獣用兵器の一つです。コスモスはモスラやバトラの存在から、この世界には彼等に類似する超常的な存在がいると予見していたようですね。そして、それと戦う時のための兵器として開発していたのが、そのメーサー車です」

資料には図面があった。それは見た目的に、巨大なパラボラアンテナの砲塔と、それを牽引する車のようだった。

「過去にコスモスはこんな物まで開発していたのですか。ほう？動力



は小型化された原子炉っ!?何と素晴らしいっ!原子炉をこのサイズまで小型化出来ていたなんてっ!成程、誘導放出されたマイクロウェーブ、レーザー光線によって目標内部の水分を沸騰、蒸発させ、さらに膨張させる事で内側から敵を破壊する兵器、と言う訳ですか。言い換えれば巨大で高出力の、指向性も持たせた電子レンジ、ですな。これでは機械兵器には効果は殆ど無いでしょうが……」

興奮気味に語るマエロフ。

「ええ。生物であるBETAや、体の殆どが水分のヘドラには効果てきめん、と言う事よ。それともう一つ、良い知らせがあるわ」

「と言うと?」

「轟天号の先端、あのドリル部分にもレーザー兵器が搭載されていたんです。それも冷凍レーザー砲と、ドリルスパイラル・レーザー砲というものが。データによれば後者は通常のレーザー車以上の出力を持っているようです。それに、冷凍レーザー砲は理論上、怪獣クラスの相手でも一瞬で凍らせる事が出来るとか」

「おおっ!それこそまさに行幸っ!やはり先史文明たるコスモスの技術力は素晴らしいっ!冷凍レーザーが使えるのなら、ヘドラの動きを止められる可能性もあるっ!」

「成程。確かに轟天号やレーザー兵器を配備出来れば良い。しかし大丈夫なのですか?」

「あら?何がですか?」

「以前聞いた話では、まだ轟天号の乗組員の育成が終わっていないとか?それにレーザー兵器の量産も簡単ではないはず」

「ああ。その事でしたら大丈夫。レーザー兵器は既に基地の多次元プリンター、ザットに命じて生産を開始。そして、轟天号の乗組員の研修は既に完了しています」

「ッ、では、轟天号は動かせると?」

「ええ。現在乗組員はオーストラリアにいます。数日もあれば、オーストラリアの空中戦艦用の乗組員養成施設からここに連れてくる事が可能です」

「となれば、ヘドラとの対決は近いうちに、と言う事ですなっ!」

「ええ。私としても、ヘドラを見過ごす理由はありませんし。折角世界が良い方向に向かっているんです。その波を消されるのは不味いですからね。私は早速、国連本部やオーストラリアの施設などに連絡を取ります。今のうちにヘドラ殲滅作戦の段取りを決めておきたいので」

「ならば私も、何か出来る事をするでしょうっ！ヘドラは流体生物との事だしっ、そうだっ！冷凍弾はどうだろうかっ！こうしては居られんっ！すぐに設計などを始めなければっ！」

「でしたら私も。モナークを通じて各国に警告と警戒を促します」

笑みを浮かべる夕呼。嬉々とした表情で駆け出すマエロフ。真剣な表情で部屋を出る芹沢。

彼、彼女らは動き出した。悪辣な怪物、ヘドラ討伐のために。

かつて人と怪獣が協力してハイヴを破壊した、希望作戦のように。

『『『キュロロロロロロロロツ!!!』』』』

だが、彼等は知らない。例えヘドラがBETAの生み出した失敗作だったとしても、それは『怪獣と比肩しうる程の化け物』だという事を。

そして、『既にヘドラは1匹』ではない事を。

ヘドラという存在に抗おうとする人と怪獣。阻む者は全て溶かし進むヘドラ。

モスラ・バトラ+人類 VS ヘドラ。

この戦いの日は近い。

そしてそれは、苛烈な戦いになることを知る者はいない。今は、まだ。

## 第20話 双翼の加護

怪獣の出現によって、好転しつつある戦局。そんな中、新たな絶望として彼等の前に現れたのは、BETAが生み出した失敗作、ヘドラだった。ヘドラの特性から、今後の不安を覚えた芹沢らは、協力してこれを撃退する事を決定。すぐさま各国軍への交渉や新装備の開発が開始されるのだった。

対ヘドラのための戦闘が計画される中、コスモスペースでは急ピッチでメーサー車の量産が行われていた。

「……メーサー車は、これで6台目か」

完成し整列しているメーサー車を前にしてポツリと呟く芹沢。

彼はここ数日、ずっとコスモスペースと欧州の各国を往来していた。もちろん、ヘドラ掃討作戦に向けて、だ。

現在欧州で確認されたヘドラは、BETAの亜種と言う情報が世界各地へと拡散している。BETAの失敗作とは言え、未だに能力などが未知数のヘドラ。更に単独でハイヴから逃走。しかもその際には仲間(?)であるはずのBETAを皆殺しにしている。

更にゼアによる分析の結果、体そのものが高濃度の汚染物質であり、同時に要塞級の衝角から放出される、戦術機さえ溶かす溶解液に勝るとも劣らない酸性をヘドラは持っていた。

もしヘドラと戦術機で戦うのなら、接近戦は不可能だ。その体を斬り付けた近接武器が溶け落ちる事は必至だ。かといって、全身が流体に近いヘドラは銃弾など貫通してしまう。体内に榴弾など打ち込んでも、それは肉体を壊しヘドラの元となる欠片をばらまくだけ。

結局の所、ヘドラを倒す為に必要な戦法は、モスラのシャイン・ストライク・バスター並みの圧倒的な高温で滅却するか、冷凍弾などで氷漬けにした上で砕く。この二つ位だ。

地獄すら溶かす程の熱量か。全てを氷漬けにする絶対零度の冷気か。

しかしそのどちらも、今の人類の科学力では安易に生み出す事など

出来はしない。

今の人間に用意出来るのは生物に対して優位性を持つメーサー車とマエロフがゼアの力も借りて開発している冷凍弾くらいだ。圧倒的な熱量でヘドドラを焼き殺すのなら、何十発と核ミサイルや核弾頭が在るが、それを使えば土壌を中心とした環境が放射能汚染されて本末転倒だ。

「くっ」

結局の所、『人類が出来るのはモスラの支援が精々か』、という現状に芹沢は小さく歯がみしていた。

と、その時だった。

「ほう、ここが噂の先史文明の基地か」

「ん？」

声が聞こえ、意識を戻して振り返る芹沢。そこに立っていたのは、ポストンバッグを片手に持った、筋骨隆々の口ひげが特徴的な男だった。

ラフな格好にその見た目から、プロレスラーを思わせる出で立ちの男が、背後に部下らしき人間を連れて立っていた。

「アンタがここの責任者か？」

「い、いや。違うが？」

「何だ違うのか。……参ったなこりや。こっちは初めての基地だつてのに案内役も居やしねえ」

そう言っただけ息をつく男。

「君たちは一体？」

そんな男と部下たちに怪訝そうな表情を浮かべる芹沢。すると……。

「お、お待ちせしてすみませんっ！」

走ってきたのは遙だ。桃色の髪を揺らし、息を切らせながら走ってくる遙。

「おう、姉ちゃんが案内役かい？」

「す、すみませんっ！対ヘドドラ作戦のせいで、今基地内部がバタバタし

ててっ！」

「まあ良いさ。それより、基地の責任者の、あく。コーヅキって博士が待ってるんだろ？案内してくれ」

「は、はいっ！」

そう言つて歩き出そうとする遙。だったが……。

「あつ！芹沢博士もいらつしやったんですねっ！良ければ一緒にどうぞっ！今後は彼等も共に戦う仲間になりますのでっ！」

（仲間？どう言う意味だ？）

「わ、分かった」

内心では戸惑いながらも、芹沢も遙に連れられて夕呼が待つ会議室に向かった。

そして中に入ると、夕呼が待っていた。

「遅いわよ遙」

「す、すみませんっ」

「つと、芹沢博士もご一緒でしたか」

「ええ。たまたま。……しかし香月博士。彼等は一体？」

「ああ。彼等は轟天号のクルーです。先ほど、訓練施設からこちらに付いたばかりです」

「ッ。では彼等がっ？」

と、驚く芹沢。しかし先ほどの男が夕呼に近づいてくる。

「アンタが責任者、ってか俺達の上官か？」

「そうよ。貴方たちの上司でここの責任者。オルタネイティブ4最高責任者、香月夕呼よ」

「成程。俺は『ダグラス・ゴードン』。階級は大佐だ。今日から世話になるぜ、博士」

そう言つて握手を交す二人。

「さて、それじゃあまずは、適当な場所に座つて。色々聞きたいことがあるでしょうし」

「あいよ。ほらお前等、適当な所に座れ」

「」「」「はいっ」「」「」

ゴードンの言葉で、適当な所に腰を下ろす男達。

「さて、それじゃあまずは、こっちの二人を紹介しておこうかしらね」  
そう言つて夕呼は芹沢と遙に目を向けた。

「まずこっちの男性は、モナークのアジア方面の責任者、芹沢猪四郎博士よ。現在は私達とモナークの仲介役などをしています」

「芹沢です。はじめまして」

そう言つてお辞儀をする芹沢。

「次にこっちは、オルタネイティブ4の実動部隊、A―01連隊所属のCP将校、『涼宮遙』よ。部隊の管制官だし、便宜上あなた達の扱う轟天号もA―01連隊に所属する事になるから、彼女から指示が来るかも知れないから良く覚えておくように。……あと、手を出すのは止めておきなさい？怖くいい妹と彼氏にボコボコにされるかもしれないから、ね」

「は、博士っ!?何言ってるんですかつ!」

妖艶な笑みを浮かべる夕呼の言葉に顔を赤くする遙と、ハハハツ、と苦笑いを浮かべる男達。

「まあ、冗談はさておいて」

と、夕呼はそう言つて真剣な表情を浮かべる。それには男達も姿勢を正す。ただ1人、ゴードンは頬杖を突きながらも、鋭い眼光で夕呼を注視している。

「今回、予定よりも早くアンタ達に来て貰った理由は、分かってるわね?」

「ああ。ヘドラとか言う欧州で確認された化け物退治関係、だろ?」

「そうよ。涼宮、そのPCからゼアにアクセスして、ヘドラのデータをモニターに」

「はい」

カタカタと遙がPCを操作し、モニターに映し出されたのは以前EU軍のパトロール部隊が遭遇した時、戦術機に搭載されていたカメラが録画した映像の一部だ。

「現在欧州においてその存在が確認されている新種のBETA。現在国連及びモナークによつて与えられた仮称のコードを使うのなら、《

怪獣（モンスター）級》第1号、ヘドラ。このヘドラはBETAが生み出した、怪獣と比肩しうる程の力を持った怪物よ」

「モンスター級、ねえ。しかしこいつ、自分の家のハイヴのBETAを皆殺しにしたんだろ？何だって同類を皆殺しにするんだ？BETAは同類を攻撃しない、だろ？」

「それに関して、現在においてもっとも有力な説はヘドラが失敗作という事よ」

「失敗作？」

「可能性として、ハイヴは各地に出現する怪獣とやり合えるBETAを作ろうとした。そうして出来上がったのがこのヘドラ。が、単体で怪獣と比肩しうる程の強力なヘドラはBETAでさえも支配する事が出来ず、生み出したは良い物の制御出来ずに暴走。生まれ故郷のハイヴを蹂躪し活動を開始した。って所ね」

「はっ。なんだいそりゃ。自分の生み出したブツに蹂躪されてちゃ世話ないな」

「確かにね。でも、同時にあれは制御不能の怪物よ。更に体全体が高濃度の汚染物質の塊。下手に攻撃すれば汚染は拡大するし、奴は体の細胞一つ一つが生きている。下手に攻撃して体の欠片が飛び散れば、そこからヘドラは再生と進化、増殖を繰り返して増え続けるのよ」

そんな夕呼の言葉に、クルー達はザワザワとざわめいている。

「おいおい。放っておけば増えるか周りを汚染するだど？BETAよりたち悪いじゃねえか」

「そうよ。だから今回の作戦で討伐するの」

と、ゴードンに答えると夕呼は再び遙の方に向き直る。

「涼宮、今度は轟天号のデータを」

「はい」

再びPCを操作する遙。するとモニターが切り替わり、轟天号の全体図と武装などが乗った映像が映し出された。

「この基地にあるAI、ゼアの予測の結果。ヘドラを倒す為に一番成功確率の高い方法は怪獣モスラの協力を得てヘドラを焼却する事。ただしこれを援護するためにEU軍や国連軍が展開される予定よ。」

そして、その国連軍の中にあなた達も含まれてるわ。この轟天号のクルー、と言う事でね」

「成程な。だが奴は下手に攻撃すると体の破片が飛び散って増えるんだろ？・どうするんだ？」

「そこについては心配無いわ。轟天号には古代文明コスモスが開発した兵器が搭載されているわ。それが艦首にあるドリルに内蔵されたメーサー兵器よ。詳しい話はまた今度だけど、メーサー兵器を物凄く単純に言えば、バカみたいな出力の電子レンジよ。この兵器なら、ヘドラの細胞を焼き払う事が出来る」

「ほう？」

「現在コスモスベースではゼア協力の下、このメーサー兵器を搭載した特殊車両を建造中よ。作戦に際して、あなた達の駆る轟天号の役割はこの特殊車両と共にメーサー兵器を用いてモスラを援護すること。何か質問は？」

「はいっ」

彼女の言葉にクルーの1人が手を上げた。

「轟天号は空中戦艦という事ですが、BETAの、光線属種の攻撃は大丈夫なのでしょうか？作戦中にBETAの襲撃が無いとも限りませんし」

「それなら大丈夫よ。轟天号に使われている装甲板は、古代文明が対ゴジラ戦を想定して開発した物。あの出力に比べれば、光線級なんてレーザーポインターよ」

「……あの光線級すら、ゴジラの足元にも及ばない？」

「付け加えるのなら、重光線級もね。……この基地の高性能AI、ゼアの予測によれば、現在のゴジラが発生させられる出力はテラワットクラスだそうよ」

「テラ？なんだそりゃ？」

「ギガワットクラスの更に上よ」

「じ、実感が沸かないですね。そう言われても」

と1人の乗組員がこぼす。

「あら。なら簡単に説明してあげましょうか？1ギガワットはおよそ



原子力発電所1基分。そして1テラワットは1000ギガワット。と、ここまで言えば分かるかしら?」

「げ、原発1000基分?!」

極端過ぎるゴジラのエネルギー量に乗組員たちはザワザワとぎわめき出す。が……。

「はっ。それつまり、俺達の船はそんなヤベえ奴と戦う為に作られたって事だろ?だったら逆にいやあBETAのレーザーなんか怖くねえって訳だ」

「まあ科学者として、絶対に安全という事は言えないわ。それでも轟天号の表面の耐熱積層装甲板は、光線級クラスの射撃なら動じる事は無い、と言うのがゼアの予測よ。流星に重光線級数十匹による同一箇所への集中砲火、までは耐えられないそうだけど」

「はっ。十分だぜ博士」

夕呼の言葉にゴードンはニツと凶暴な笑みを浮かべる。

「無能な上官ぶん殴って窓際に左遷か除隊かって時に、俺はアンタ等に拾われた。他の連中もそうだ。クソみてえな上司に刃向かった奴、命令無視をした奴。みんなそれぞれ古巣じゃもう鼻つまみ者だ。

……それがこんなヤベー船に乗れるってんだ。やってやるさ」

「そう。ならあなた達の働きに期待させて貰うわ。くれぐれも、失望させないで欲しいわね?」

「おうよ。全力であのヘドロ野郎を消し炭にしてやるぜ」

そう言って凶暴な笑みを浮かべるゴードンに同調するように、乗組員たちも笑みを浮かべているのだった。

その後、新しくコスモスベースへとやってきたゴードン達は、A-01連隊所属の空中戦艦轟天号を扱う部隊、『空中戦艦運用部隊』、通称『空戦隊』に配属される事になった。

現在は、メーサー車と表向きはゼアの開発と言う事になっている冷凍弾の数が揃い作戦が開始出来るようになるまでの間に、轟天号に慣れておくようにとの夕呼の指示で実物を使ってコスモスベース周辺の海域で訓練をしていた。

一方、ヘドラ掃討作戦の話は、海を越えて帝国へと伝わっていた。そしてもちろん、恭子や上総たちの元へも、だ。

その日、恭子の元に上総たちや真田と言った、部隊長クラスの者と、例外として上総たちが集められた。上総や志摩子達が例外なのは言わずもがな、ギドラと友好関係を持つ特別な存在だからだ。

そして彼等に恭子が語ったのが……。

「欧州で巨大不明生物の掃討作戦、ですか？」

「そうだ」

真田の言葉に恭子が頷く。

「現在欧州において、BETAが生み出したと思われる怪獣に類似した巨大不明生物、通称ヘドラの存在が確認されている。モナークなどの報告から、ヘドラは細胞一つ一つが生きている群体生物のような存在であり、例え体を破壊しても生きた細胞を残せば再び成長し、汚染物質をまき散らす恐れがある。そこで欧州は国連軍と協力し、欧州でのヘドラ掃討作戦を実行するつもりだ。この掃討作戦に関しては、コスモスペースのAI、ゼアが有効な戦術を提供したようだ。こちらに伝わっている情報によれば、モスラとバトラの協力を受けた段階で、更にコスモスペースで開発中の新兵器や空中戦艦、轟天号を投入するとの事だ」

「ッ、轟天号。確か古代文明コスモスが残したと言うあれですね？」

「そうだ」

上総の言葉に恭子は頷く。

「しかし、なぜその話が私達に？」

「まさか、希望作戦の時みたいに私達も海外に派兵される形になるんですか？」

と疑問を口にする和泉と安芸。

「いや。今回は場所が場所なので我々帝国の軍、つまりGフォースの派兵予定は無い。ただし、モナークの芹沢博士からの指示で我々は当面、第二次警戒態勢を維持する」

「どういうことですか？話が良く……」

と、首をかしげる志摩子。

「芹沢博士は、最悪の場合を想定していると言う事だ。もし万が一、モスラとバトラが敗れた場合、我々人類が真つ先に頼れる怪獣は、ギドラしか居ない。もちろん、博士自身もモスラとバトラ、そして人間の底力による勝利を信じている。が、あの双翼の神々が倒れたのだとしたら、我々人類最後の希望は……」

「千年竜王であるキングギドラだけ、と言う事ですね」

ポツリと先を読み言葉を漏らす上総。

「そうだ。単純な力で言えばゴジラという更に上がいるが、奴は放射能汚染をまき散らす。あれに期待するのは無謀な賭けなのだ。だからこそ芹沢博士は言って居た。『万が一に備え、戦えるように準備をしておいて欲しい』と」

彼女の言葉に上総たちや真田、如月たちは表情を引き締める。

「……これより我々Gフォースは万が一に備えて第2種警戒態勢へと移行する。各自、いつでも戦場に出られるように用意をしておけっ！  
良いなっ！」

「「了解っ!!」「」」

こうして、欧州から離れた極東の地でも、人々は慌ただしく動き出していた。

場所は戻り、太平洋上、コスモスベース。

兵士達の憩いの場でもあるレクリエーションルームに水月や孝之たち4人が集まっていた。

「対ヘドラ戦、か」

そして集まった4人は、少しばかり重い表情を浮かべていた。ポツリと孝之が呟く。

彼の言うとおおり、もう間もなく欧州でヘドラ討伐の為の作戦が展開される。そしてそれには当然、孝之、慎二、水月は衛士として。遙はCP将校として参加する事になっている。

そんな彼等の敵は、未だに戦闘能力などは良く分かっていないヘドラ。しかも怪獣と比肩しうる程の力を持った存在だ。そんなのを敵

にすると分かっている、楽観視など出来る訳が無かった。

「なあ、作戦って確か……」

「ああ。ヘドラと主に戦うのはモスラとバトラ、轟天号にメーサー部隊だ。俺達はマエロフ博士が作ってる冷凍弾を、戦術機の120ミリから放ってヘドラの動きを止めるか牽制する。そしてモスラやバトラ、轟天号とかの主力を援護するのが任務だ。……けど」

慎二の言葉に応える孝之だが、彼自身不安を拭えないで居た。

「……戦術機すら溶かす物質の塊か。近づきたくは無いわね」

真剣な様子でそう漏らす水月。

敵はまともな攻撃が通らない上に、近づかれれば溶かされる可能性だってある。近づかなければ良い、と分かっているも怖いものは怖い。誰だって溶かされて死にたくは無いのだから。

「接近戦は不可。かといって戦術機での使えそうなのは120ミリの冷凍弾くらい。しかも敵が飛び散るってんで下手な攻撃は原則禁止ってんだから。やりにくいよなあ」

「確かに。やりにくいよね」

慎二の言葉に遙が頷く。

「それでもやるしかないだろ？ゼアの予測データ、見た事あるか？」

「予測？なんの？」

「香月博士がゼアにさせてたんだよ。仮にヘドラが増殖した場合、どうなるかってさ。俺も又聞きだから詳しくは知らないが、最悪だったらしいぞ」

首をかしげる慎二に答える孝之。更に彼は言葉を続ける。

「増殖したヘドラは生物の概念を越えた速度で進化するらしい。そして恐ろしい事に飛行能力を獲得したヘドラは、海を渡って北米や南米、帝国に、東南アジア、オーストラリアにまで活動範囲を拡大させる恐れがある、そうだ」

「ッ!?なんだよそりやつ!?だったらBETAよりヤベえじゃねえかった!」

「BETAだって飛行可能な種類は居ないのに……っ!」

孝之の語った予測データに狼狽する慎二と遙。

「おまけに、ヘドラは体全体が汚染物質の塊だ。移動するだけで土地を汚染するし、下手すれば海だって汚染される」

「ますます最悪ね……っ！予測データが最悪つてのも領けるわっ。否が応でもね……っ！」

「そうだな。海が汚染されると、俺達が食ってる合成食料だって食べるかどうか。大地だって汚染されちゃったら、奪還しても人が住めるかどうか。……そう言う意味では、さっさとヘドラを倒さないとな」

水月の言葉にそう続ける孝之。

「……負けれない。……そう言う事なんだよね」

静かに呟く遙の言葉に、水月達3人は沈黙する。負けれないのは確かだ。しかし相手は未知の敵。気軽の勝てる、などと言う事は出来なかった。

と、その時だった。

「皆さん。こちらにいらしたのですね」

声が聞こえた。その主は、小さなモスラ、フェアリーに乗ったコスモス2人の物だった。

「ッ、コスモス。俺達に何か用か？」

2人の方を向く4人。そして彼等を代表するように孝之が問いかける。

「はい。此度は皆さん、ヘドラと戦う為の作戦に参加されるとお聞きしました」

「ですから皆さんには一度、モスラとバトラの聖域へ来て欲しいのです」

「そこで皆さんに、お渡ししたい物があります」

「は、はぁ」

戸惑いながらも、孝之達は言われるがままにモスラとバトラの巣がある最深部、聖域へとやってきた。……ちなみに聖域と呼ばれるようになったのは、マエロフのせいだったりするのだが、今はもう誰も気にしなくなっていた。

そして彼等がやってきた聖域では、孝之達以外にもみちる大尉達や

デリング中隊の衛士達。他の中隊の衛士達。更に作戦に参加予定のオペレーターや夕呼、マエロフまで。大勢の人間が集まっていた。

聖域の奥にはいつものようにモスラとバトラが鎮座していた。だがいつもと違う所があった。彼等の前に折りたたみ式のテーブルが置かれ、その上に無数の石のような物が並べられていたのだ。

「二体、何を？」

渡したいもの、と言われて集まった者達の中でポツリとみちるが呟く。

皆が戸惑いながらも待っていると、テーブルの前まで飛んでいくフェアリー。

そしてフェアリーがその場で浮かび始めた時だった。

『♪~~~~♪~~~~』

「ッ、これは？」

基地のスピーカーから音楽が流れ出し始めた。マエロフが驚いて周囲を見回している。他の衛士やオペレーター達もだ。だが夕呼や遙と言った一部の面々は、その音楽を知っていた。

「モスラ~~~~ヤ、モスラ~~~~」

それはコスモスがモスラを讃える歌だった。

(でも、何故?)

しかし何故今歌うのか?と言う疑問を拭えない夕呼。と、その時だった。

『キュアアアアアアアアッ!』

『キュガアアアアアアッ!』

モスラと、彼女に寄り添うようにして隣に居たバトラが咆哮を上げた。突然の事に驚くみちるや孝之、夕呼達。

と、その時。モスラの体から淡い緑色の光が。バトラの角から紫色の光が、それぞれ溢れ出した。

そしてふよよと漂う光の粒子は、やがてコスモスたちの前にある石のような物へと降り注いだ。

モスラとバトラが光を注ぎ続ける間、コスモスは歌を歌い続けた。やがて、彼等の光の照射が終わると、コスモスたちも歌を止め、スピー

カーから流れていた音楽も止まった。

やがて、歌い終えたコスモスたちがフェアリーに乗って夕呼達の前までやってくる。

「コスモス、これは一体？」

流石の彼女もコスモスの意図が分からない、と言う表情で問いかけた。

「これは、モスラとバトラと、私達からのお守りです」

「お守り？」

「そうです」

「皆さんはこれから、困難な作戦に臨む事になるでしょう」

「そしてそこでは常に死がつきまとうでしょう」

「しかしモスラとバトラは、あなた達を共に戦う友として認めています」

「だから、お守りを？」

ポツリとみちるが呟く。

「はい。これにはモスラとバトラの力を刻印してあります。きっと、戦地で皆さんを守る盾となってくれるでしょう。さあ、どうぞ手に取ってみてください」

そう言つて促すコスモス。彼等は戸惑いながらもテーブルに歩み寄り、石を手にした。

お守りであるその石には『インファントの紋章』が刻まれていた。  
(※イメージはゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOSに登場した小さな石版)

「ッ。これ、温かい」

そして彼等は気づいた。その石は確かに熱を持っていた。

「でも、熱いって訳じゃねえ」

「うん。……とても、温かい」

慎二や遙はそう言つて笑みを浮かべている。

他の面々も、不思議そうに石を手にとっていく。

ちなみにその傍では……。

「ああ何と言うっ！何と言う恵みっ！これこそは正に二柱の神々から

もたらされたご加護っ！喜ぶのだ諸君っ！君たちは神々に認められた人間っ！これ程の幸運は一生に一度、あるか無いかと言う物っ！いやっ！神に認められる人間など、決して多くは無いつ！ああ何と、何と羨ましい事かっ！」

相変わらずのハイテンションなマエロフにみちるや美冴達は苦笑を浮かべていた。

そして、そんな中で……。

(怪獣に認められた人間、か…)

水月が手の中のお守りを見つめながら物思いにふけていた。

そんな彼女の脳裏によぎった光景。それは帝国で唯依達がキングギドラと触れあう所を収めた写真だった。

「こんな凄いの貰ったんだし、お礼、しないよね」

「水月ちゃん？」

ポツリと呟いた水月の言葉を聞いていた遙が首をかしげながら彼女の方へと向く。

すると、水月は何とモスラ達の方へ向かって歩き出した。

「んっ？あつ！おい水月っ！」

相変わらずハイテンションなマエロフに皆視線が行って居た為、水月がモスラとバトラに近づいているのに気づくのが遅れた。一番最初に、それに気づいた慎二が声を上げる。

他の者達も、何だ何だ？と水月の方へと目を向ける。

しかしその頃には水月は、既にモスラとバトラの眼前に歩み寄っていた。2匹とも巢の中で体をリラックスさせていた。

水月はモスラの方へと歩み寄る。彼女は左手にお守りを握りしめ、それを胸の前に置きながら、右手でモスラの柔らかいその顔を優しく撫でた。

「ありがとう、モスラ。こんなのお礼になるか分からないけど。でも、本当にありがとう」

彼女は優しい声で語りかけながら、モスラの体を撫でていた。すると……。

『クルルウウウッ』



モスラが気持ちよさそうに、喉を鳴らしたような声を漏らす。

「ふふっ、気持ち良いの?」

水月は笑みを浮かべながら更にモスラの事を撫でていた。みちるや夕呼たちはそれを茫然と見守っていた。が……。

「じ、じゃあ、私もっ」

「えっ!?!遙っ!?!」

唐突に遙もそちらへと向かってしまった。驚いて声を上げる慎二。

しかし遙は小走りでバトラへと歩み寄っていく。バトラの大きな複眼が彼女を見つめる。普通ならその大きさに圧倒され萎縮しても可笑しくは無い。

しかし、遙は物怖じするどころか、笑みを浮かべながらバトラのゴツゴツとした表皮を優しく撫でる。

「バトラもありがとう。私達のために、力を分けてくれて」

遙もまた、水月のように優しい表情を浮かべながらバトラの体を撫でる。

バトラは、モスラのように声を出すことはしないが、静かに彼女に身を委ねていた。

モスラと触れあう水月。

バトラと触れあう遙。

夕呼達はその姿を見ていたが、そんな中で一人の衛士がポツリと呟いた。

『まるで、帝国にいる龍神の姫巫女達みたいだ』と。

壮絶な戦いの時は近い。しかし、彼等には加護が与えられていた。怪獣という名の、神々より賜りし加護が。

## 第21話 ヘドラ掃討作戦・I

BETAの生み出した怪物であるヘドラ。それを討伐するための準備が着々と進んでいた。コスモスベースへとやってくる轟天号のクルーたち。建造が進むメーサー車。そんな中で、作戦に赴く事になった水月や遙、みちる達や孝之たちと言った面々に、モスラとバトラ、そしてコスモスからお守りを与えられるのだった。

モスラとバトラ、コスモスからお守りを貰って早数週間。対ヘドラ掃討作戦が、いよいよ始まろうとしていた。

コスモスベースから発進した、孝之達を乗せた大隈級揚陸艦が複数、欧州を目指して海原を進んでいた。

これから数日、彼らは海の上で過ごす事になる。そして、海原を行く大隈級の1隻、その甲板から愛機が簡易整備を受けている所を見ている、二人の男性衛士がいた。孝之と慎二の二人だ。

「暇だなく、俺たち」

「まあな。けど暇だけ良いだろ？整備兵たちはあんな風に忙しく仕事してるんだ。変なこと言ってる、手伝って言われるぞ？」

二人の眼下のハンガーで、起立したままの不知火の周りで忙しく動き回る整備兵たち。そんな整備兵たちを見下ろしながら孝之が呟く。「手伝え、か。まあそれも良いかな。手を動かしてりゃ、作戦の事はとりあえず考えなくて済むし」

「……ヘドラの事か？」

「ああ」

どこか苦笑を浮かべる慎二に孝之がその名を出し問いかけると、彼は静かに頷いた。

「モスラやバトラ、轟天号が居るとは言え。相手は怪獣にも匹敵する未知の相手だ。対ヘドラ用の武器があるからって言ったって、そういう安心は出来ねえよ」

「まあな。相手は怪獣クラスの戦闘力を持つ化け物だ。実質、怪獣と戦うのと状況は変わらない。言うなれば、俺達は世界で初めて怪獣に

挑む人間の一人だ」

そんな孝之の言葉を聞くと、慎二は露骨に表情を歪めた。

「怪物だってよ、強さに差があるったってどれも単独でBETAと戦えるんだぜ？そもそもモスラとバトラ、ギドラにゴジラは、それ自体が神様みたいに強いんだぞ。で、ヘドラはそれと同じくらい強いっていうんだろ？……そんなのに挑んで、勝てるのかよ俺達」

「そう気を張るな。それに、最前線でやりあうのはモスラとバトラだ。俺たちじゃない」

「……そりやそうだけどよお」

不安から来る恐怖とネガティブな考えが、慎二の頭の中をグルグルとめぐる。

「はあ。水月達の方は、どうしてるのかなあ」

彼は眩きながら、眩しい青空へと目を向ける。そんな彼の視線の先にあるのは、ただ一隻、空を飛ぶ轟天号だった。

「……」

そんな轟天号の一室で、水月は窓の外の海と空を静かに見つめていた。彼女もまた、慎二と同じような不安に苛まれていた。

「はあ」

本日何度目になるか、数える事すら億劫になる程、彼女はため息を繰り返していた。

「もう水月ちゃん、また？」

その時、同室になっていた遥が声をかけてきた。

「うう、ごめん遥。でもやっぱり緊張しちやつてさあ。何か別の事して気を紛らわそうにも、やる事なくて」

「自分の機体の整備とか、確認は？」

「さつきとつくに終わらせて戻ってきた所」

遥の問いかけに、水月は苦笑しながらそうつぶやいた。そして水月は再びため息をつく。それを見かねた遥は彼女の元に歩み寄り、そつと彼女の肩に手を置いた。

「大丈夫だよ。モスラやバトラが見て、ヘドラを倒すための作戦だつ

であるんだから。そんな風に気負っていると、本番でも固まっちゃおうよ？」

「うん。分かっている」

（分かっているんだけど……）

遙の言葉に水月は小さく苦笑を浮かべながら頷いたが……。

（分かっているんだけど、どうしても拭えないのよね。この、嫌な予感“が”）

水月は、胸の内で燻り続ける拭えない嫌な予感にモヤモヤしていた。

しかし、そんな彼女の予感など気にも留めず、彼女らを乗せた船は欧州を目指し進み続けるのだった。

数日後。ようやく欧州の地に到着した轟天号と大隅級からなる船団。轟天号も今は着水し、大隅級と共に彼らに宛がわれている港湾基地の一角に係留されている。

そして今、みちる達や轟天号のクルーであるゴードンらは基地の一角にある会議室に部隊の代表として集められていた。周囲にはEU軍の指揮官や、欧州方面の国連軍の指揮官などが集められていた。

しばらくすると、会議室にある大型モニターの前にパウルが現れた。

「私は国連軍所属のパウル・ラダビノツド准将である」

そう言ってパウルは、皆の前で名乗り話し始めた。

「今回諸君らが参加する大規模掃討作戦、対ヘドラ作戦の最高責任者として私はここにいます。そして今から、諸君らが参加する作戦の説明をさせてもらう」

と、パウルが言うと、部屋のライトが消え、彼の背後にあったモニターが起動。そこにヘドラの画像データが映し出された。

「今回の作戦の目的は、この怪物、ヘドラの討伐である。この中には知らぬ者がいるかもしれないので、最初から説明しよう。ヘドラとはBETAが生み出し、しかし支配する事に失敗した、怪獣と比肩しうる程の力を持つ存在だ。また、懸念事項としてヘドラ自身が高濃度の汚染物質をまき散らす危険極まりない存在である事だ。更にヘドラは

戦闘で肉体がちぎれた場合、その千切れた肉片などから新たにヘドラの個体が誕生する恐れがある、と言う情報が上がってきている」

パウルの説明を聞いて、その情報を知らなかった兵士たちが僅かに騒めく。

「そのため、この作戦で現在確認されているヘドラを早急に討伐する。さもなければ、我々はBETA以上の脅威の増殖を見過ごす結果となるだろう。ヘドラが増殖する前に、完全に討伐する。それが本作戦の目的となる。作戦の内容については彼女、香月由夕呼博士よりしてもらう事となる。香月博士」

パウルが呼ぶと、いつもの白衣姿の夕呼が彼と場所を入れ替える。

「どうも初めまして。自己紹介は、意味がないから飛ばして作戦の説明をします」

そう言つて夕呼が近くの端末の所にいた遙に目くばせをする。すると、彼女の背後にあった大型モニターに地図データが表示された。「作戦地域は海岸線から近いこの平野部で行う予定です。現在ヘドラは、この平野部からほど近い、戦争で放棄された都市に潜伏している可能性がある、と言うのが古代文明、コスモスが残したAI、ゼアの予測です。これについては周辺に残存していた汚染物質の濃度から見ても十分にありえる事だと我々は考えています」

夕呼は地図データ上に映し出されている都市を指さしながら説明を続ける。

「まず、作戦の準備段階として、平野部に国連軍、EU軍の合同部隊を展開。前衛は戦術機部隊が担当し、その後ろにコスモスベースで開発した新型兵器、メーサー車を展開します」

彼女の言葉に合わせて遙が端末を操作し、モニターに映し出されるメーサー車。その姿に、初めてメーサー車を見るEU軍や国連軍の指揮官たちが騒めく。

「このメーサー車をとても簡単に説明すると、超高出力の電子レンジです。これは過去、コスモスが対怪獣を想定して作られた兵器であり、指向性マイクロウェーブによって対象を内部から焼き払う事を目的としています。これにより、体の大部分が水分であるヘドラに対し

て有効な兵器となるでしょう。ただし、見ての通りメーサー車は砲塔となる照射部分を装軌式の牽引車で引く形となるため機動性は劣悪です。そのため、ヘドドラに接近されたメーサー車は無力であり恰好の的となるでしょう。戦術機部隊の任務の一つは、このメーサー車の護衛です。ただし……」

夕呼はそう前置きして再び遙に視線を送る。それに答えて遙が端末を操作。するとメーサー車の画像が消え、入れ替わるようにマエロフが開発した冷凍弾の画像が表示された。

「ヘドドラが肉片から分裂する恐れがある、と先にも説明したように奴への榴弾や銃弾での攻撃は控えなければなりません。そこで開発したのが、この冷凍弾です。液体窒素などを用いたこの冷凍弾は、戦術機が持つ突撃砲の120ミリを用いて射撃可能で、前衛の部隊にはこれを基本的に装備してもらいます。ただし、これらは自衛や援護が目的の装備であると理解しておいてください」

と、夕呼が説明すると、EU軍の将校の一人が手を上げた。

「香月博士、一つよろしいですか?」

「なんででしょう?」

「その装備の目的が援護や自衛のためならば、一体何を使ってヘドドラを討伐するおつもりですか?」

「そのご質問は最もですね。しかし、『何を』と言うと語弊があるのでしよう。正確には、『彼女らの力を借りて』と言った方が正しいでしょうね」

「彼女、ら?」

夕呼の言葉に将校は首をかしげる。夕呼は再び遙に目くばせをする。すると、モニターの映像が切り替わる。そこに映し出されたのは、モスラとバトラを監視している戦術機のカメラが捉えた映像。つまりライブ映像だった。

「これはっ!」

「まさか、怪獣モスラの力を……っ!」

突然のモスラとバトラの登場に、国連軍やEUの将校たちは驚き騒めく。

「この映像を見て大体の人が察した事でしようが、お察しの通り今回の作戦においては、モスラ及びバトラの協力を得る事が出来ました。中でも、モスラは今回の作戦の要と言える存在です」

夕呼の声が響くと、モニターが移り変わり写真を映し出した。それは、かつての佐渡島ハイヴ戦で見せた、シャイン・ストライク・バスターを放つ様子を収めた物だ。

「モスラの放つ必殺技、シャイン・ストライク・バスターと命名されているこの技は、モスラの鱗粉を用いてレンズを作り、太陽光を増幅。太陽表面の温度の20%にもなる高温で範囲内の敵を滅却する大技です。我々はこの大技をヘドラに対するトドメの一撃と考えています。しかしこの大技には一つ欠点があります。それは鱗粉のレンズが必要である事から、移動する相手には命中させるのが難しいという点です。そこでこの技を使う前段階として、我々がメーサー兵器や冷凍弾でヘドラを攻撃。奴を弱らせるのです。そして弱った所を、このシャイン・ストライク・バスターで一気に焼き払う。これが我々の考えた作戦です。説明はこれでよろしいですか？」

「え、ええ。問題ありません」

質問してきた士官はモスラとバトラ参戦に驚いているのか、少し戸惑いながらも頷いた。

「では、改めて作戦の説明をさせていただきます。まず第1段階。戦術機部隊による偵察部隊を編成し、ヘドラが居ると思われる区域を偵察しこれを発見。第2段階。ヘドラの発見後、部隊が牽制射撃を行い注意を引き、作戦を展開するトラップポイントまでヘドラを誘引。第3段階。メーサー兵器及び冷凍弾による一斉射撃でヘドラを攻撃。弱って動けなくなった所を確認した時点で最終段階である第4段階に移行。モスラによるシャイン・ストライク・バスターを発射。ヘドラを完全に滅却します」

概要の説明を終え一息をつく夕呼。

「以上が本作戦の主な概要ですが、どなたか質問は？」

彼女が問いかけ見回すが、皆特に質問は無いようだ。

「では、私からの説明は以上となります」

説明を終えた夕呼は下がり、代わってパウルが再び檀上へ。その後は細かい日程の説明や、シャイン・ストライク・バスターには太陽が必要であることから天候によって作戦の前倒しや延期がある可能性の説明などをして、作戦説明のためのブリーフィングは終了した。

その後、衛士や兵士らは皆、いつ作戦が始まっても良いように待機しつつ武器や戦術機などの整備に勤しんでいた。

それから2日後。

「香月博士ッ！」

基地の一角、宛がわれた部屋でPCと向かい合っていた夕呼の元の遙が駆け込んできた。

「コスモスベースのゼアから通信ですっ。ここ数日の気象状況の予測と、作戦決行日についての予測データが届きましたっ！」

「見せて」

「はいっ」

夕呼は遙の持っていた、ゼアから送られてきたデータが掛かれた書類を受け取ると素早く目を通す。そして……。

「……各国軍司令部に到達してちょうだい。ゼアからのデータを元に作戦決行日を明後日にするわ。いよいよ作戦開始です、ってね」

「了解っ！」

遙は足早に部屋を後にした。一人残っていた夕呼は窓の外へと目を向ける。その視線の先にあったのは軍港、そしてそこに停泊する轟天号の姿だった。

「いよいよ、ね」

そして彼女は誰に言うでもなく、独り言をこぼすのだった。

遙、延いては国連軍からの通達は速やかに各軍、各部隊に伝達されていた。兵たちはみな、いよいよか、と言わんばかりに緊張した面持ちで出撃の準備を始めた。誰もが初めての戦いに緊張しながらも時間は流れ、2日後。いよいよ作戦が開始された。

くくくく某都市跡地くくくく



まず作戦の第1段階として、欧州軍の戦術機部隊が偵察部隊としてヘドラの存在が予測された都市の跡地へと向かっていた。

「見えて来たな。あそこか」

戦術機部隊の隊長である衛士が、ぽつりとつぶやいた。

偵察部隊は、フランスのダッスオー社製の戦術機、第2世代戦術機『ミラージュ2000』と、その前身機とも言うべき同社製のF5『フリーダムファイター』の改修機である『F-5FミラージュIII』で構成されていた。

「スカウト1より各機へ。これより目標、ヘドラが潜伏していると思われる都市跡地へと進行する。良いか、我々の目的はあくまでもヘドラの発見とその誘因だ。可能な限り冷凍弾以外の発砲は禁ずる。36ミリの射撃は、牽制と挑発行動のみの使用だ。良いな？」

「了解っ！」

「目標はどこに隠れているか分からん。各自2機編成の分隊に分かれて移動。バディと離れすぎるな？常に全方位を警戒しつつ索敵を行え。それと、汚染物質の濃度を測定するレーダーが装備されているが、こいつに頼り切るな？自分の目でしっかりと索敵しろ」

「了解っ！」

隊長の言葉通り、彼らの戦術機の頭部には、通常なら装備されていない特殊なレーダーがあった。これは周辺の汚染物質の濃度を測定するレーダー、つまりヘドラを探すためのレーダーなのだ。

「よし、行くぞっ」

隊長機のミラージュ2000を先頭に、彼らはいよいよ都市跡地へと侵入していった。

彼らの戦術機は、都市跡地に侵入するとそこから2機ずつの分隊を作って四方へと散っていった。幸い今は周囲にBETA、延いては光線級の存在が無いため、ある程度高度を取った状態で都市の内部を飛行していた。

「スカウト1より各機へ。状況知らせ」

『こちらスカウト3、ヘドラの姿は見えず』

『こちらスカウト5、同じく。ただ、何かを引きずったような痕跡を確

認。大きさと汚染物質の濃度からしてヘドラの移動の痕跡と推定します』

「スカウト5、位置はどこだ？」

『街の北西部、メインストリートです』

「そうか」

隊長は報告を聞き、次の指示を考えた。

「スカウト5。その周囲にヘドラが隠れられそうな大型の建物はあるか？ 奴の大きさは約30メートルとの事だが」

『少々お待ちを』

通信を受けたスカウト5のミラージュIIIが道路の上から飛び上がり、上昇して周囲を見回す。

『あつ。現在地より数ブロック離れた地点に半壊したドームらしき物を発見』

「ドーム、か。スカウト5、念のためそのドーム内部を索敵しろ。気を抜くなよ？」

『了解。スカウト5、スカウト6と共にドームへ向かいます』

2機のミラージュがドームへと向かい、まずはその上空を旋回する。

『スカウト5及び6、ドーム上空の到達。上空を旋回中』

「スカウト1より5へ。ドームの様子はどうか？ 損壊具合はどの程度だ？」

『ドームの一部が崩落。戦術機でも余裕で通れるほどの大きな横穴のようになっています。ただ、上空から分かるのは入り口付近の様子までです。天井部分が丸々残っているので、上空から天井下の様子を伺う事は出来ません』

「汚染物質の濃度はどうだ？」

『かなり高いですね。周囲と比較しても数倍の汚染濃度です。しかしレーダーの方には動体反応なし』

「そうか」

報告を聞き、隊長は少しだけ迷った後。

「スカウト5、および6へ。そのドームがヘドラの寝床になっている

「可能性もある。着陸し内部の様子を確認せよ。ただしヘドドラが内部に潜んでいる可能性も捨てきれない。警戒を怠るな?」

『了解』

指示を受け、2機のミラージユがドームの脇に着陸する。そして2機は素早く崩落した穴の両脇に立つ。そして、1機のミラージユIIIが穴の淵に手を掛けた。

戦術機の指先にはカメラが装備されている。それを用いて中を確認しているのだが……。

「どうだ、スカウト6。中の様子は」

「暗くて光学観測じゃ殆ど何も分かりませんね。汚染濃度はどこよりも酷いですが……」

と、話していたその時、暗がりでは何か動いた。

「ッ!?一瞬ですが動体反応ありっ!何かいますっ!」

「マジかっ!」

何かいる、と分かり2人は驚く。

「ッ!?反応、向かってきますっ!」

「不味いッ!離れろっ!!」

スカウト5の言葉と共に、2機のミラージユIIIが跳躍ユニットを吹かして飛び上がった。直後、壊れて開いた穴を、更に壊し広げながら『何か』が現れた。咄嗟に飛び上がった事でミラージユIII2機はなんとか無事だった。

「な、何だ?」

ミラージユ2機は空中に浮かびながらも、壁が壊れた事で巻き上がった砂煙の方へと突撃砲を向けている。と、その時。

『キュロロロロッ!!』

砂煙を風が吹き飛ばし、煙のヴェールが晴れたその奥から現れたそれは、4足歩行形態のヘドドラだった。ヘドドラの大きな目が空に浮かぶミラージユIIIを真つすぐ見据えている。

「ッ!?ヘドドラ出現っ!繰り返すっ!ヘドドラ出現っ!」

即座にスカウト6の衛士が通信機に向かって叫んだ。ヘドドラ出現の報告はすぐさま各地へと散らばっていた偵察部隊の戦術機へ伝

わっていく。

『スカウト1より各機へっ！スカウト5、6のいる北西部にヘドラが出現したっ！残り各機は速やかに北西部へ移動っ！スカウト5らと合流するぞっ！急げっ！』

ヘドラ出現の報告を受けて、各機が北西部へと移動を開始した。  
しかし……。

「こちらスカウト7ッ！これからスカウト8と共に向かうっ！行くぞスカウト8ッ！」

「あ、りよ、了解っ！」

北西部とは離れた、南方面の索敵に当たっていた2機のミラージュⅢ。

「ちっ！こつちも汚染濃度が濃いと思ってたが、外れかつ！」

悪態をつき飛び上がるスカウト7のミラージュⅢ。それに続くスカウト8のミラージュⅢだが……。

「あの、さっき一瞬レーダーに反応があった気がするんですが……」

「はあっ!?何言ってるんだお前っ！現に北西部にヘドラが現れてるんだぞっ！見間違いか何かだろっ！とにかく北西部へ急ぐぞっ！」

「りよ、了解っ！」

急かすスカウト7に反論できず、スカウト8は後ろ髪を引かれる思いでスカウト7の跡に続いた。

だが、彼らのいた地点の傍。攻撃か何かで陥没した穴があった。その穴の下には地下鉄の線路が走っていた。そして、その奥で……。

『『『キュロロロロッ!!!』』』

無数の目が怪しく光っていたのだった。